

平成廿五年十二月廿二日

# 研究資料

「元禄組騒動」について

第十二号

Version 0.5  
校正用

須佐御土史研究会

東京部会

# 目次

## 「元禄組騒動について」

「凡例」	.....	
「目次」	.....	
「序文」	.....	1頁
「読解文」	.....	12頁
「小山私記拾遺」	97頁・8	譜録益田より「四組御理之趣」.....12頁
「益田家文書」	12頁・43	御家来就騒動仕置記録.....元禄七年七月十一日.....16頁
「益田家文書」	16頁・14	両組頭御究御請次第覚書.....元禄七年七月十一日.....39頁
「益田家文書」	46頁・15	大塚源右衛門外連署注文覚.....元禄七年三月十八日.....62頁
「益田家文書」	51頁・24	堀市郎右衛門等連署口上覚.....元禄七年閏五月五日.....68頁
「益田家文書」	51頁・24	堀市郎右衛門等連署書状.....元禄七年閏五月五日.....71頁
「益田家文書」	11頁・3	大谷権左衛門ヨリ差出候口上覚.....元禄七年閏五月十日.....74頁
「益田家文書」	11頁・2	大谷権左衛門組公儀指出候九人之者共.....
		御理申上候口上覚え.....元禄七年閏五月十八日.....106頁

「補注」

「益田家文書」	46	10	追放申渡書	元禄七年七月廿二日	219
「益田家文書」	46	9	切腹申渡書	元禄七年六月十日	182
「益田家文書」	44	15	境三郎左衛門切腹申渡書	元禄七年六月十日	162
「益田家文書」	44	15	堀市郎右衛門切腹申渡書	元禄七年六月十日	215
「益田家文書」	51	124	居留り御奉公申上候者名前覚	元禄七年六月二日	202
「益田家文書」	51	124	益田久右衛門等連署状	元禄七年六月五日	198
「益田家文書」	16	17	堀市郎右衛門御請	元禄七年六月二日	193
「益田家文書」	44	15	御意覚書	元禄七年閏五月廿九日	191
「益田家文書」	3	10	益田氏御意覚	元禄七年閏五月廿九日	189
「益田家文書」	13	2	益田就恒御意書	元禄七年閏五月廿九日	187
「益田家文書」	44	15	御意覚	元禄七年閏五月廿九日	184
「益田家文書」	46	7	御意覚書	元禄七年閏五月廿九日	182
「益田家文書」	8	31	境三郎左衛門口上覚	元禄七年閏五月廿九日	176
「益田家文書」	20	19	堀市郎右衛門口上書	元禄七年閏五月廿九日	170
「益田家文書」	51	124	境三郎左衛門等連署書状	元禄七年閏五月廿七日	164
「益田家文書」	20	9	大谷権左衛門口上覚書	元禄七年閏五月廿五日	146
「益田家文書」	11	4	大谷権左衛門口上覚	元禄七年閏五月廿二日	136
「益田家文書」	55	35	有福三左衛門覚書	元禄七年閏五月廿一日	128

# 凡例

一、**原則** 全体を通して、可能な限り古文書原本に忠実に読解文を表記する。

原文が旧漢字の時は、活字がある限り旧漢字で表記する。活字が無いときに限り常用漢字を使用する。

異体字は常用漢字を用いる。 例 = 𠄎(𠄎) 𠄎(𠄎)

変体仮名は原文通りとする。 例 = 者(𠄎) 幾(𠄎) 茂(𠄎) 与(𠄎)

尔(𠄎) 江(𠄎) 之(𠄎) 而(𠄎) 連(𠄎) など。

助詞も原文通り表記する

ヨリ、より、ニテ、ニ而(ニて)、 二て、候得共(候え共)、 二付

活字が無い合字・省字には常用漢字を用いる。

例 𠄎(𠄎) 𠄎(𠄎) 𠄎(𠄎) 𠄎(𠄎) など。

但し、活字があるものは原文の通り。例 𠄎(𠄎) 𠄎(𠄎) など

繰り返しの表記 漢字 " 々、仮名 々、二字以上 々、

## 一、文字の大きさ

助詞等に右寄せの小文字表記は適用しない。全文を同じ大きさの活字で表記する。

返り点は使用しない。代わりに難読個所にはヨミのルビを打つ。

以上はHPにヨミ表記する場合、縦書きを横書表記に変更する場合などに生じる諸問題を回避する為である。

## 一、誤字、誤記、衍字、あて字など

右傍に正字をルビで示し xカ とする。但し、明らかな誤字は正字と置き換える。

意味不明の場合は(ママ)を付す。

あて字 には正字でルビを打つ。

重複(衍字)の場合は(衍カ)と注記する。

## 一、欠字、虫損、その他判読不能箇所

欠字は 〇 で表す。字数が確認出来るときは 〇 で文字数だけ 〇 で埋める。字数が判らないときは 〇 で示す。推読可能な欠字は 〇 に推読文字のルビを打ち xカ と表記する。

判読不能箇所は 〇 〇 で示す。

虫損破壊で判読できない箇所も同様とし虫損とする。

推読箇所は同じく 〇 〇 で示し、右傍に(…カ)と注記する。

## 一、抹消部分

抹消部分は読解しない(含)、見せ消ちや抹消文字の横に〃を付けた場合など(

## 一、氏名・地名など固有名詞の連記には中黒)・(を付け区分する。

## 一、朱書、後筆、付箋など

該当部分を「」で囲み、封紙ウワ書、端裏書、端書、裏書、朱書、異筆、後書、付箋、張紙、刎紙などと注記して表記する。

## 一、花押・印章など

花押が書かれている場所に花押と記し、印章が押されているときは 印 で表す。

## 一、注釈

人名、地名、特殊な用語、現代使用されていない用語、特殊な表記などの説明には「注x」を付け頁毎に脚注を付ける。

長い注記が必要な場合には、巻末補注を設ける。

西暦年数、時刻など簡単な摘要は注釈代わりに適宜ルビを付ける。

割り注は原文通りに表記する。

## 一、出典、参考文献

出典は原則として著者と書名を表記し必要に応じて頁数を示す。HPはURLを表記する。

参考文献は巻末の一覧表に詳細を示す。

以上

# 序文

東京大学史料編纂所蔵の「益田家文書」の中に元禄時代に益田家中で起こった「元禄組騒動」の記録がある。また、益田家文書の一つである「小山私記拾遺」にはこの事件の要点が記述されている。これらの史料を辿って「元禄組騒動」とは一体どういふ事件であったのかを辿ってみることにする。

## 「」まえがき

毛利家永代家老益田家では、関ヶ原の戦いの後、石見国益田から長門国須佐へ移住して以後明治維新に至るまでの徳川時代270余年の間に武士階級の騒動が都合3回起こっている。

第1回目が今回取り上げる「元禄組騒動」で元禄六癸酉(1699)年二月に発生し、翌七甲戌(1704)年六月十日のお仕置きで決着している。

第2回目は寛政十二(1800)年から享和二年(1812)に及び「須佐騒動」であった。この事件については、2008年に須佐郷土史研究会東京部会が研究テーマとして取り上げ、その成果をHPに発表し

た。

第3回目が幕末の「須佐内訌事件」である。蛤御門の変の責任を取った「三家老切腹」で益田親施が死去した後、益田家中を二分した事件であった。この事件の顛末は「回天実記」という詳細な記録が京都大学付属図書館尊攘堂と山口文書館に残されており、須佐郷土史研究会の機関誌「温故」でも全文が紹介され、東京部会の手による読解文はHPにも発表されている。

三事件のうち、「須佐内訌事件」は比較的によく一般にも知られているが、残りの事件は須佐町の歴史書にも記述されて居らず、現在では地元でも余り知られていない。

「須佐騒動」については山口文書館に「須佐騒動一件御裁断記録」(毛利家文書 諸省492)という萩本藩による取調べ記録が残されており、事件の顛末を詳しく知ることが出来る。

所が、「元禄組騒動」に関しては、益田家の公式記録と思われる「益田家文書」12・43(東京大学史料編纂所蔵)の「御家来就騒動御仕置記録」が虫損のため冒頭の22頁しか閲覧する事が出来ない有様で、事件の全容はおろか、そういう事件があったことすら世間には未だ余り良く知られていない。

私達、須佐郷土史研究会では「須佐騒動」の研究の過程で、当時益田家の職座にあった宅野太郎左衛門が騒動取鎮めの為に、「元禄組騒動」の故事を研究した事を知った。これによって、元禄時代

にも益田家に騒動が有ったことが初めて判ったのである。

そういう訳で、今回須佐郷土史研究会東京部会では東京大学史料編纂所が所蔵する「益田家文書」の中から、「元禄組騒動」に関連する文書を見つけ出し、それを読解して事件の経緯を把握し、事件発生の原因や背景を調査するという作業を行うことにした。

平成20年、東京大学史料編纂所が「大規模武家文書群による中・近世史料学の統合的研究（萩藩家老益田家文書を素材に）」という論文を発表した際、その附属資料として「益田家文書」の総目録が整備・発表された。これによって、我々も「元禄組騒動」の関連文書を簡単に見つけ出し、それを複写して閲覧する事が出来るようになり、この調査研究の推進が可能となったのである。

## 「益田家の軍制」「四組」について

「元禄組騒動」は益田家の四組の組子が起こした事件である。

「四組」は防長両国の防衛体制の内、益田家が担当した石州境防衛の為に考案された益田家軍制の基本制度である。

慶長五年(1600)、益田家が石州益田から須佐へ移住する以前から須佐は益田家の所領であった。しかし須佐移封後は逆に石州からの外敵防禦が任務となったので、現在の田万川地区に当初八組の在郷武士を配置して佛坂、土床の街道筋を中心に防禦体制を敷い

たのである。

「八組」とは大蔵、市丸、立野、宇谷、友信、下小川、境、千疋で、1組36名の編成であった。つまり、益田家の軍勢は288名であった事になる。組の名称はいずれも田万川町に現存する地名である。

元和七(1622)年に軍制改革があり、「八組」を「四組」に改組して、宇谷、市丸、須佐地、瀬尻となり、一組64名(総勢256名)に編成替えが行われた。各種の記録を総合すると、事件当時の組頭は宇谷、境、市丸、堀、須佐地、小原、瀬尻、大谷という担当だったのではないか。そして、この「元禄組騒動」の後、「四組」は一組55人編成(侍 25人、中間 30人)となった。(増野家文書 12-4 卷末補注【注1】参照)

「元禄組騒動」では最初の「御理」に連署した組子の数は堀組10名、境組16名、大谷組14名その他1名で41名の者が連座している。256名の内からこれだけの者が参加し、しかも「御理り之廉二願の分二仰付られず候時八 四組侍分残らず御暇」(願いが容れられなければ、四組の侍分は残らず暇を取る)、「益田家文書」55・35)という強訴であったから、これは益田家の軍制の根幹を揺るがす大事件であった。益田家の軍制にヒビが入ったことは軍事上の機密事項であり、関ヶ原から百年近い年月が経って如何に太平の世の中になつていた元禄時代であっても、絶対に他国に知られてはならない事であった。また、萩藩内部でも益田家の石見境の防衛体制に問題が発生した事になる。「益田家文書」の中の関連文書に「御為之儀二付」とあるのはそういう意味であって、単に外間が悪いというような単純な意味ではなかった。だからこそ、益田

家としては事件の解決を急ぐ必要があったと思われる。

四組の大部分は在郷武士で、小禄であったから平時は百姓同様に農作に従事して年貢を納める生活をしてきた。増野家文書によると、これらの組侍や中間は農作の傍ら、元禄年中（1688～1703）は何とか輪番制で「出浮」して須佐の勘場勤めや益田公の上京、参府、萩勤番などのお供など「公用」にも従事した。こうした村役人としての仕事や、益田公の御供、警護などの通常業務の外に、今回の調査で、我々は当時益田家が推進していた「秋穂二嶋開作」という干拓工事への出役という大きな公役が課せられていた事を知った。これは組子達にとっては増税に他ならない。

「元禄組騒動」の後、召放ちや家計窮迫などで組員の数が段々減ったこと、および藩財政悪化に伴う俸禄カット（半知の馳走米など）が厳しく、武士と雖も農耕に従事しないと家計を支えることが難しかった…などの理由によって、「出浮」の方法が改められた。「元禄組騒動」以後は従来の輪番制の「出浮」の代わりに各組から一律10人（侍4人、中間6人）を差し出して「公用」に従事する事になった。各組は組毎に事務所として組屋敷を建て、この定勘場に組頭元詰めや組証人夫婦が常勤で勤務するようになった。組証人は須佐詰め侍4人の中から任命するようになった。組証人は元々は年寄座から任命して夫婦で組頭役宅に詰めていたので組頭へは四人扶持を支給するなどの制度面の改革が行われた。これらの改革は開作事業への出役をし易くする為のものであったとも云える。

## 「」 益田家の代替わり

元禄六年八月五日益田越中就恒が死去し（65才）、益田就賢が家督を継いだ。毛利十一代史には「元禄六年十月十二日益田越中跡職高吉萬千石嗣子右衛門二命ス」と記されている。事件はこの直前に起こっている。

就賢は実は益田又兵衛就武の三男で寛文十二年五月十五日生、元禄二年十月七日に人家している。就恒には嗣子がなく一人娘は9才で早世したので、益田源左衛門兼祥の娘芳子を養女とし、婿養子就賢と結婚させたのである。

就賢は元禄六年当時満21才であったが、未だ若く、人家して日も浅かった。65歳で越中就恒が死去しているので、その死の前から実権を揮っていた家老達に対して四組の組子達が不満を持っていたのであろう、組子一同が家老人事に介入したのである。希望が容れられないときは全員が暇を取ると強訴した。

この代替わりの時、益田家では家老職の人事更迭が行われたが、有福三左衛門の覚書（益田家文書「55・35」）によれば、この時は当初は「御役人なとも指替られずの由仰渡され候」と言うことであつた。しかし組騒動の結果、「益田久右衛門 益田与右衛門 益田八郎左衛門 益田又左衛門相替られ候」とあるように、実際にはこの四人が更迭され、後役として「当役栗山半左衛門 萩（當役）増野作左衛門 御目付役 松井庄左衛門 仰付られ候事」と

任命された。新任の職座の人選が組子共の希望通りであったかどうかは判らないが、交替しない筈の職座役員が交替したのであった。

## 「一」 事件の経過

では、「益田家文書」を読んで、事件の経過を段階的にメモしてみる事にしたい。

### (1) 第一段階、事件の発端

1 元禄六年<sup>1963</sup>二月に四組(境三郎左衛門、大谷権左衛門、小原二郎左衛門、堀市郎右衛門が組頭)の組子一同が訴訟を起こした事が事件の発端となった。

これまでの調査で、何時、誰が、どのような内容の訴訟を起こしたのかを示す文書は東大史料編纂所蔵「益田家文書」の中には見当たらないが、訴訟に加わらなかった大谷組の有福三左衛門の書状(「益田家文書」55・35)によると、二嶋(ふたじま)御開作 先御役人指替について訴え出た模様。そして「御理り之廉二願の分二仰付られず候時八 四組侍分残らず御暇」と下書きに書かれていたらしい事が判る。

2 この時、境組の真嶋惣右衛門、堀組の栗山平太夫、大塚半右衛門、小原組の有田彦右衛門、岩本惣左衛門、大谷組の有福

三左衛門の「六人之者」が訴訟に参加せず、残りの組子達が連判はずれの六人に「意趣を含んで」組内が不和となった。

六人のうち有田、真嶋、岩本、栗山の四人は元禄七年<sup>1694</sup>の引方役を命じられたので、元禄七年正月三日、初物のお祝いに出席しようとしたところ、四人が出るなら四組の残りの者は出席しないという話になった。それで四人は病氣と称して祝いの席には出席しなかった。しかしそれでも不和が治まらないので、四人の人事は取り消された。

【注】引方 高から差し引くことを意味する。高請の田嶋塩田等が水害などにより荒廃して耕作が不可能となり、或いはその土地が公用に供せられた場合に、課税対象の石高から差引き、貢租を免除した。組證人も同じ様な仕事をしたので組證人の補佐役が。

3 しかし、この騒ぎは、元禄七年二月十三日に益田就賢から土中へ御ケ条の仰渡しがあり、一同で御請け。特に四組の儀については、格別に御意書を出して四組頭へ仰渡し、謹んでお請けする事により表向きは一旦治まったかに見えた。(「益田家文書」46・15)

4 二嶋御開作がどういう事業であったのか、何故この事業への出役をお断りしたのか：などは後述する。「益田家文書」46・15には御役目之日数請から六人を外すことも差し控える旨書かれているので、開作事業への出役の日数請けの計算に六人の連判外れの者を入れるか・入れないか・も問題だったのかもしれない。

## (2) 第2段階、宗門究め

5 元禄七年春、宗門究があつた。宗門究めは益田家でもキリシタン禁令に基づき「五人組」で相互監視する制度であつた。ところが、その仕組みを破つて、「六人之者」を残りの組子が「五人組」から外してしまつた。「益田家文書」55・36）  
其上で四組組子42名が上記六人之者と同じ宗門帳に判形を押す事を拒んだのである。

しかし、公儀（萩藩政府）に提出する文書なので、宗門改めの障りになるし、益田家の内紛が表面化する事になるので最終的には一同の判形を整えて提出することになつた。

元禄七年三月十八日、42名の組子が今後は無体の訴訟を起こさないこと、御役儀については「万端五（齧）疎なく申合せ御用奉るべく其節を遂げ候事」と申し合せ、誓紙を組頭に提出したので、これで騒ぎは終息したかに思われた。「益田家文書」46・15）

6 元禄七年四月二八日、四組組子数十人は六人者と相役仕り向後御理事は申上げず 御奉公申上べく候との書付を差出し一旦落付た。

所が、残りの強硬派の者が「六人之者と一和致し、續けて御奉公申上べしとの申出をしたのは、六人之者の勧めにより三頭へ申出たのだ」と言つて再び騒動した。そして「彼六人之者一同之判形仰付られ候時ハ 残ル惣人数は判形仕はず候」と申出て再び六人を組外へはみ出した。「益田家文書」55・35）

7 そこで四月二九日、境三郎左衛門と堀市郎右衛門は組内を取収める為には出萩して事情を上聞に達するべくと願い出て、船着き場まで行つた。残る四十人之組子からも萩へ罷出ると言つて益々騒動が大きくなつて仕舞つた。「益田家文書」55・35）そして「六人之者」が騒ぎを起こしたかの如く吹聴した。境・堀が出萩しようとした理由は「組子共一通り之御理之筋申上げ度と頻二願ひ候故、罷出様子申上げ候ハ、組子落つき之為に二も相成べくと存じ」と後日弁明している。「益田家文書」16・14）

8 同じ日、大谷組でも市味村の者共が注文（4/28の書面）への判形に応じない。何事も御理しないのだから、申し上げる事が無い以上判形無用と云い連判を拒否した。「益田家文書」11・3）

9 こうして再び四組の内部が落ち着かなくなり、四月二十日、「組半間之者共 御頭衆まで申出候ハ 各儀と向後一座相役等仕候儀相成ずの通申出候由承及候 切又御組内日数請帳へも入候儀 一圓二相成ず候通 内證申談仕りたるの由二候」。「益田家文書」55・35）

10 組頭四人は夫々の組内取収めの為、協議を重ねたが、五月五日、堀市郎右衛門は残る組子がどういふ行動に出るか判らなると称して、子細なく落付いた者から差出された書付（4/28付）を一覧しなかつた。

しかし、大谷、小原、堀の三組頭は年寄中へ三組組子から子細

なく落付御奉公申上ぐべしと申出があつた旨（4/28の書付の事）報告した。残る者共の儀は境二郎左衛門萩当番で不在故、彼帰宅の上相談しようとしたが、年寄中から六人の者と「立相御役目

相成ず」ではならぬ。今一通り一和するよう組毎に沙汰せよと命令あり。しかし残りの組子は4/30の申出は不変。四組一同でのお尋ねでなければ応じかねると拒否。（「益田家文書」11・3）かくて四組の組子は益々徒党を組んで行動する様になった。

11 五月十九日、益田家は松井勝左衛門（御目付役）を須佐へ差戻し、事態收拾を命じた。

4/28四組組子数十人は六人者と相役仕り 向後御理事申上げず御奉公申上べく候と書付を差出し一旦落付ている。しかし残る人数は六人者との相役を拒否4/28付注文判形の段になつて六人者とは相役罷成らずと申切っている。四組頭は六人者を一組二仕置候様にと願ひ出たが、これでは問題解決にならない。松井は子細なく落付き候者以外の残りの者を落付かせる件は、組別に沙汰すると評定し分断作戦に出たが、四組組子は四組一同でなければ話し合ひに成ぜず。大谷組でも市味村の八人が話し合ひに成ぜず。結局、松井の須佐派遣鎮撫工作は失敗に終わった。（「益田家文書」12・43、16・14、8・31、11・3）

12 五月二三日、大谷権左衛門は組頭の指揮に従わない8人の組子を公儀へ差出す旨年寄中へ申し出た。しかし詮議の結果、8人は大谷組で当分請持置くべしという事になった。

《8人の者》とは仲村新左衛門、梅津喜兵衛、内田清右衛門、奥山忠左衛門、安富甚左衛門、大谷喜左衛門、増野左二右衛門、椋木六郎右衛門である。（「益田家文書」11・3、20・9）

13 閏五月一四日、益田家は再び益田八郎左衛門、増野作左衛門、松井正左衛門須佐へ指戻し、就賢の御意伝達。そして、同17日、境・堀両組と大谷組8名の者一同に連判はずれの六人の者と一和するよう三組一同に説得すべく組子に招集を掛けたが集まらず。（「益田家文書」20・9）

14 閏五月十八日、境・堀両組及び大谷組八名の者は大谷権左衛門が八名を公儀へ差出し家来への面目を失つた今、権左衛門が頭役を辞任しなければ落付申さずと申し立てた。また、境二郎左衛門も彼らが権左衛門の支配を受ける事罷成らず権左衛門が組を差上るよう勧めた。（「益田家文書」11・4、20・9）

15 閏五月二日、大谷権左衛門宅で三組頭一座の上、境・堀両組と大谷組八名（上記8名のほか熊谷吉右衛門が加わり九名となつている）の代表が話合つたが、大谷組の有福三左衛門が会談を盗み聞きしようとしたりして会談の成果なし。（「益田家文書」11・4）

### （3）第3段階、結末

16 埒が明かないので、閏5月27日、益田家は4組頭を萩に召出

し、御究を仰付けた。

究手 本尾源介、大賀庄右衛門、兼重安太夫、御目付  
松井庄左衛門（「小山私記拾遺」）

17・閏5月28日、以下のように御意書発表。

(1) 六人之者共一烈(列)をはつれ候段は尤の心入れにて候ノ御尋の子細これあり候条六人のもの逼塞仰付らるべく候ノ様子においては追て御沙汰遂げらるべく候（「益田家文書」13-2、44-15-4、44-15-7）と六人は軽い処分となった。

(2) 境・堀両組及び大谷組の八名は組召上げノ但し召放しないノ続けて御奉公を希望すれば召仕えるべしノいよいよ申し募る者は退去せよ。（「益田家文書」3-10、44-15-3、46-7、46-9、55-34）

(3) 小原二郎左衛門、大谷権左衛門当分は遠慮。（しかし、二人は程なく召出された）

18・6月1日になつて騒動を起こした組子達が石州飯井浦辺りへ退去し始めた。彼らはバラバラに幾つかのグループとなつて、須佐を退去した。

退去した者は次の通り。（「益田家文書」51-124-14・15）なお、この内大谷組の八名は市味村に留まつた。

【注】太字は追放又は帰参しなかつた者

《堀組》**尾木孫右衛門**、**高津権右衛門**、**高津善右衛門**、高津正右衛門、高津与右衛門、長嶺七右衛門、**大谷又右衛門**、**高津左衛門**、波田半兵衛、大谷忠兵衛（10名）

《境組》大谷市右衛門、波田安兵衛、**片山久兵衛**、**波田久右衛門**、品川三郎右衛門、城一宇兵衛、仁保徳右衛門、尾木市郎兵衛、石川安之丞、大谷善左衛門、城一忠左衛門、中村六郎兵衛、**大谷孫兵衛**、梅津甚右衛門、河上六左衛門、棕木半太夫（16名）

《大谷組》中村新右衛門、奥山忠左衛門、増野左二右衛門、内田清右衛門、棕木六右衛門、梅津喜兵衛、波田四右衛門、安富甚右衛門、大谷喜左衛門、**安富五郎兵衛**（10名）

《その他》**羽田権五郎**

19・6月10日、堀市郎右衛門とその息子（和田安之丞、堀市之進、堀唯八）、ならびに境二郎左衛門とその息子（境新兵衛、栗山八左衛門）に対して切腹が申し渡された。（「益田家文書」44-15-1、44-15-2）同夜、堀市郎右衛門は上小川光明寺にて、境三郎左衛門は上小川尊正寺にて、境新兵衛と栗山八左衛門は法隆寺、和田安之丞、堀市之進、堀只八は浄蓮寺にて切腹した。両家の近親は当分逼塞。（「小山私記拾遺」）

20・騒動を起こし飯井浦辺りへ退去した組子達は結局どうなったか。「小山私記拾遺」のまとめによると

退去し立帰らなかつた者（召放ち7名）

《境組》片山久兵衛、大谷孫兵衛、波田久右衛門

《堀組》 大谷又右衛門、高津左衛門  
《大谷組》 安富五郎兵衛、椋木半太夫

この他に「益田家文書」51・24・22に依ると尾木孫右衛門、高津権右衛門、高津善右衛門の3名が召放となった。また同51・22に依ると大野三省も追放されている。

その他の組子は概ね帰参した。

…と言うわけで、組子に対しては比較的穏便な処分となった。しかし、この後で四組は前述のように一組64名(総勢 256名)から一組55人編成(侍 25人、中間 30人)に編成替えとなっており、総勢36名減少している。召放となった11名を加えると47名なので、彼らは帰参しても四組には加えられなかったのではないかという疑問が残る。

## 「元禄組騒動」は何故起こったのか。40名以上の組侍が武士の身分を捨てる覚悟で徒党を組んで強訴に及んだのであるから、それなりの理由がなければならぬ。これまでの調査では事件の背景を明確に記述した手掛りとなる文書は見当たらないが、「益田家文書」に書き記されている事から以下のごとが推定出来るのではないか。これを一言で言えば「重税問題」が騒動の引き金だったのではないかと思われるのである。

### (1) 秋穂二嶋開作

秋穂(あいお)二嶋は現在の山口市の南部。昭和19年山口市へ合併される前は吉敷郡秋穂二嶋村であった。北は火の山・福西山を隔てて陶・鑄銭司、西は南若川を境に名田島、東は吉敷郡秋穂町に接し、南から南西にかけては山口湾・秋穂湾に面する地域である。小郡駅の側から瀬戸内海へ流入する榎野川の左岸が秋穂町でその湾寄りに「二嶋」という地名がある。地名は海中に雌雄に似せた2つの小島があったことに因む。雄島は今が開作地となり雌島のみ存す。

「秋穂二嶋史」によると、二嶋は平安時代から皇室の荘園として栄えた。後白河上皇の長講堂領となって荘司が二嶋に居住していたので良く拓けていた。それを建久年間に鷹司院に賜り、その後、後深草天皇領を経て仁和寺が領家となった由緒ある土地柄である。

開作は秋穂二嶋の海岸を埋め立てる工事で、「小山私記」益田就恒の代の記述によると、寛文八年(1668)六月十三日付で福原宇右衛門(益田就恒のこと)と佐々木太郎左衛門が連名で秋藩に開作を申請し、干拓権が認可された干拓地の埋め立て工事で、面積は百町歩(東京ドームの<sup>21.2</sup>倍の広さ)であった。その半分 50町歩を益田家が担当した。

益田家が開削した場所は大里と上ヶ田の2個所(50町、<sup>61</sup>250石)、佐々木家が二嶋(40町、<sup>87.6</sup>石)を開発した。担当区域の分割、工事計画、経費捻出などの難問があったためか、開作工事は直ぐには

始まらなかつたが、益田側の工事は25年後の元禄六(1699)に完了した。然し、佐々木家の工事は遅々として進まなかつたらしく明和三年(1766)に完工している。(東大史料編纂所蔵「益田家文書」60・1・5「某村絵図」参照。この絵図は大里村開作の絵図である。)

益田就恒は益田元堯五男就祥であるが、慶安三年福原広俊の四女と縁組みをした。同四年七月福原宇右衛門と改名。しかし、益田本家の益田久之丞が早世した為、延宝八年(1690)八月二三日益田本家を継いだ。従つて、上記二嶋開発は就恒が福原宇右衛門であつた時に取得した干拓権を益田家へ持帰り、以後は益田家として二嶋開作を行ったものと思われる。

「小山私記」に依ると、益田就恒は二嶋開作の外に貞享五年(1688)一貫(神)野、千坊(房)原、遠ヶ崎、平田、香力、西浦など150町歩(東京ドームの31.8倍の広さ)に及ぶ開作権を単独で取得するなどして、益田家の財政改革に熱心に取り組んだ。

これらの開作事業推進に必要な労働力として、益田家には地元の百姓などを雇う財力はとても無かつたと思われ、当然須佐から四組の組子を動員する事になつたのではないか。益田家にとっては組子を使役すれば安上がりだが、労務は組子にとっては増税となる。酷税の上に更に開作事業の公役を課せられ、農作の時間を割いて埋め立て工事に参加すれば食つて行けなくなる。それで訴訟沙汰になつたのではないか。

## (2) 年貢(重税)問題

五月二三日、大谷権左衛門が組頭の指揮に従わない組子8人(「益田家文書」55・36)を公儀へ差出した事について、9人(8人ではなく9人となつている)の組子が書いた口上覚が残っている。(「益田家文書」11・2)

その中に市味村在住の9人の組子が何故組頭の命令に従わなかつたのかその理由を述べている。その要点は次の通り。

1 増野十左衛門が組頭時代、寛永八年1631から同十年1633の3年間は市味と瀬尻の2個所はならし石にして賣つていた。彼らが住んでいる市味村は悪所だつたが、瀬尻は上田万の内でも良い所柄であり麦も作れたので、土地の格差は「以ての外 高下御座候」。しかし同じ組の組子が居住していたから組内で甲乙が無いように年貢はならし石で上手く調整出来た。

波田太郎右衛門が組頭の時も市味は高35石5ツ成税率50%でそれ以上の市味の租税は瀬尻に付けられていた。

栗山三郎左衛門が組頭の時も同様で水損、虫損で毎年吝(ぶ)続きで瀬尻から高7石を賣つていた。

2 大谷権左衛門が組頭になつて、一部の土地が御蔵入地となつたり、市味の年貢は熊野帳の税率(五公五民)となつた。また、吝戻しの田地も数力所あつた。しかし、蔵入地と言つても自分に預けられているので大谷組内と変わらぬと言つて、天和三年(1683)から貞享二年(1685)までの間は市味は悪所だから旧例通り瀬尻とならしにしていた。

3 所が貞享3年(1686)の検地があり、市味は従来ならし石であつたが、それを差引かれて組石は90石余り上がったのに対し

て瀬尻の組石は50石余下がった。その格差が余りにも大きいので、迷惑した市味の組子は大谷権左衛門に旧例通り瀬尻とのならし石にして欲しいと度々訴え出た。しかし権左衛門は時節が悪いから暫く待てと答える丈であった。瀬尻に知行を貰っている者からも同様申し出たが、瀬尻には下北十兵衛が住んでいるから待つようにという返事であった。

4 そのころする内に、ここ3年間の間に市味の侍4人と中間3人が体をこわし、「是非ない仕合せ」となってしまうた。

内田七郎右衛門〓水江で餓死。

増野十郎右衛門、梅地善兵衛〓石見で乞食。

梅地七左衛門〓下人風情で地下に罷居

中間〓老人1名萩道で餓死。2人は飯ノ浦庄屋の下人となつた。

この他、千振新右衛門も体をこわした。

これまでは市味村の困窮者は残りの者が助けてきたが、このままでは市味の者全員が路頭に迷う。これは組頭の失政（不作舞）である。

5 以上の理由で9人は大谷権左衛門から呼び出しを受けたが、三組一同でなければ話し合いに応じない事を取り決めた。すると、権左衛門は我々9人の者を公儀へ差出して仕舞った。彼はこれで家来への面目を失ったが、三組一同（境三郎左衛門が萩勤務だった関係で四組ではなく三組）で権左衛門と話合うようにとの上意なので一旦お請けはしたが、最早権左衛門の組支配はお断りする。

以上の市味村の問題は大谷権左衛門組の問題だが、組子共は組頭

との話し合いに四組一同でなければ応じないという態度を取った。これは二嶋開作も絡んで、四組全体で年貢・公役などの改善を求めたからではなからうか。

### （3）職役人事問題

元禄六癸酉（1693）年二月の「御理」（訴訟）に加わらなかった大谷組の有福三左衛門の書状「益田家文書」55・35により、御理の一項として先御役人指替を訴え出た事が判る。「二嶋開作」の工事が完了する時点で、御理と言つのは無意味の感じるが、この開作事業を推進した職役役人に対する抗議と、今後更に続くであろう「西浦開作」ほかの新しい開作事業への出役について改善を求める為であったのではなからうか。

何れにしても、益田家では益田越中就恒が死去し益田就賢が家督を継いだ時点で職役の交替は予定していなかったにも拘わらず、益田久右衛門 益田与右衛門 益田八郎左衛門 益田又左衛門を更迭して、後任として当役栗山半左衛門萩増野作左衛門 御目付役 松井庄左衛門を任命せざるを得なかったのである。

## 「」 結び

「元禄組騒動」の結末は元禄時代という時代感覚とか価値観で見なければならぬと思う。

（1）40名余組子共が徒党を組んで起こした訴訟は、背景や理由

はともあれ、放置すれば益田家の軍制である四組の体制を根底から揺るがす恐れがあると考えられた。益田家としては解決を急ぐ必要があった。

(2)「御為之儀」、つまりこの様な騒ぎが益田家中に起こったことは益田家の軍制にヒビが入ったことを意味するから、石州境の防衛に問題が生じたことになる。従って軍事上の機密事項である。外部に漏れては一大事という認識が強かったと思われる。

(3)代替わりで益田就賢が益田家当主となった矢先の事件だが、「一嶋開作」は先代の就恒が福原宇右衛門であった時から推進して元禄六年に25年の歳月を費やして完工した大事業であり、財政改革の為、引き続き西浦開作も継続実施する事になっていた。この開作事業推進にも支障を来す。

(4)酷税が事件の引き金となったとしても、財政再建は益田家にとって死活問題であり、逃れられない政策課題であった。税率は萩藩全体で決まっている以上、益田家では開作事業で石高を増やすなどの対策が不可欠であったと思われる。然し乍ら、ならし石の様に家中に不公平が起らないように年貢取り立てを調整する工夫は必要であった。

(5)「元禄組騒動」以後、益田家では判明している限りで以下の組織改革が行われた。

- 1 益田家職座人事更迭(上述)
- 2 四組の組織変更 四組は従来の一組64名(総勢256名)から一組55人編成(侍 25人、中間 30人)となった。(増野家文書12・4)また組子が公事に携わる仕組みにも変更が加え

られた(上述)

(6)事件の処罰では組頭一人とその息子達が生害され厳罰に処せられたが(計7名)、事件の発端となった「組はずれの六人の者」は「尤もの心入れ」とされ逼塞の軽い処分となった。お断りをした者の大部分は従来通り御奉公する事を誓約して益田家に復帰。11名が召放ちとなった。

なお、開作事業の推進体制に変更が加えられたかどうかや、年貢の不公平を是正する為のならし石に工夫が加えられたのかどうかは明らかではない。

現代人の時代感覚からすると、年貢の不公平を調整できなかった大谷権左衛門が処罰されなかった事には疑問が残る。また、処刑された境三郎左衛門や堀市郎右衛門はむしろ組子共の生活実態を正しく認識していたのではないかとさえ思われるが、益田家は二人が騒動を起こした組子共に一味同心したと見なしたのである。

なお、「宗門究め」と「元禄組騒動」とは無関係と考えて良い。宗門究めの実施方法で組子達が連判はずれの6人の者と一緒に判形を押し事を拒み、事件の過程で若干絡んだものの、最終的には幕府への届け出はほぼ支障なく行われた。6人の者は元禄六年二月の御理に参加しなかった者達で、その為に残りの者から村八分にされたのであって、組子の中にキリシタンが居たわけではない。

以上

東京大学史料編纂所蔵 「益田家文書」 47-8

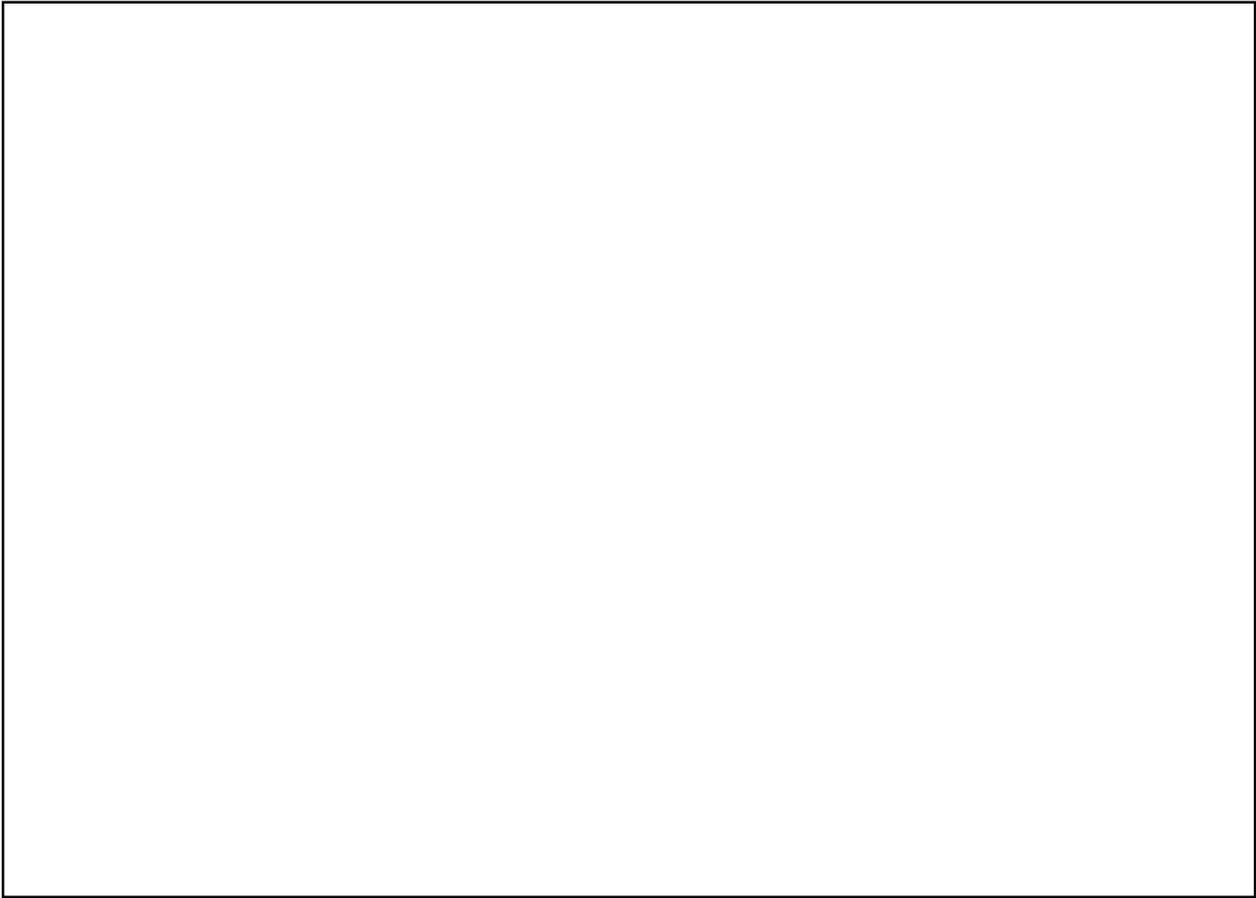
【小山私記拾遺】「譜録益田」より

四組御理之趣

一 元禄六酉二月 境三郎左衛門 大谷権左衛門 小原二郎左衛門  
堀市郎右衛門 此四人之組子一同二訴訟申出候節 境組  
真嶋惣右衛門 堀組栗山平太夫 大塚半右衛門 小原二郎左衛門  
組 有田彦右衛門 岩本惣左衛門 大谷組 有福三左衛門  
以上六人 御断之列を逃候付而 對六人 残者共  
意趣を含 不和二成候事

一 同七ノ春 御代替付而 諸事御仕組被仰付候 益田  
久右衛門 益田与右衛門 益田八郎左衛門 益田又左衛門  
被相替候 須佐当役栗山半左衛門 萩増野作左衛門  
御目付役 松井庄左衛門 被仰付候事

一 春の宗門究之節 六人八逃シ可申之由候へ共  
公儀事付 一同二判形調候 其外儀付而八



不申請候

一、最前ヨリ謹而罷居候由申出候者供一如

小原二郎左衛門組

小原平右衛門 岩本九郎左衛門

下十兵衛

大草小左衛門 有田十太夫

有田神右衛門

有田傳右衛門

大草傳之丞

下孫右衛門

草野市兵衛

吉田角右衛門

横田長兵衛

岩本彦右衛門

増野九兵衛

岩本十郎右衛門

大塚源右衛門

此度謹而罷居候由申出候者

平川五郎右衛門

大谷十右衛門

大谷六右衛門

松井平兵衛

大谷源八

岩本九郎兵衛

一、最前ヨリ謹而罷居候由申出候者供

大谷権左衛門組

有福七五郎

有福甚兵衛

品川助左衛門

品川半右衛門

梅地三太夫

石川市郎兵衛

緒方安右衛門

横田十兵衛

西尾勘左衛門

金山長左衛門

永田作之進

三浦十郎兵衛

有田彦右衛門

此度謹而罷居候由申出候者

奥山九右衛門

熊谷忠右衛門

有田六郎兵衛

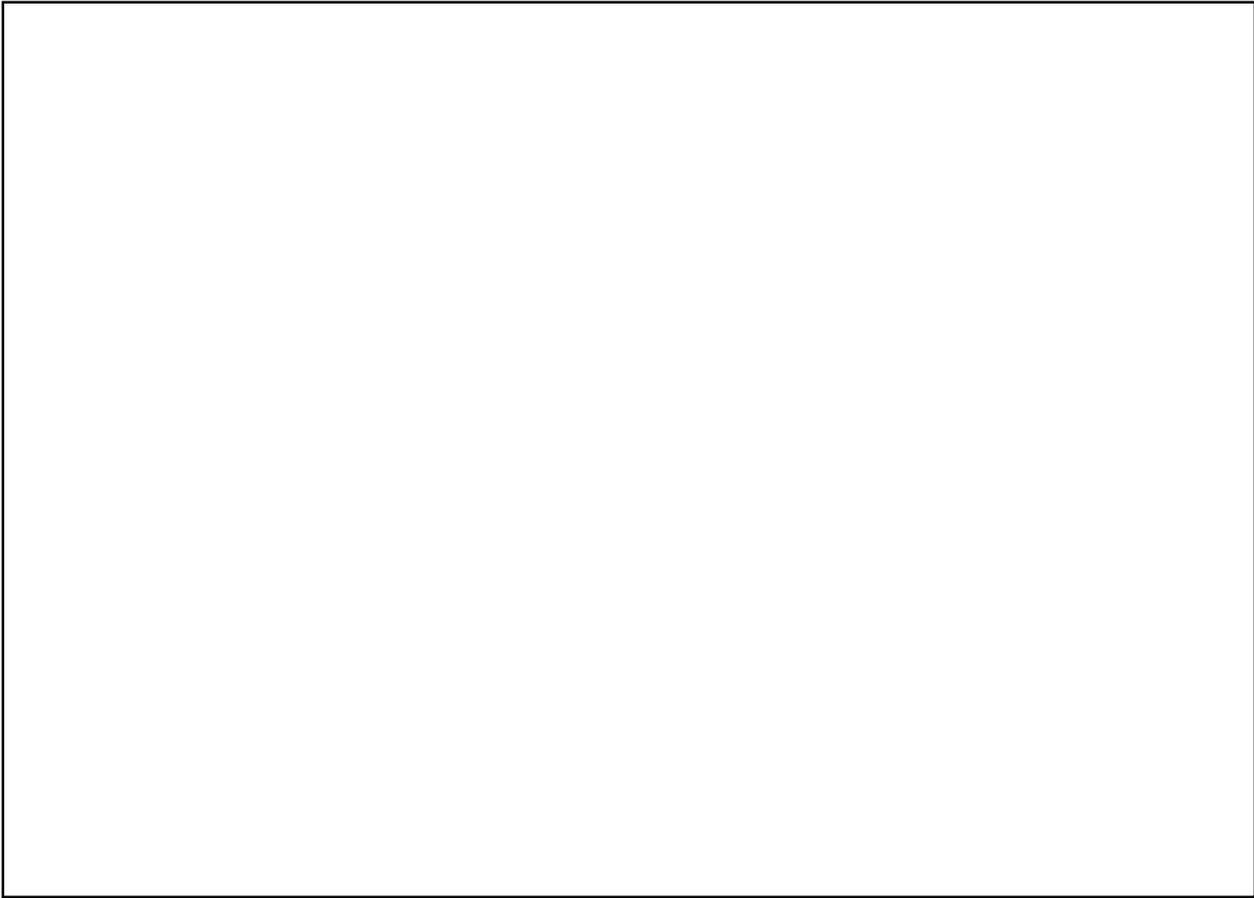
有田善兵衛

一、同列御断申上候者八御糺明之上御暇被遣候へ共立帰

御奉公申上度と候ハ、御憤を被成御捨前々之

分可被召仕との儀ニ而立帰候面々左二記之

向後いか様之御役儀候とも可奉遂其節との事



向後無<sup>むた</sup>躰<sup>たい</sup>之御断申上問敷事  
各半<sup>おの</sup>間<sup>の</sup>之者共と御役儀二付 万端無<sup>し</sup>五疎<sup>そなく</sup>注<sup>し</sup>申合  
御用<sup>そのせつ</sup>可奉<sup>を</sup>遂<sup>し</sup>其節候事

右誓紙

此時御ヶ条を以被仰渡候 其内二已往徒黨を結ひ  
候ハ 證人組頭共 同罪可被仰付との事

品川三郎右衛門 城市右兵衛 石川安之丞

中村新左衛門 梅地喜兵衛 増野左治右衛門

大谷喜左衛門 中村六兵衛 大石忠兵衛

城市忠左衛門 尾木市郎兵衛 大谷吉右衛門

梅津甚右衛門 内田清右衛門 奥山忠右衛門

河上六郎右衛門 波田半兵衛 仁保徳右衛門

右六月六日御請

波田安兵衛 高津庄右衛門 長瀬七右衛門

高津善右衛門 高津与右衛門 大谷市郎右衛門

右六月七日御請

荻野孫右衛門 高津猪右衛門

右六月朔日御請

一 此三人一同之御断人数を逃候由 松井庄右衛門迄  
連判を以申出候

寫五左衛門 高津伊兵衛 伊藤弥右衛門

閏 五月十五日申出

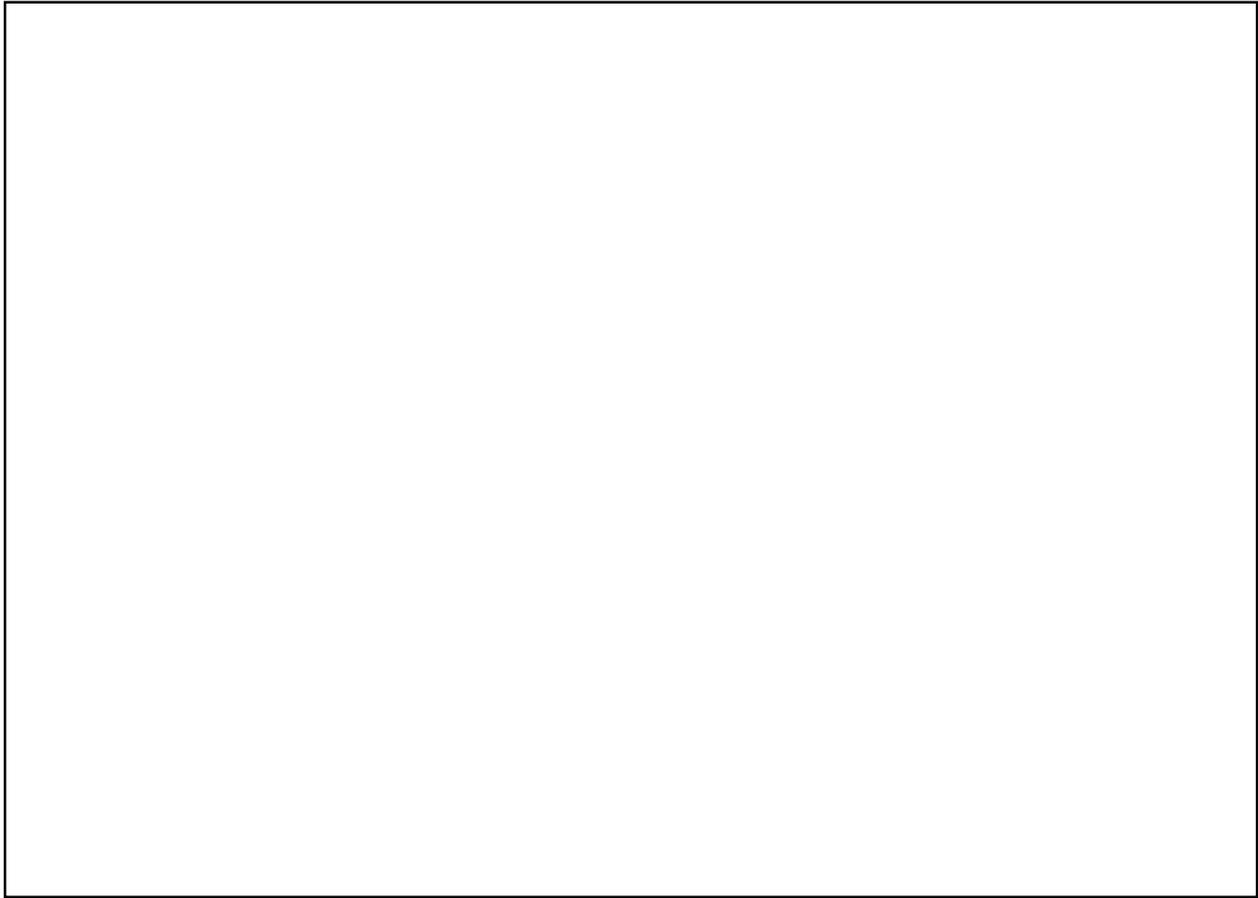
六月九日

御暇被遣 退去仕 立歸不申者

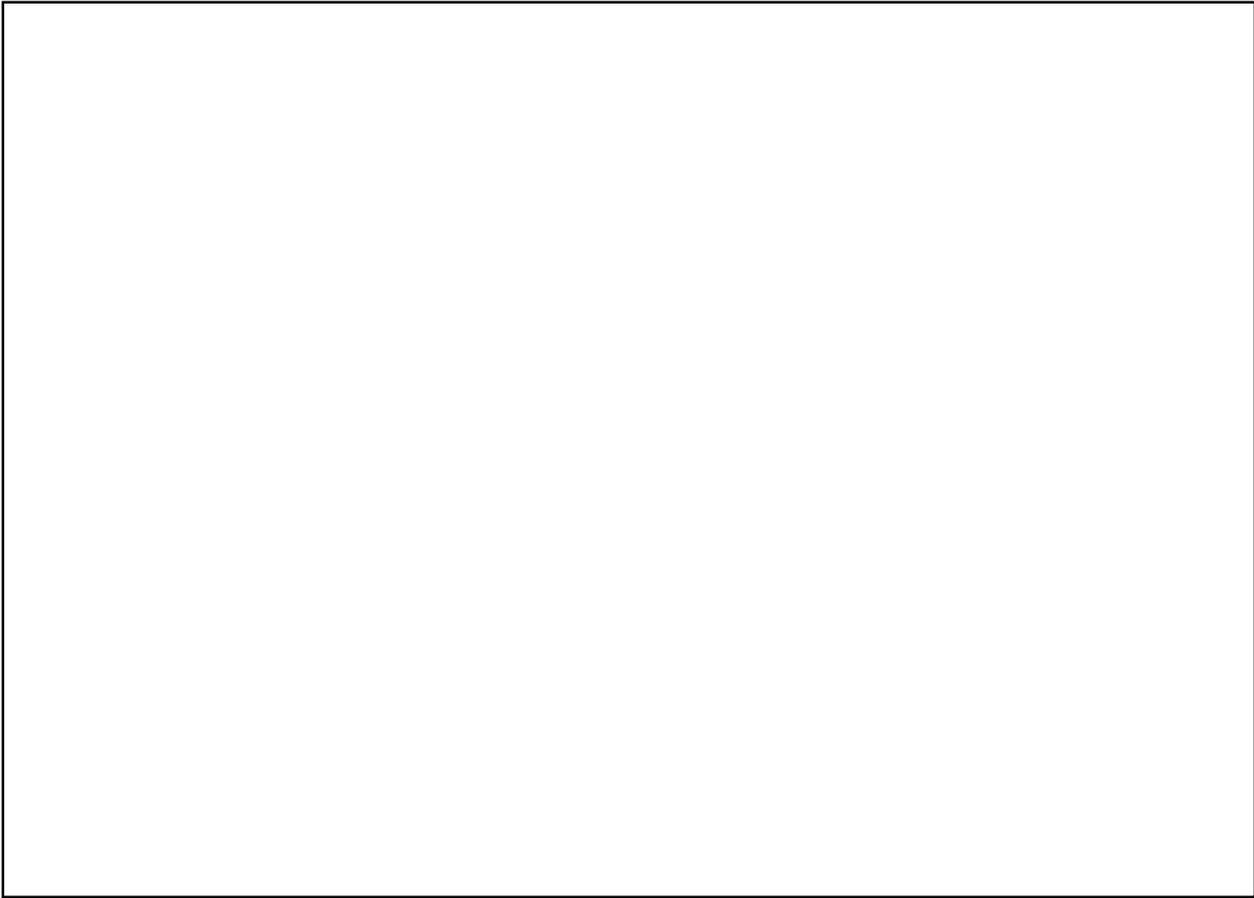
境組 片山久兵衛 大谷弥兵衛

波田久左衛門

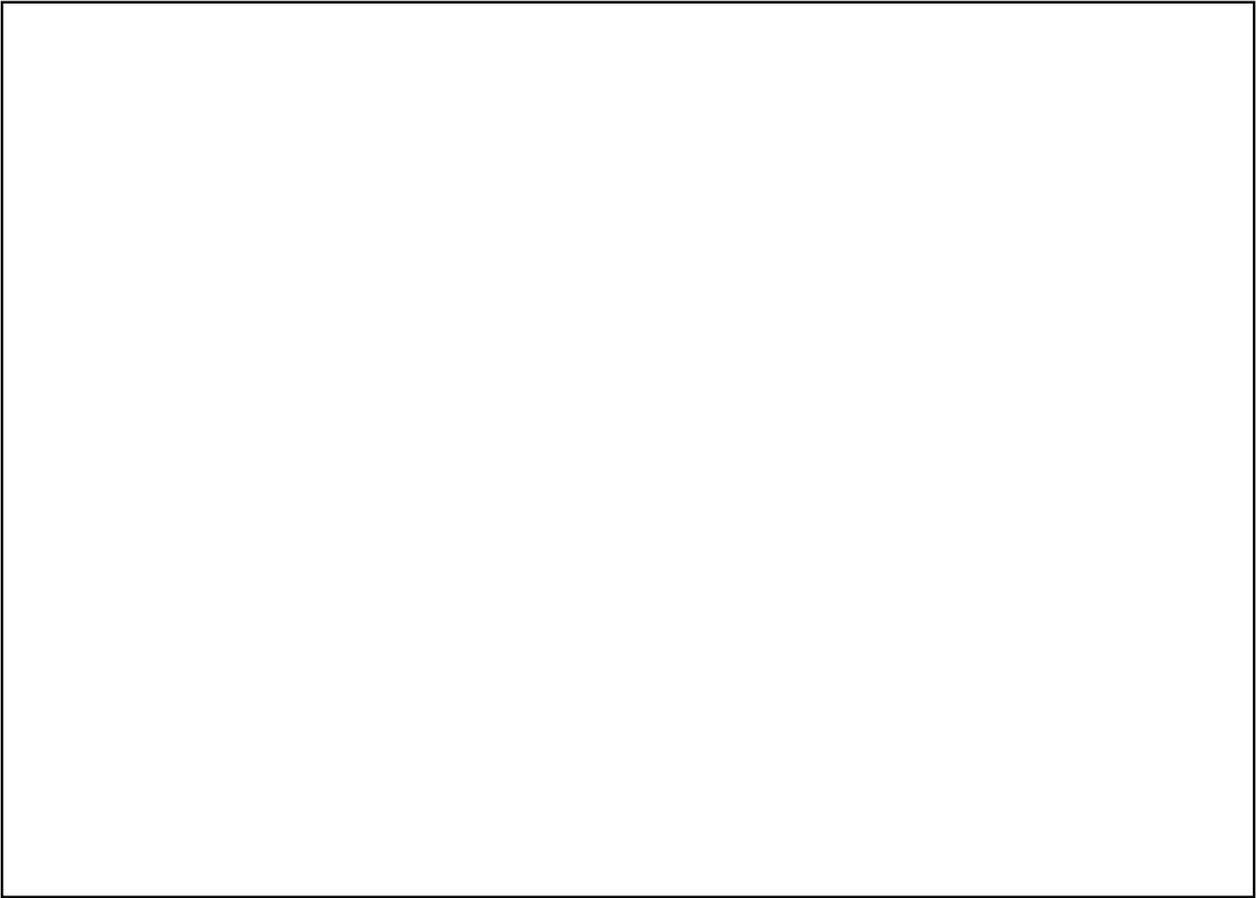
\*1 五疎 = 語疎。「五」は語の音符号。



- 堀組 大谷亦右衛門 高津左衛門  
大谷上ヶ組ニテ 安富五郎兵衛 椋木半太夫  
以上七人 残八立歸
- 一 閏五月廿七日四組頭・境三郎左衛門・堀市郎右衛門・小原二郎左衛門  
大谷権左衛門 萩被召出 右之四人御断御究 被仰付  
候事
- 究手 本尾源介・大賀庄右衛門・兼重安大夫  
御目付 松井庄左衛門
- 一 小原二郎左衛門 大谷権左衛門 頭之収方能候付而 当分八  
遠慮 早速被召出御意
- 一 境三郎左衛門・堀市郎右衛門切腹被仰付候 為御届  
益田孫左衛門様・益田隼人様を以 御老中 完  
備前様・毛 阿波様・福 隠岐様へ御届 遠近方へ
- 願書
- 一 御談合人 繁 足庵様・益 孫右衛門様・繁 二郎兵衛様  
益 源兵衛様・井 孫左衛門様
- 六月十日夜
- 一 境三郎左衛門 萩ヨリ直様上小川二遣 尊正寺ニ而切腹  
御ヶ条之趣 松井庄左衛門申渡 介錯本尾源介
- 同
- 一 堀市郎右衛門 右同光明寺ニテ切腹 御ヶ条小国茂兵衛  
介錯品川五郎右衛門
- 三郎左衛門御嫡
- 一 境新兵衛 法隆寺ニテ切腹 御ヶ条松原六左衛門  
介錯多禰茂右衛門
- 同次男



- 一 栗山八左衛門同寺二而切腹 御ヶ条右同 介錯増野五右衛門  
市郎右衛門次男
- 一 和田安之丞 淨蓮寺二而切腹 御ヶ条石津仁右衛門  
介錯増野市郎兵衛
- 同三男
- 一 堀市之進 右同 介錯梅津源兵衛
- 同四男
- 一 堀只八 右同 介錯安富与左衛門  
仁保林磨為養育
- 一 市郎右衛門嫡八郎兵衛早世 其子又十郎七歳二  
相成候 大湊寺もらひ被申候 後二佐々木清三  
養子 称林哲
- 一 境組内前廉より落着候者八
  
- 梅津七右衛門 同六大夫 石川九右衛門
- 品川弥二兵衛 真嶋作右衛門
  
- 一 境・堀両家之近親類八当分逼塞被仰  
付候事



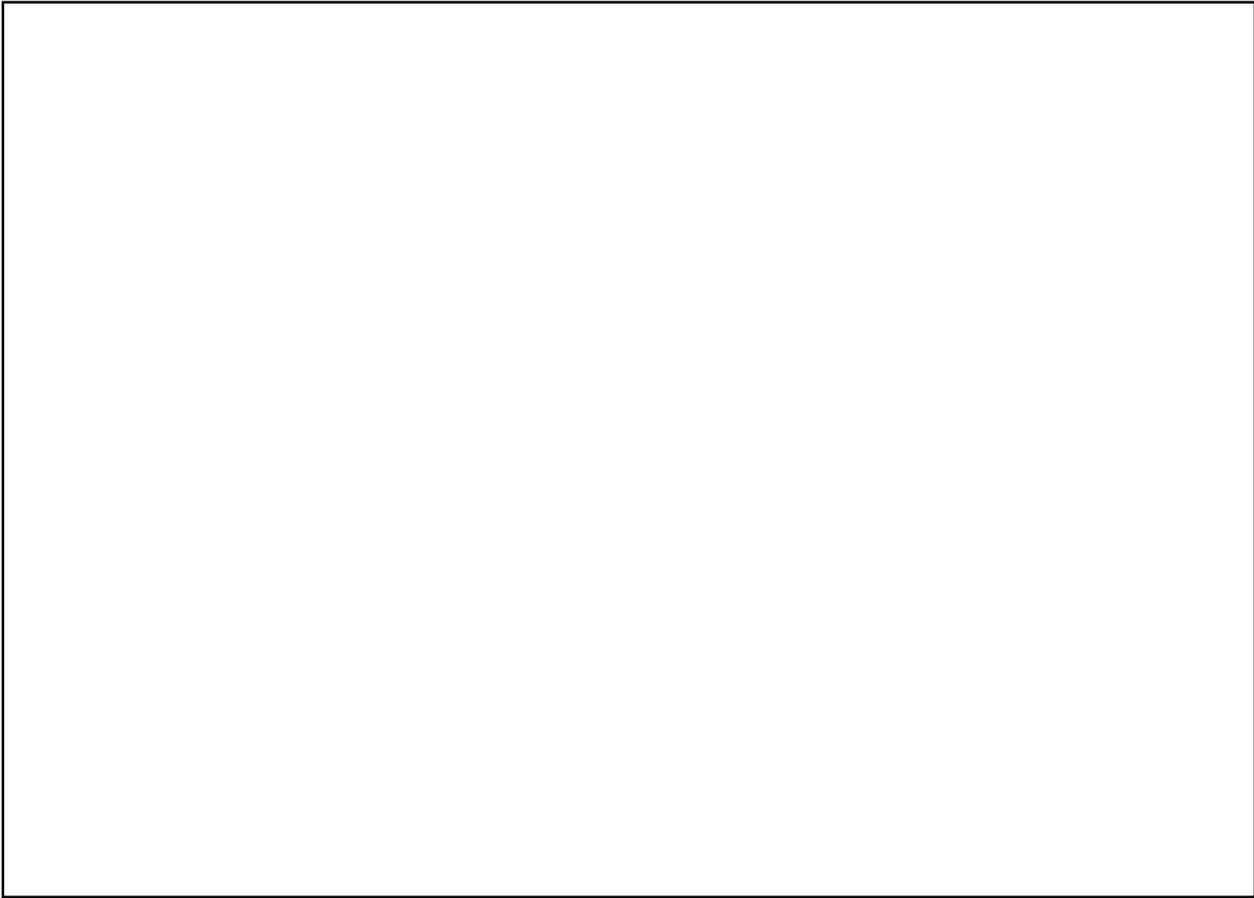
東京大学史料編纂所蔵 「益田家文書」12-43

**御家来就騒動御仕置記録**

元禄七年

**御家来就騒動御仕置記録**

七月十一日



一 元禄<sup>1693</sup>六年春境三郎左衛門 大谷権左衛門

小原二郎左衛門 堀市郎右衛門 右四人之組子

一同二御訴訟之儀申出候節 境三郎左衛門

与<sup>組</sup>子 真嶋与市右衛門 堀市郎右衛門組子 栗山

平太夫 大塚半右衛門 小原次郎左衛門与<sup>組</sup>子 有田

彦右衛門 岩本惣左衛門 大谷権左衛門与<sup>組</sup>子 有福

三左衛門 已<sup>以</sup>上六人之者 御理<sup>ことわ</sup>り之<sup>ことわ</sup>二<sup>ことわ</sup>列を は



つれ候於<sup>よつす</sup>様子者 面々双方之書付二

相見候 依<sup>これによつて</sup>之<sup>これによつて</sup>右六人之ものへ對し 相

残者共 意趣を合 何角と申候付 右

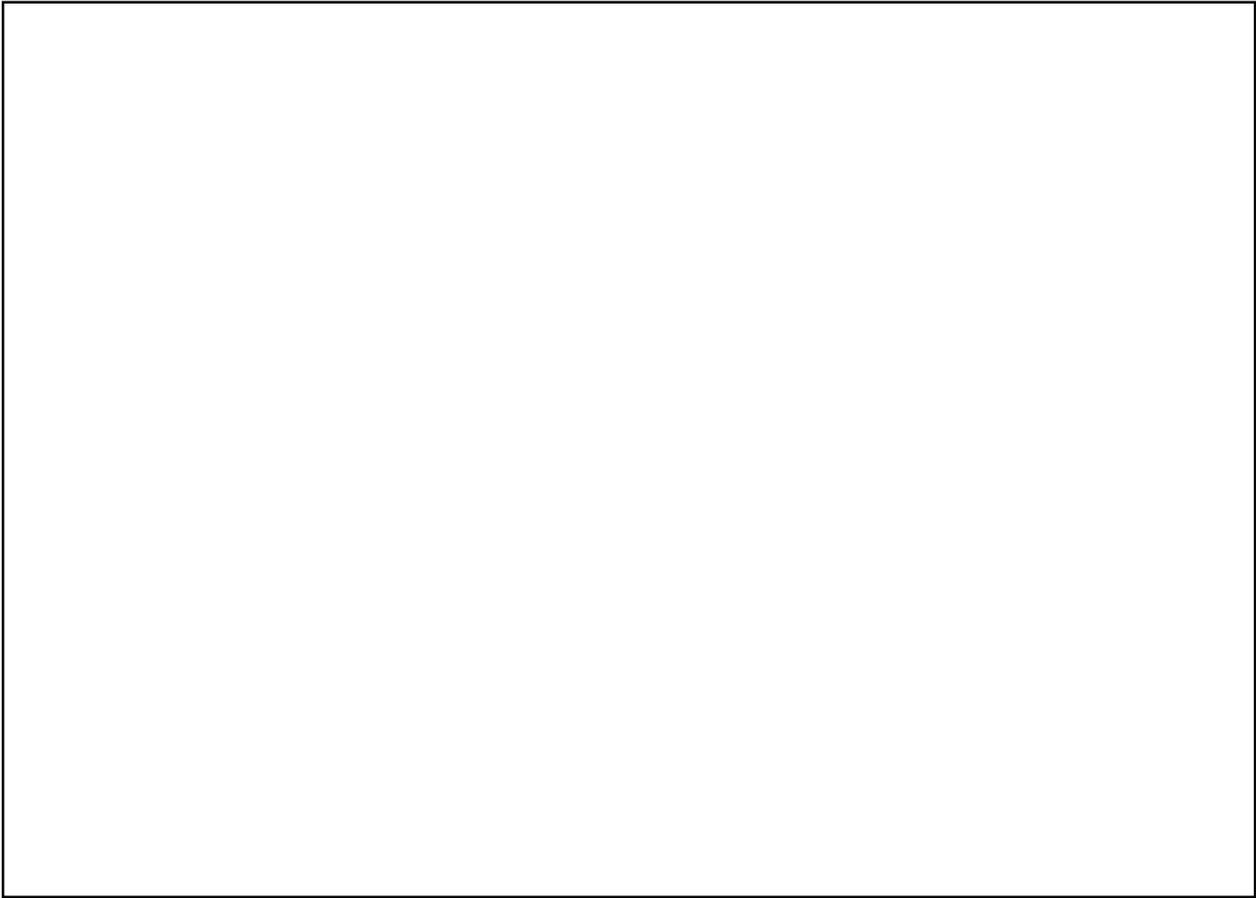
六人之内 有田彦右衛門 真嶋与市右衛門 岩本

惣左衛門 栗山平太夫 此四人之儀者 翌七年

中之引方注<sup>おあせわたされ</sup>1御役被仰渡候 然<sup>しかるところ</sup>處 正月

三日 御初物之時分 右四人之もの罷出候ハ

\*1 引方 = 引米方の事か。諸臣の借禄をその禄額から引去り処理する役。(「もりのしげり」P300)



相残四組之者共一同二罷出間敷と内談  
 仕候通 四人之者及承候付而病氣之通  
 御理申出 御初物二毛不罷出候就夫相残  
 四与之者共八罷出如例年御初物相調候  
 然共 四組之者共 内證憤不指捨候付  
 四人之者御役儀之御理達而申越候付被指  
 替候事

一 元禄七年之春 御代替之御仕与注<sup>1</sup>二付  
 益田久石衛門 益田八郎左衛門兩人萩江被召出  
 尤益田又左衛門 相添 諸事御任与被仰付<sup>組</sup>  
 其節 益田与右衛門儀者 江戸被差上候て 留守にて  
 其節之出座不仕候 左候て 御役人定  
 相極 栗山半左衛門 増野作左衛門 松井勝左衛門  
 萩被召出 御一門様方御烈座之上 栗山

\*1 仕組 = 構造、機構。ここでは益田家の主要人事異動のこと。



半左衛門 須佐都合役 増野作左衛門儀

萩当役 松井勝左衛門儀 御目付役 右之筋

被仰渡 いつれも御請仕候 左候而 諸沙汰

被仰付 御家来御制法之御ケ條書 相

調 萩在番之面々江 被仰渡 其後

二月十二日 益田久右衛門 益田八郎左衛門 栗山

半左衛門 須佐被差戻 翌十三日 土中

右之御ケ條被仰渡 いつれも

御請仕候事

一 四組之儀者 旧冬御理之儀付各別二

御意書を以 頭四人江被仰渡 其辻を以

与子共江申渡 何茂 謹而御請申上候 然処

当春之宗門御究 右列はつれ

六人 相之儀 と



恨を以内證にて

加之しかのみならず与内御役目日数(組)申覚

悟之由候 此段江戸ヨリ御両国御安堵之

御到来有之次第これあり注1 御理申出覚悟にて相含

罷居候由相聞候事

一 四月廿八日 小原次郎左衛門 大谷権左衛門 堀

市郎右衛門 三人之与子(組)

出之申上度儀有之候間

被下候様くだされと申候二付而

打寄罷出候処 次郎左衛門与子(組) 小原平右衛門

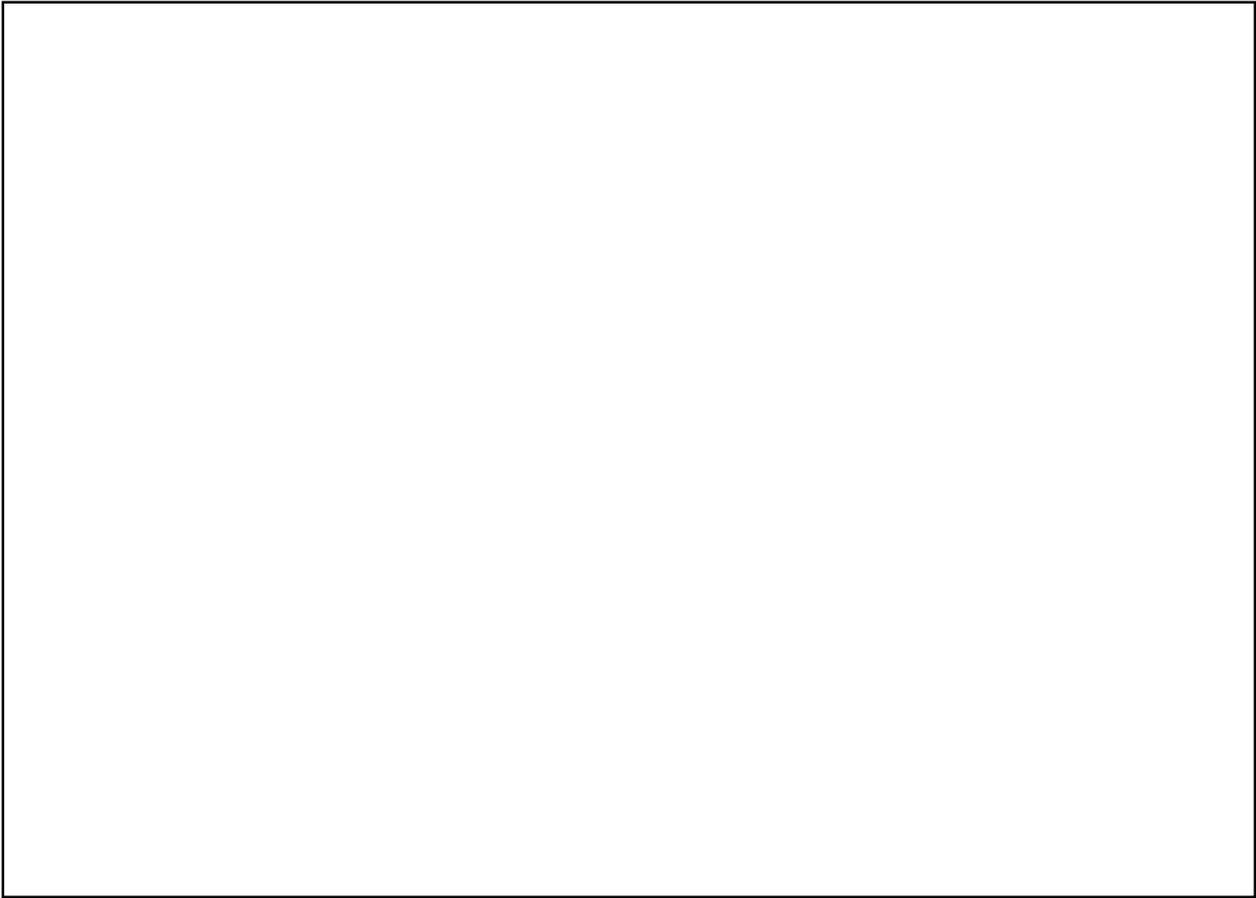
有田甚左衛門 権左衛門大谷組子 有福甚兵衛 市郎右衛門堀

与子(組) 品川太郎兵衛 右四人之もの共 権左衛門大谷

宅江参 三頭江申し候八 当春宗門帳二彼

六人 候段在郷

\*1 江戸より御両国御安堵之御到来有之次第 = 元禄7年2月7日、毛利本家では毛利吉就が卒去。同年4月13日、吉就の弟吉広が家督相続した。吉広は右田毛利六郎左衛門就信の養子となって主膳就勝と号していたが、兄が卒去したので毛利本家の家督を相続した。この代替りを幕府に報告し、防長ニカ国の安堵状を求めていたものと考えられる。そういう時期に、益田家中の騒動が表沙汰になっては一大事という認識があった事を意味すると考えられる。



一圓 与内数 と

差除覚悟之由相聞候 かやう 向後

不依何事 四組一同と相唱候時者 假物之

儀二も結徒党 御理申上候様相聞江

上之御為も如何敷 次二八御年寄中

心入も迷惑奉存候 旧冬已来 以

当春 御意書

一同御請申上候 もはや於此段

儀無御座候 然上者彼六

仕 御奉公申上覚悟御座候 就夫

右心入之人数 懸り目候間 御年寄中も

此段被仰返被置被下候様二と申候て 二郎左衛門

与子 在郷者十六人 榎左衛門与子 在郷

もの十三人 市郎右衛門与子 在郷者十三人



已上四十式 注又注<sup>1</sup>三頭 差出候 尤 〇

家名之儀者 右之注文二相記候 然處<sup>しかる處</sup>二

権左衛門申候八 只今各之申分<sup>おのの</sup> 此書付二

無相違候哉 其頭へ別段之御理有之時八

縦<sup>たとい</sup> 府と 〇 共差越可申候間 〇

相心得候様と申候 与子共<sup>あいにしるえ</sup>

御尤之儀共存候 祇今<sup>まさ</sup> 〇 上候分者

無御座候通申候付 権左衛門申候八<sup>大谷</sup>

此注文にて申出之由候 三郎左衛門 〇

二て八候へ共 三郎左衛門与へ八<sup>組</sup> 一圓内 〇

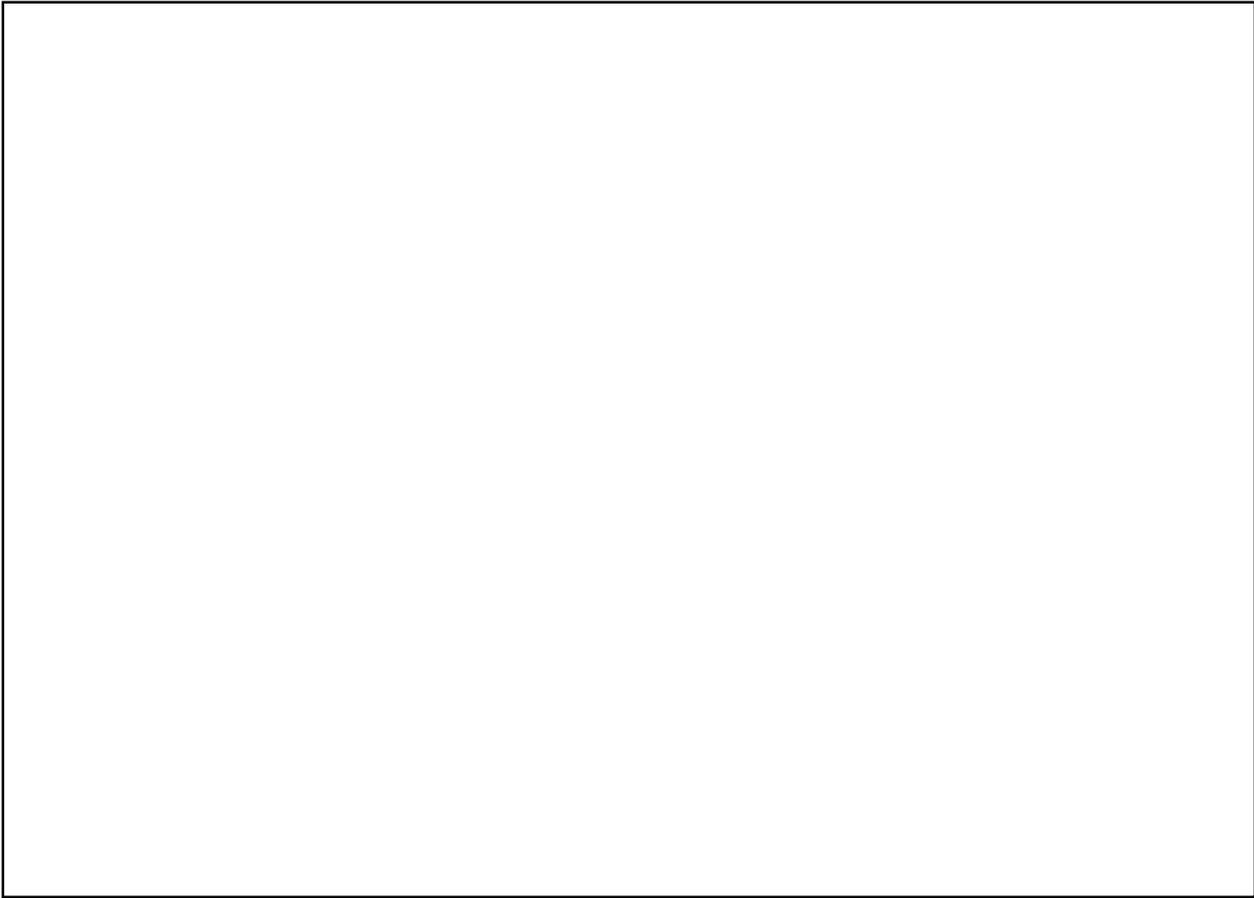
相尋候奴 与子共申候八 三郎左衛門殿 御与<sup>組</sup>

承合候奴 いまた此方之組八 詮議不相

極候由返事仕候故 先三組斗<sup>ばかり</sup> 右之趣

御座候由申候付 然時者 向後御理之儀 〇

\*1 注文 = 注進の文書。注進状。 書付、文書、書状。



無之と申出候段これなし神妙なまじ条

披見可仕と権左衛門申候へ八つかまつるべし二郎左衛門儀も小原

成程尤之儀共せしむべし可令披見と申(候)其時

市郎右衛門申候八せつしやにおいでます於拙者八先披見仕間敷候まじく

拙者組与ヨリ八 證人兩人共二 不罷出候故

五郎左衛門 品川太郎兵衛罷出之由

得者ば 此一座江まかりいでず人不罷出候 得と

しらべ披見可仕候由

罷立候故 権左衛門儀大谷 玄関迄

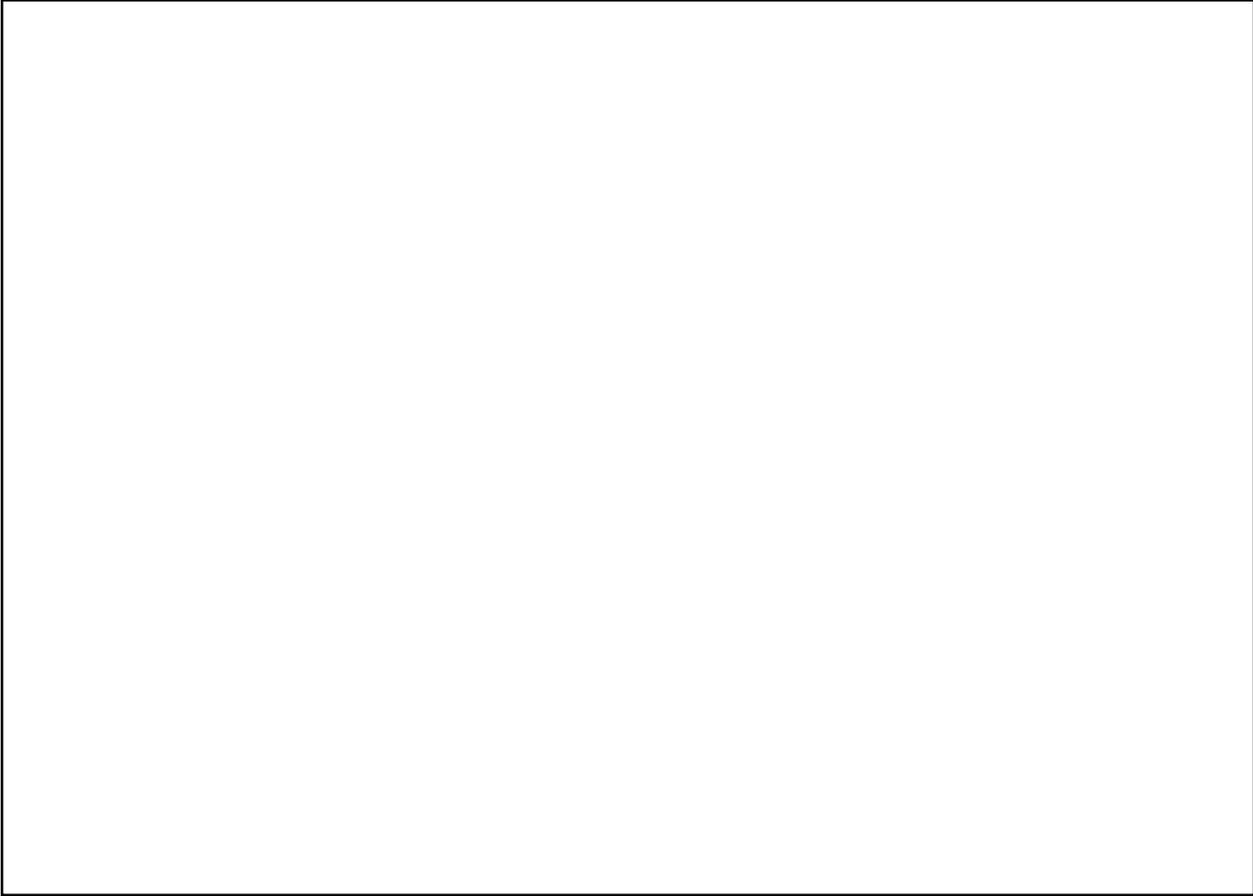
め罷出候処 市郎右衛門申候八

儀 兎角披見八無用候 相残もの共とかく

いかやうに可申出も難計由申候而はかりがたく 市郎右衛門堀

儀者罷歸候 其跡にて権左衛門大谷 二郎左衛門小原

相談仕 右之書付令披見 六大相對



權左衛門方二罷置候事

一 同廿九日大谷權左衛門 小原次郎左衛門 兩人

前日之首尾 与右衛門 八郎左衛門 半左衛門へ

咄申候付 右三人申候八 市郎右衛門心入 切々

苦々敷儀共候 畢竟不覺悟之儀候間

兩人ヨリ市郎右衛門方江 手紙

可仕候趣者 三郎左衛門儀

与年寄共迄様子承合候て

有之哉と問合可然候 左候八、市郎右衛門

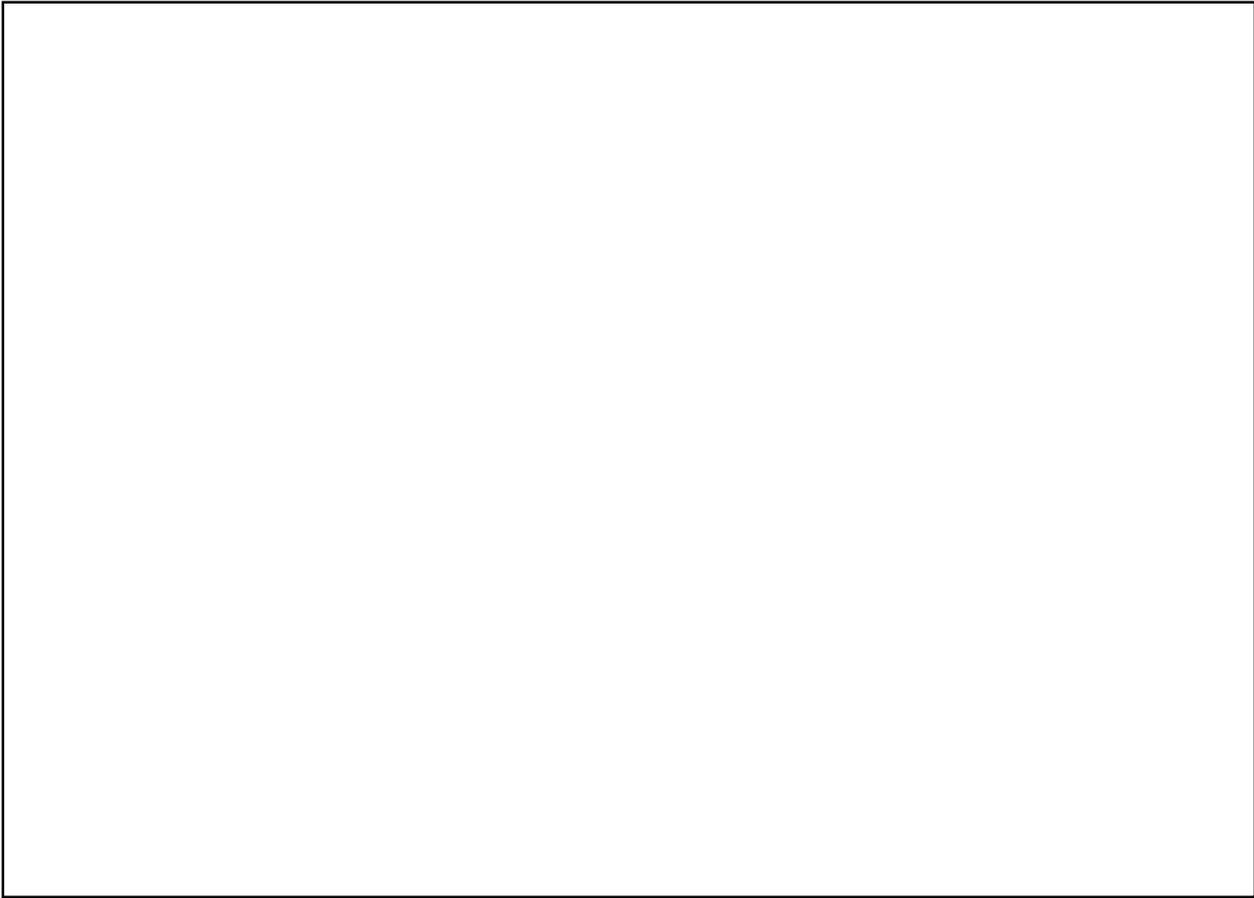
心入も弥知レ可申候由申候へ八 相心得候由にて

兩人罷歸 則時一郎右衛門方へ手紙を以

右之趣申遣候処 返答二申越候八 三郎左衛門

与之儀二おひては 明日三与之ものへ相

尋候八 彼もの共ヨリ 問合 然時



各□之沙汰二八及間敷之由返事仕との事

一 同晦日在須佐四与之内ヨリ三頭へ申候八

一 処へ御集り被下候様ニと申付候 又々権左衛門宅へ

三人打寄候処 小原二郎左衛門与 大谷十右衛門 大谷

六左衛門 松井平兵衛 堀市郎右衛門与 大谷又右衛門

高津佐右衛門 大谷権左衛門与 安富五郎左衛門

新右衛門 梅地喜兵衛 境三郎左衛門与 大谷孫兵衛

片山久兵衛 波田久左衛門 已上十壹人參

大谷十右衛門申候八 御三人様江申上度儀御座候

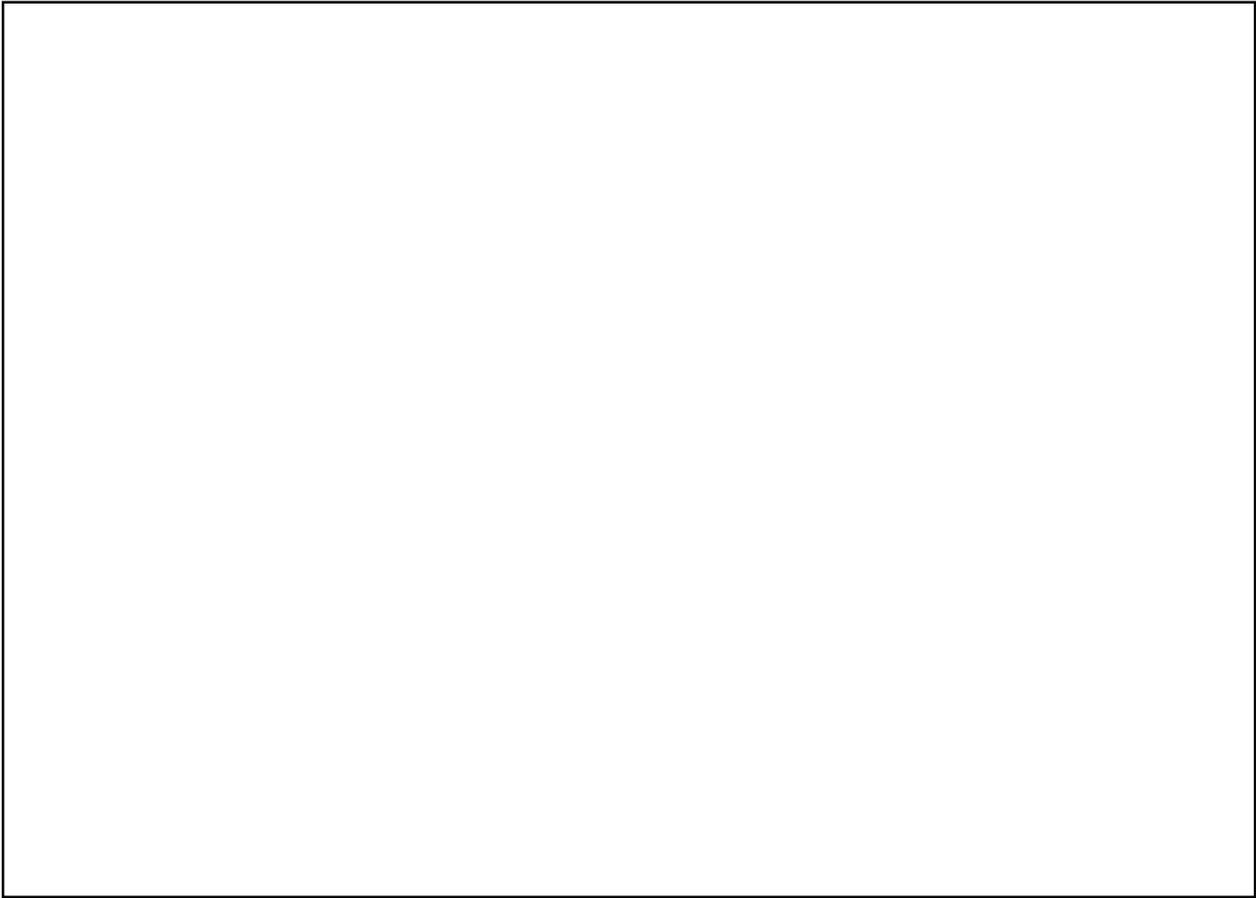
付而參上仕候由申候処 引続大谷孫兵衛

申候八 此間在郷二居候与子共ヨリ 何事

哉覽書付を以申出候由候 此段様子者

不存候 然處 各儀 彼烈はつれ六人之

ものと向後相役等不相成候 此間も彼者



参懸りにては[各]了簡も成苦敷候間

新規之御理も有之儀候間 三郎左衛門

萩ヨリ帰宿之上 四頭惣談候上 年寄

中迄申出候ハ、上之御了簡可毛可

間 先其内之儀者 諸事音ひん二相かまへ

候様二と申聞 皆々退去仕候由候 此段

翌五月朔日 夫々権左衛門 二郎左衛門事 与右衛門

八郎左衛門 半左衛門江咄申候時 三人申候

今少市郎右衛門心入も承合 表向各

申出可然と申談 兩人差戻候事

一 五月三日権左衛門・二郎左衛門兩人 八郎左衛門

宅江呼 尤 与右衛門 半左衛門一座にて内談

申候ハ 此間市郎右衛門 心入折角聞合候へ共

先日[宅]之参懸り苦々敷存候



種々悪調儀 彼(組)与茂騒動仕候 扱さて又また

旧冬之指替儀 須佐・萩 大(組)与之役人衆へ

向後自他国共 御付之役儀 相勤候事あいつとあ

是又不相成候間 此段とも左様御聞届あいならず

被成候様二と申候 然処二市郎右衛門申候八 是者なづれ  
しかるところ

新番御理之大与之役人と(組)先石津

傳右衛門 小国彦兵衛 松原八郎右衛門とも

ゆ指ひを折 此外誰々にて候哉と申候へ八

片山久兵衛申候八 是八市郎右衛門(堀)殿注1とも

覚不申候 左様二御名指候て八不被申上候由申候おぼえもせず  
なまじ  
もつしあげられず

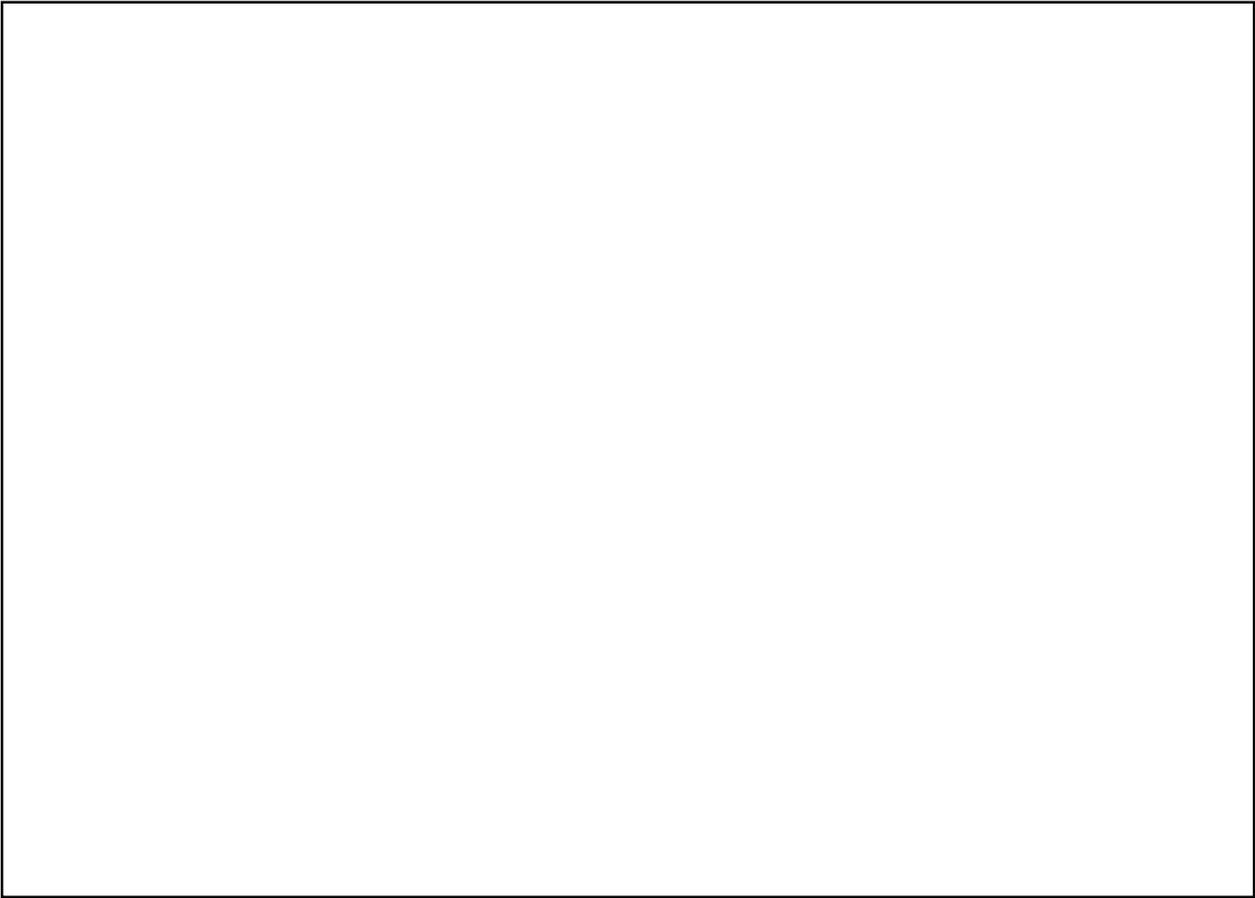
其時二郎左衛門申候八 久兵衛申儀候へ共 かやう二(片山)

大事之御理申出 各迄取次相頼候時(ことわり)  
おのあのとりつき

一篇二大与役人と計二て八不(組)済すまず

申届候由申候 権左衛門(大谷)申候八 もはやかやう

\*1 催 = 他を促すこと。催促。 企て 促して物事を起こらせること。



いか様内證候て 萩・須佐相談之取遣

なとも可有之様存候 乍此上延引候てハ

悪敷候間 明日者早々表向各付

届被仕可然候 兩人被參候時ハ 市郎右衛門

残居候様二八相成間敷と存候 乍尔 兩人

ヨリ八市郎右衛門事へ知せ迄ニテ 餘り同心

両二八及間敷之由申談 兩人儀

合点仕 罷歸候事

同四日 八郎左衛門宅江 権左衛門・二郎左衛門・市郎右衛門

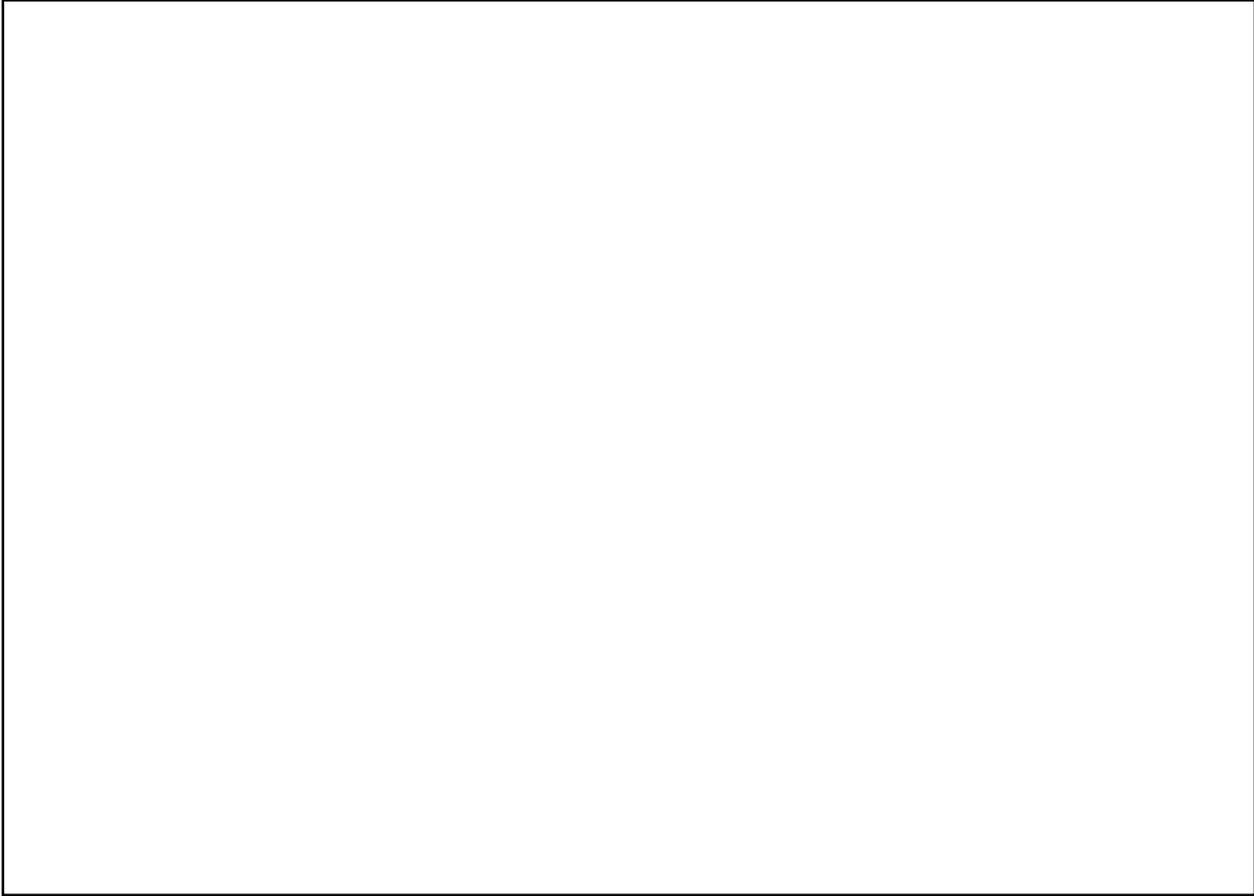
同道ニテ參候故 久右衛門・与右衛門・半左衛門をも

呼 烈座ニテ 権左衛門申候ハ 先月廿八日 在郷

者申出之趣 并注文之様子 物語仕候 然時

市郎右衛門申候ハ 其以後晦日在須佐 尤

在郷残与子申出之首尾をも物語被仕候



様二と申候 小原二郎左衛門申候八 是八あたかも

おのあの各請持分二ても無之 これなく其上御名指

物語申候様二との儀も無之候 これなく其節も三郎左衛門

儀 萩ヨリ罷歸候八、四頭惣談之上 年寄

中へも可申出と申談候 もついでるへし只今御物語聞

及間敷哉之通申候へ八 ききあよひまじくや市郎右衛門申候者

成程其通二て候へ共 先内證届仕候者共

心入之通御物語被仕 つかまつられしかるへし可然と申候二付

晦日之申出 これをもついで三頭与子江之挨拶旁 かたがた

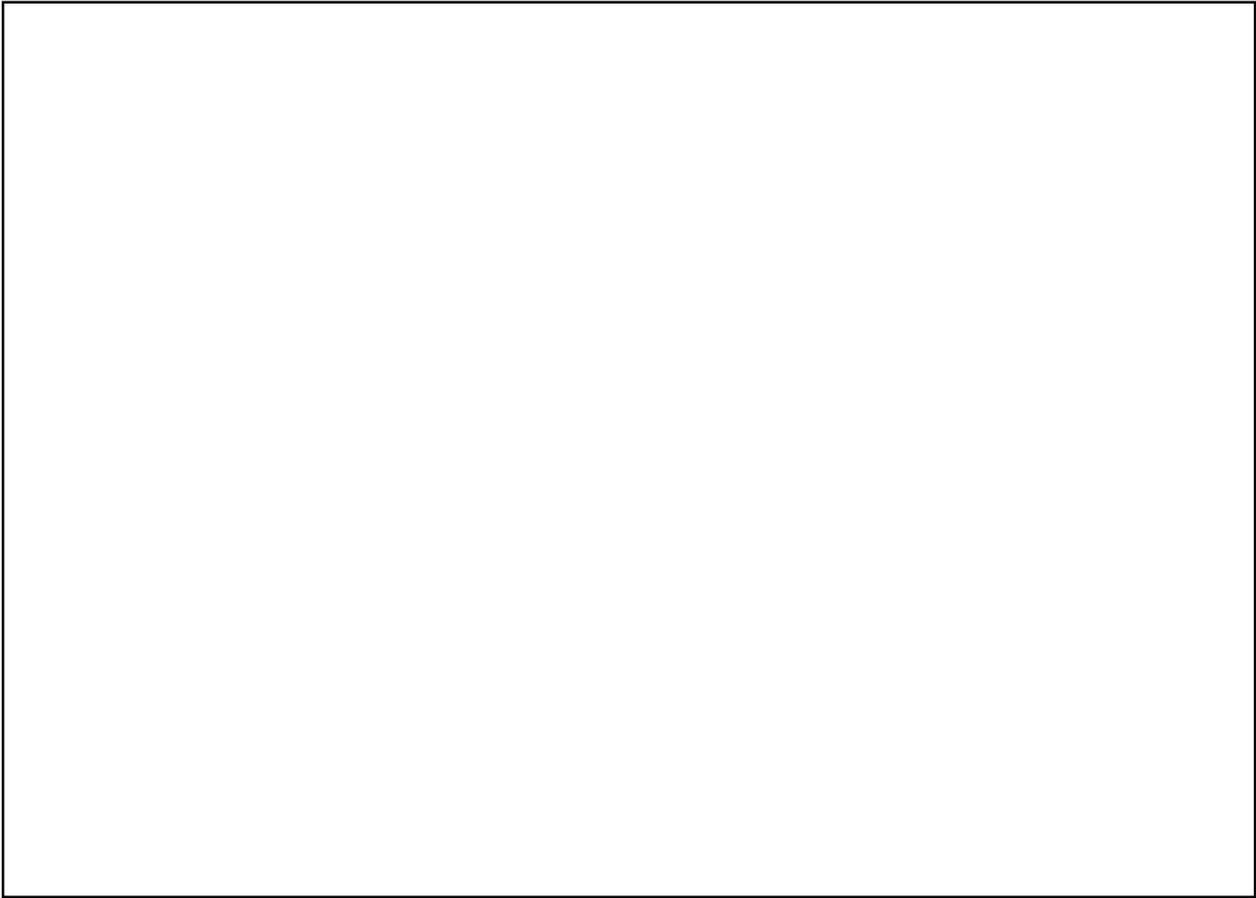
二郎左衛門物語仕候 小原与右衛門・八郎左衛門・半左衛門三人 益田 栗山

申候八 先月廿八日 在郷之三与ヨリ申出候

時分 市郎右衛門事 堀何とて右之書付

無披見候哉 彼者共申出候段八承候処

尤之心入計に存候 もつともの然時八早々被



其俣二て權左衛門方預り被置可然と申候

与右衛門申候八 尤兩頭八披見之儀候得共

表向之付届之事候へ八 注文之人数者

各見置たる首尾可然之通申候 八郎左衛門

申候八 与右衛門申通 此節之儀候へ八 書物

人数見届 二度不立帰様御仰仕可然候

乍去 兩頭披見之上 表向之付届者

人数兩頭見届之事候 然時八各披

見同前之儀候 乍此上 相残与子判形

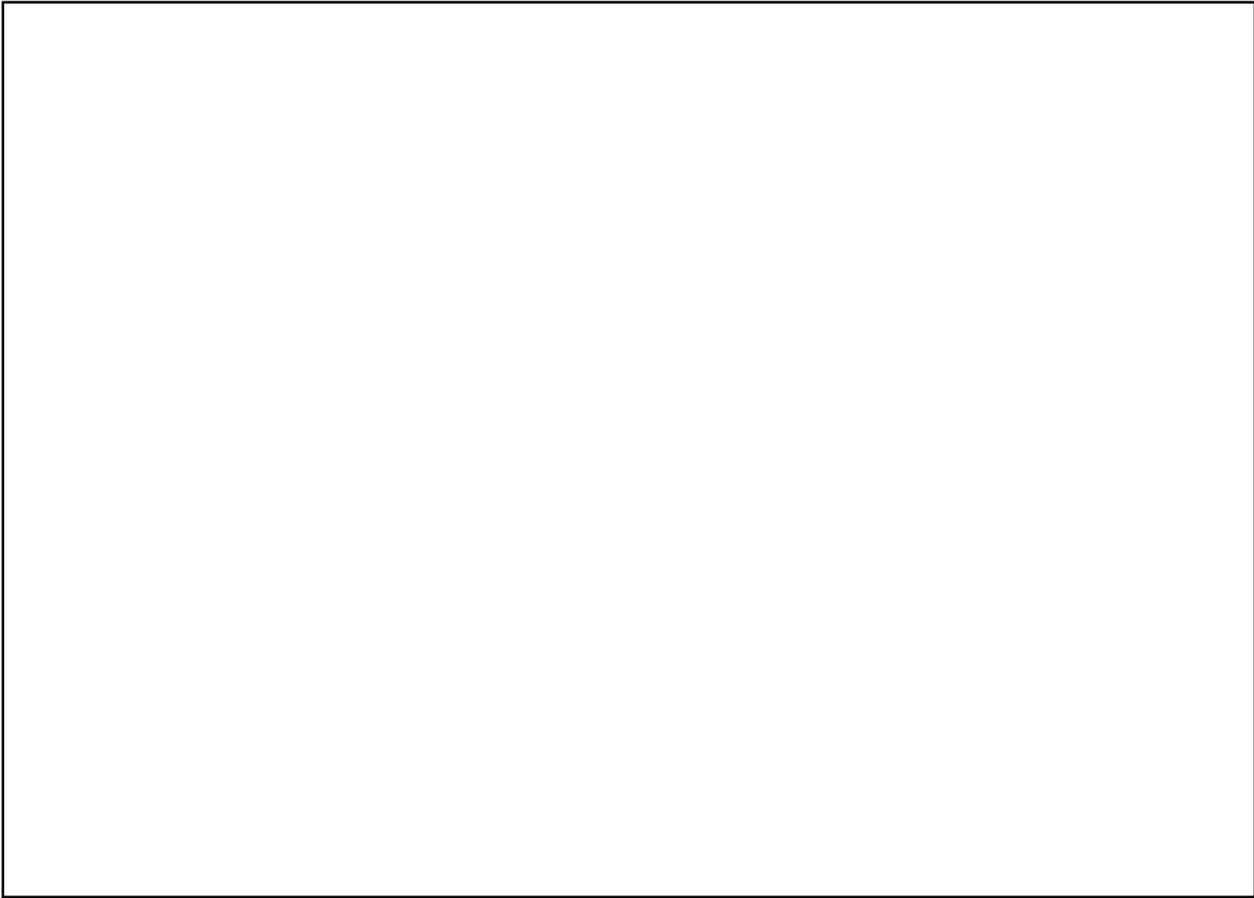
なと仕為二八 先披見不申首尾可然と

申候 半左衛門申候八 今一通り残組子

頭々呼候て 此書付之段申聞

御為之儀候間 判形仕可然之通沙汰有之

度事候 三与之儀者 一与切り之沙汰



披見致候へ共 心入計はかりに候段 氣を被

様二祐有こしれあり之度儀共候 いかやう之心入二て

無披見候哉と相尋候へ八 市郎堀右衛門申候八

私与組ヨリ八證人兩人共二不能出儀 其上

嶋五左衛門 品川太郎兵衛 兩人罷出候八

五左衛門儀者は 権左衛門宅へさへ不参まいらず 在郷引取

申之由候 旧冬四与組一同御理之時分二茂

私与組子之儀者 度々不合二留り左

たる事已候へ八 得と内證引しらべ 其上

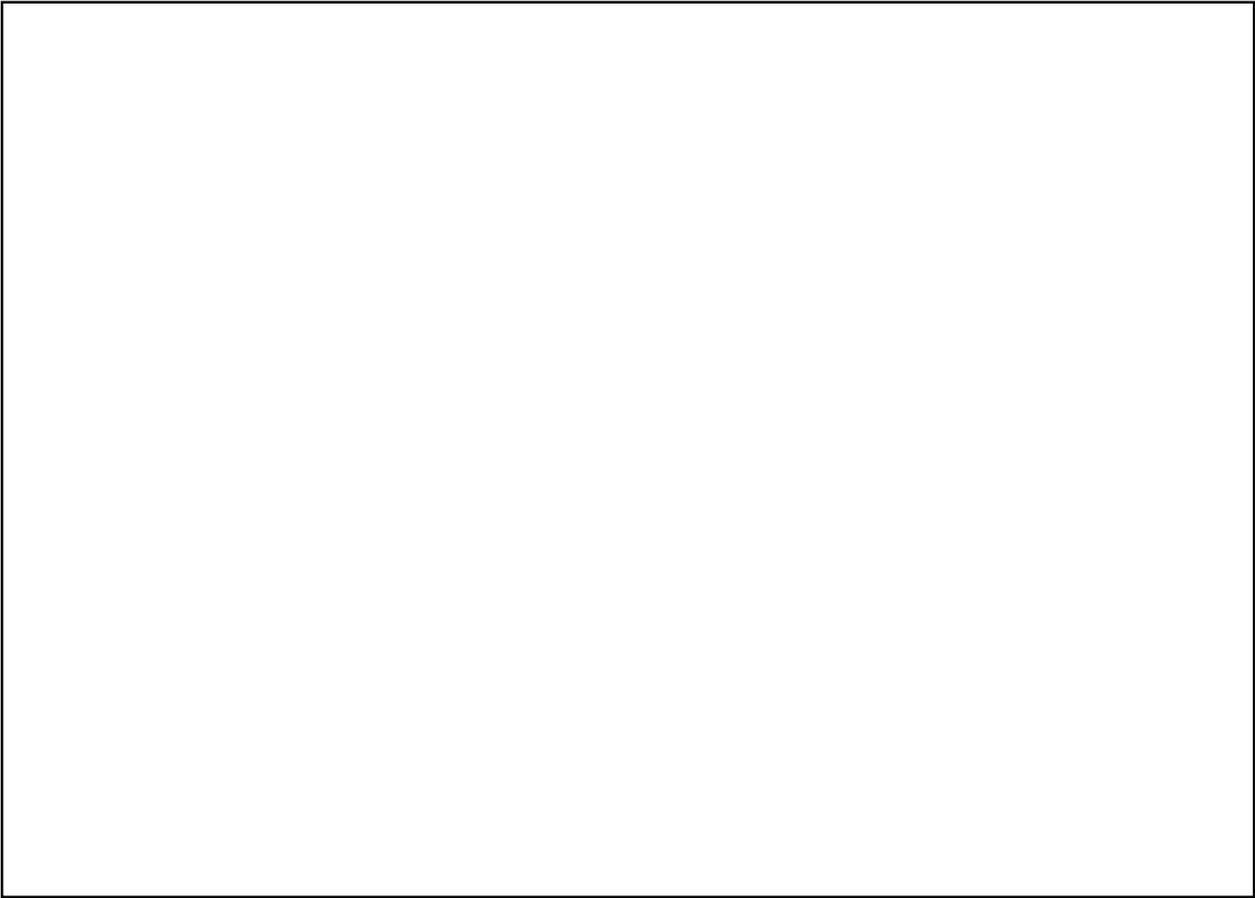
二て披見可仕と存罷過候通申候 切又さてまた権左衛門大谷

申候八 三組ヨリ之書付只今御披見二

被成哉と申候付 与右衛門申候八 いかにも

仕可然と申候 半左衛門申候八 先此書付之

儀者御披見御無用存候 両頭披見之儀候間



仕可然 三郎左衛門境与組之儀者 年寄分之

者證人引加 呼出し候て 三頭一座ニテ右

段々被もつ申しま聞か可然候通申談 いつれも

尤と詮儀相極 皆々退去仕候事

一 同五月四日之晚在郷ヨリ残与組子面々呼出候

处 須佐罷出候へ共 権左衛門大谷与組子之儀者 再三

呼候へ共 権左衛門大谷宅へ参まいり不申も之由候 二郎左衛門小原

与組子之儀も頻しきり二沙汰仕

平川五郎右衛門 漸夜半過よひ二参り申候 就夫

二郎左衛門小原段々申聞候処 彼者共申候八

成程御尤之儀共奉存候 乍尔しかしな只今

何とも御請仕つけ苦敷候 いつれも罷歸

得と思惟仕 様子可申上とて罷歸

由候 大谷六右衛門儀者 波田久左衛門所ニテ

残組与子共かけ留 手離し不申候故 不任まかせ

心底 漸く翌朝二郎左衛門所江参申

左候て 六右衛門参候二 猪兵衛 五郎右衛門儀

内存物語仕候 夜分次郎左衛門殿 縦たとい

被仰聞候儀 旁々吟味仕候得共 兎角新とかく

願入不得仕候間 此段二郎左衛門殿へ申上

くれ候様二と被頼之由候 就夫 六右衛門儀

右一同之心入 由申候二付 次郎左衛門申候八

切々不合点成儀共候 乍此上も得と

吟味仕可然之通申候て 六右衛門儀差戻之

由候 権左衛門儀者右之通 与子寄

不申候故 存寄可申間方便無御座候

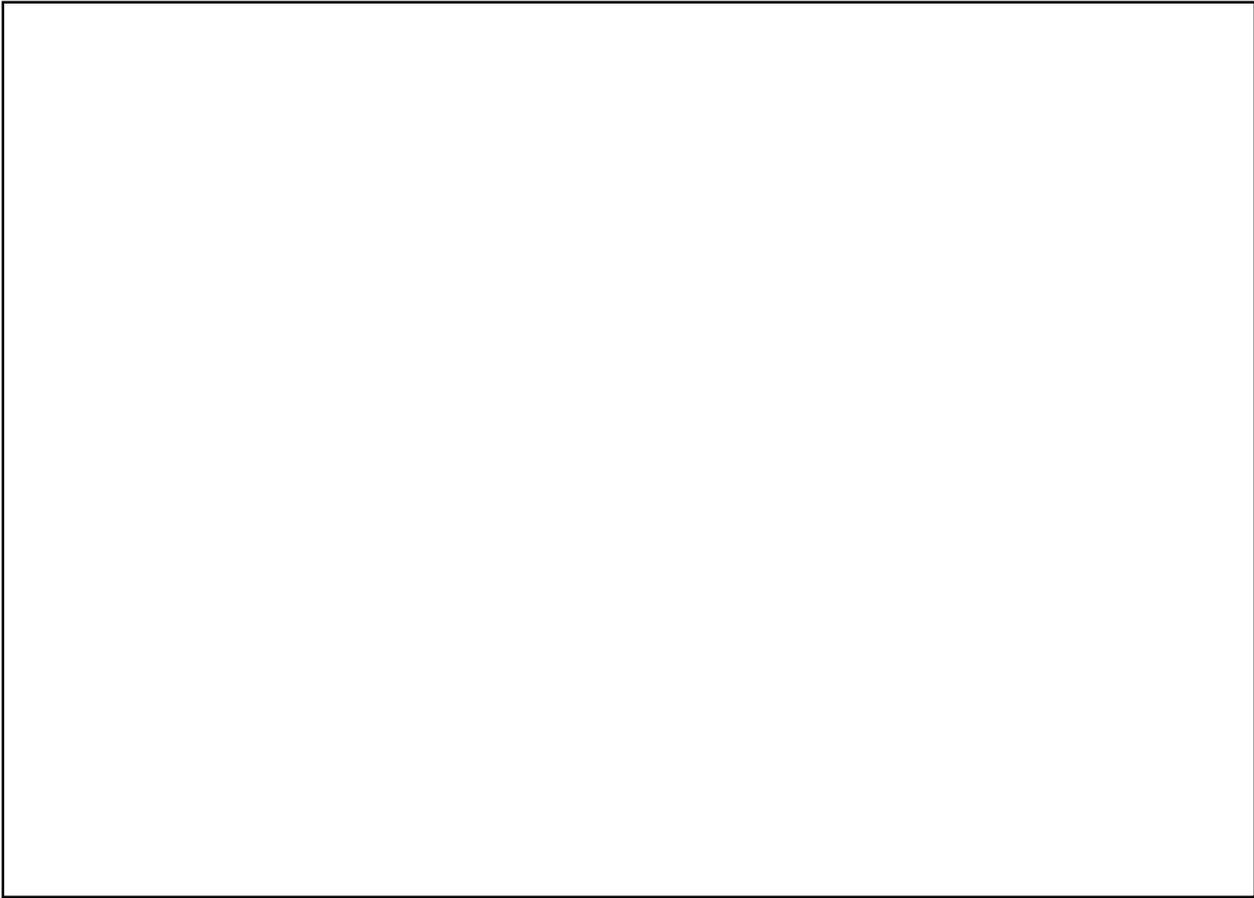
乍此上 兎角呼寄候様二も可相成候へ共

左様二て八及方りきみ出来候様二可



有之候 いかゞ可仕哉之通 与右衛門・八郎左衛門・  
半左衛門<sup>栗山</sup> 相談仕候二付而<sup>ついで</sup> 三人申候は いかにも  
尤之心入候 二郎左衛門与子も<sup>小原</sup> 頭之方へ  
参候へ共 判形八不相成候由相聞候て 然時  
権左衛門与子も一同之内存可有之儀<sup>大谷</sup> 左候  
時者 けんへひ<sup>注1</sup>二呼候ても結句<sup>〇</sup>  
出来<sup>しゅつたい</sup> 先々以<sup>〇</sup>惱<sup>〇</sup>苦敷事候<sup>〇</sup>  
其俣<sup>二</sup>て被差置<sup>さしおかれ</sup> 一同もはやく被  
差戻候首尾可然候 多人数須佐二て  
入込罷居候而<sup>て</sup> 悪鋪候通申談 権左衛門<sup>大谷</sup>  
委細合点仕候間 其分二沙汰可仕<sup>〇</sup>  
申候 此上之儀者萩ヨリ勝左衛門<sup>松井</sup>など被指  
戻 詮議被仰付ヨリ外無之儀<sup>これなき</sup> 先其内之  
儀者<sup>は</sup> いつれも音<sup>〇</sup>ひん二相構居候様二申

\*1 けんへひ = 権柄。権勢をもって人を押さえつけること



聞可被置候 おかれるべく 旦那樣御事も頃日

三田尻入越被成儀候間 なられる 御帰之上 各三人

より秋年寄中迄可申談候通申相

権左衛門も指戻候 夫ヨリ八被付込 大谷 沙汰

不仕候 尤 勝左衛門 松井 須佐被差戻

与右衛門 益田 八郎左衛門 益田 半左衛門ヨリ又左衛門方迄 栗山

寄合互之存寄申相候事

一 同十八日之晚 五月 益田久右衛門 益田又左衛門

増野作左衛門 松井 松井庄左衛門儀 御前一被

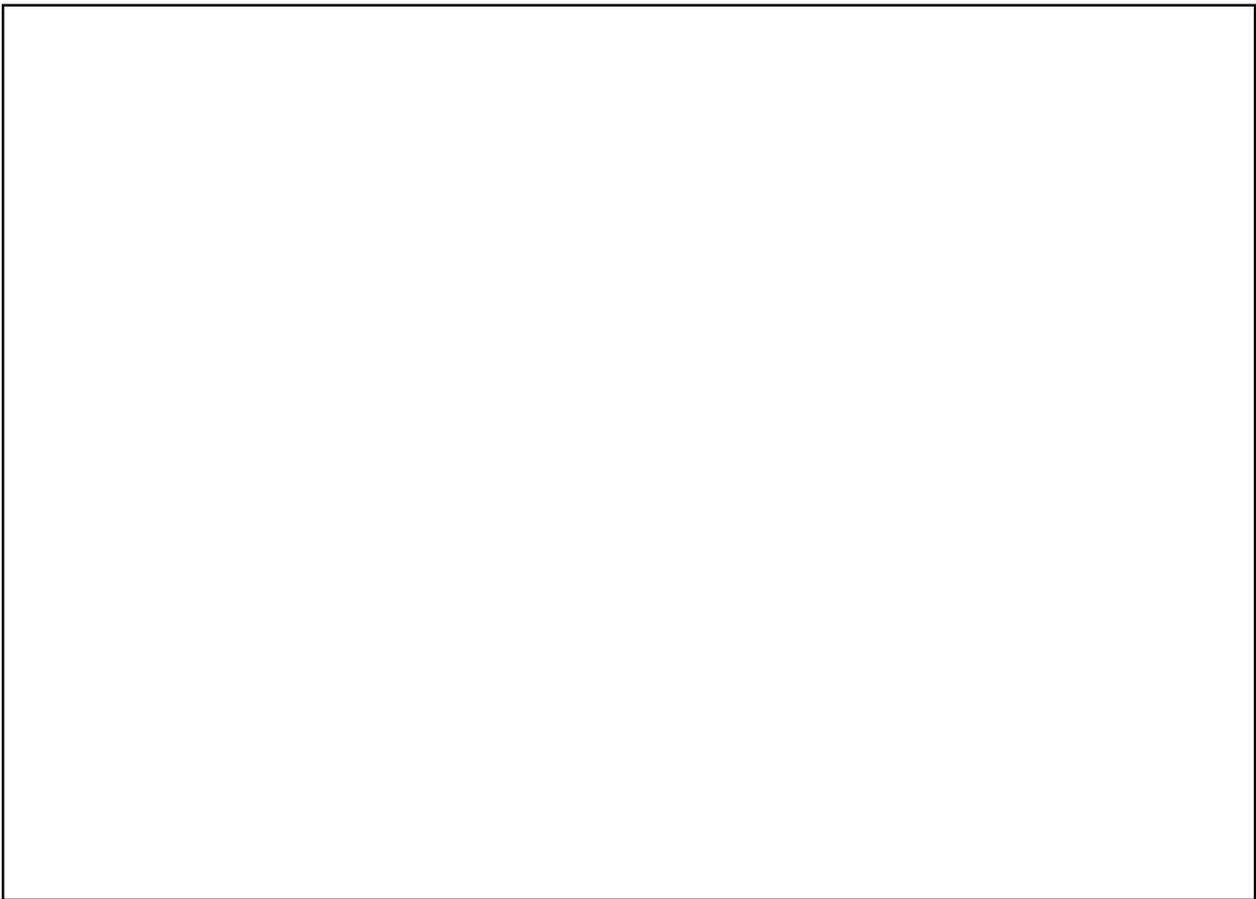
召出 勝左衛門江被成 なられ 御意候八 四与之 組

もの共 當春以来 何角理 ことわり 有

之由にて 頭共迄八理申出候通 ことわり いかやう之

首尾にて候哉 頭共ヨリ之申出 いまもってこれなく 今以無之

左候而者 な 与中も少々噪候様二被 なむき



聞召付而 勝左衛門儀 明日須佐可被指

戻候間 益田与右衛門 益田八郎左衛門 栗山

半左衛門 遂相談 与頭共申分委細

承 勝左衛門存寄之廉も有之候八、

無邊遍注<sup>1</sup>致詮儀 可罷出候様相談之

上 相成程八取収之心遣仕可然 此度

先御下心被仰聞 被差戻事

一 弥四与共収り不申候八、表向之御

沙汰可被仰付候間 左様相意得 まつ

随分心遣仕候様二と被仰渡候事

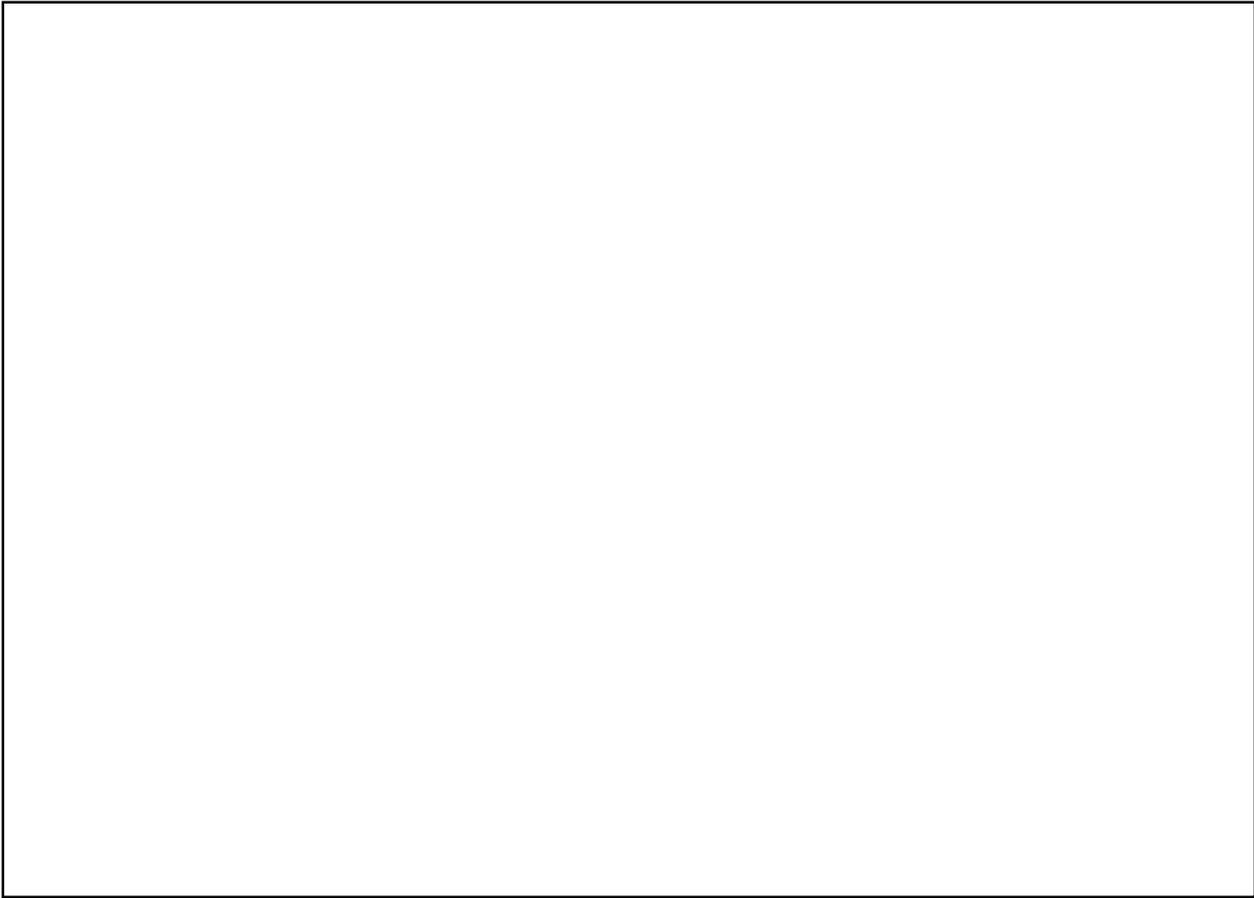
一 十九日之朝 勝左衛門儀 御前被召

出 いよ、今日須佐可被差戻候 委細

前夜被仰渡之通相意得 沙汰在

相極候所承 罷出候様二と重畳二被成

\*1 邊遍 = 偏頗 (えこひいき) の事か。



御意 すなわち午前十時 則白四ツ前萩出足 同晚五ツ 八時

時分 須佐着 早速 栗山半左衛門方へ付届

仕候事

一 同廿日 五月 於益田与右衛門宅 益田八郎左衛門・

栗山半左衛門・境三郎左衛門・小原次郎左衛門・

大谷権左衛門・堀市郎右衛門 尤松井庄左衛門 勝

烈座二て 列 勝左衛門申候八 此間四与中 組

何角と候てふし／＼のやうに相成通

被聞召付候 きこしめしつけられ 就夫 それについて 一昨晚私儀

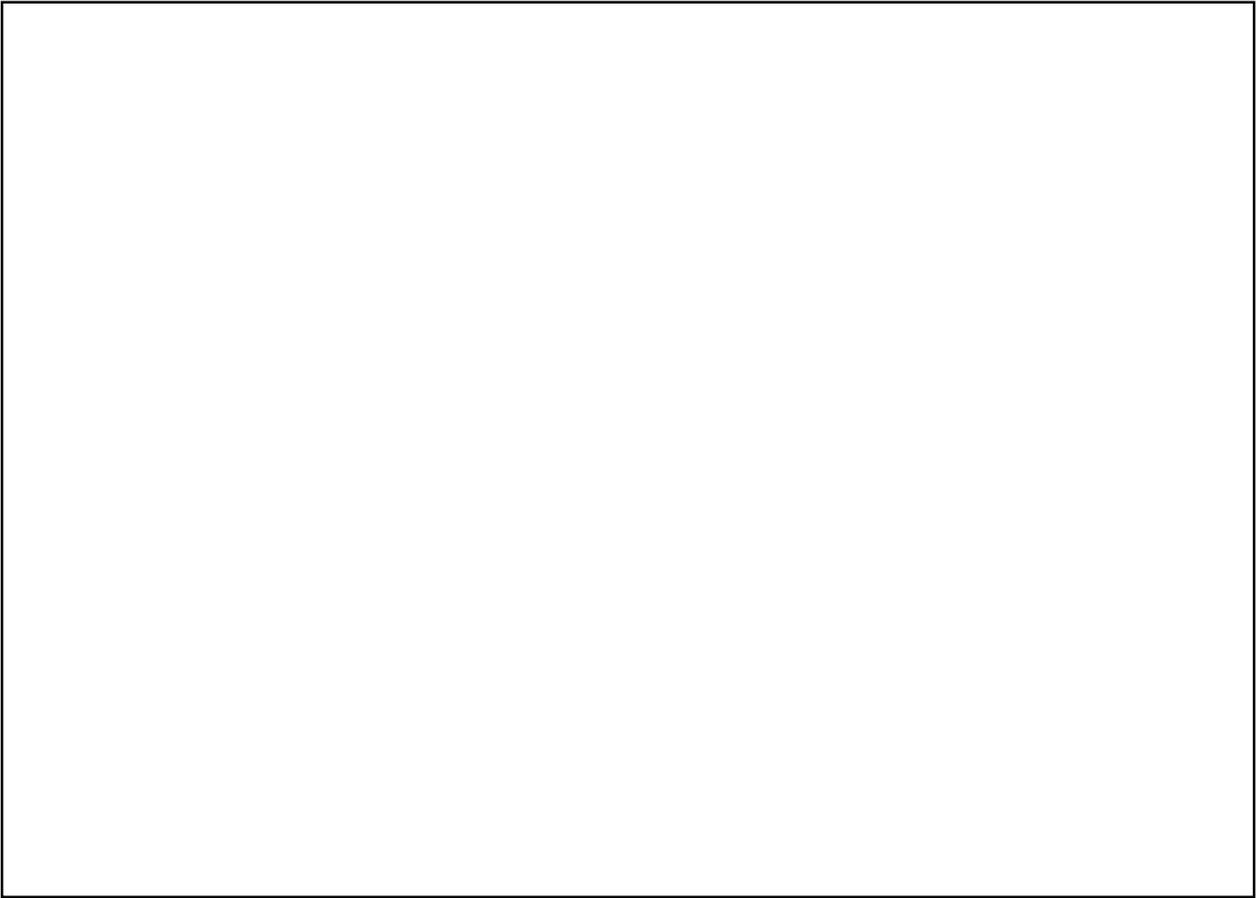
御前被召出 めしだされ 御下心被仰聞候付而 おおせきかされ ついて

昨日罷戻候 与内此中之参懸り 組

いかやう之首尾候哉 おのあの 各遂相談

様子承候様二との 御意御座候 四与之 組

儀者 旧冬御為 元禄六 おんため とて書付を以



尊簡御下着前押付 御法事之儀

付 砌 みぎり 地下向じげ 噪候様成仕  不謂作廻 いわれざる

此節者一圓ひそかに相意得居

指押置之通申付 庄左衛門松井申候八 三郎左衛門方境

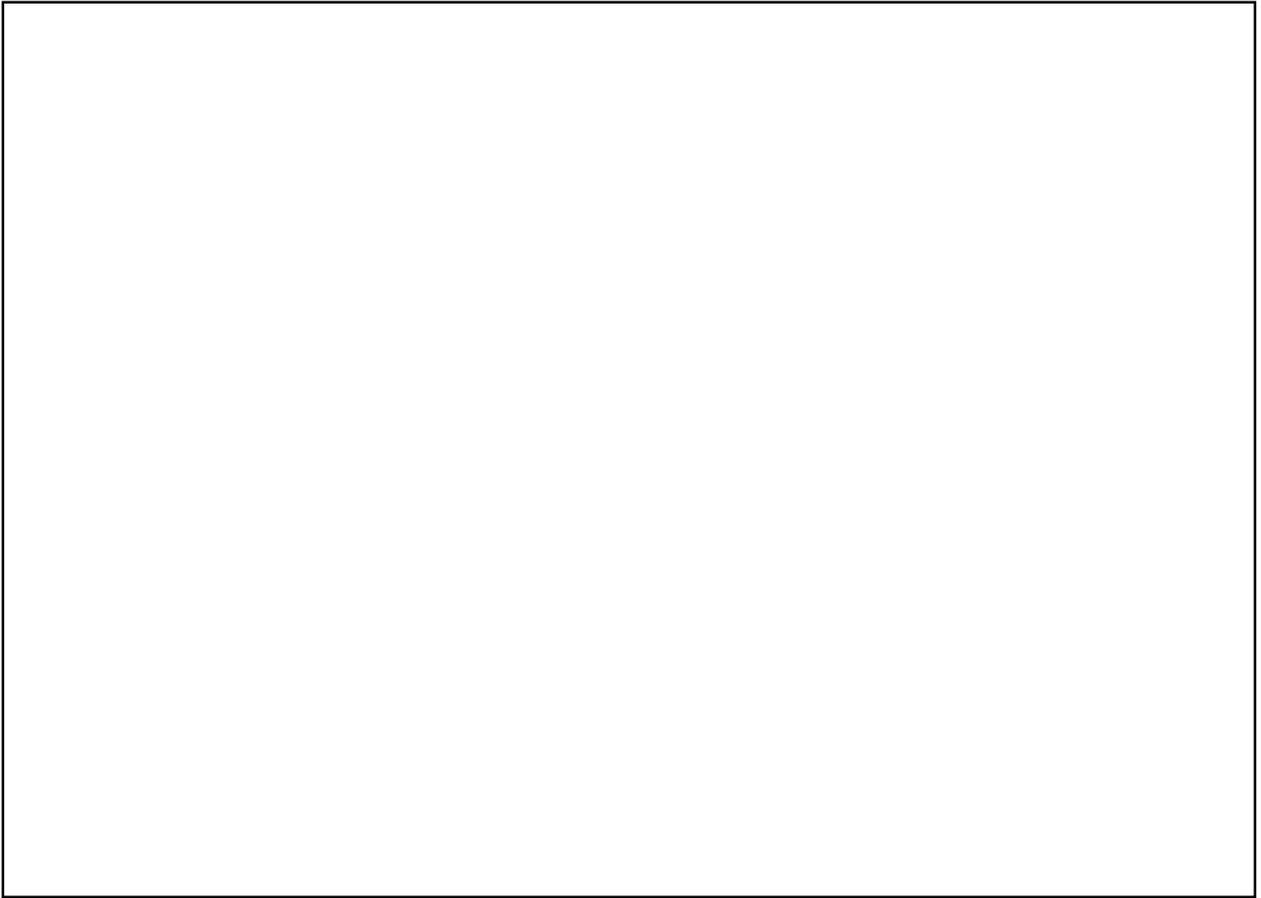
帰宅ても間有之これあり事候 此中相謹

何とて延引候哉と相尋候へ八 二郎左衛門小原

申候八  頃日者御法事半 右之沙汰

虫損などのため

ここから撮影不能



東京大学史料編纂所蔵 「益田家文書」16・14  
**両組頭御究御請次第覚書**

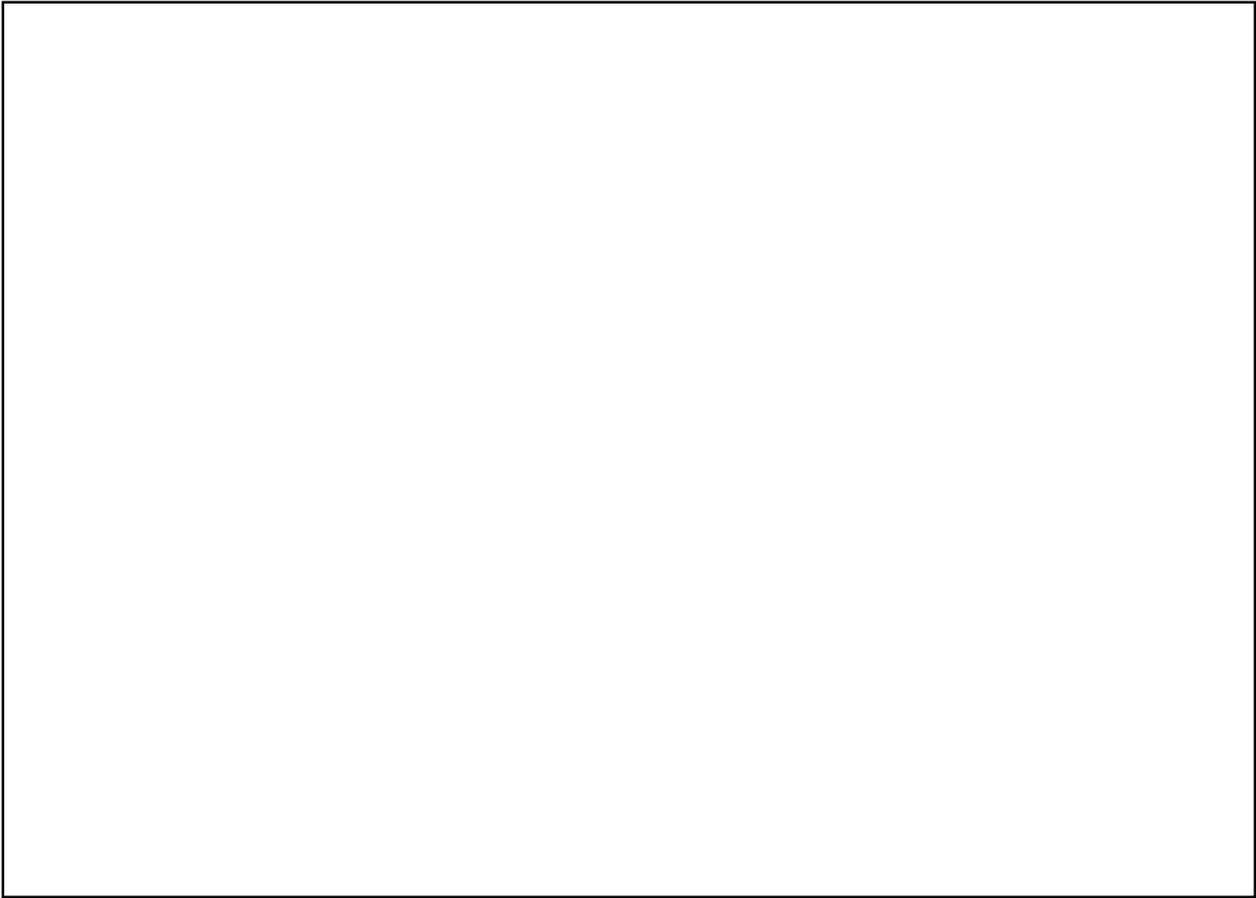
元禄七年七月十一日  
両<sup>組</sup>與頭萩被召出 於  
両度御究被仰付候御請次第

## 境三郎左衛門最初之御究

- 一 宗門之究きわめ 六人注1者書注2候時者は 須佐  
役都合所江早速申届候上 相談  
を以落着候様二心遣可仕儀共候事つかまつるべき  
一 最前 松井勝左衛門差さしかえし帰候時分  
一 与切之沙汰可然と評定しかるべし  
之上 取収之心遣可仕とて 与子組

\*1 六人 = 12 頁参照。

\*2 者書 者ツシ（ハツシ、外し）カ。



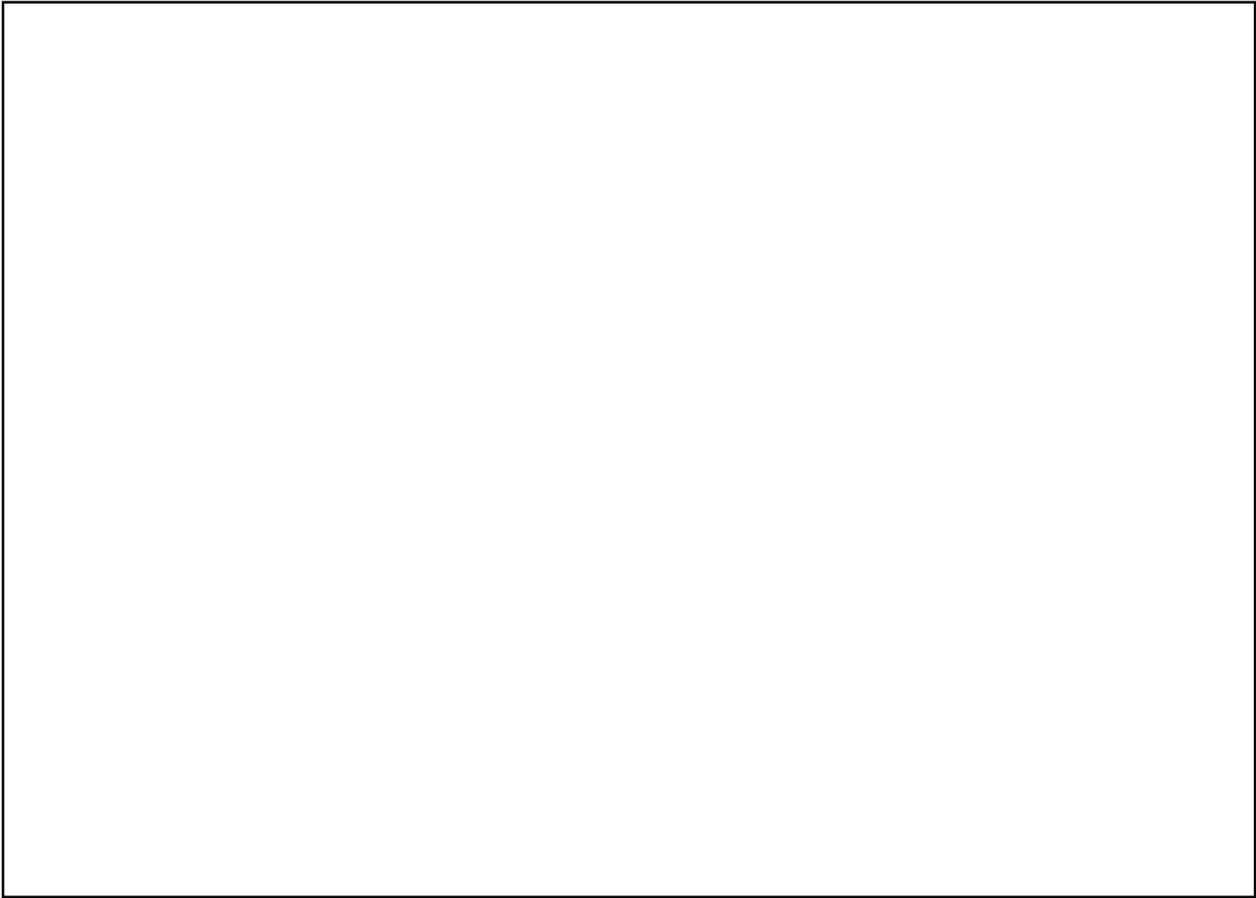
共召寄候処 御上書を以 四組与一同  
 四人列座候八ねば申出 不相成候通  
 申候由 頭之支配不請組子共  
 二て候八、須佐年寄共江様子申出  
 組差上注3可申儀共候処 此段難心  
 得候事がたく

一 最前 松井勝左衛門差さしかえし歸候時分

一旦落着候と申出候処 注文判形  
 之儀申懸候二付 又はみ返し注4  
 六人者相役も不相成と申切候段  
 何を以一先落着候と八申候哉 弥請  
 相不申二極り候時者 与支配不相成  
 段申出 与子共差上ケ可申儀共  
 事

\*3 組差上 = 組子を藩に差し出して処分をお願い出ること。

\*4 はみ返し = ぶりがえす。



一 與<sup>組</sup>子共落着候様二と達<sup>たつて</sup>而申聞候へ八

只今之參懸<sup>まいりがか</sup>りにて八 兎角<sup>とかく</sup>向後

奉公不相成候間<sup>あいならず</sup> 乍<sup>このうえながら</sup>此上八手を放候

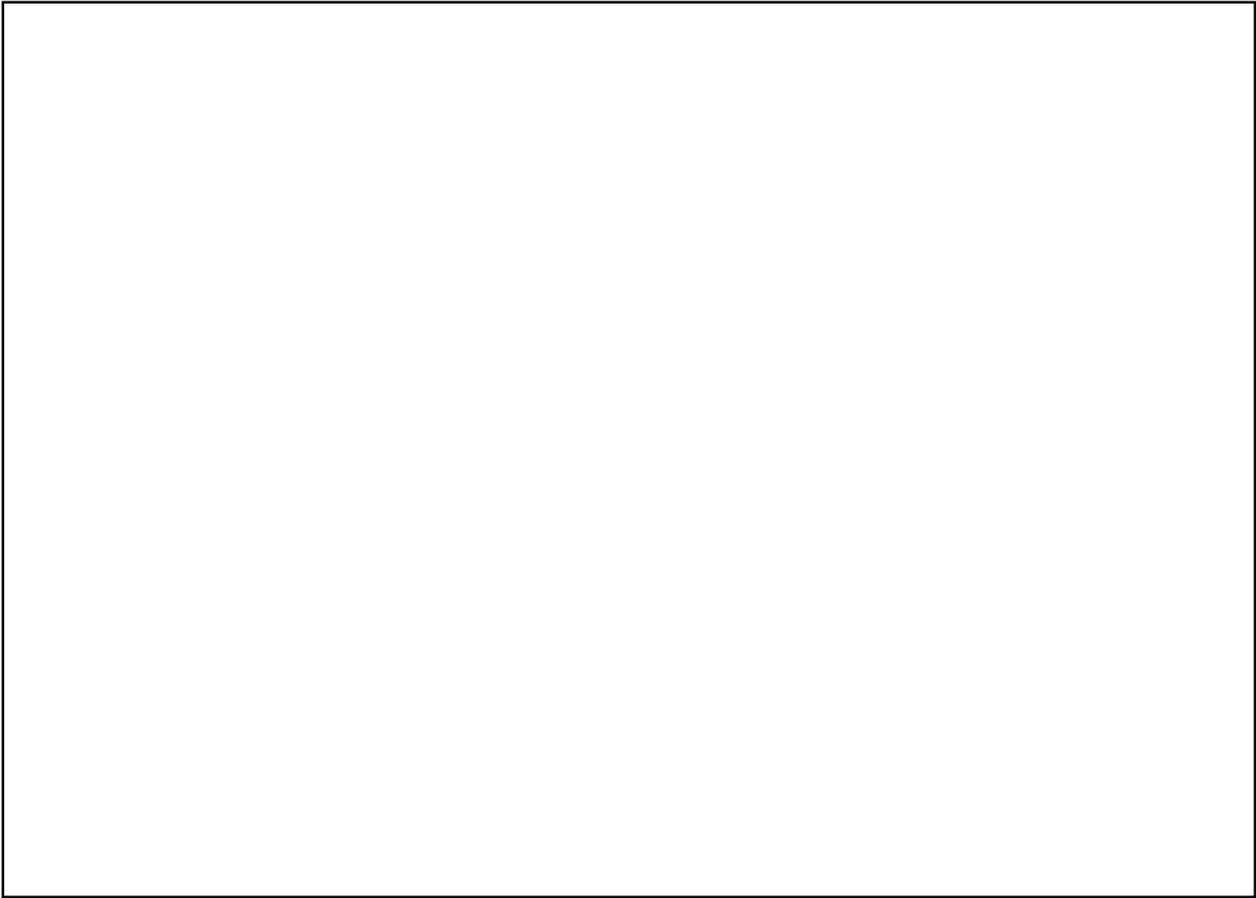
様二と申之由<sup>しかるときは</sup> 然時者一人別二相究<sup>きわめ</sup>

其上二ても申切候八、 兩条之詰り

銘々承届 与<sup>組</sup>□差上 無二之所

可申出候事<sup>もうしはずべく</sup>

元禄七  
戌ノ閏五月廿九日



境三郎左衛門御究之御請

一 當春宗門御究之時分 六人者

差除候付而 三郎左衛門儀 追而與中

頭取候者 三三人召寄せ 只今之

分にて八 先々不相濟儀 第一

御為不可然 其上 組内支配

不相成候間 何とそ各心遣候様と申

聞せ候処 成程御尤存候 先々  
如何様二茂参り懸り可有御座と  
申候事

一 四月廿八日 六人者と相役仕 向後

元禄七  
御理事不申上 御奉公可申上候と

申候もの數十人催 書付差出候

それについて  
就夫 残人数ヨリ八 彼六人者と

相役仕御奉公不罷成候由 三頭江

付届仕候通 於萩承候事

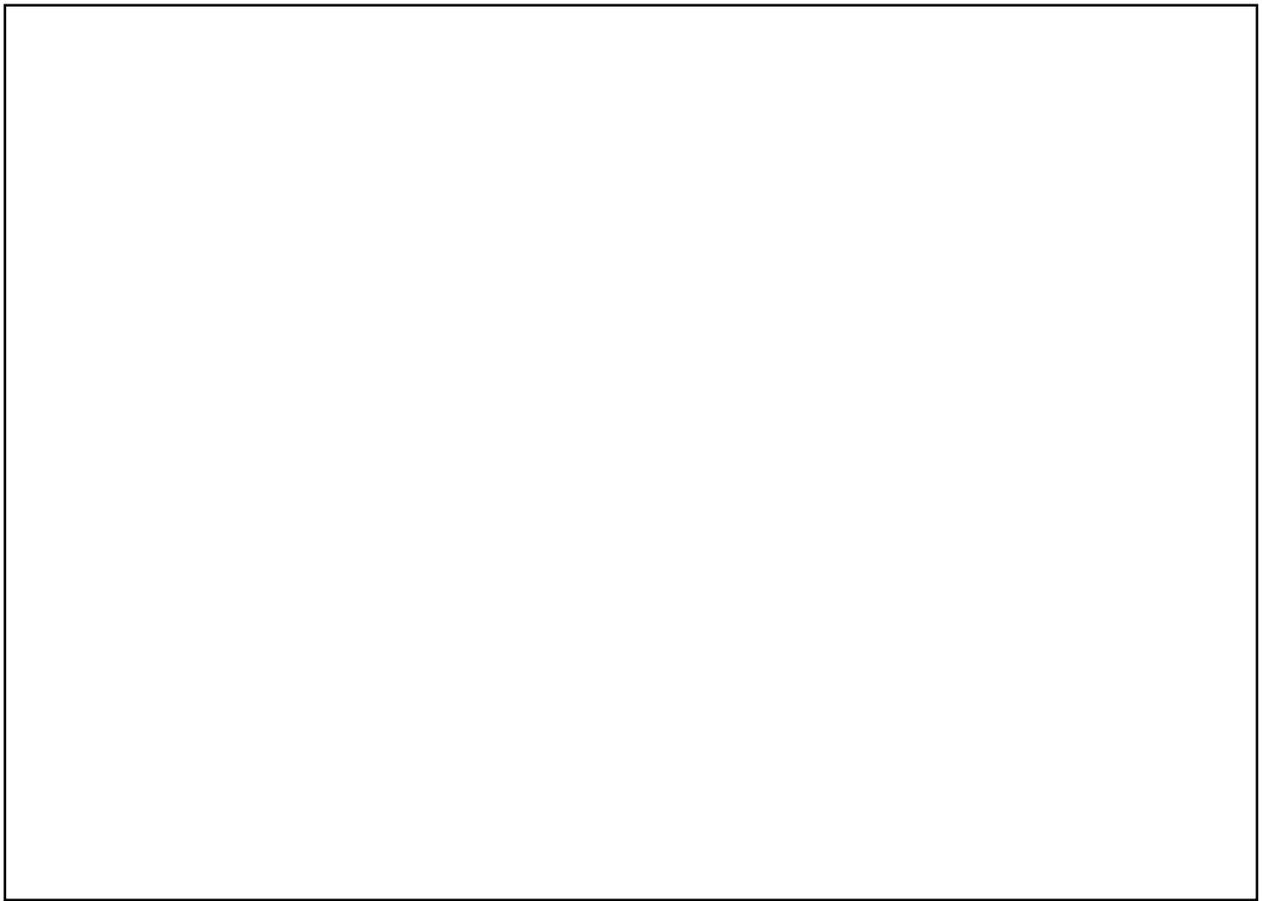
一 五月十二日 萩ヨリ罷歸 元禄七 組内江申聞せ

候八 尊書茂御下近々候間

先謹而罷居候様二と申聞候事

一 松井庄左衛門 須佐被差戻候付

何とそ四與沙汰仕 落つき候様二と



申聞せ候 皆々列座之上 与<sup>組</sup>江之

取掛り沙汰仕候 一組切之讚<sup>算段</sup>段

可仕<sup>つかまつるべし</sup>と申者も有<sup>これあり</sup>之候 又与<sup>組</sup>内之者

存所 四組一同四人之頭一座二て段々

様子申出度と 内々之参り懸り

付而<sup>ついて</sup> 一同之さた二も可仕<sup>つかまつるべき</sup>哉と各

申相<sup>そつらえども</sup>候得共 兎角一与<sup>組</sup>切之沙汰

可<sup>しかるべし</sup>然と評証相極り 其分二取懸り

候処 私与<sup>組</sup>より八口上書を以申<sup>し</sup>上

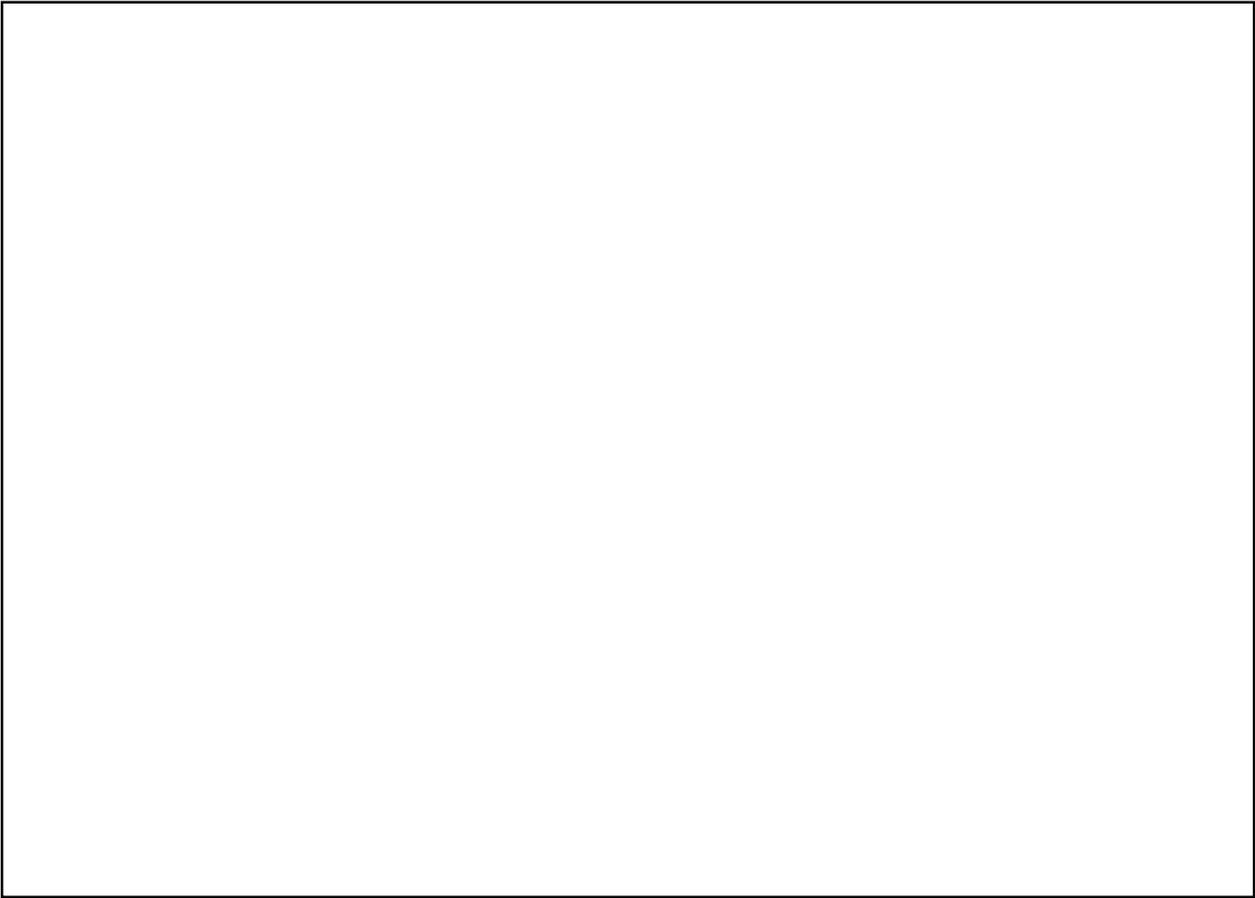
本<sup>曰</sup>各申談之儀候間 一同二様子

承くれ候様二と達<sup>たつて</sup>而申候 然<sup>しかるときは</sup>時者其<sup>組</sup>与

参り懸り二沙汰<sup>つかまつるべし</sup>可仕と存 其分二

仕罷居候 其上一旦<sup>組</sup>与内之分

承候處二 彼もの共心入左様二茂



可有之候得共 偏二御為之儀二（候）間 落つき

候様二と達而申聞候付 一旦八落つき □

申候処 注文判形之儀二付 又々六人之

者と八相役不罷成候と申切候事

一 今度増野作左衛門 為 上使被指戻

何事も差捨 御為之儀二て候間

落つき申候様二と 各昼夜段々

心遣仕候へ共 承引不仕二付而 年寄中

相談之上 又々中人を立 いろ／＼と

申候へ共 只今之参り懸り二て八 各

儀 さき／＼之御奉公難申上 内存

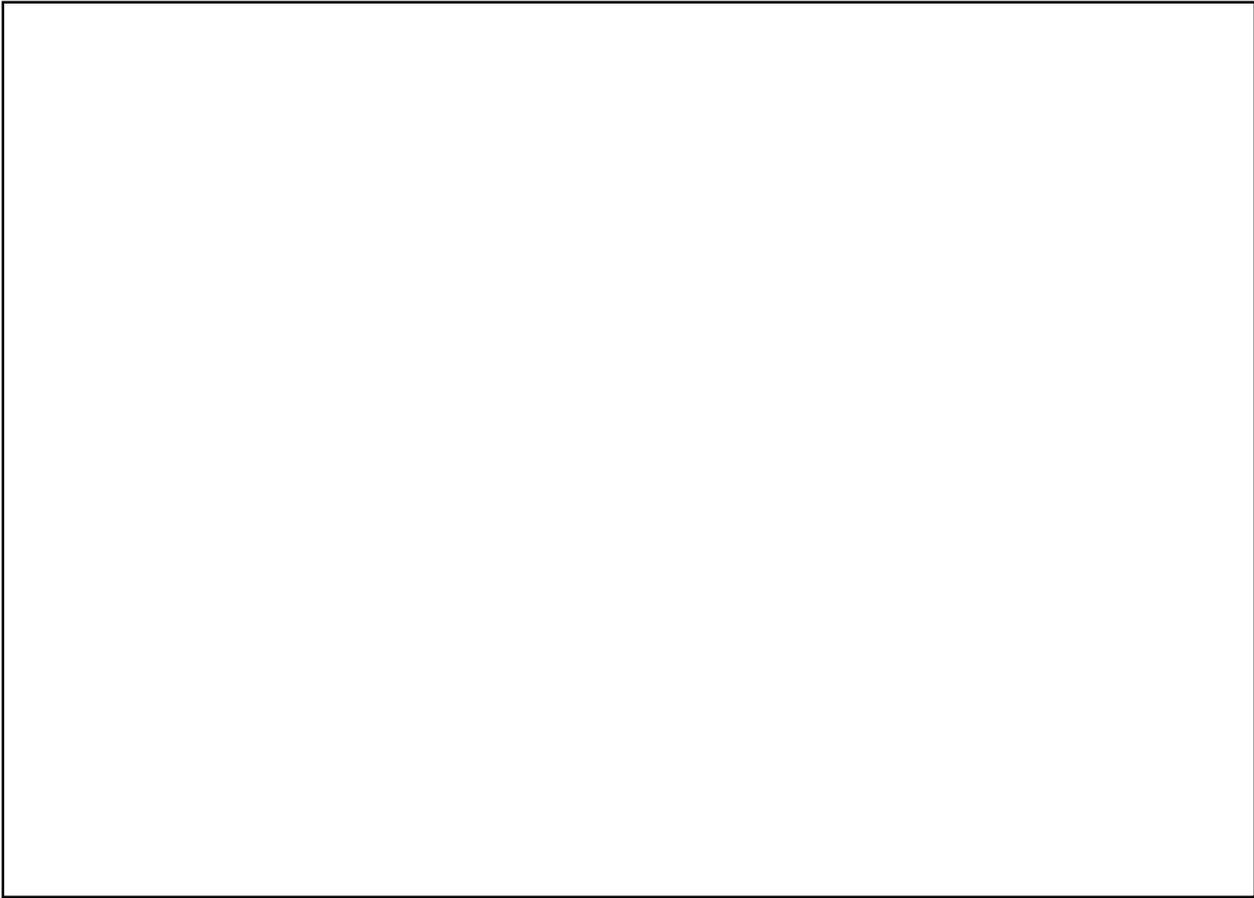
通中人へも申達 一圓承引不仕と

達而申候へ八 乍此上八被放御手 被下候

様二と申候 左様仕候而八 前々定立注<sup>1</sup>

申儀も有之候へ八 御為もいかしく

\*1 定立（ていりつ）= ある判断・意見を提出すること。



奉存 手放候様二も不得仕候 私儀

今年迄十八年 与支配被仰付候

何とぞ御威光を以成とも取収

可申と存候へ共 右之参り掛り故 不任

心底 残念至極ニ奉存候事

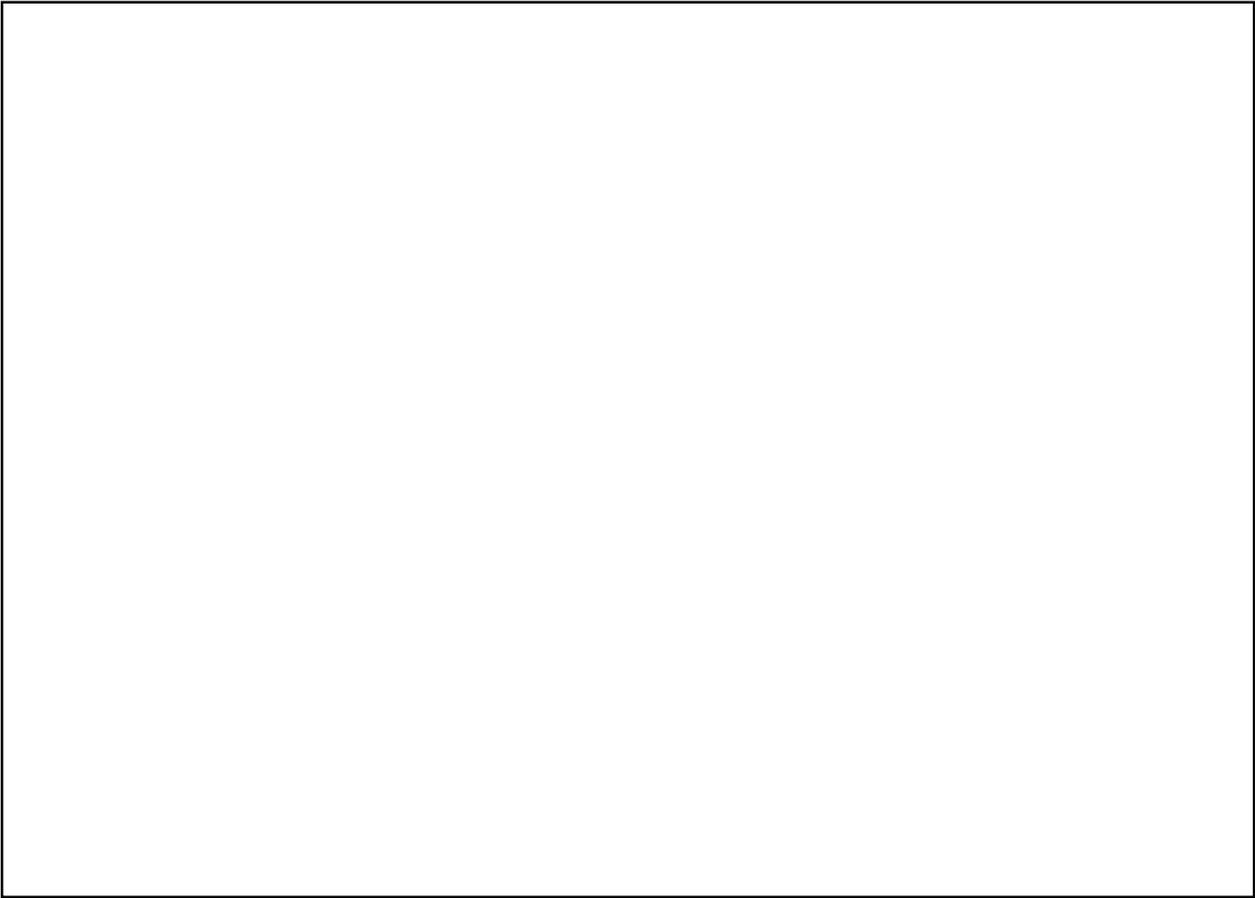
一 若残ニ与之内ヨリ私身分江

懸り候儀申出候八、私江御尋

被下候様ニと奉存候事

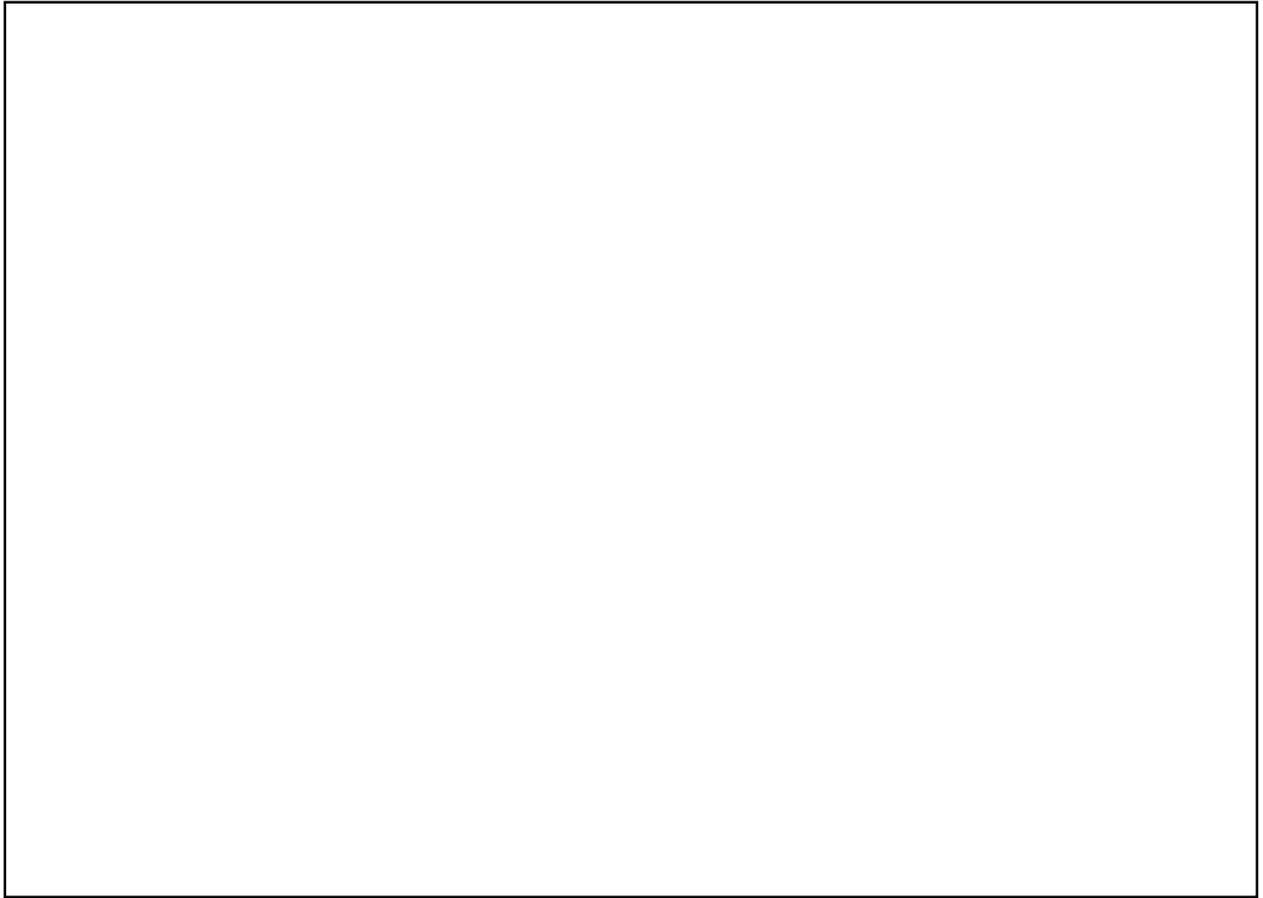
元禄七  
戌ノ閏五月廿九日

境三郎左衛門 判



### 堀市郎右衛門最初之御究

一 當春宗門御究之時分 六人之者  
差除候付 四組惣談之上 追而  
参り様も可有之候間 先六人与二仕  
置候様二と申付之由候 市郎右衛門儀  
年行事之事情間 早速半左衛門  
方へ申届 取収之心遣可仕儀共候事



一 松井庄左衛門 最前須佐被差返候さしかえされ

時分 与子共組へ手入仕候へ共 三与組一同二

可申出もつし出すと候て 一與切二八承引不仕候由つかまつらず

然時者支配不相成候段申出しかるときは 與組

可差上儀共候事

一 与子共組一旦者落つき候と申出候処

注文判形之所二てはみ返し注1 六人之

ものと相役等不罷成段申切候由まかりならす

然上八しかるうえ此時も与差上可申儀候事せうすへき

一 増野作左衛門差戻候時分 心遣仕

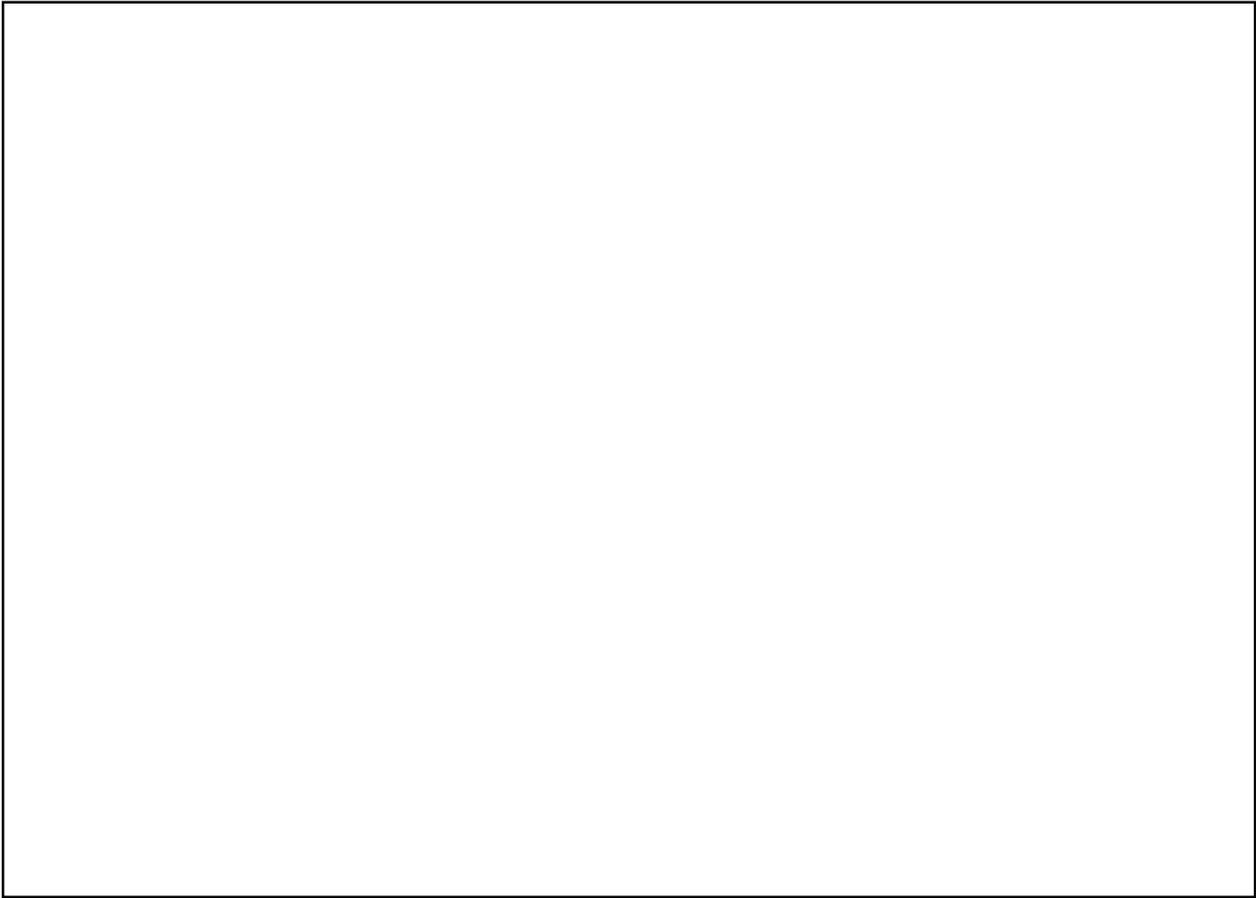
候得共ぞつとせ 落つき不申候二付 中人を立

異見仕候得共ぞつとせ 只今之参り懸り二て八

向後之奉公不相成と申之候由あいならず 然時八しかるとき

吉人別二相究きわめ 治まりノ承届 無

\*1 はみ返し = 41 頁脚註参照。



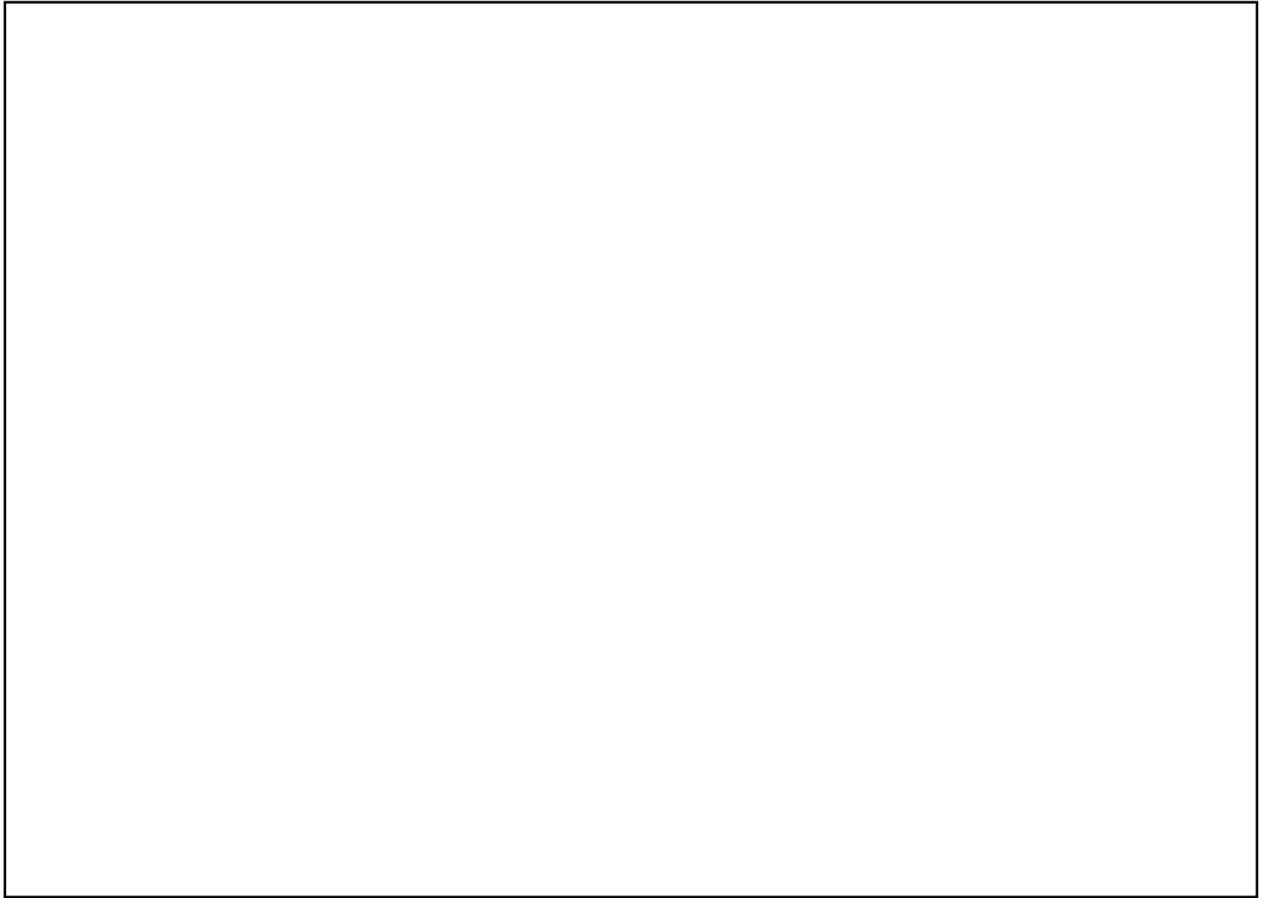
二之所可申出儀候事  
せうししすへき

元禄七  
戌ノ 閏五月廿九日

堀市郎右衛門御究之御請  
きわめ うけ

【注】この部分は20-19とほぼ同文。

一 當春宗門御究之時分 六人之者  
まわめ  
相加り候而八 判形仕苦敷と与内  
て つかまつりくもしく  
之もの申候通 其節之宗門究  
まわめ  
方之ものヨリ私年行司役故 申  
出候二付 此段残三与江遂惣談候  
組 そつだんごけ  
處 只今差押候八、何角六かしく  
なにかと



申 宗門御究之支<sup>きわめ</sup>りニ可<sup>あいな</sup>相<sup>なる</sup>成<sup>べく</sup>候 六人之<sup>〇</sup>

もの之儀者 追<sup>おつて</sup>而<sup>て</sup>参<sup>ま</sup>り様茂可有<sup>これある</sup>之候

間 先<sup>こたひ</sup>此<sup>ひ</sup>度<sup>び</sup>之儀者 其分<sup>さし</sup>ニ<sup>お</sup>可<sup>く</sup>指<sup>さ</sup>

置<sup>べし</sup>と四人一同ニ申相候<sup>て</sup>而 六人者一<sup>組</sup>与<sup>二</sup>

仕置候様ニと申聞候と覚申候事

一 其以後 右之段ニて八相<sup>もつ</sup>濟<sup>さ</sup>不<sup>ず</sup>申候間

いつれも折<sup>相談</sup>を以 四頭惣<sup>さむ</sup>談<sup>わ</sup>仕 何とそ

一 和仕候様ニと存居候内 又々かように

(べ)發<sup>元禄七</sup>注<sup>七</sup>1申候事

一 四月廿八日 六人之もの<sup>たち</sup>と立<sup>あ</sup>相<sup>い</sup> 御奉公

可<sup>せ</sup>申<sup>つ</sup>との書付私披見不<sup>つか</sup>仕<sup>ま</sup>心<sup>つ</sup>入<sup>ら</sup>者<sup>は</sup>

相残<sup>こ</sup>もの共<sup>こ</sup>之手<sup>も</sup>前<sup>と</sup> 爰<sup>こ</sup>元<sup>こ</sup>存<sup>も</sup>候<sup>と</sup>付

三与<sup>組</sup>遂<sup>ない</sup>内<sup>だ</sup>談<sup>ん</sup>候<sup>ど</sup>上 一覽<sup>しか</sup>可<sup>る</sup>然<sup>べ</sup>候 第一

私<sup>ま</sup>與<sup>かり</sup>在<sup>い</sup>郷<sup>で</sup>之<sup>す</sup>證<sup>ま</sup>人<sup>り</sup>兩<sup>り</sup>人<sup>に</sup>共<sup>に</sup>不<sup>ま</sup>罷<sup>かり</sup>出<sup>い</sup>候<sup>す</sup>

\*1 にべ発、二遍発 = 「にべ」はにべにかわ。粘着力が強いところから、粘り気。転じて愛想、愛敬、世辞。にべ発 ねちねちとごねる意味か。



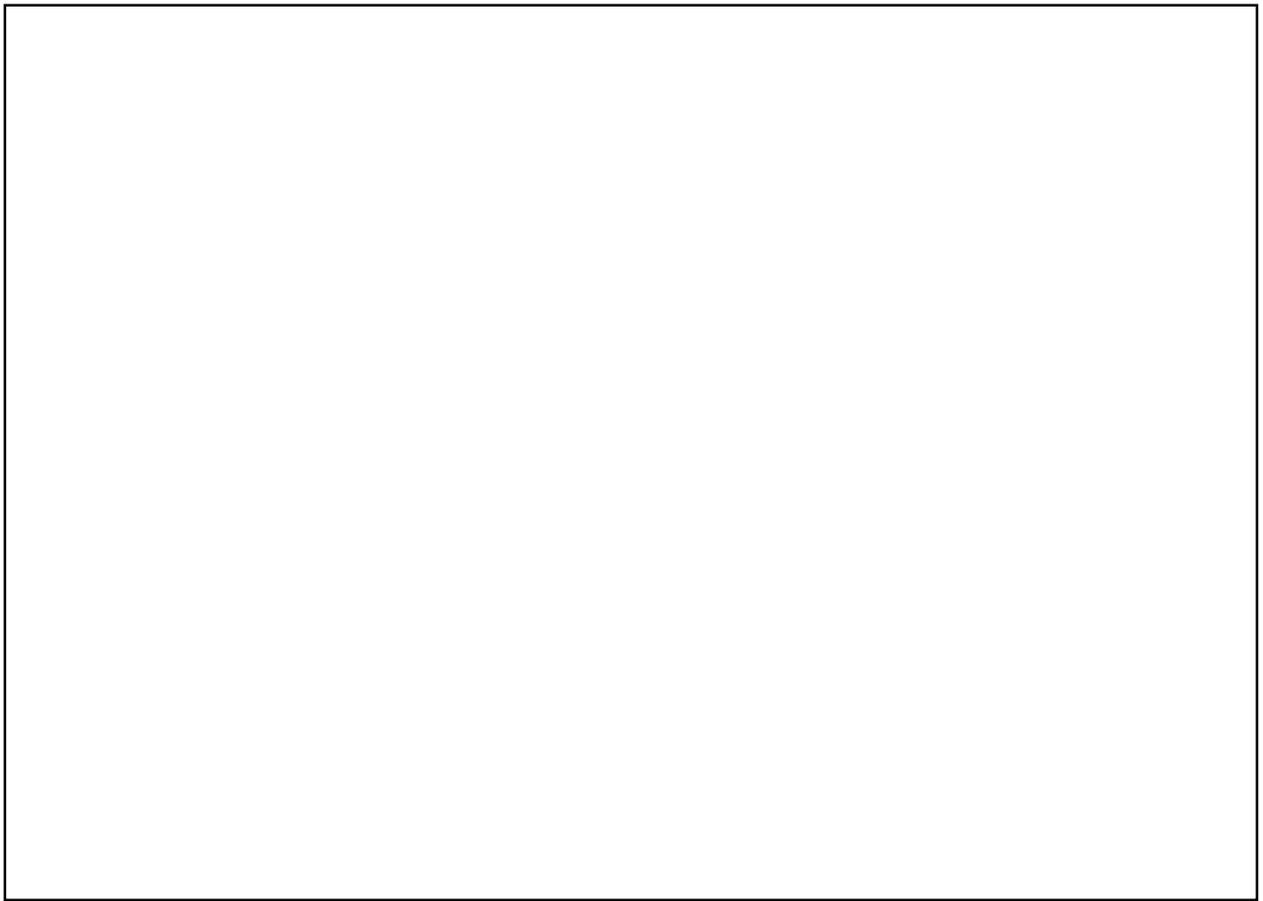
かたがた  
旁二付 披見不仕候 此段最前 松井  
勝左衛門へ申候事

一 其以後 松井勝左衛門 須佐被差越候  
節 与内取収之儀 与切二も可仕と  
存 私宅参候様二と波田久左衛門を以  
度々申聞せ候得共 一圓承引不  
仕 兎角三与一同二承候様二と申候而

不参候故 不任心底候事

一 其後 三与一同二様子承 もはや  
御為之儀候間 治り候様二と申聞せ候  
付 一旦落つき候処 注文判形之  
儀申懸候故 にべ發注<sup>1</sup>仕 此参り  
掛り二て八 六人之ものとの相役不  
罷成と又々申募候事

\*1 にべ発 = 51 頁脚註参照。



一 今度 八郎左衛門殿 作左衛門 勝左衛門 被

指戻候而八 猶以治り候様二と重畳

申聞候得共 申切候付而 中人を立候て

異見仕候得共 只今之参り掛り二て八

始終御奉公不相成之由申切 不任

心底候事

元禄七 戌ノ 閏五月廿九日 堀市郎右衛門 判

境三郎左衛門 堀市郎右衛門 二ノ 目之御究

一 去ル比 松井勝左衛門 被指戻 与内八

一旦落着候処 又々悔返注<sup>2</sup>候通 於

此段 両頭抛身躰 取収可

申儀候 其上二ても承引不仕候八、

様子申出 組差上可申処 為何

\*2 悔返 = 心から後悔する。後悔して取り消す。



内存これありニテ有や之候哉之事

一 與組落着之通 須佐年寄共ヨリ

入江忠兵衛を以申出候ニ付 頭共江

早々取収しかるべし可然之通 忠兵衛を以被成なられ

御意候処 悔返注1候付而 罷出

御意承間敷之由ニテ 出座無これなく之

通 縦たとい 内證いかやう之儀たりとも

一通り罷出 無據内存 老共上とわりへ理

可申儀候 此段いかやう之心入ニテ

候哉之事

一 與組内落着又候哉はニ返注2し候処ニ

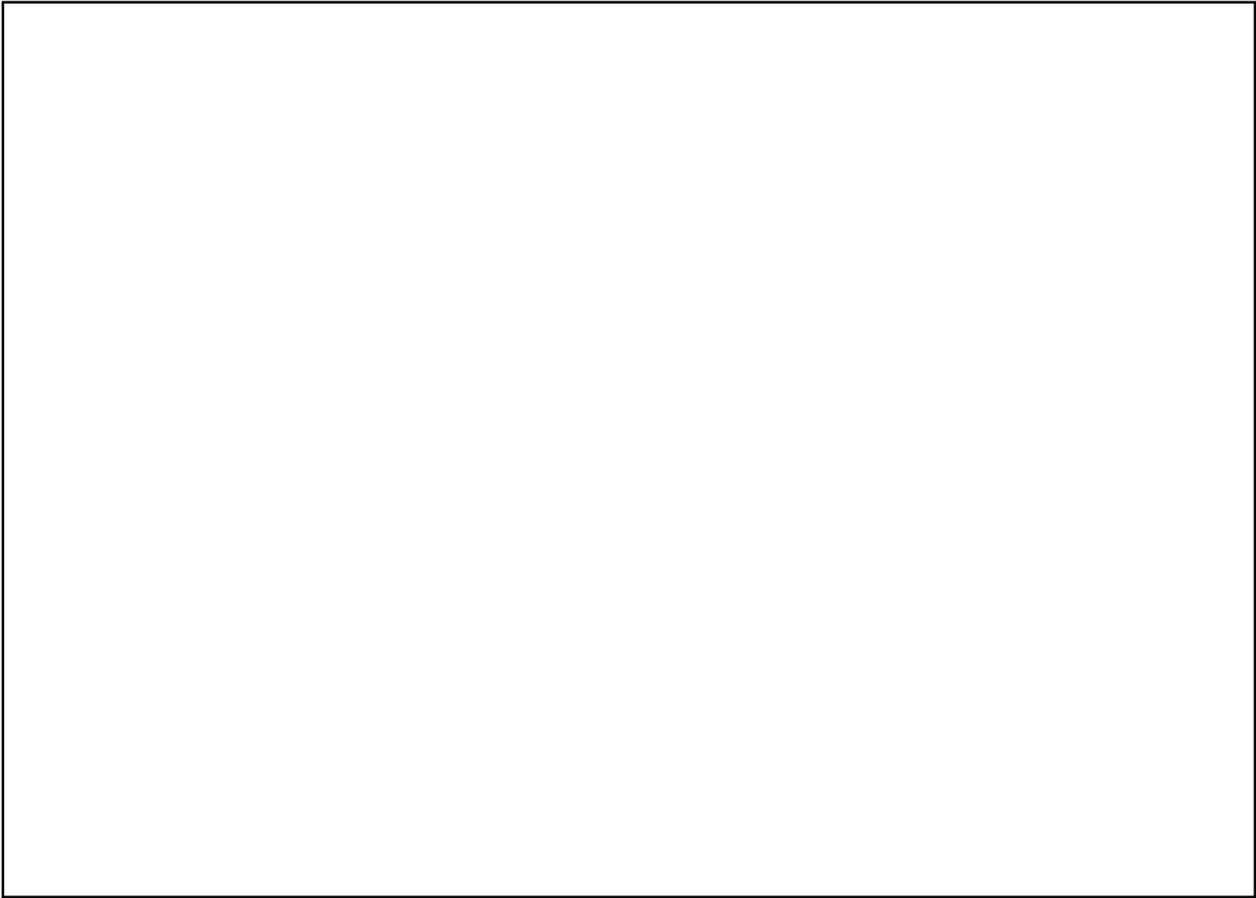
取収とりあさめ之才覚無これなく之 剩 両頭一同ニ

出萩之覚悟ニテ 船場迄罷出候

付 組子も騒動仕候由 此段

\*1 悔返 = 心から後悔する。後悔して取り消す。

\*2 はニ返し = 41 頁脚註参照。



いかやう之心入ニて候哉之事

一 三郎左衛門境 与内組ニも 三四人程御理ことわり

一 列ニはつれ候もの有これあり之由ニて

今いまもつて以様子不申出候段 いかやう之内存

ニて候哉之事

一 増野作左衛門 被差戻候節 種々きわめ究

仕候へ共 組子共一圓承引不仕候 只今之いま

参り懸りニてハ 始終之御奉公不まかり

罷成ならす申分ニ相極きまり候時者 一よ／＼

頭之支配ニ不相成あいならぬもの共ニ候 何とて

与差上組不申候哉之事

一 於両度りょうど 頭共爰元罷出こころもと 様子申

度と相願候由 いかやう之内存有これあり之

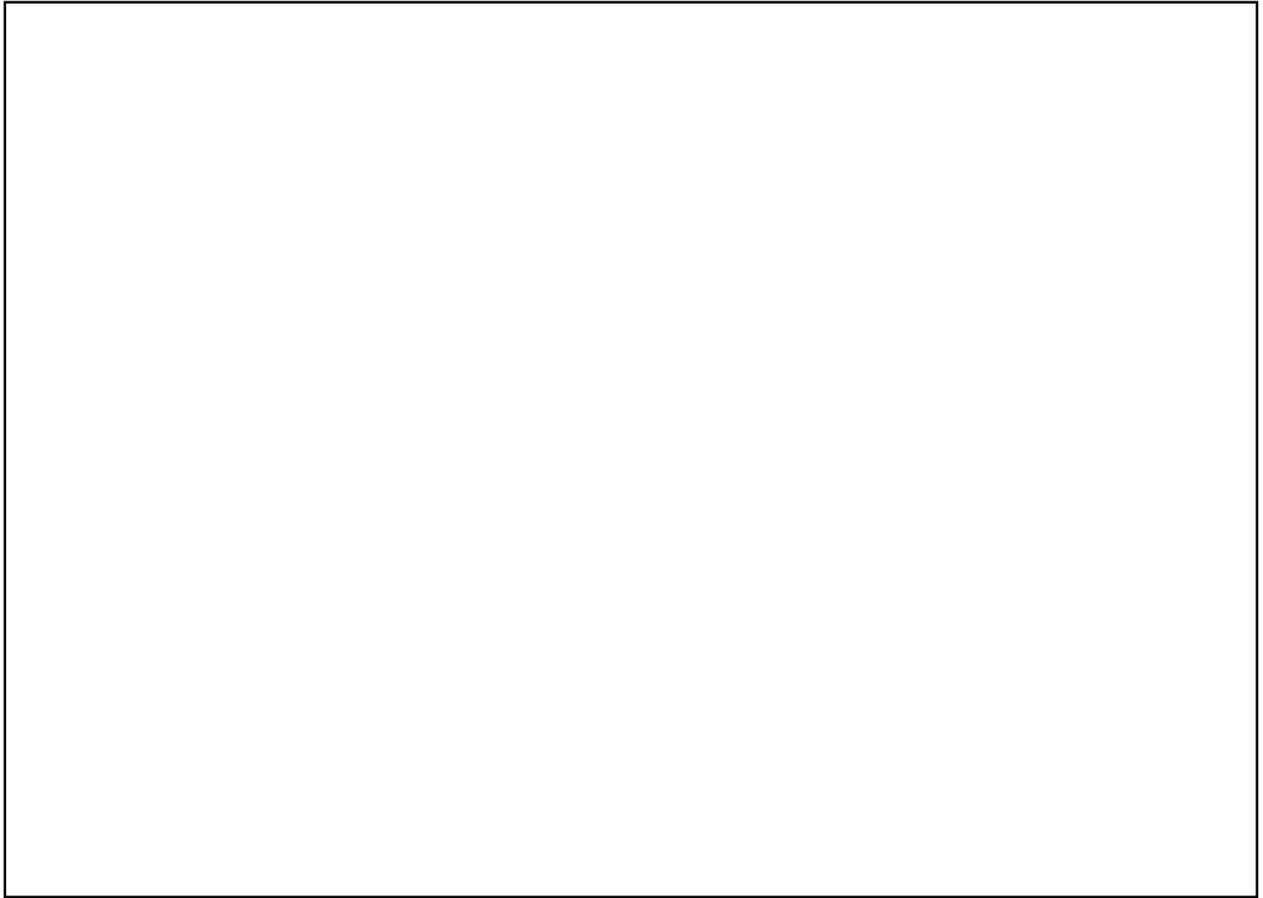
申候哉 様子可申出候事

元禄七  
戌ノ  
六月二日

境三郎左衛門 二ノ目御究御請

一 与組差上もつたす不ず申所八 一通り落着仕  
付ついで而 判形之儀 前廉まえかど注<sup>1</sup> 申懸候もつかけて  
請相申間敷候うけあい 先まず一通り何となし二  
落つき 其後八連々つらつら 以心遣こころいをまわして 仕候  
八、六人之ものと相役も仕様これ二可  
有之あるべくと存 右之段遅々仕候事

\*1 前廉 = その時より前、まえまえ、 前もって、あらかじめ



一 入江忠兵衛被差戻さしもちどされ 前廉まえかど 組落

着二付而ついで 頭々江被成御意候通ぎよいなられ 益益田

與右衛門方ヨリ内證手紙ニテ申越候へ共組

内にべ發注2仕候付而ついで 御意と承候

も無面目奉存めんほくなく 與右衛門方へ此段益田

委細返事仕候 尤 年寄衆へ之

付届八不仕候事つかまつらず

一 私共舟場迄出張仕儀八 与子組

共存分注3之通り 一 通り八萩罷出候通

上聞二達しきり候様ニと頻二申二付而ついで 其上二

差押申候へ八 中々定立注4申二付 まつ

一 通り八 与子共落着之ため二候間組

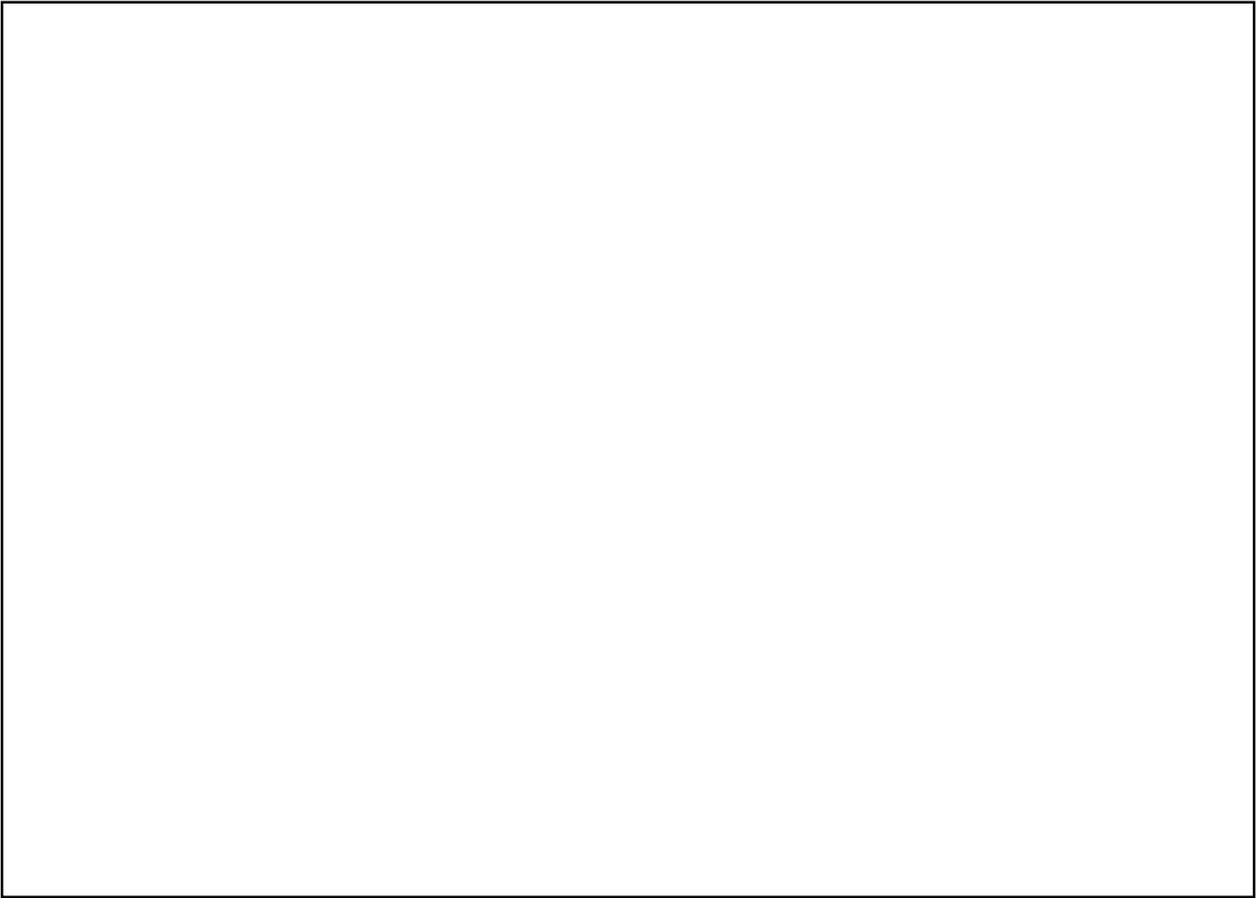
可罷出と存まかりいすべし 右之通御座候事

一 与子之内三四人儀 御理一列二はことわり

\*2 にべ發 = 51 頁脚註参照。

\*3 存分 = 考え、意見、存念。

\*4 定立(ていりつ) = 46 頁脚註参照。



つれ候者有之由 私儀も及承候  
尤私へ八付届不仕候 然処二 いつれか  
申出之由及承候旁二付而 御付届も  
不仕候事

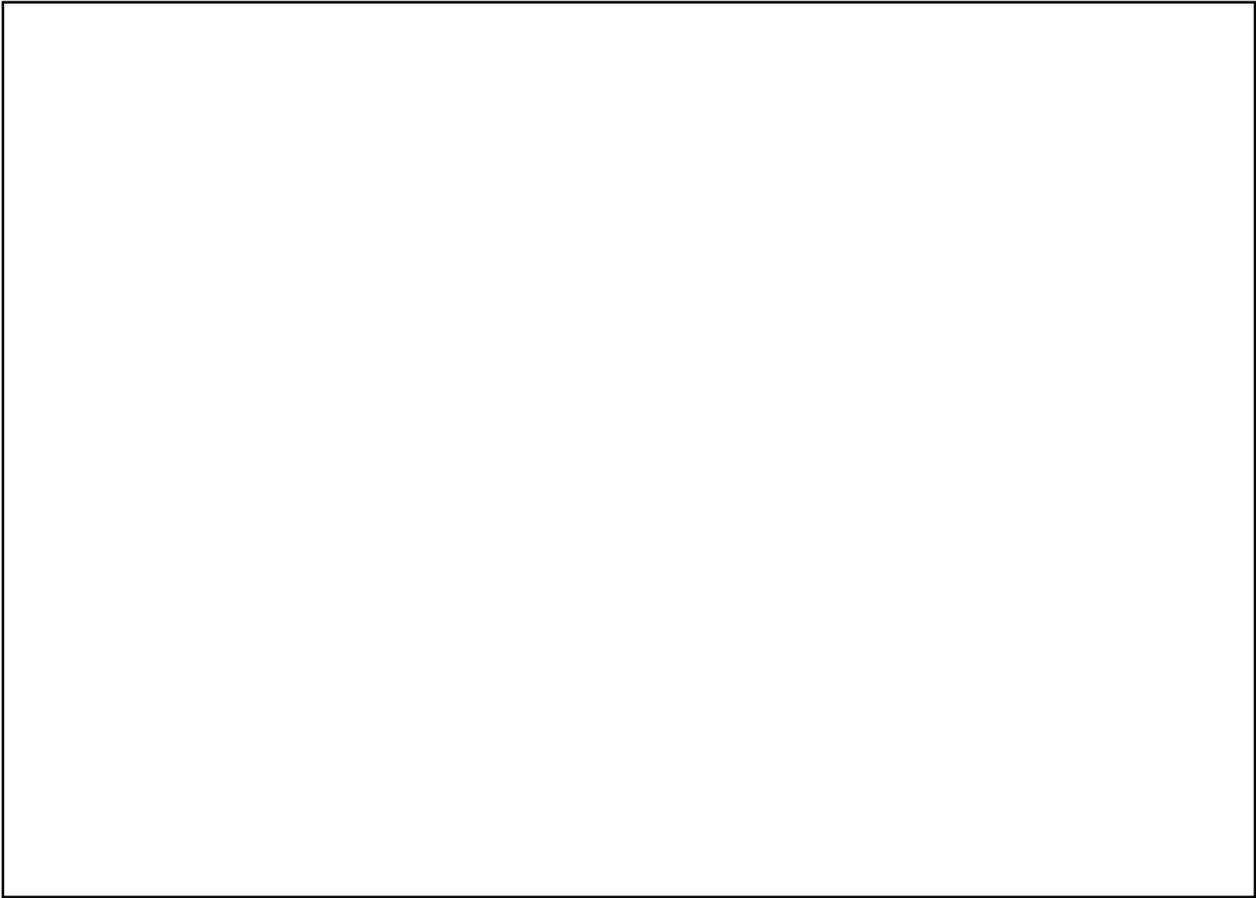
一 只今之参り懸りにてハ 始終御奉公  
不罷成申分二相極候時ハ 弥以 組  
差上可申との儀 与子共ヨリも達而

手離し候様二と申募候へ共 向後  
さきノハ落しつけ可申と存 私  
身分之儀をもかへり見す 先御為之  
儀候間 大勢定立注<sup>1</sup>不申様二と存 遅々  
仕候事

一 私共萩へ罷出度と願候段 与子共  
も存分注<sup>2</sup> 何とそ一通り申上くれ候様二

\*1 定立(ていりつ) = 46 頁脚注参照。

\*2 存分 = 57 頁脚注参照。



頻<sup>しきり</sup>二申<sup>ついで</sup>付而 罷出様子申上候八、落つき候  
ため二も可<sup>あいなるべし</sup>相成と存 右之通御座候事

元禄七  
戌ノ 六月二日 境三郎左衛門 判

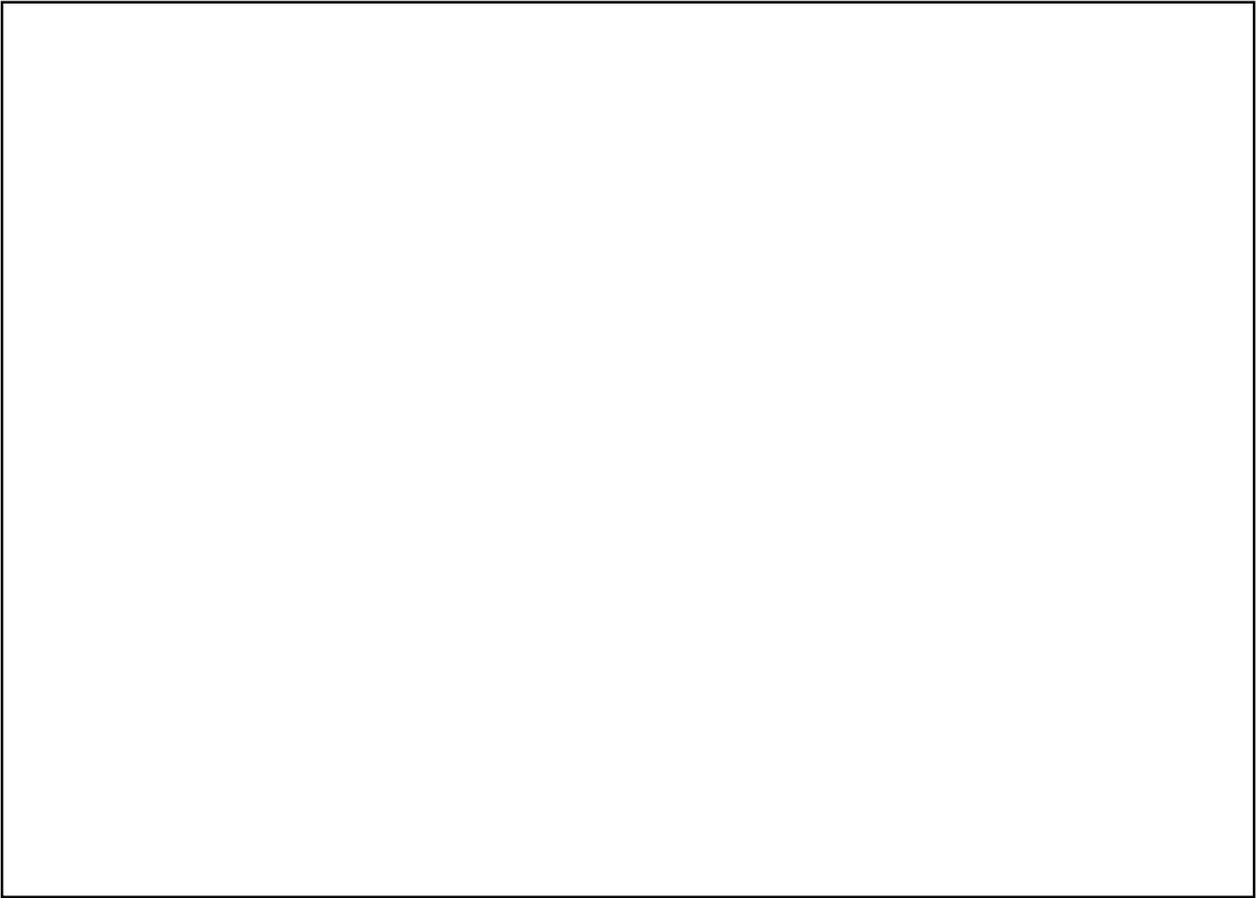
### 堀市郎右衛門二ノ目御究御請

一 組にべ發<sup>注3</sup>仕候時分 心遣仕候得共  
弥<sup>いよいよ</sup>落つき不申時者 与<sup>組</sup>差上可申<sup>もつすべく</sup>  
候へ共 私共手離シ候八、与<sup>組</sup>子申募<sup>もつしつり</sup>  
たる儀候間 自然<sup>注4</sup>多人数之儀候へ八  
吉人二ても境目<sup>注5</sup>なと越<sup>そつらえは</sup>候得者  
御為不可然儀と存 遅々仕候事

\*3 にべ發 = P51 脚注参照。

\*4 自然 = 万一。

\*5 境目 = 石州境。仏坂のこと。

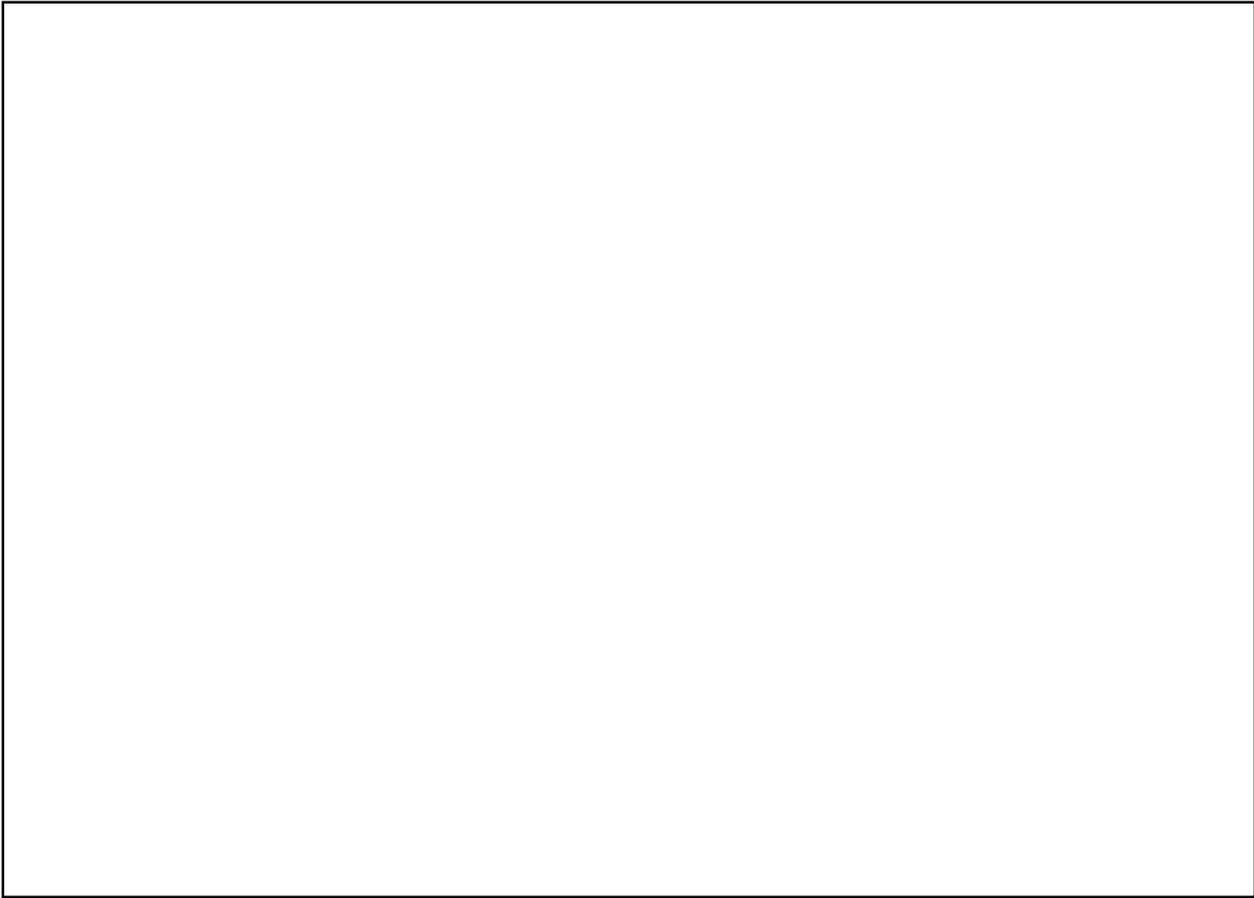


一 入江忠兵衛 被差戻 御意御座候  
由承候へ共 いつれヨリ之物音注<sup>1</sup>有之候  
哉 一圓覚不申候事

一 船場迄罷出候儀も 与子共一通り  
存分注<sup>2</sup>達 御耳申度と 頻願  
候故 一通り達 御耳候八、 与子共  
落着申候ため二も相成候八、 御為

奉存 右之通御座候事  
一 増野作左衛門被指返候時分も  
いろ／＼心遣仕候へ共 与子一圓落つき  
不申 只今之参り懸りにて八 始終  
御奉公不相成と申極候時者 いや／＼  
与差上可申儀二候処 是以私共手は  
なし候八、 定立注<sup>3</sup>可申と奉存 右之

\*1 物音 = 知らせ、情報。  
\*2 存分 = 57 頁脚注参照。  
\*3 定立 = 46 頁脚注参照。



通御座候事

一 私共萩罷出申度と願候事 是以これもちて

与子共組一通り之御理之筋申上

度と頻しきり二願候故 罷出様子申上

候八、与子落つき之為あいなる二も可相

成へしと存 延引仕候事

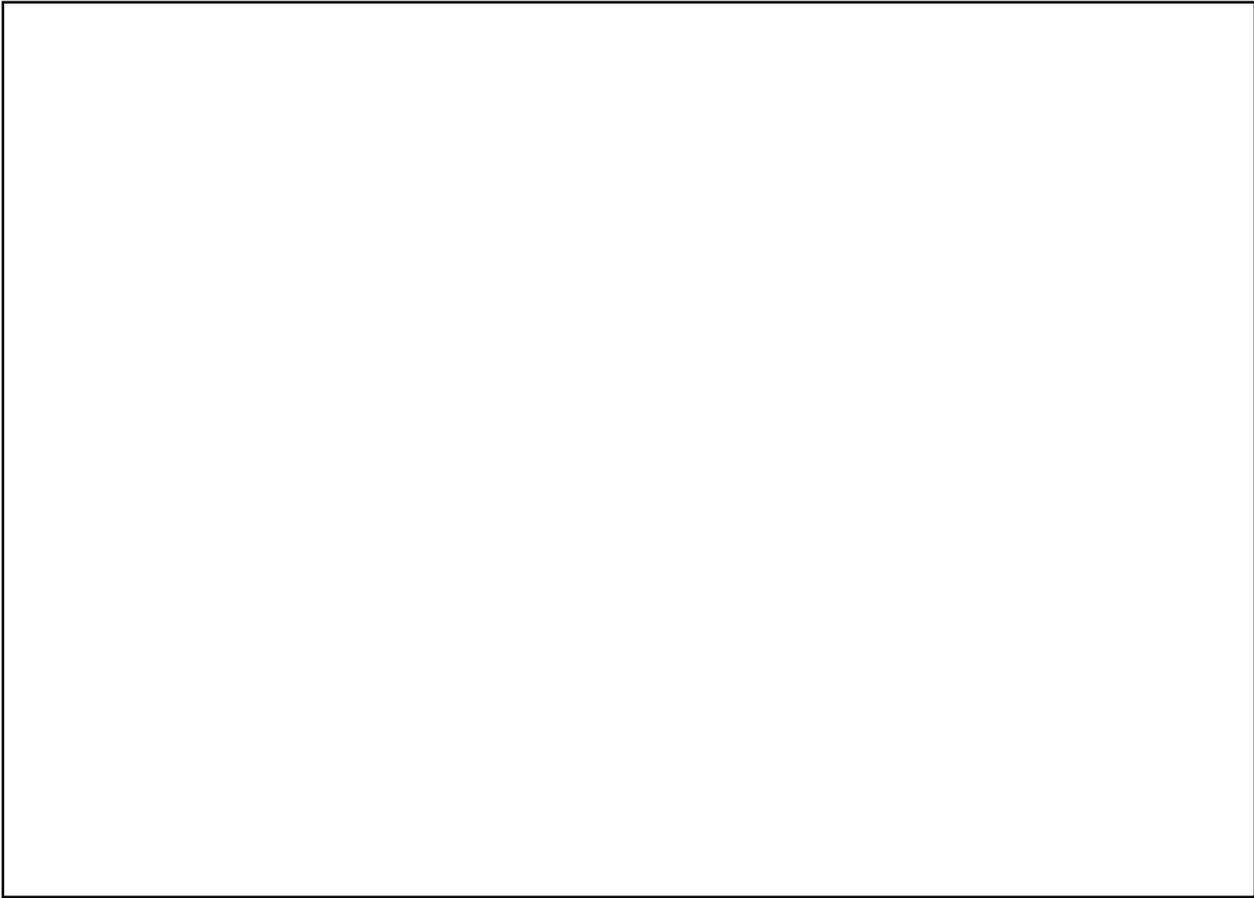
元禄七  
戌ノ六月二日 堀市郎右衛門 判

東京大学史料編纂所蔵 「益田家文書」46-15

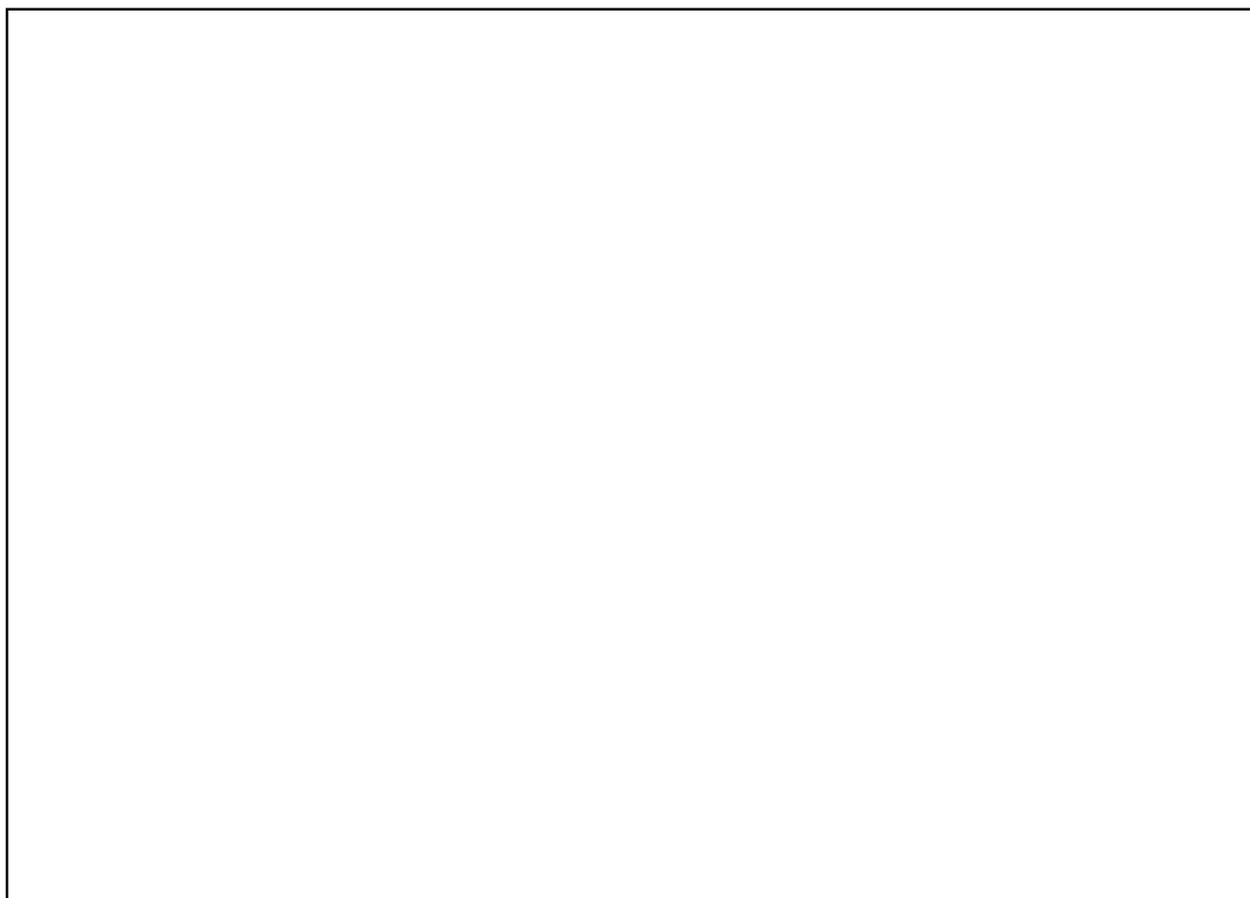
### 大塚源右衛門外連署注文覚

#### 注文覚

- 一 旧冬四組ヨリ御断申上候処ニ 去比こころ
- 御定御十条を以被仰渡 謹而おあせわたされ つつしんで
- 御請仕候 向後四組令一和御うけ いちわせしめ
- 奉公可申上候通奉存其旨候もつしあぐへく
- 然所二当春宗門御究二付 有福三右衛門しかるところ
- 真嶋与一右衛門 有田彦右衛門 岩本惣左衛門
- 栗山半太夫 大塚半右衛門 右六人
- 之者 旧例を外シ 其組々を
- 差除さしぞのぞき 御帳相調申候 宗旨
- 御究候時分 六人之者 并二 一族共二
- 判形不仕様子相尋 埒明次第つかまつらず らちあき
- 可遂其節と奉存候得共 大そのせつをしげるへく そつらえども
- 公儀事ニて御座候へバ
- .....紙継目(割印).....
- 御上江茂御難躰をかけ申二付而ついで
- 不及其沙汰ニ 宗門御究之判おおよばず
- 形相調申候 注文四組之儀八あいとこのえ



先年ヨリ御役目之日数請  
組々ニテ相調来り候処ニ 右  
六人之者を其組々を除ケ  
日数請江茂差はつし可申  
との儀ニ御座候 ケ様之参り  
かかりニ而ハ一族之者共御跡迄モ  
趣可申哉と奉存候へ共 此節  
之儀ニ御座候へハ ひかへ申候 此已後  
押返シ而之御断一圓ニ無御座  
一族之外 此注文前 御理り  
不申哉候条 左様ニ被聞召  
可被下候 依之注文を以申



上候 以上  
戌ノ

三月拾八日

紙繼目(割印)

有福 七五郎 印

有福 甚兵衛 花押

梅地 三太夫 印

品川 竹右衛門 印

品川 半右衛門 花押

石川 市兵衛 花押

緒方 作右衛門 花押

横田 十兵衛 花押

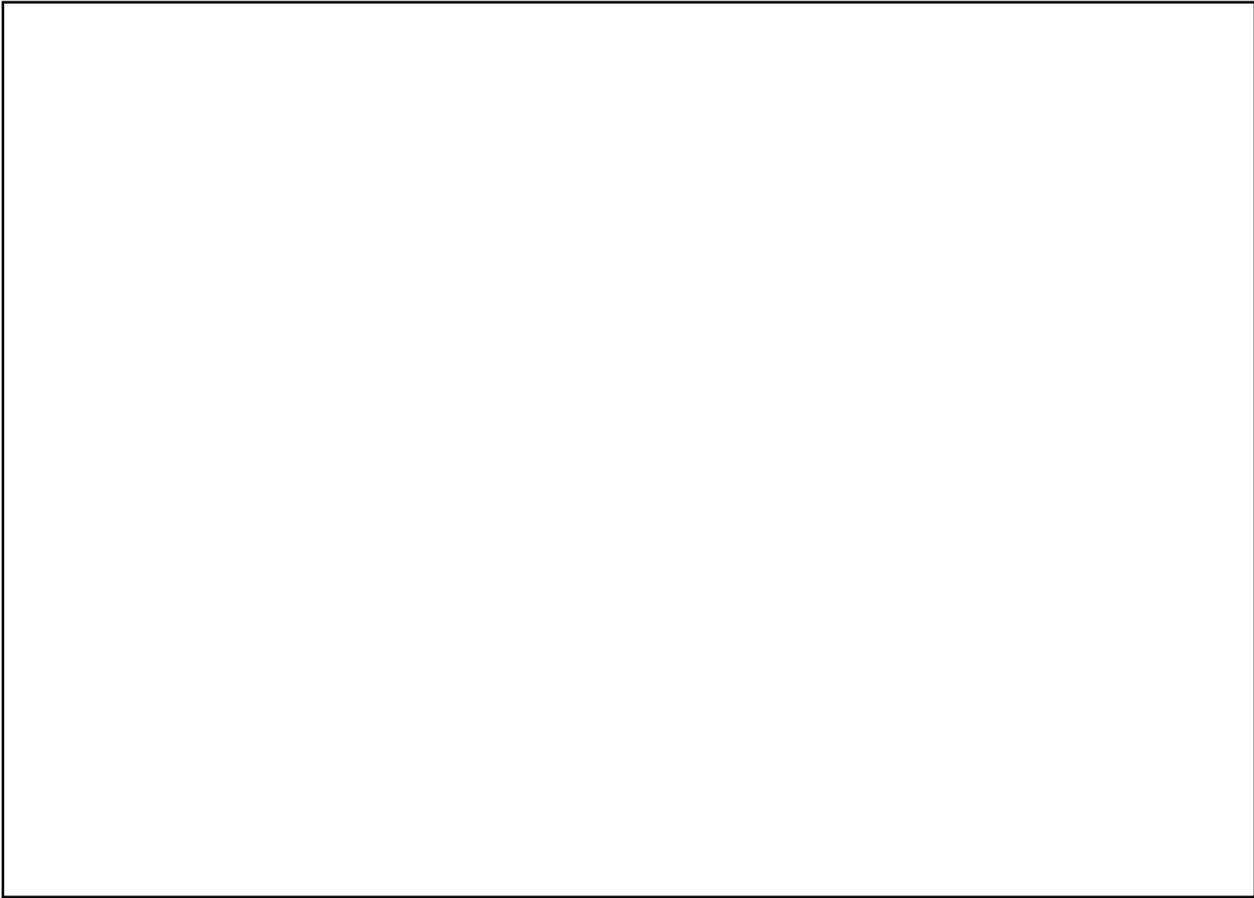
三浦 十郎兵衛 花押

金山 長左衛門 花押

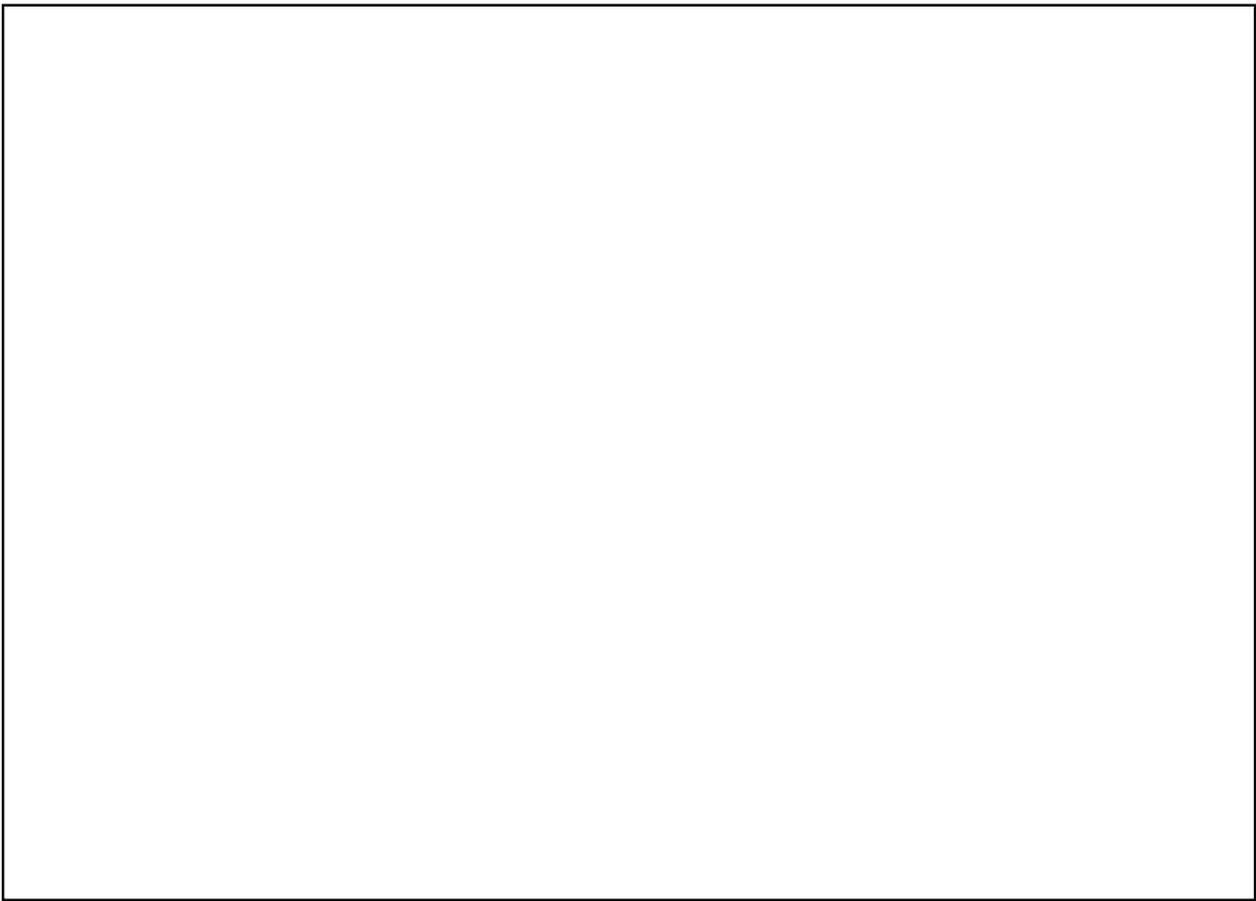
長田 作之進 花押

西條 勘左衛門 印

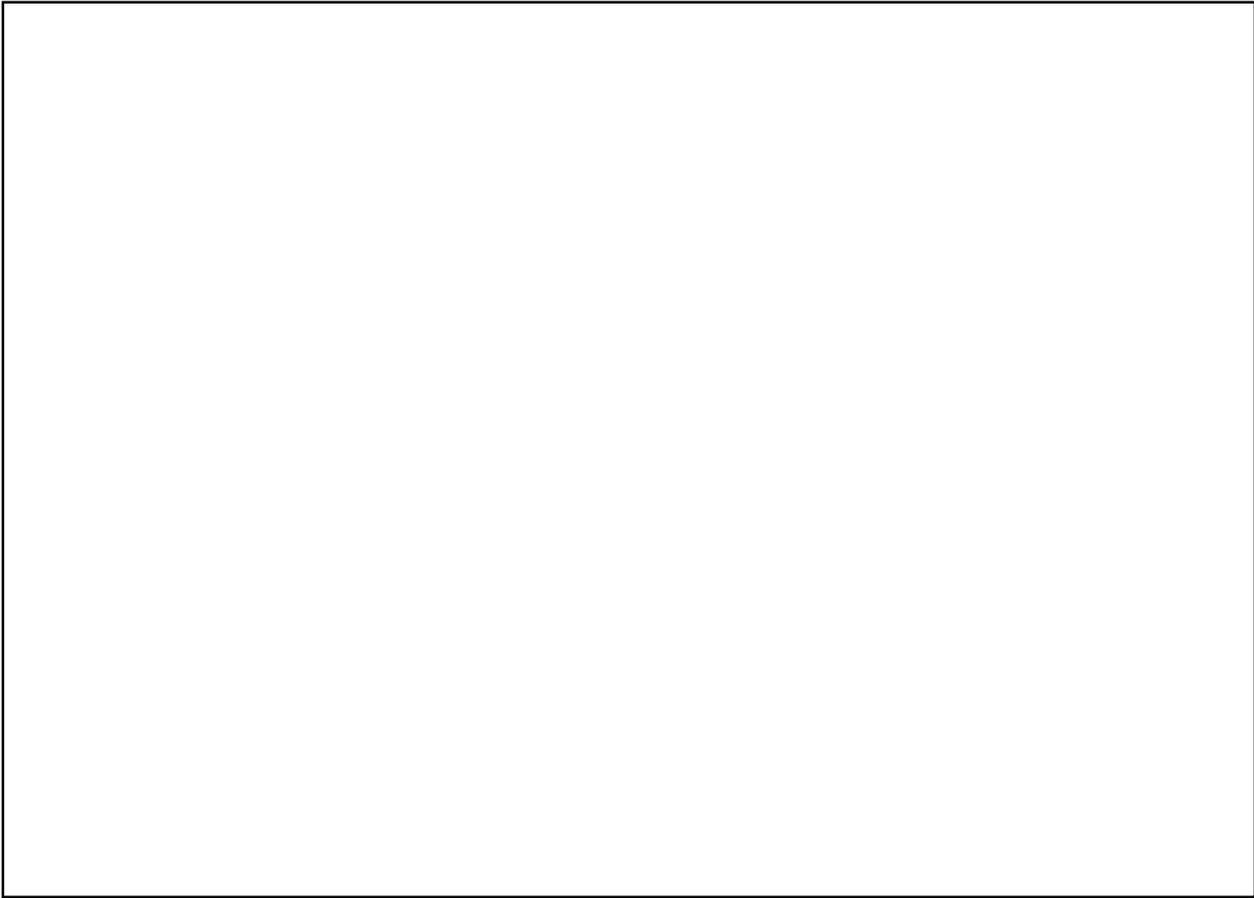
紙繼目(割印)



高津	嶋	古和	中村	岩本	尾木	長岩	三浦	古和	三浦	古川	品川	有田
徳兵衛	五左衛門	喜兵衛	勝兵衛	安右衛門	四兵衛	作兵衛	勘兵衛	与兵衛	正兵衛	弥兵衛	太郎兵衛	彦右衛門
花押	花押	花押	花押	花押	花押	花押	花押	花押	花押	花押	花押	花押



横田	吉田	草野	下	大草	有田	有田	有田	大原	下	岩本	小原	伊藤
長兵衛	角左衛門	市兵衛	孫右衛門	傳兵衛	傳左衛門	甚左衛門	十太夫	小左衛門	十兵衛	九郎左衛門	平右衛門	弥右衛門
花押	花押	花押	印	印	花押	花押	花押	花押	花押	花押	印	花押



岩本 彦右衛門 花押

.....紙繼目(割印).....

増野 九兵衛 花押

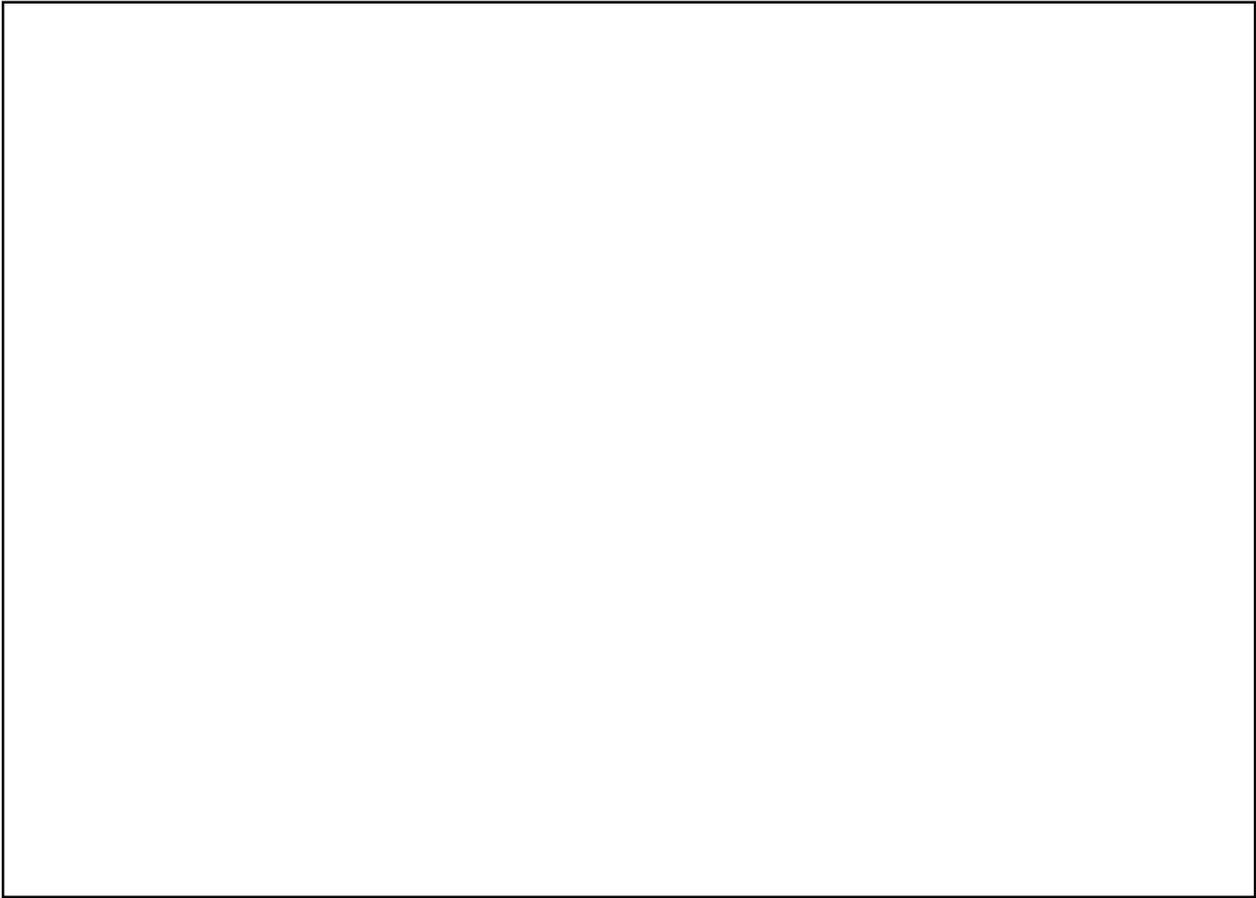
岩本 十郎右衛門 花押

大塚 源右衛門 花押

小原 二郎左衛門 殿

大谷 権左衛門 殿

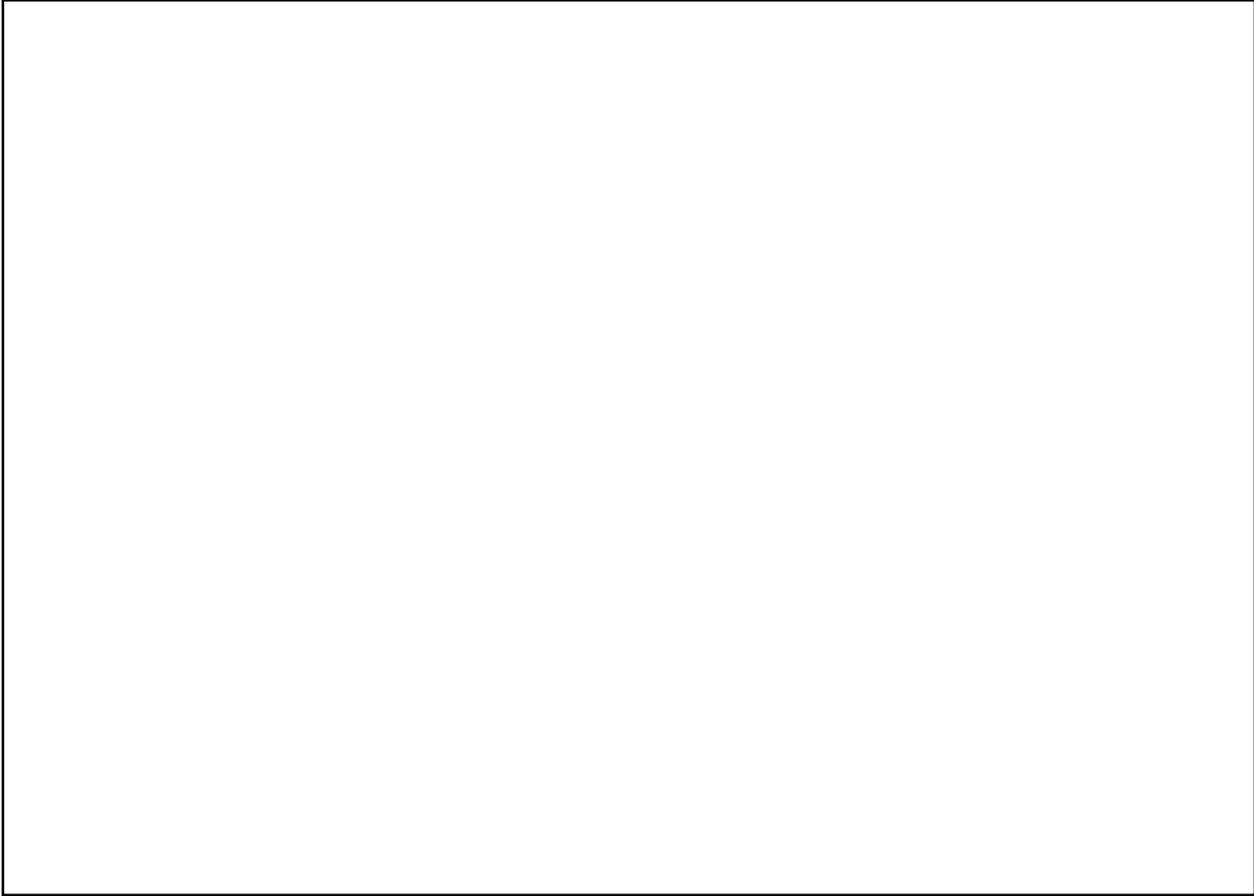
堀 市郎右衛門 殿



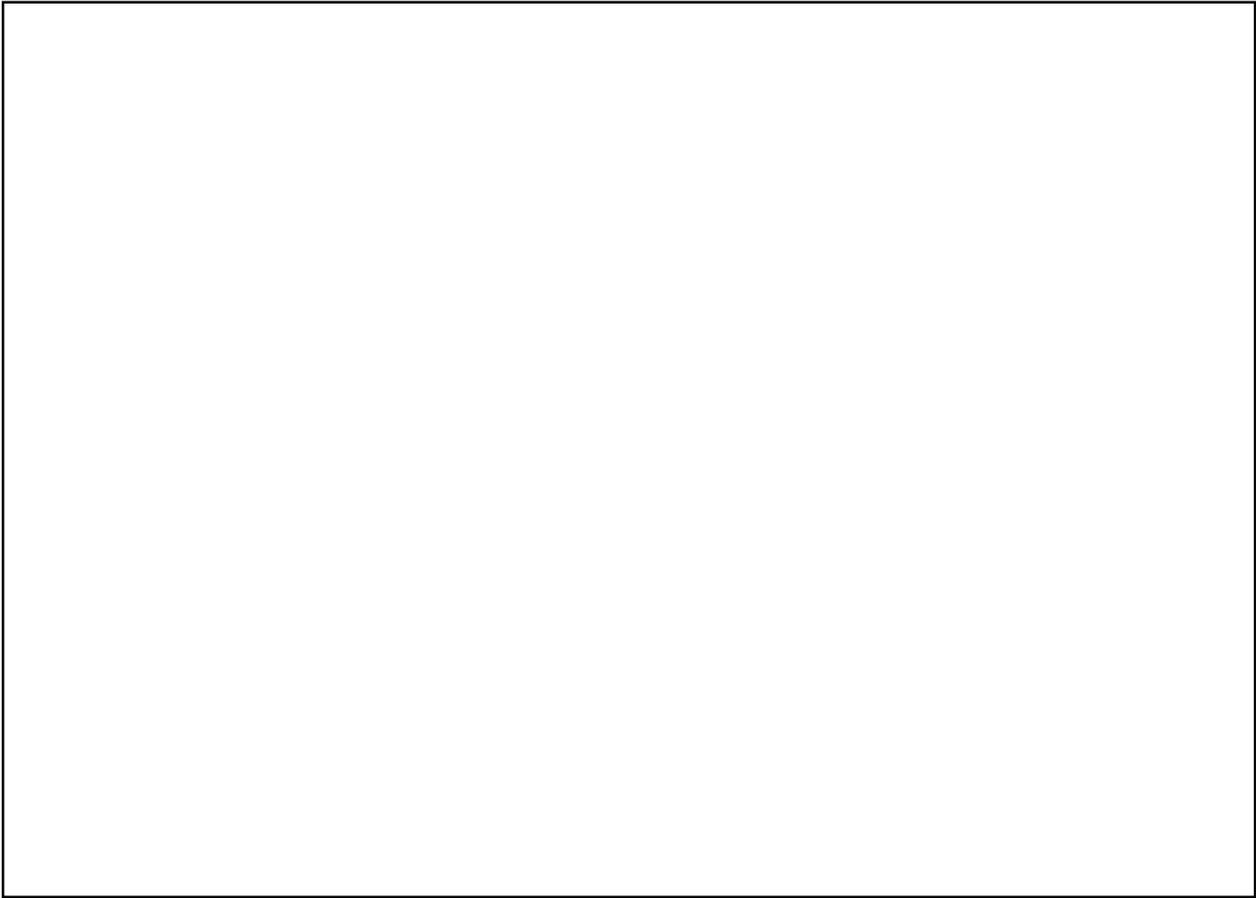
東大史料編纂所蔵 「益田家文書」  
51  
|  
124  
|  
2

口上覚

一 今度組之儀二付而 各々兩人作廻  
祇令者 不手際之部二罷成 却而  
上二も思召入 迷恐至極奉存候  
乍尔 於此段八 段々次第有之儀二  
も御座候間 御沙汰之上 委細前後  
と首尾可被分候 御為之儀二



付而 各々兩人毛頭深意可奉存  
様無御座候 於身分之儀 御異儀  
可收様無御座候得とも 祇令之分二て八  
大勢之御人数被召遣 苦敷可  
有御座候哉と 此段苦敷奉存候  
其上被仰出之首尾を以 私共組  
并 大谷権右衛門指上候者共二数十人  
最前之分二存詰罷有事二御座候  
間 いつれ之道二も 詳二御沙汰被  
仰付被下候様二と奉願候 於此元  
茂支配仕苦敷候て 私共組指上候  
様二と之儀二候得とも 左様仕候て 結句  
御沙汰被成 苦敷可有候哉と存  
先かくし置申候 右之趣私共



兩人萩罷出 可申上覚悟二御座候  
處二 頃日八御役儀御請取二付而  
御繁多之砌用捨仕 致延引候

此儀二付 私共手前之儀八 様二  
被仰付候 とても忘却不仕候得とも  
大勢之者とも御仕置之儀八 御  
有躰之御沙汰 於其後 御為も

如何敷奉存候 此段申上候様二御座  
候得とも 御序之節宜御内意  
被仰上被下候様二と所仰候 以上

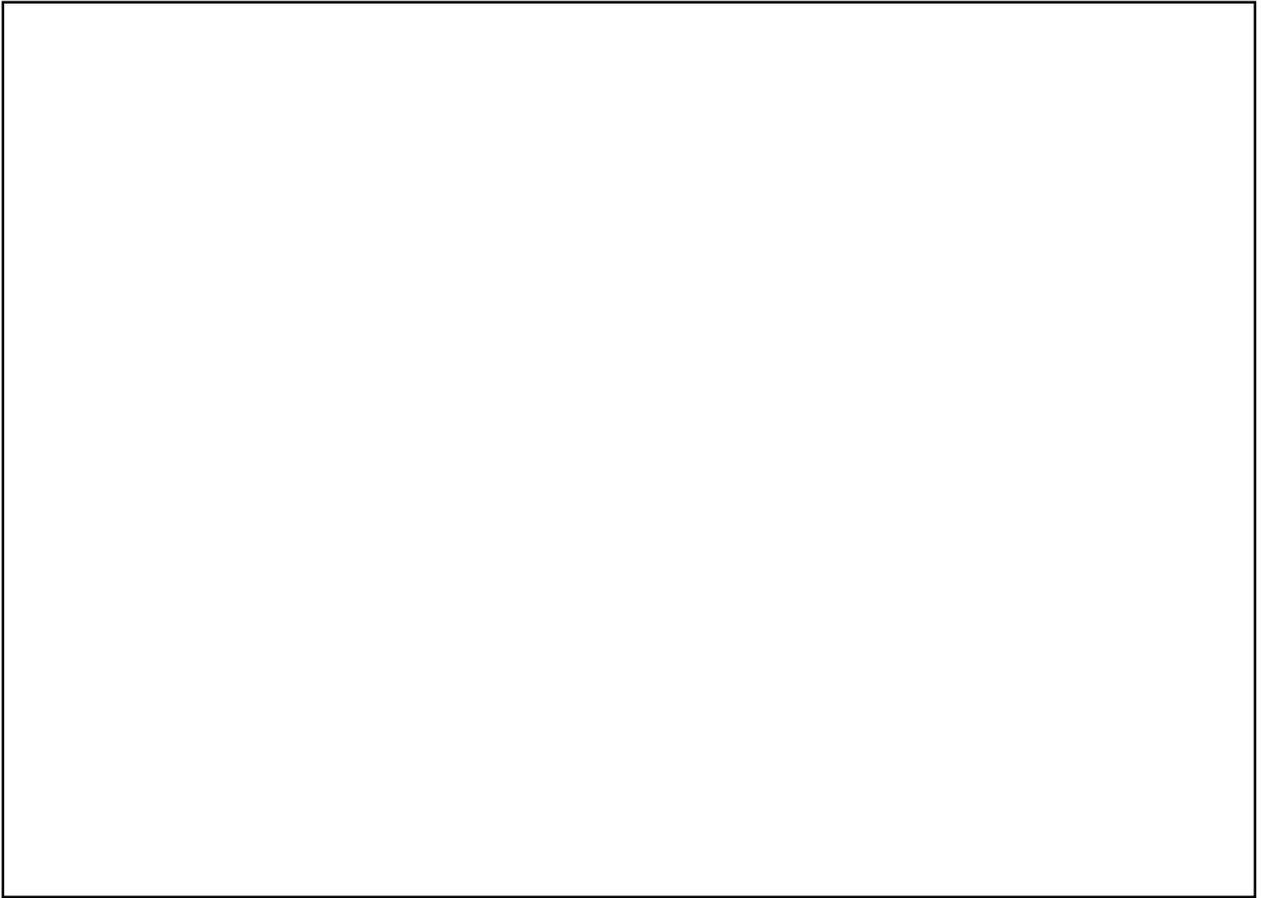
閏 五月五日

堀 市郎右衛門

境 三郎左衛門

益田又左衛門殿

増野作左衛門殿



東大史料編纂所蔵「益田家文書」

51-124-7

【切紙上段】

一筆致啓上候

然者各々御預ケ

之組之者共以前

御理申出候儀二

付而 此間於此元

皆々沙汰被致候

付而各々兩組之

儀も後押 一通り

落付申候處二

急二判形之儀

被申懸 此段

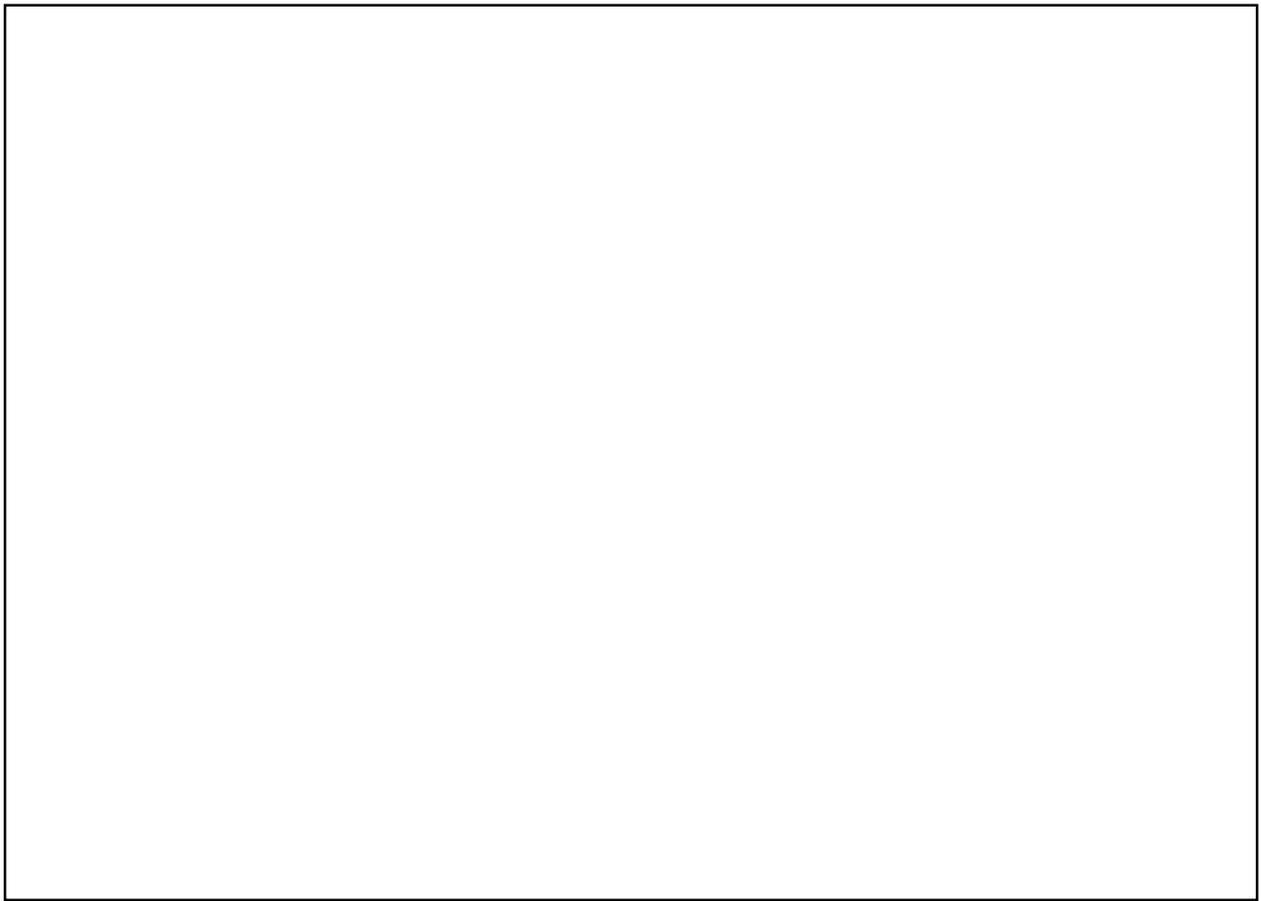
難任其意 難

洪仕候 段々彼者

共々申合も有之

儀御座候程 此段八

難尽筆紙二候



【切紙下段】

各々儀

御為誠意ニ可

存儀 無御座候へとも

不慮ニ 此事致

出来迷恐仕候

御役ニ付 私共

倅身代及断絶候

とても御主上 對し

忠儀難道儀ニて

覚悟仕候 別紙ニ

口上書指出候間

御序之節 御

内證を以御取成

奉頼候 恐惶謹言

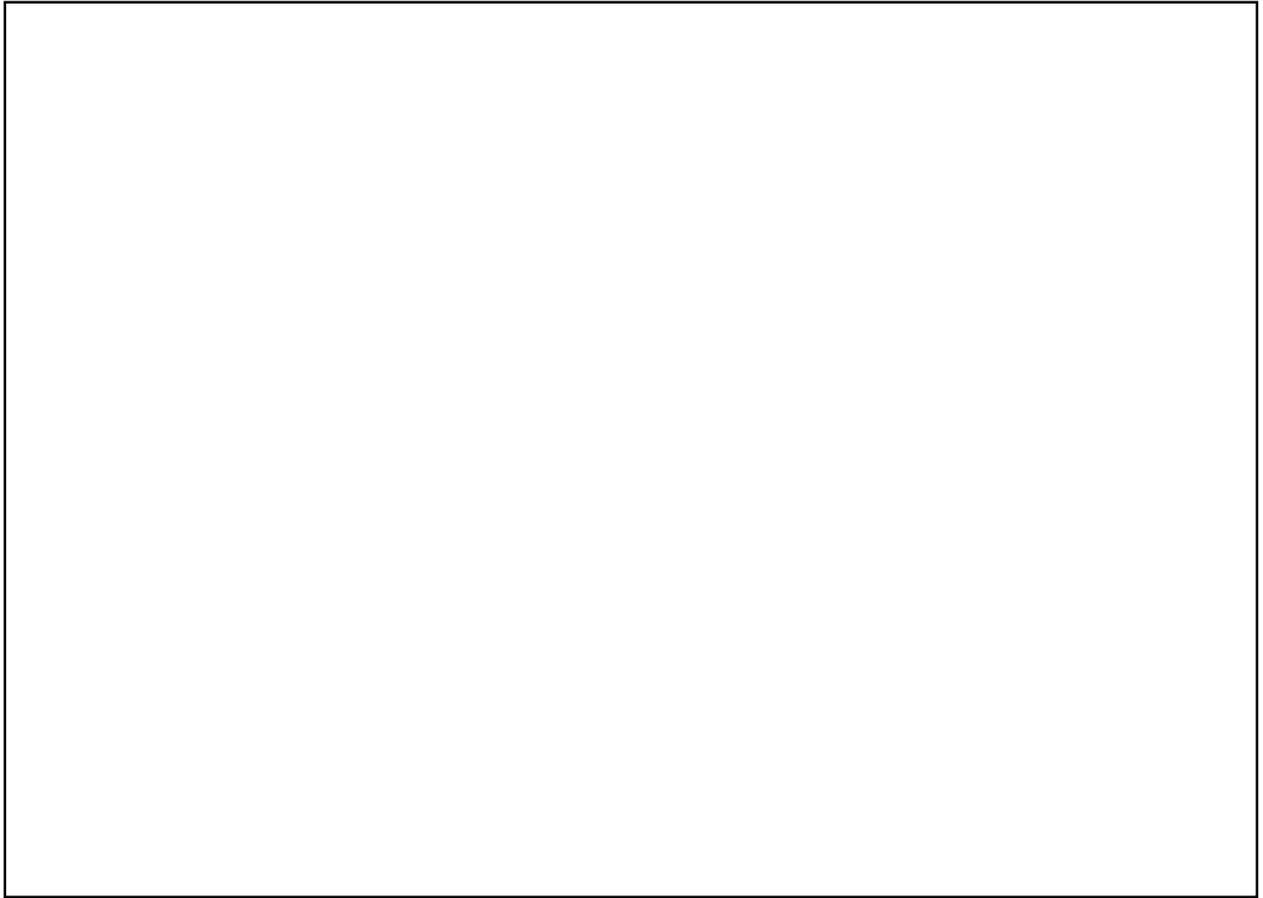
境 三郎左衛門 花押

閏 五月五日

堀 市郎右衛門 花押

益田又左衛門様

増野作左衛門様



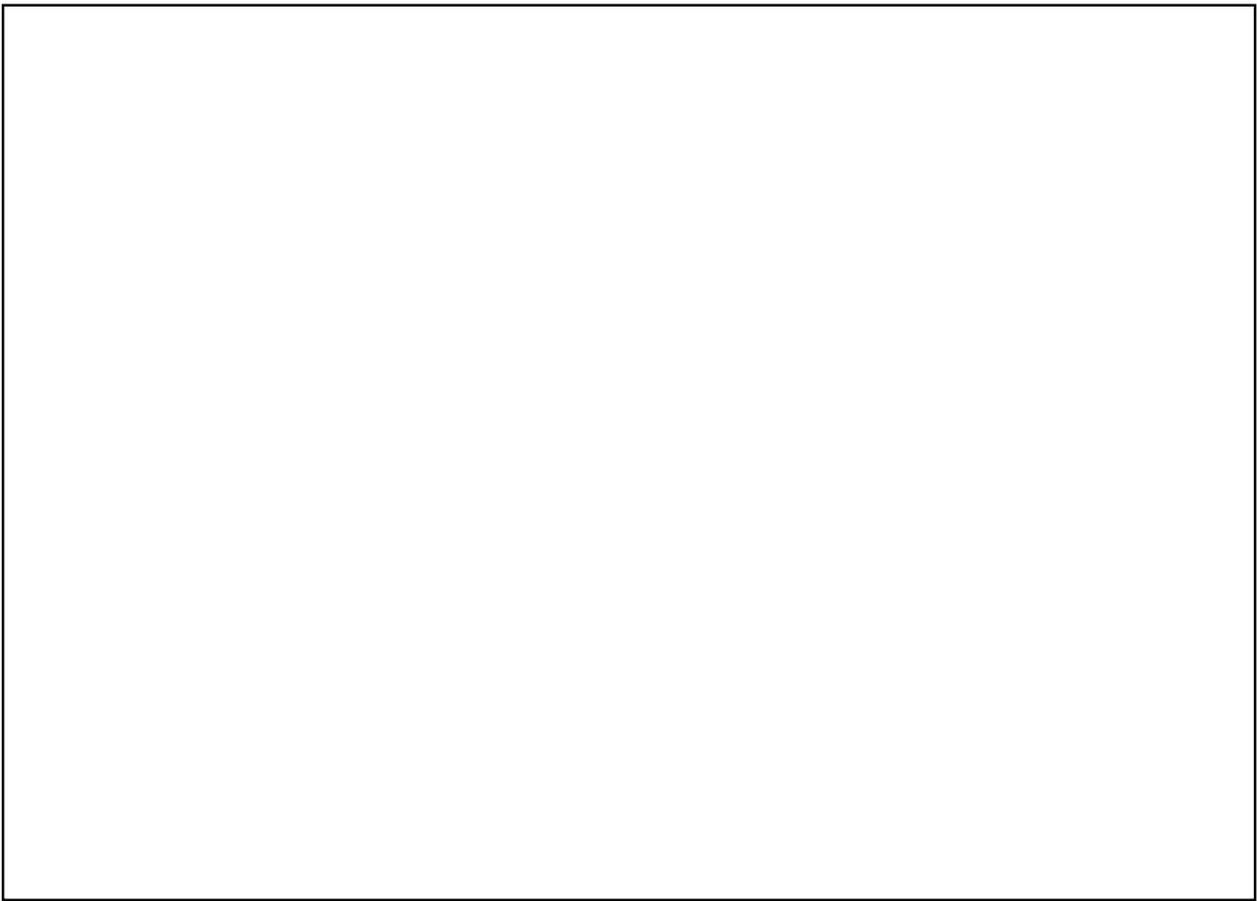
東京大学史料編纂所蔵「益田家文書」 11・3

元禄七年  
戌ノ

閏五月十日

大谷権左衛門<sup>注1</sup>ヨリ差出候  
口上覚

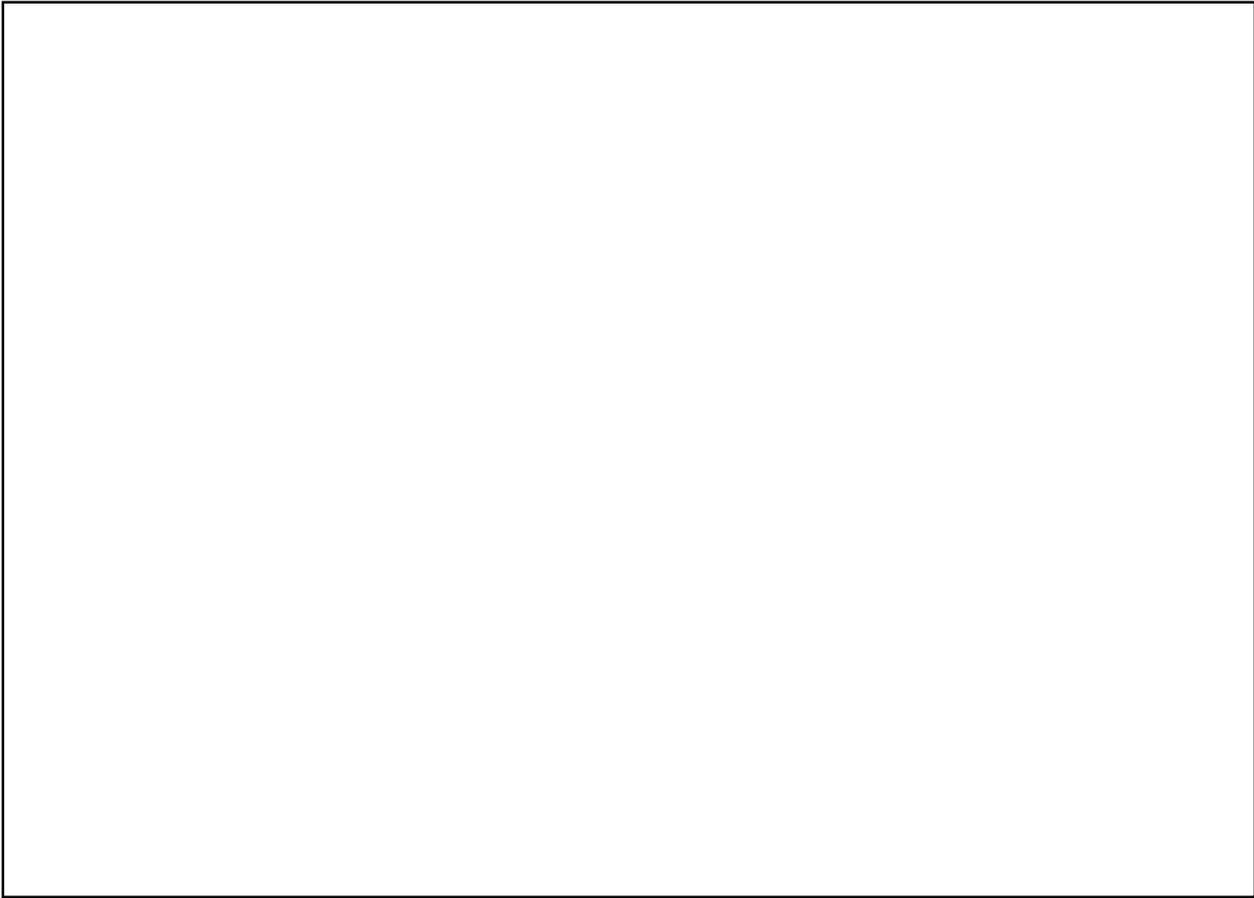
\*1 大谷権左衛門 = 瀬尻組組頭。



口上覚

一  
去四月廿七日元禄七一梅地喜兵衛注<sup>2</sup>私宅江参組内  
市味川除相調候通申聞候 其後私相  
尋候八 此間四組何ヶ落付不申風聞にて候  
いか様之首尾にて候哉と申候へ八 喜兵衛梅地申候八  
仰候様ニ此間何ヶ有之由候 御組内瀬尻  
之者共ヨリも書付を以御理とやらん

\*2 梅地喜兵衛 = 市味村居住の大谷組證人（59頁参照）。大谷権左衛門の命令に服さず、権左衛門が公儀へ差し出した「八人之者」の一人（6頁参照）



御付届とやらん申出仕之由及承候 委細

之義者不存候通申候二付 私申候八

公儀注1江之御理り事注2 於此節八何事二不寄

申出間敷候 旧冬四組ヨリ書付を以御理り

申出 御沙汰之上当春 御意書注3を以被仰

渡 四組共二 御意之通謹而御請仕 落

付候上八又々御理りかましき義など申出と

候ても 取次不相成候間 左様可相心得之由

喜兵衛二申聞候へ八彼者申候八 於各も 曾以注4返

し

候て之御理り 少も無御座候 然故何事も申

出覚悟にて八無之通申二付 一段可然存候由

申聞 指戻候事

同廿八日二堀一郎右衛門注5・小原二郎左衛門注6・

私共三組ヨリ

小原平右衛門・有田甚左衛門・品川喜兵衛・有福甚  
兵衛

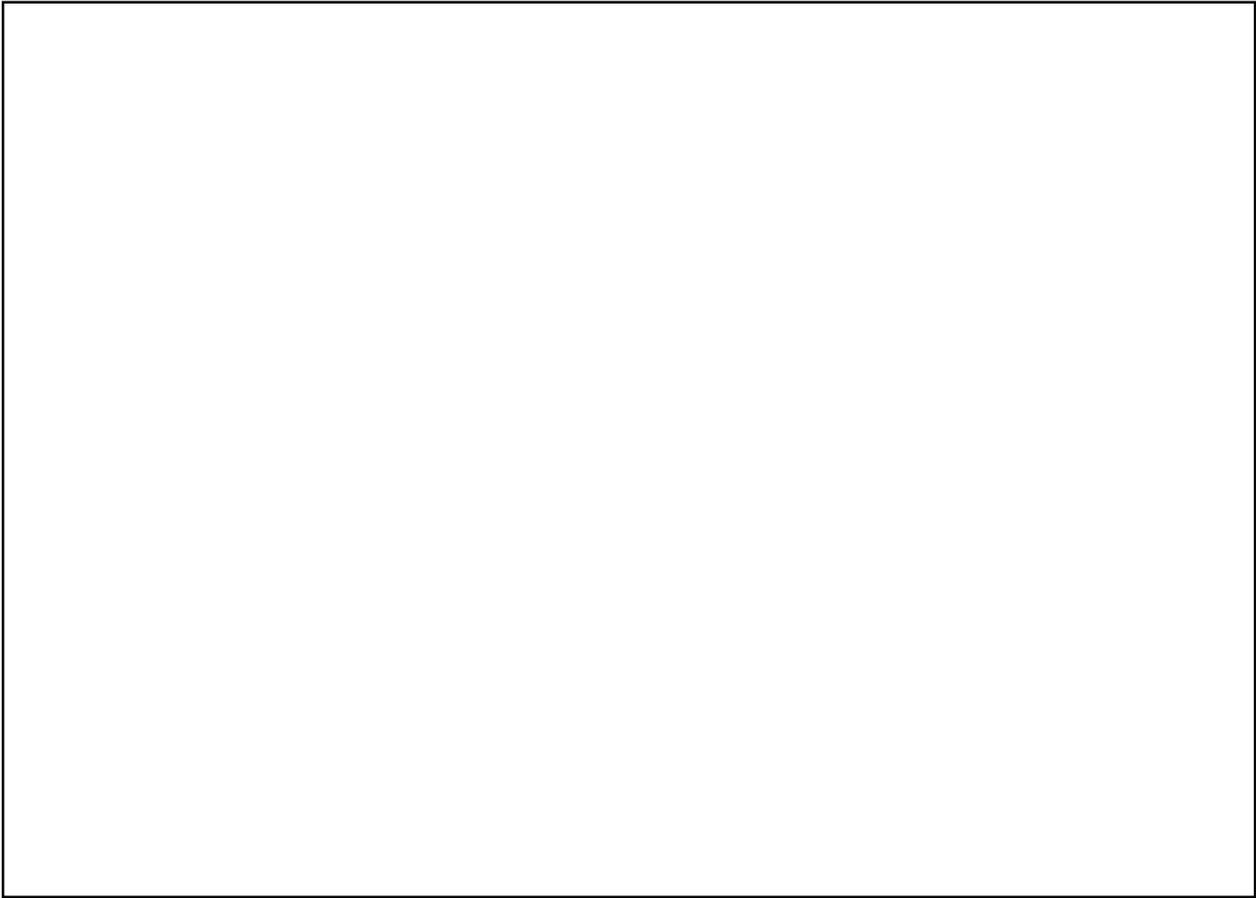
\*1 公儀 = 萩藩のこと。

\*2 御理り事 (おことわりごと) = 訴訟。

\*3 御意書 (ぎょいしょ) = 御差圖。御命令。 益田就賢の命令。

\*4 曾以 (かつてもって = 打ち消しの語と共に用いて 決して。全然。今まで一度も。)

\*5 堀市郎右衛門 = 市丸組組頭。



右四人之者共罷出 各三人へ申候八 組内ヨリ付  
 届仕置度儀共御座候て各罷出候間 何レ之  
 御宅へ成共可遂伺公之由申候二付 各申候者  
 大谷権左衛門宅へ可参候条 左様可相心得之由  
 申聞 何も右之者共私宅へ参 各三人江  
 小原平右衛門口出しにて申候八 此間在郷之趣  
 粗々  
 被聞召たる儀も可有御座候 当春以来

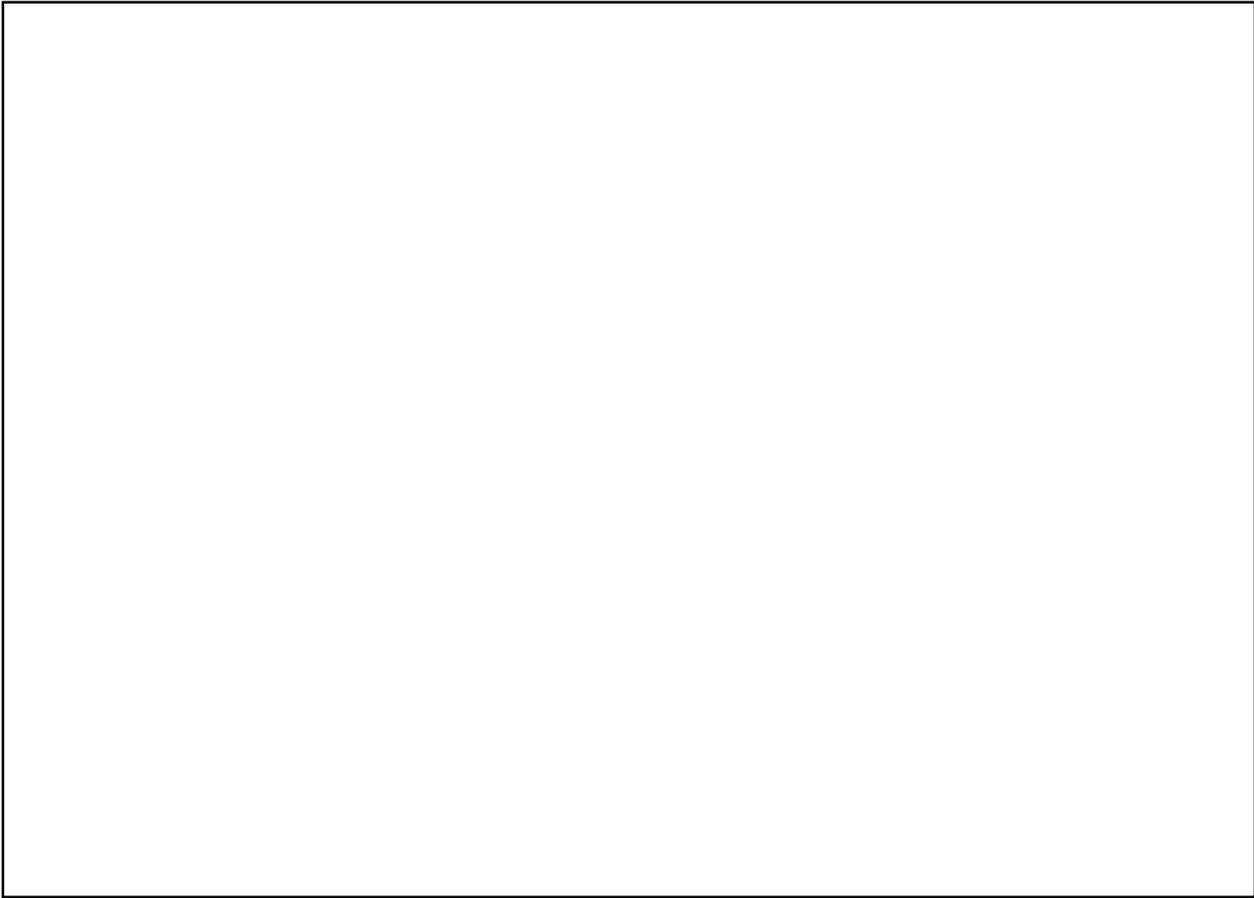
四組共二今以内證注7落付不申候 於各八当春  
 御意書を以被仰出 謹而落付 御奉公可申  
 上之通御請申上候上八 少も相替ル心底にて無  
 御座候 然ル処ニ当春宗門御極之時分 旧冬  
 四組御理り之節 判形注8ニ指除候六人之者共  
 宗門組相注9へも入レ申間敷候段 旧例をはつし  
 御帳仕立申之由候 其砌当人之義八不及

\*6 小原二郎左衛門 = 須佐地組組頭。

\*7 内證 = 内に持っている考え。内心。本心。

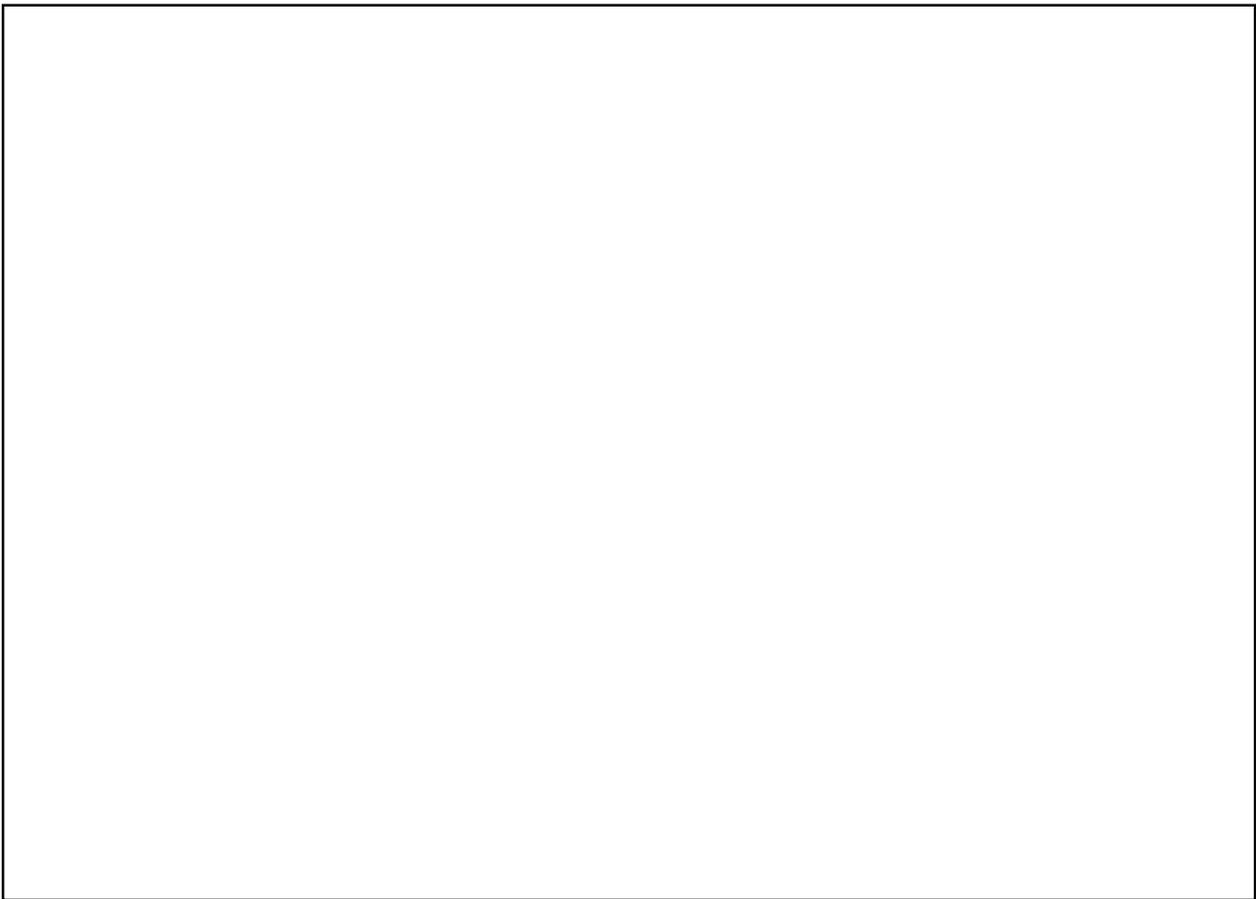
\*8 宗門組相へも入れ申間敷 = 宗門究めは「五人組」でキリシタン信者の有無を相互監視する制度であった。その五人組から「六人之者」を追い出すという意味。

\*9 判形 (はんぎょう) = 印形。また書き判。



申<sup>およばす</sup> 一類共迄不謂義共二存<sup>いわれざるまぎ</sup> 御理り申出有無<sup>ごりりしんしゅつうむ</sup>  
 相極<sup>さま</sup>り候上 宗門判形相調申覚悟にて<sup>あいとこのえ</sup>  
 御座候へ共 左候時者<sup>さむつうらうときは</sup> 公儀宗門御極之妨<sup>きわめさまたげ</sup>二  
 相成義共二候間 先<sup>ます</sup>謹而罷居候<sup>つつしんで</sup> 切又古来ヨリ<sup>さてまた</sup>  
 一組切り日数ならし<sup>注1</sup> なんと二も 右六人之者を八  
 入申間敷之由申候通相聞へ候<sup>まじく</sup> 切々<sup>さてさて</sup> 不謂義<sup>いわれざるまぎ</sup><sup>注2</sup>  
 共二存候 於各八曾而左様不存候<sup>かづて</sup> 第一宗門<sup>ぞんぜず</sup>  
 御究之時分 六人之者共四組一同二組相二入レ候事  
 不相成之通御頭中江申出たる由及承候<sup>あいなわらはず</sup> 曾以<sup>かつてもって</sup>  
 在郷二居候此注文<sup>注3</sup> 前々各一圓不存候<sup>ぞんぜず</sup> 此已後  
 と候ても又々か様之義 四組一同と申出様二  
 御座候ては 各心底相違之義共迷惑二存候二<sup>おのおの</sup>  
 付而<sup>ついで</sup> 此度御理り事二付而者<sup>ごりりごとわ</sup> 此已後兎角  
 不申出落付御奉公可申上之由 各申談 人別<sup>もつしいでず</sup>

\*1 日数ならし = 「ならし」は平均すること。開作工事の日数請け計算で「六人之者」を除くことか。  
 \*2 不謂義(いわれざるまぎ) = いわれのない事。不当な事。余計なこと。  
 \*3 注文 = 注進の文書、注進状 書付、文書、書状 こうしたい、ああしたいと期待すること。また、その条件。



判形仕 懸御目置候間 左様御心得可被下候

多人數之義二御座候へ八 皆々如何様之心持二て

居候段も御存不被成筈二候故 無子細者共注4

右之注文仕 差出候間 左様御心得 各此心

底之段八 卒度御年寄中へも御咄被成被置

可被下候由申候二付 小原二郎右衛門・私兩人申候八

切々 尤之申出二候 皆々落付御奉公申上候

事こそ 御為之儀共二候由申聞 其後私申候八

此注文前書二 各口上と違 少二ても御理り

事書加へ候時者 縦封を切り候ても指返シ

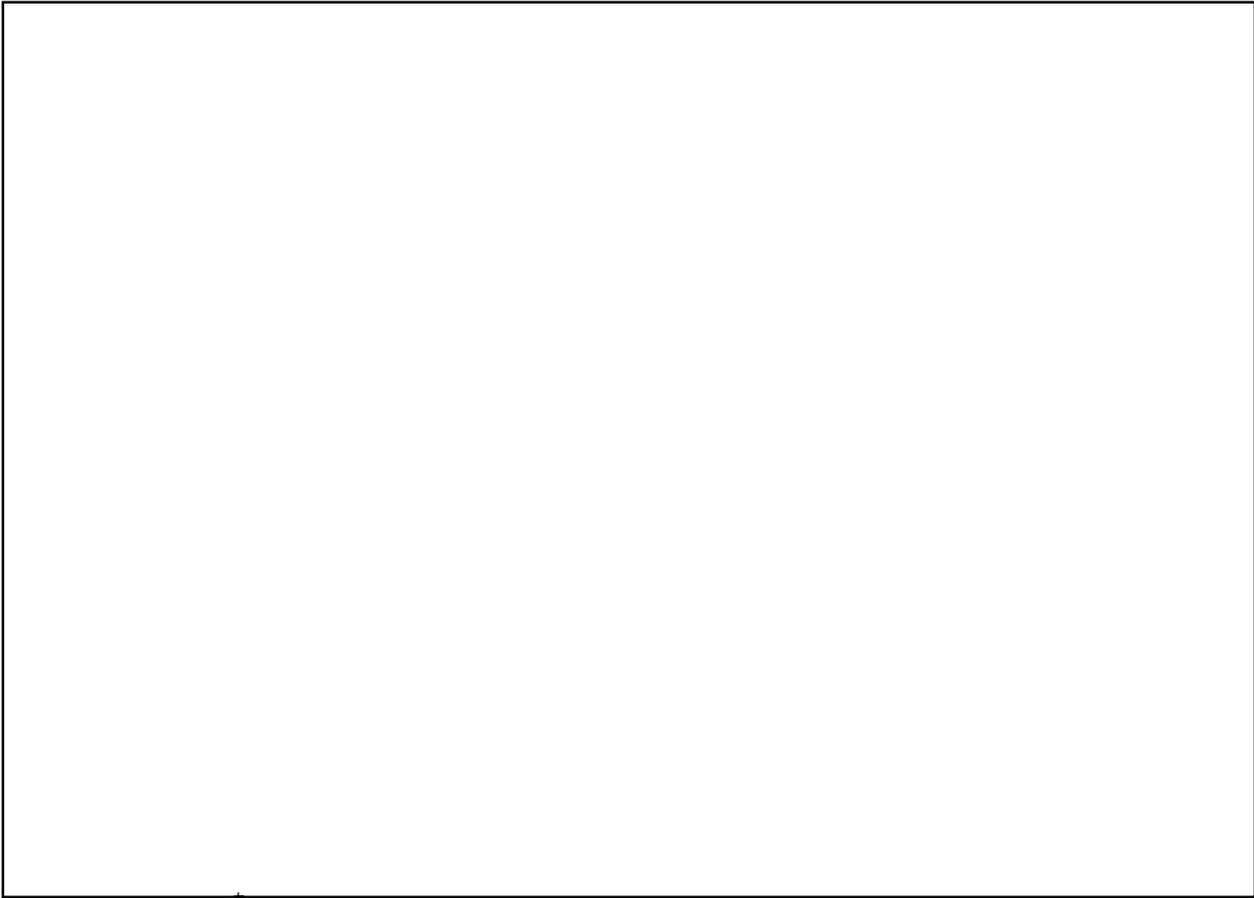
候間左様可相心得之由申聞せ候へ八 只今

口上二て申候分二少も相違無御座候由在郷

ヨリ罷出候四人之者共申候二付 然ル時八言人

二ても落付候こそ 御為と存 各兩人義者

\*4 無子細者共(しさいなきものども) = あれこれ難しくて面倒な事を言わない者共。



右之書付一覽仕落シ付申候 左候而有福甚兵衛注<sup>1</sup>二  
私申候八 市味村之者共判形不相見へ候 如何  
仕候哉と相尋候へ八 甚兵衛申候八 昨日喜兵衛義<sup>梅地</sup>  
須佐罷出歸候節 直様瀬尻江寄 石川  
市郎兵衛・私一座にて喜兵衛申候八 今日須佐罷出<sup>梅地</sup>  
候処二 権左衛門殿被仰候者 此已後返シ候て之  
御理り一圓申間敷候 御理りさへ不申候へ八判形  
二八及不申之由被仰候間 先 判形八仕間敷候  
自然注<sup>2</sup>判形入申候八、権左衛門殿にて判形可仕候と  
申候二付而 甚兵衛申候八 夫八其方申分悪敷  
故にて候 権左衛門殿も何事にても御理事申  
出間敷候とこそ 為被仰由候 各此書付二も  
御理り事八少も不申出候 向後落付御奉公  
可申上と申儀二候 然時八其方判形仕候

\*1 有福甚兵衛 = 大谷組證人。  
+2 自然 = 万が一。

とても当り相あい二可相成様無これなく之候 是非判  
形仕候様二と申候へ八 喜兵衛申候八 此間市味村  
半間之者共と申談もつしだんじ之筋も有これあり之候間  
一同二判形 可仕つかまつるべく 候条 明日須佐罷出候刻  
市味へ参候様二と喜兵衛申候二付 甚兵衛申候八  
手前寄候二八及不申候 喜兵衛同意二存候八、  
此書付取帰 皆々へ判形調させ可然候

左候而御手前も證人役之義二候条 須佐へ  
同道可仕之由申候へ八 喜兵衛申候八 尤左様二て  
候へ共 落付ため二候条 是非甚兵衛二市味へ参候  
様二と申候二付而 翌廿八日被調 喜兵衛義参  
候処二 彼者義ふせり居申候 甚兵衛申候八  
皆之判形いか、仕候哉と 相尋候へ八 喜兵衛  
申候八 夜分ヨリさん、気色心二て 只今

㊦居申候 皆々義也追付おつつけ 可参由まいるべく 喜兵衛梅地

申候処二 上之市味村之者共 喜兵衛所梅地へ参候

付 様子申聞候処二 皆々申候八 此已後少也

申分八無御座候へ共 判形八得不仕候由申候 喜兵衛梅地

も其通二申候二付 然時者しかるときは 各分別次第おのあの

と申 甚兵衛儀八須佐罷出候由申候 此段

八松井正左衛門萩罷出候前日也 益与右衛門殿益田

栗山半左衛門・松井正左衛門三人一座にて正左衛門

相尋候二付而 物語仕候 切又三組無子さい

細 落付候書付 二郎右衛門・私一覽小原

仕候首尾 并 堀一郎右衛門義書付

一覽不相成との申分 此段八去五月元禄七

廿日二益与右衛門殿宅にて年寄中益田

一同二松井正左衛門承候二付 不存候事ぞんぜず



一 去四月廿八日元禄七堀一郎右衛門・小原二郎右衛門・

私右三組之者共爰こゝもと元罷出

当春御ケ条を以被仰渡候分へつじょうなく二無別条

落付御奉公可申上との書付もつしあぐへし

一 覧之上 私組證人有福甚兵衛二

申候八 明日其方在郷罷歸候時分

用事有之候条これあり 私宅へ参候

様二と申候処二元禄七年四月翌廿九日二私宅へ参候付 彼者へ

私申聞候八 其方咄承候処二梅地喜兵衛事

拙者申分不台点二仕居候物と存(候)間 罷歸

候八、早々市味にて梅地喜兵衛方へ飛脚遣つかわし即

刻爰元罷出 手前江相對仕候様二可申遣候由もつしつかわすべく

申聞 甚兵衛差戻候 彼者罷歸 喜兵衛方へ趣申もつし

遣候処二 はや其内在須佐組半間之者共ヨリつかわし

内談有之これありと候て 喜兵衛方へ飛脚遣 仲村新衛門・梅地喜兵衛・増野左二右衛門・奥山忠左衛門・四人之者共

須佐罷出候跡へ甚兵衛ヨリ之飛脚八参 喜兵衛

留守ニて相對 不仕之由候 左候て廿九日ニ新右衛門・

喜兵衛・左二右衛門 右三人一同ニ私所へ参候ニ付

私喜兵衛ニ

申候八 昨日有福甚兵衛罷出 瀬尻之者共向後

落付御奉公可申上との三組一同之書立持参

申候ニ付 様子承候処ニ 曾而前取々ニ承候

首尾と八違 偏ニ無子細落付御奉公可申上

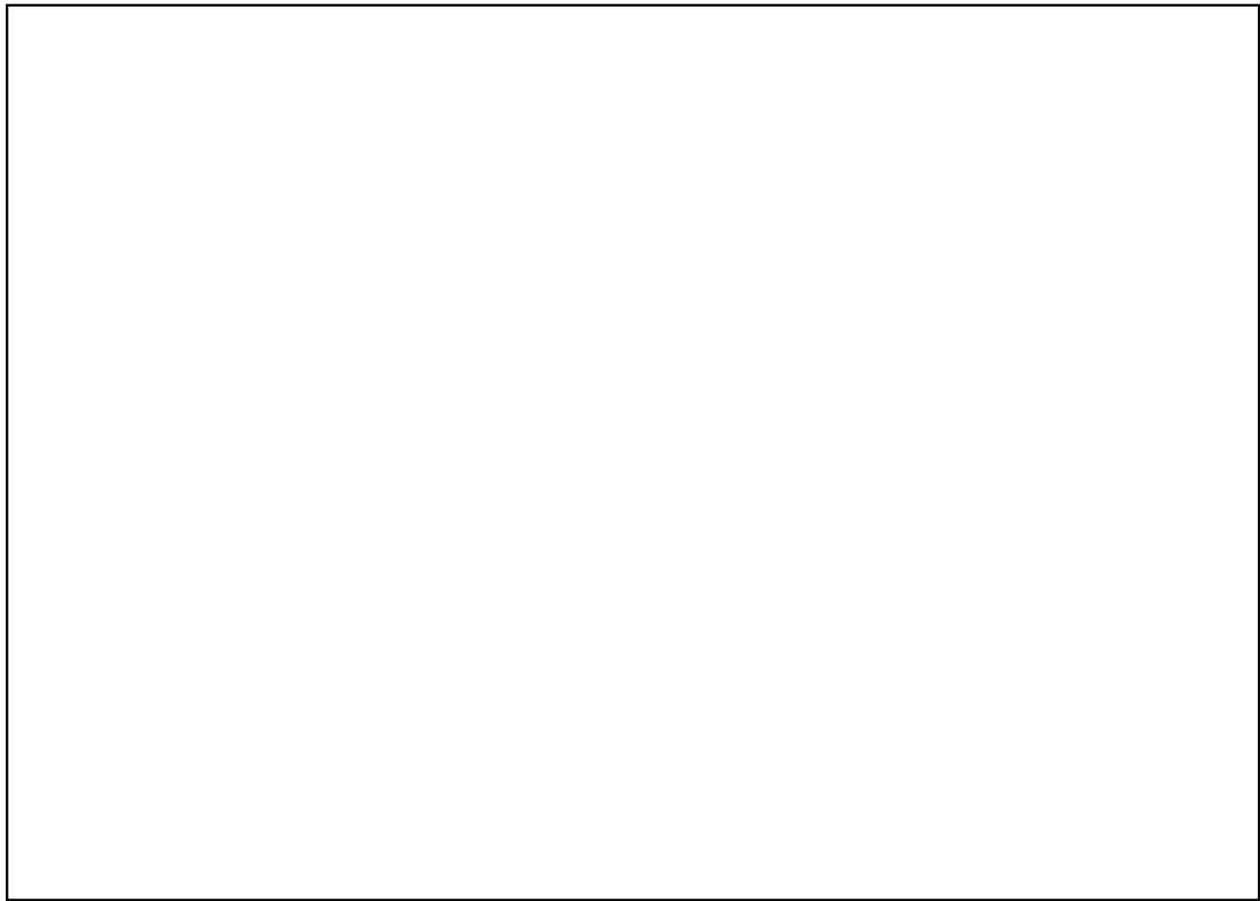
との義共ニ候 一昨日喜兵衛罷出 拙者相尋候節之

**うて相** 八 御理りとやらん又八御付届とやらん之由

申候ニ付 御理事等など申出と候ても取次申

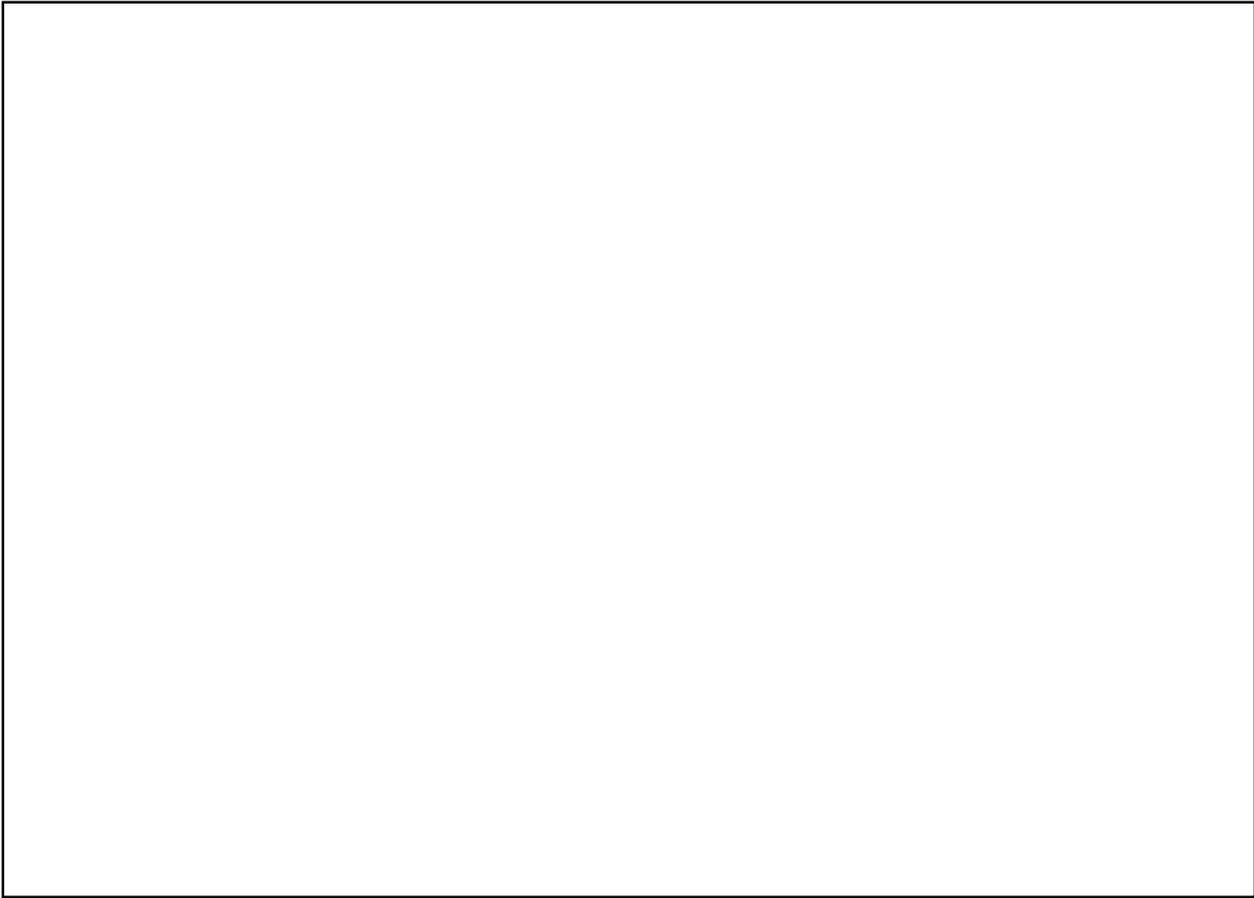
覚悟ニて八無之段申聞せ候 右申候様ニ瀬尻

ヨリ之申出 案外おんひん福便之申出ニ候 然時八



各義判形仕可然之由申聞候へ八 新右衛門・喜兵衛仲村 梅地  
申候八 各々義者次第したいにて之御理り ゆめノ、  
無御座候 左候時者 何にてても可申上義も無之  
故 判形八不仕候由申候二付 私申候八 いかにも御  
理り無之と候時者 左様も可存候へ共 一組一同二  
無子細段申出候上八 各斗ひかへ居候段も  
いかゝ 間 一同之判形仕可然由申聞候へ八

彼者共申候八 其段八右申様二 何にてても兎角  
不申候心底にて候間 判形二及不申候由申候 其時  
増野左二右衛門申候八 いつれも各半間申談候筋  
も御座候間 申上義御座候へ者 一同二可申出之  
由申候二付 私申候八 切々左二右衛門申分合点二  
不及候 只今迄皆々一同二何事二不寄 此度之  
義 御理り立無之由申候処二 又々返替へ御理りも



有<sup>これあり</sup>之候八、皆々一同二可<sup>もつしすべし</sup>申出と八甚<sup>いわれなき</sup>不謂申分  
之由申候へ八仲村新右衛門うけ取申候八仰<sup>あおせしまつとも</sup>御尤二存  
候

左二右<sup>増野</sup>衛門只今之申分 彼者あやまり二て御座候  
何<sup>なんべん</sup>篇申上義無<sup>これなし</sup>之と申候時八 少も子細無<sup>しじざなく</sup>御座候

併<sup>しかし</sup> 六人之連判は<sup>外</sup>つれ之者共と一座相役八  
得不<sup>えつかまつらず</sup>仕候由申候二付 私申候八 其段合点不<sup>まいら</sup>参候

大公儀<sup>注1</sup> なども承及候<sup>うけたまわりあひあひ</sup>処二 いか程も内證不和

之衆有<sup>これあり</sup>之由候へ共 表向御役儀二付 立相

御奉公不相成と被<sup>あいならず</sup>仰出候衆 不及承候 表向

之義者立相御奉公申上 内證故障之義

有<sup>これあり</sup>之 不申合候分八差<sup>さして</sup>而当<sup>これありま</sup>り相有之間

敷候通申聞せ候<sup>仲村</sup>処二 新右衛門申候八 何<sup>いすれ</sup>も半間

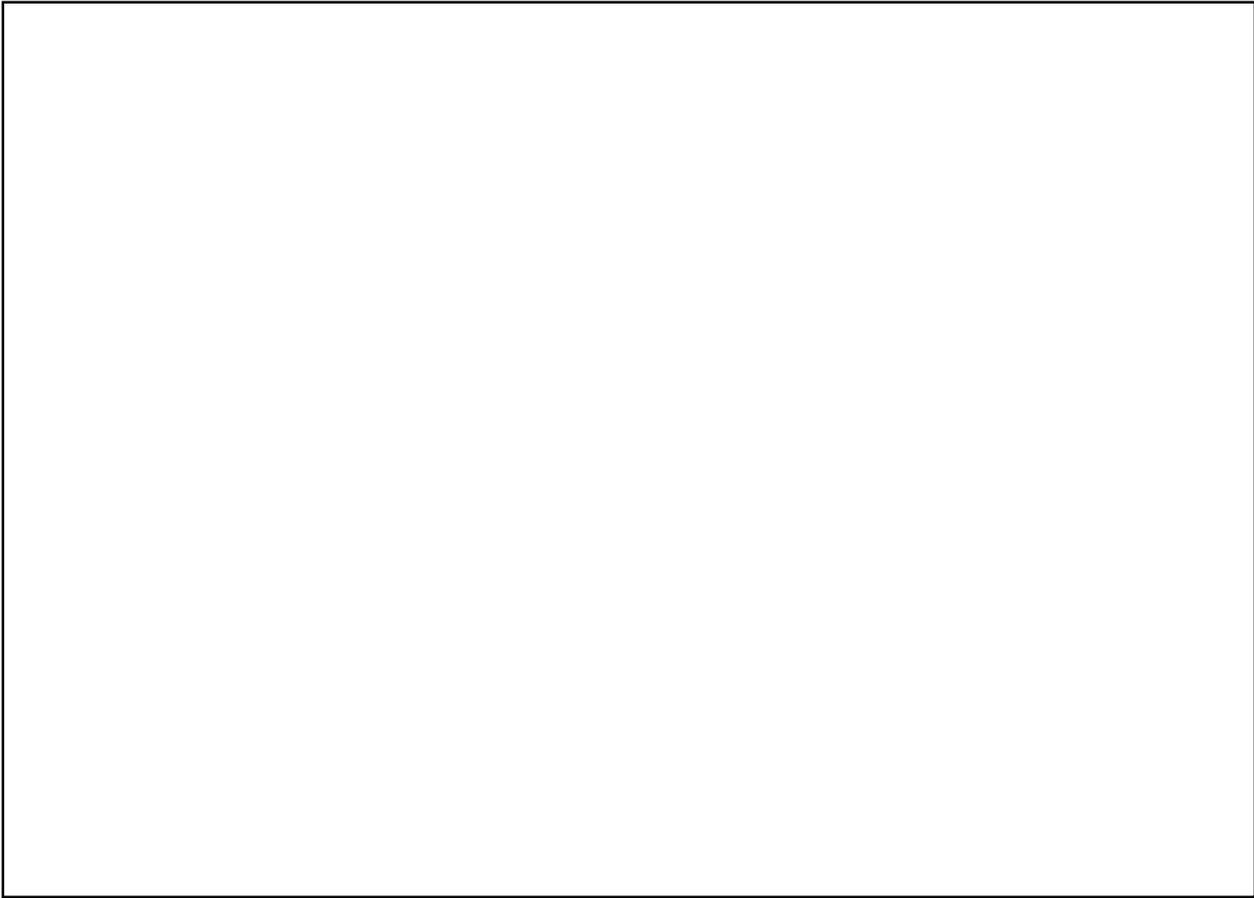
相談之首尾有<sup>これあり</sup>之候共二て一同二罷立候事

去<sup>元禄七</sup>五月四日二小原二郎右衛門・私申談候八三組無<sup>しさい</sup>子  
細<sup>なく</sup>

\*1 大公儀 = 幕府。

落付候者共之儀 いか様堀一郎右衛門ヨリ様子申  
越 此書付一覽可仕候 其上にて各三人同道  
仕 年寄中江趣可申と存 只様打過候へ共  
市郎右衛門一覽之儀 定不極も 然上八左様二  
延引仕候段いかゝ敷候間 市郎右衛門を呼請存  
分之詰り承 彼方弥同意にて無之候八ゝ  
各兩人書付持参仕 年寄中江可申達候由

申談 一郎右衛門方へ手紙遣候へ八 私宅へ参候二付  
右之段々申談候へ者 彼方申候八 書付一覽八  
仕間敷候 併 年寄中へ付届之一座江八可  
参由申候二付 各申候八 願八老人にても落付  
ため二候間 一覽被仕候へかしと申候へ共 最前ヨリ  
申様二 此書付一覽申時者 残ル者共何ケ  
申候故 一覽不被仕候由申候二付 二郎右衛門・私申  
候八



左様二て無<sup>これなく</sup>之候 四組之義 当<sup>元禄七</sup>春宗門

事此かた 六人之者とも網かけむつかしさ  
おこり居申候 此落付之注文見不<sup>もつたず</sup>申候とて

も 右宗門之騒動八やめ申候て無<sup>これなき</sup>之首

尾二候 其上六人之者組日数ならし注<sup>1</sup>なとへ  
入<sup>いれもつすまじく</sup>申間敷と申之由風聞有<sup>おのの</sup>之候 各<sup>おのの</sup>承<sup>さか</sup>

左様参答二て八無<sup>これなく</sup>之候へ共 如此内證里き三

居申候処二 其内ヨリ 於<sup>おのの</sup>各<sup>において</sup> 八無<sup>しさいなく</sup>子細落付御奉

公可<sup>もつしあくべく</sup>申上と申出候処 切<sup>さてさて</sup>々<sup>しかるべき</sup> 可<sup>おのの</sup>然<sup>あ</sup>義共二候段 各手二

餘<sup>あ</sup>り 上<sup>かみ</sup>之御吟味二被<sup>かけられ</sup>掛候とても 人数少キ事故

御なやミも被<sup>か</sup>成<sup>か</sup>能<sup>か</sup>義共二候 第一只今之向二て八  
当分御人遣<sup>つかい</sup> 御当用二も御手をつかれも参

かゝり二候 三組四十四五人も落付可<sup>もつすべく</sup>申と申

出候時八 早々請<sup>うけ</sup>取<sup>と</sup> 落<sup>しかるべくと</sup>シ付<sup>と</sup>可<sup>と</sup>然<sup>と</sup>存<sup>と</sup>候由各兩人

\*1 日数ならし = 56 頁脚註 1 参照。

市郎堀右衛門へ申聞候へ八 彼者かのもの申候八 存寄有之と  
候て

書付一覽不申候二付 然ル上八心次第にて付届

之一座江八可参由二申候 弥其分二候八、同道

可申之由各申 年寄中へ右落付候首尾

物語仕候事

同日一座にて年寄衆被申候八 三組ヨリ之無子細  
落付御奉公可申上と申出候段 尤二候 切又

相残ル者共之義八 いか様之首尾にて無子細

判形不仕候哉之由年寄衆尋被申候二付 各申候八

於其段八去晦日二四組相残ル者共ヨリと候て各

三人江申出候筋御座候 御存之様二境二郎左衛門

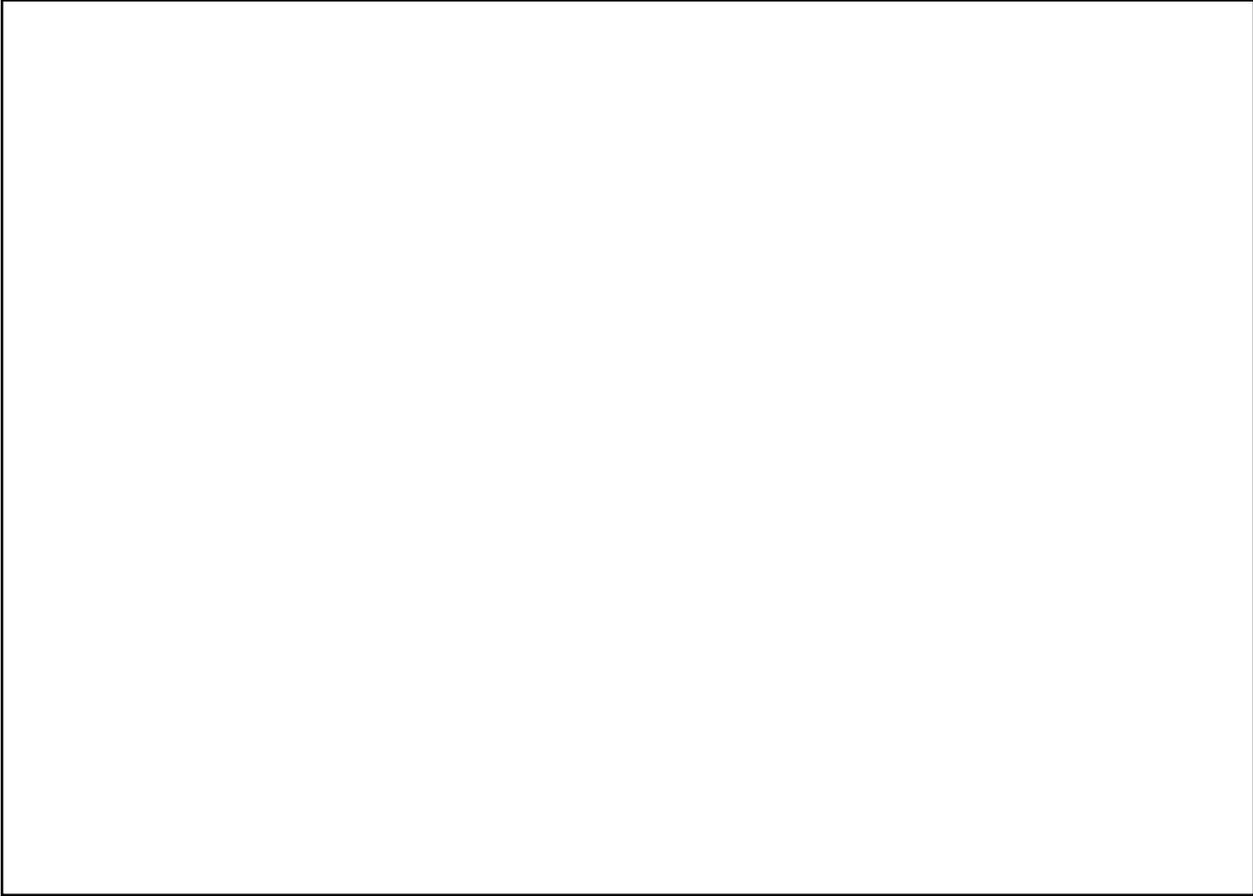
義萩当番にて罷居候 四組一同之申出二候

故 彼方かのかた帰宅候上 右之首尾遂内談 於

様子八 各様へ可申出と内談仕り置候由申候へ八

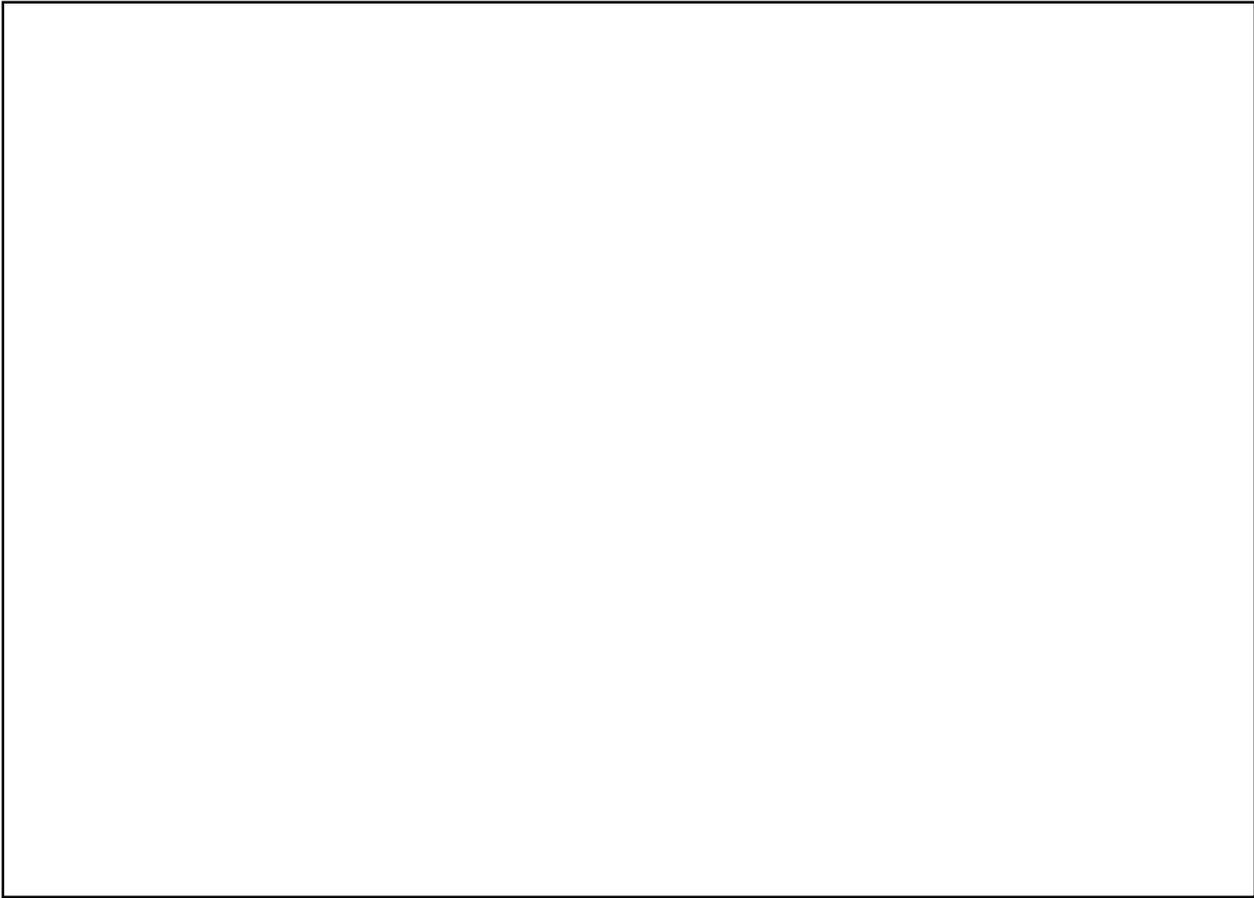
堀一郎右衛門申候ハ 右之首尾をも序ついでなから御  
物語仕可しかるべく然候 表向之義者 三郎左衛門罷歸候上  
可もつすべく申候由申候二付 去四月晦日二四組ヨリ申出候  
首尾委細物語仕候 然しかるごとく処二年寄中よ里ハ  
六人之者と立相御奉公不相成あいなひすと申候段ハ  
公儀・内儀共二之事二て候哉 内證迄之事  
二て候哉 此段今一通相残ひとこおひル者之存分承可しかるべく然候

公儀二ても立相御役目不相成あいなひすと申時ハ 扨々  
御上江もたれたる申合二て候間 とかく今  
一通沙汰仕可しかるべく然候 左候ハ、三郎左衛門義留守之  
事二候間 此組之義も各三人組内申分  
承可しかるべく然候 扨又自分ノ組之義ハ 猶なほもつて以面々ヨリ  
承可しかるべく然と被申候二付 則時罷歸四組江飛脚  
遣 残つかわしり之者之内兩人宛様子相尋 可もつしあくべく申上



候て呼申候 私組ヨリ八仲村新右衛門・梅地喜兵衛召  
 出候処ニ須佐罷出候へ共 私宅へも参不申 波田  
 久右衛門を以申越候八 組内出入之御尋ニて候八、  
 四組一所ニて御尋可被成候 格々ニ八申候義不相成  
 申談候由申越候ニ付 久右衛門へ私申候八 切々新右  
 衛門・  
 喜兵衛申分驚人候 手前相尋候義有之  
 呼出候処ニ控居候段不謂儀共ニ候 何ニても

子細有之事ニて八無之候条 只今可参候  
 左候八、趣可申聞由久右衛門を以申遣候処ニ何ケと  
 候ても四組出入之御尋ニて候時八去晦日ニ申出候  
 首尾少も相違無御座間 とかく一同ニ御尋  
 可被下候由又々申越候ニ付 私申候八弥新右衛門・  
 喜兵衛  
 私宅へ参候事不相成と申候哉 此段久右衛門承  
 切り可参候 手前指圖ニて用事有之 呼候



所へ八参不申 組半間申談 難遁 参候義

不相成との心底不及覚悟候 各別之用心

も有之事二候間 有無参候様二と重畳

久右衛門を以申聞候へ共 終二参不申候 是非二呼

候八八余程之筋も可有之候へ共 左様仕候時八

当分色立候二付 其節之尋不仕 在郷指

戻申候 四組一同二承候時八去晦日之申出二相替

義無之 耆人二ても落付可申目当無之候

付 右之分二年寄中へも内談仕 一圓首尾

不承候事

去五月廿日栗山半左衛門ヨリ各へ手紙にて申越候

者 夜分松井正左衛門事 従萩被指戻相談

之義有之候条 益田与右衛門殿宅へ参候様二との

儀二付 各四人参申候 尤益田八郎左衛門殿・栗山

半左衛門・松井正左衛門一座被申候 正左衛門各へ  
申候八春比頃

三組ヨリ無子細落付謹而御奉公可申上通申

出候 此書付一覽仕候首尾承度と申候二付

其節委細正左衛門へ申談候二付不存之候 扱又年

寄中并正左衛門申候者 乍此上も何とそ相残ル者

落付申候様二各四人沙汰仕見候様二との義二付

御為之義二候条 幾分二ても取收見可

申と各申談候 然処二境三郎左衛門・堀一郎右衛門義八

四組一同二沙汰可仕との儀二候へ共 小原二郎右衛門・私

存候八 四組打込二仕候て八 思々之義申候て埒

明申間敷候間 一組切り二引わけ何とそ収り

候様二申聞可然と申相候処二一年寄中も其

分可然との義二付 四組引わけ之沙汰二

極り 各罷歸候 左候て則時仲村新右衛門・梅地喜兵衛

罷出候様ニと私ヨリ飛脚遣候処ニ各与右衛門殿  
宅ニ居候内ニて可有之と存しはや先達而

四組在須佐之者共ヨリ新右衛門・喜兵衛方へ飛脚

遣候 私ヨリ之飛脚に候ハ、右両人之者尋候て

相對仕候由候 左候て須佐罷出 波田久右衛門を以

新右衛門・喜兵衛ヨリ私へ申越候ハ 御用有之候由ニ

定而四組出入之御尋ニて可有之候 於此段

四組一同ニ申覚悟ニ候故 参上不申之由申

越候ニ付 久右衛門へ私申候ハ 松井正左衛門被指戻

候ニ付

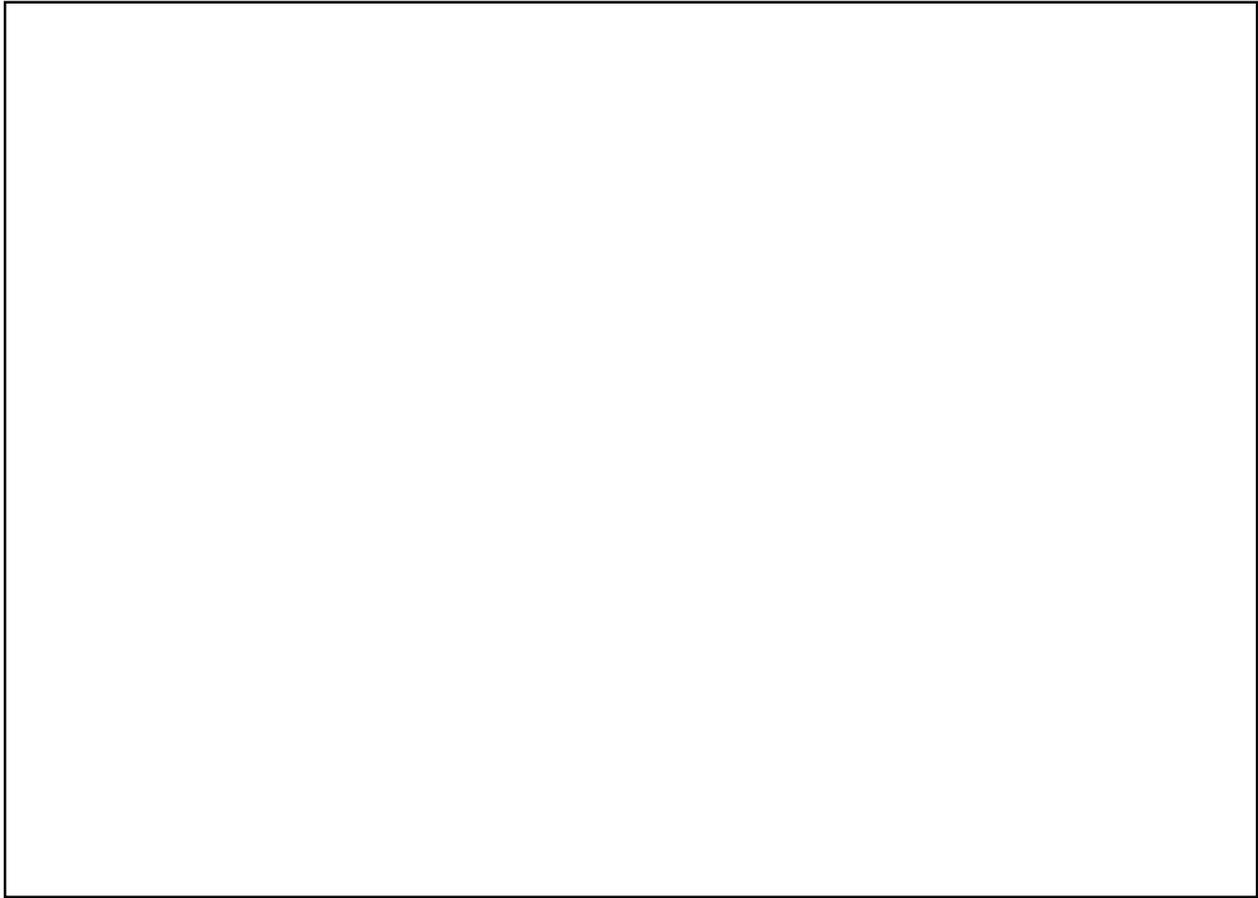
面々組中内存承筈ニ候間 新右衛門・喜兵衛

兩人共ニ先私宅へ参候様ニ可申聞之通申 久右衛門

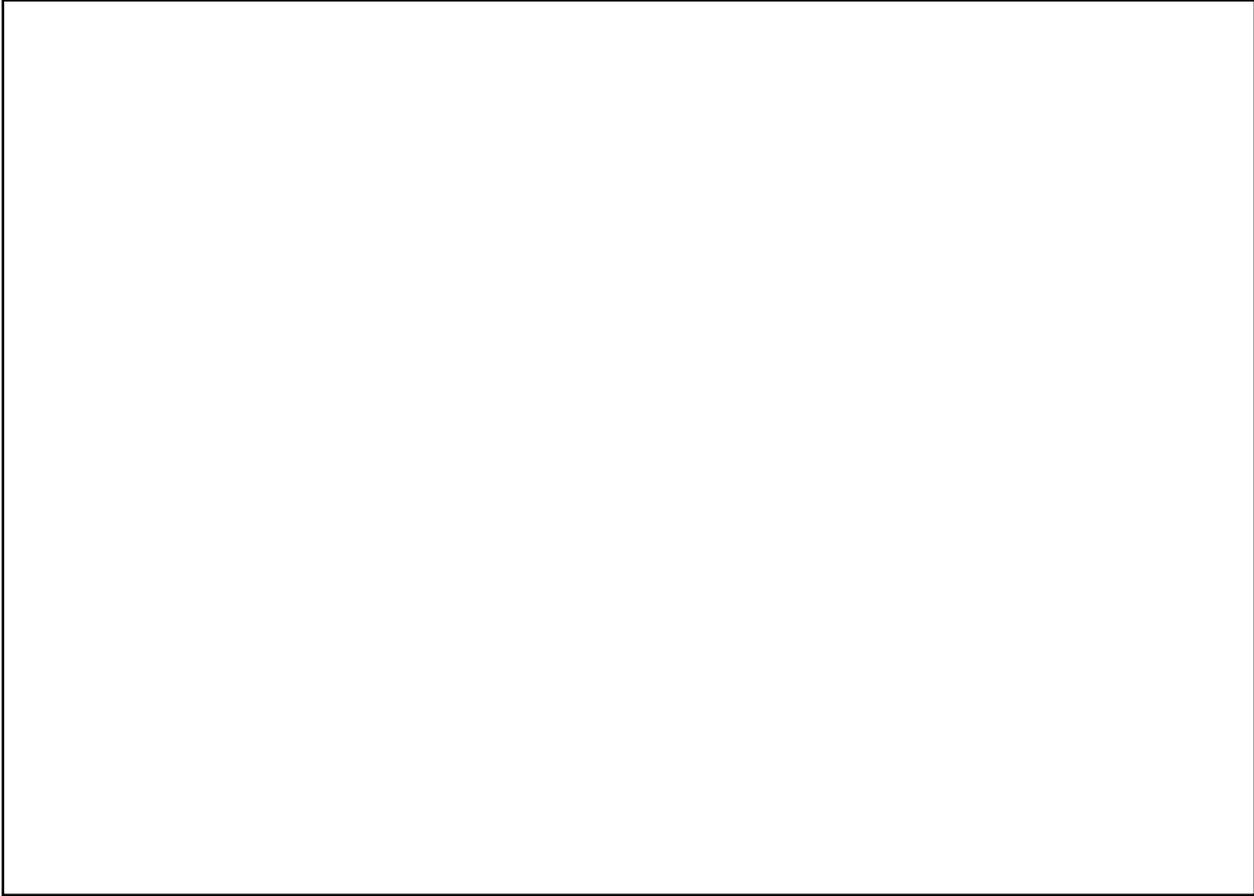
指返候処ニ又々久右衛門を以とかく四組一同ニて無

之候へハ 様子不申之由申越候ニ付 私申候ハ何

ケと候ても此方へ兩人共相参候 左候ハ其方なと



存分をも得と承 申立至極之義二候八、極候  
拙者申立可遣候 扱又手前申分至極と存  
候八、自分ノ之里きニ差捨 御為能方へ  
付可申候 此方參候とても不遁存寄 至極之  
上八 拙者申分不承迄二候 とかく參候様二と  
重畳申候処二 合点不仕申切り 不參候段不謂  
義二存候 拙者方へ儀絶候て八有之間敷候  
有無可參候 左候八ノ相方之申分得と相聞  
可申由申遣候へ共 一圓參不申候二付 其後八彼  
者共親類或八内縁を以種々異見仕候へ共  
後々八此もの共へも相對不仕候二付 私内存候  
通委細手紙相調 詰り之存寄迄書認  
遣申候へ共 返事も不仕 其已後波田久右衛門を以  
弥各義致參上 格々ニ思召寄承 各内存



申候段 四組半間申談相違仕二付 不罷成候条まかりならず

とかく御尋之義候八、四組一同二被聞召可被下候由きこしめされくださるべく

申越候二付 私申候八左様二八不相成候 拙者色々あいならず

事をわけ申聞せ候へ共 手前存寄二 順不申候ぞんじより したがいもうはず

各三組打込にして落付可申目当無之候このおの もつすべき これなく

もはや拙者手二餘り候条 公儀江指出

より外無之候由久右衛門へ申聞指戻申候これなく 波田

右之参かゝりにて 私組内八人者之義八何共

手二及不申候間 公儀江差出候条 組御法およびもつたはず

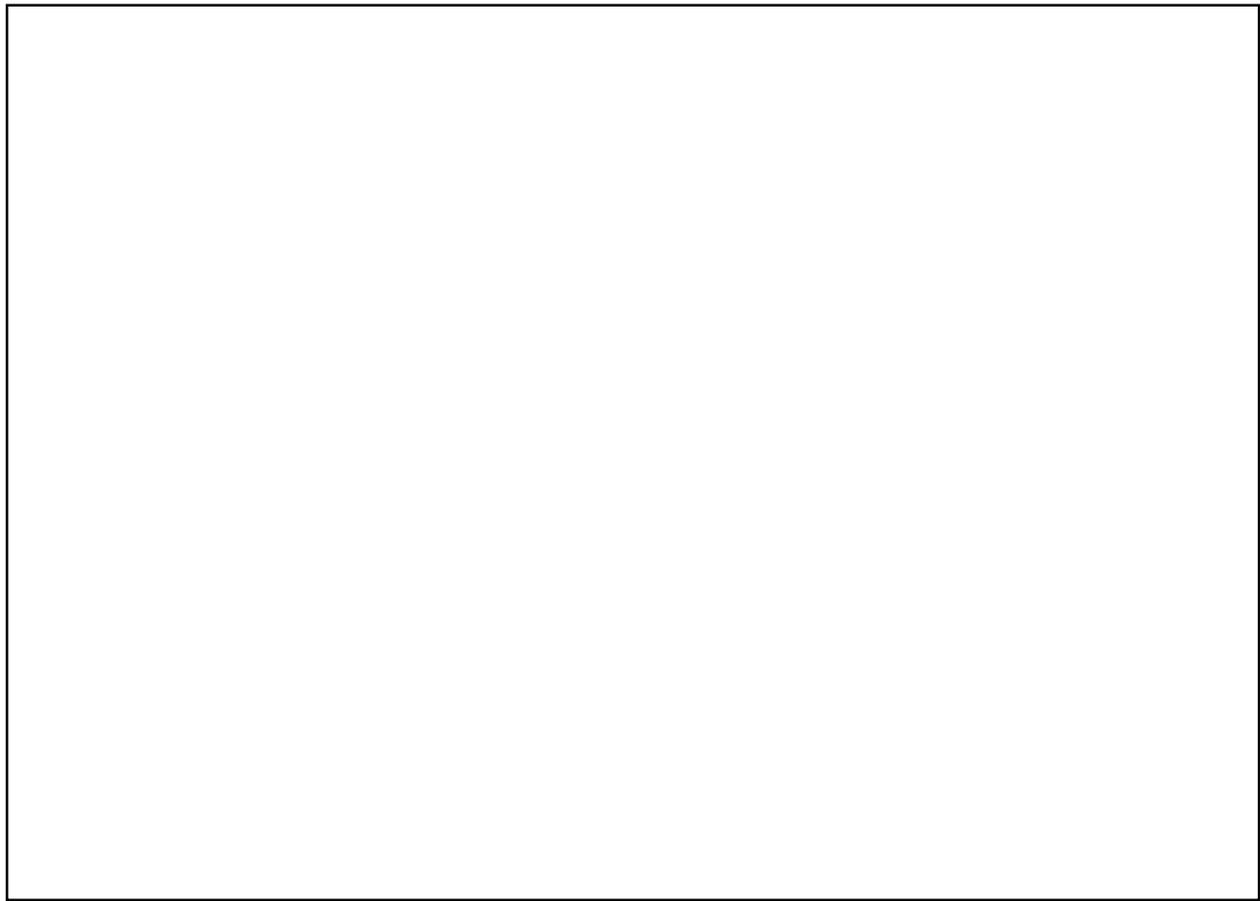
立候様二被遂御沙汰可被下候由 去五月廿三日二たちそつろひつひよう としけられ くださるべく

年寄中迄申出候処二 皆々御詮義之上にて

私方二請持置 可然之由被仰聞候二付 私申候八うけもちあき しかるべし おおせきかされ

曾以私里きミ候て申候て八無御座候 右之分二かつてもつて り しだなく

法外成者共之義八 御沙汰ニかゝり候こそほうがいなる



御為と奉存候二付而 如此二御座候 併 御指圖  
之上八いか様ニも可仕之由申候 其後年寄衆ヨリ  
被申越候八 三組

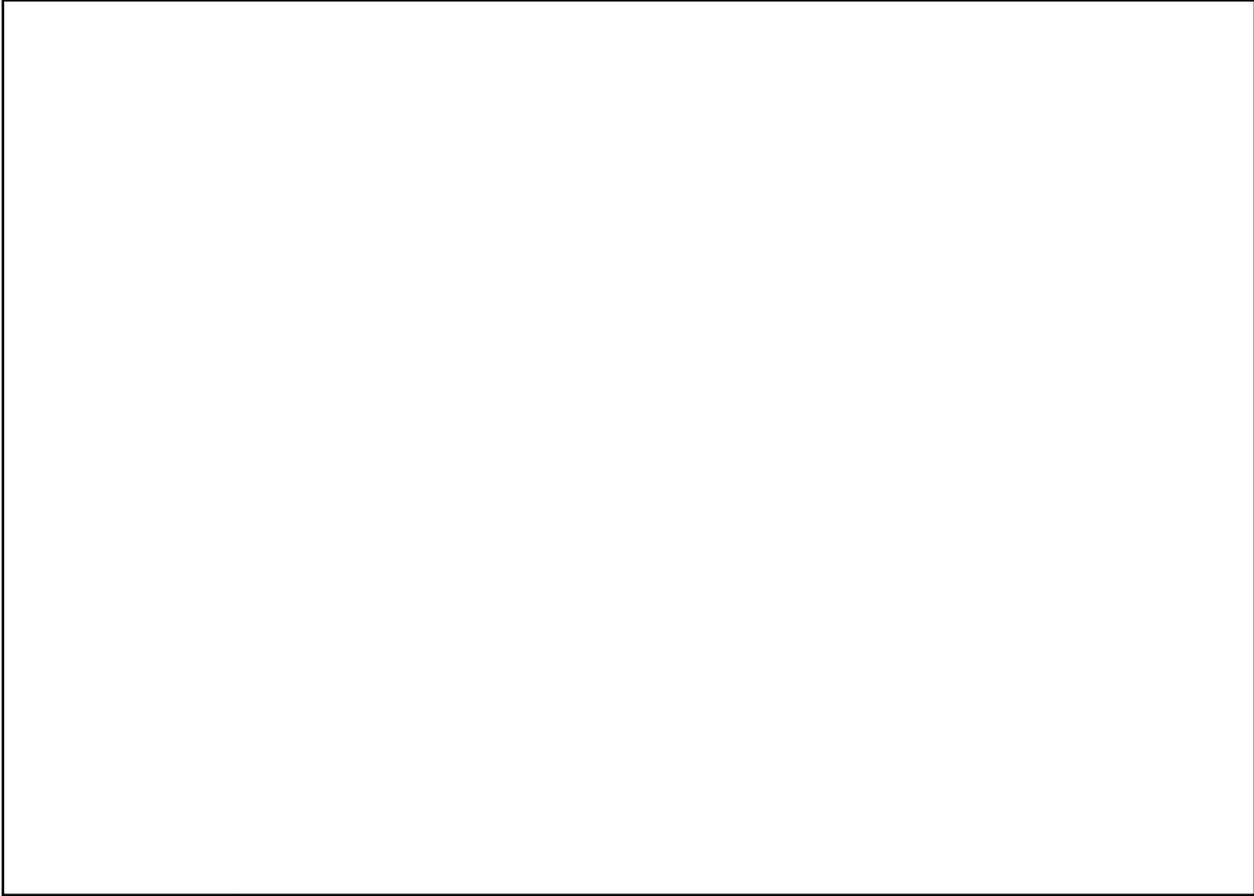
落付之上ニて 右八人之者共私宅へ参候八、無別  
条判形申付可指出之由被申越候二付 私申候八  
八人之者共前後之作廻注<sup>1</sup> 切々不謂義ニ存候  
へとも私内證之里きニ 曾以立申覚悟  
ニて無御座候 落付候こそ 御為之義ニ候間

此方参候八、判形申付可指出之由 年寄  
中へ挨拶仕候 切又私組八人之者共 前後作  
廻之義 左ニ相記申候事

仲村新右衛門江異見之義者 右之通ニ種々申尽シ  
候へ共 終ニ合点不仕候二付 老父仲村孫右衛門  
所へ飛

脚遣 爰元呼候へ共 老足故得不参之由申  
越候二付而 私世倅九右衛門ニ存寄申含 私組證人

\*1 作廻(さくまい) = 仕草。行為。



有あ福い甚そ兵衛えを相添あ 去元禄七五月廿一日二孫右衛門方へ

遣候へ共 彼者も得と合点不仕 両人共行取

申候 其後小原二郎右衛門組 小原平右衛門義 新右衛門

舅し二じて候 新右衛門不合点之通及承候哉 仲村

孫右衛門所へ参 彼者を申なため 新右衛門方へ

孫右衛門ヨリ之書状調させ 須佐罷出 尤私へも

相對仕 孫右衛門申分物語仕 并孫右衛門ヨリ私へも

新右衛門落付候様二と申遣候との書状指越

新右衛門代判をも孫右衛門ヨリ平右衛門を頼相調

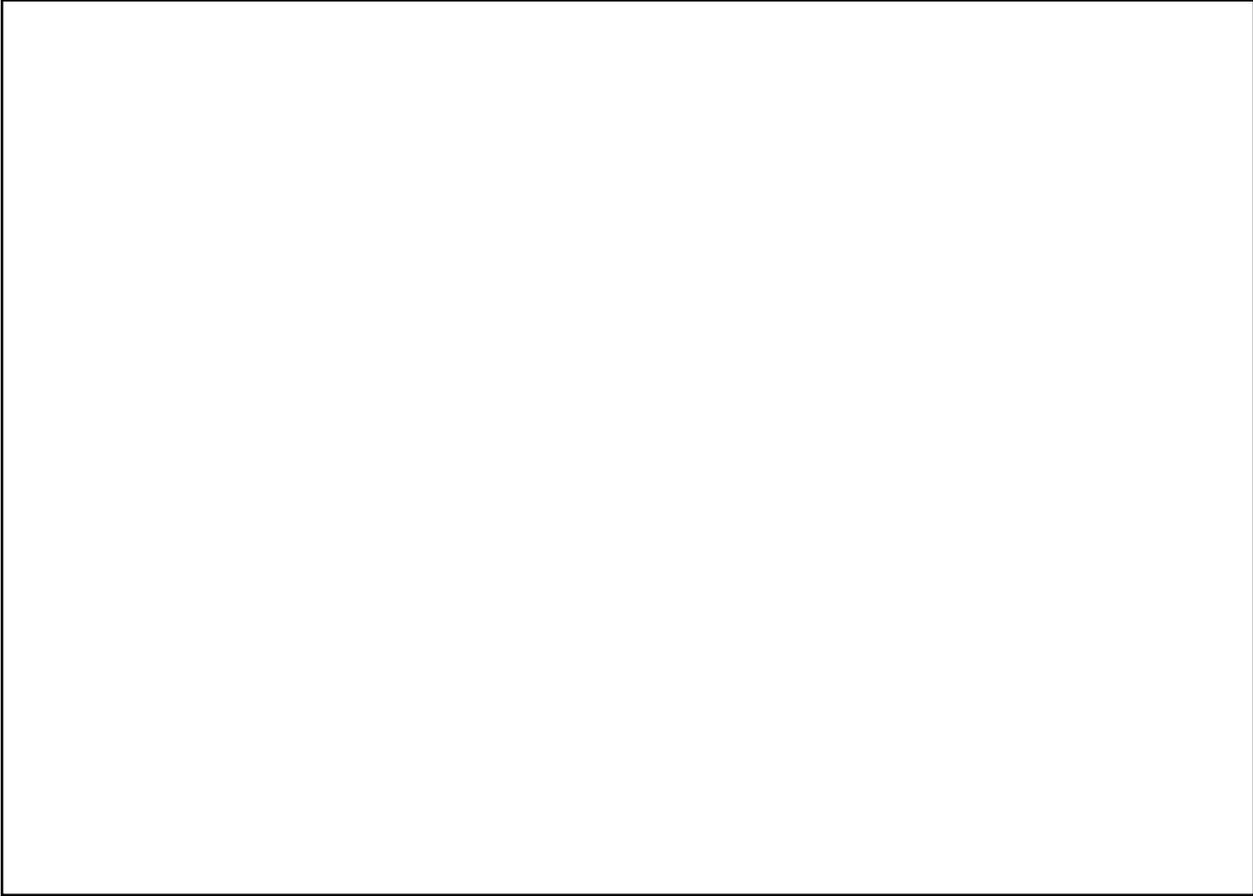
申候 其上二新右衛門へ平右衛門相對仕 度々右之

段々申聞候へ共一圓二新右衛門合点不仕候二付

乍此上八馬二成共孫右衛門罷出 新右衛門へ異見

可仕候 とかく何かと申候八不 御為之由平右衛門

ヨリ飛脚遣候処二 此段仲村新右衛門・大谷孫兵衛



及承 飛脚を以孫右衛門罷出候義 差押し申  
うけたまわりおよび 仲村

之由平右衛門ヨリ之飛脚之もの罷歸申事二候  
小原

右之通二候故 新右衛門義 私手二余り申候段  
仲村

御了簡 可被成候事  
りよつげん なられるべく

一 梅地喜兵衛 手前は又右之通二種々申  
これまた

聞候へ共 合点不仕候二付 兄弟西尾治右衛門方へ  
つかまつらす

右之趣申遣 爰元罷出候て喜兵衛二異見仕候  
つかわし こころもと 梅地

へかしと申遣候へ八 治右衛門承 去五月廿一日即  
つかわし 西尾 元禄七

刻罷出 終日爰元二罷居 喜兵衛二相對仕候而  
こころもと 梅地

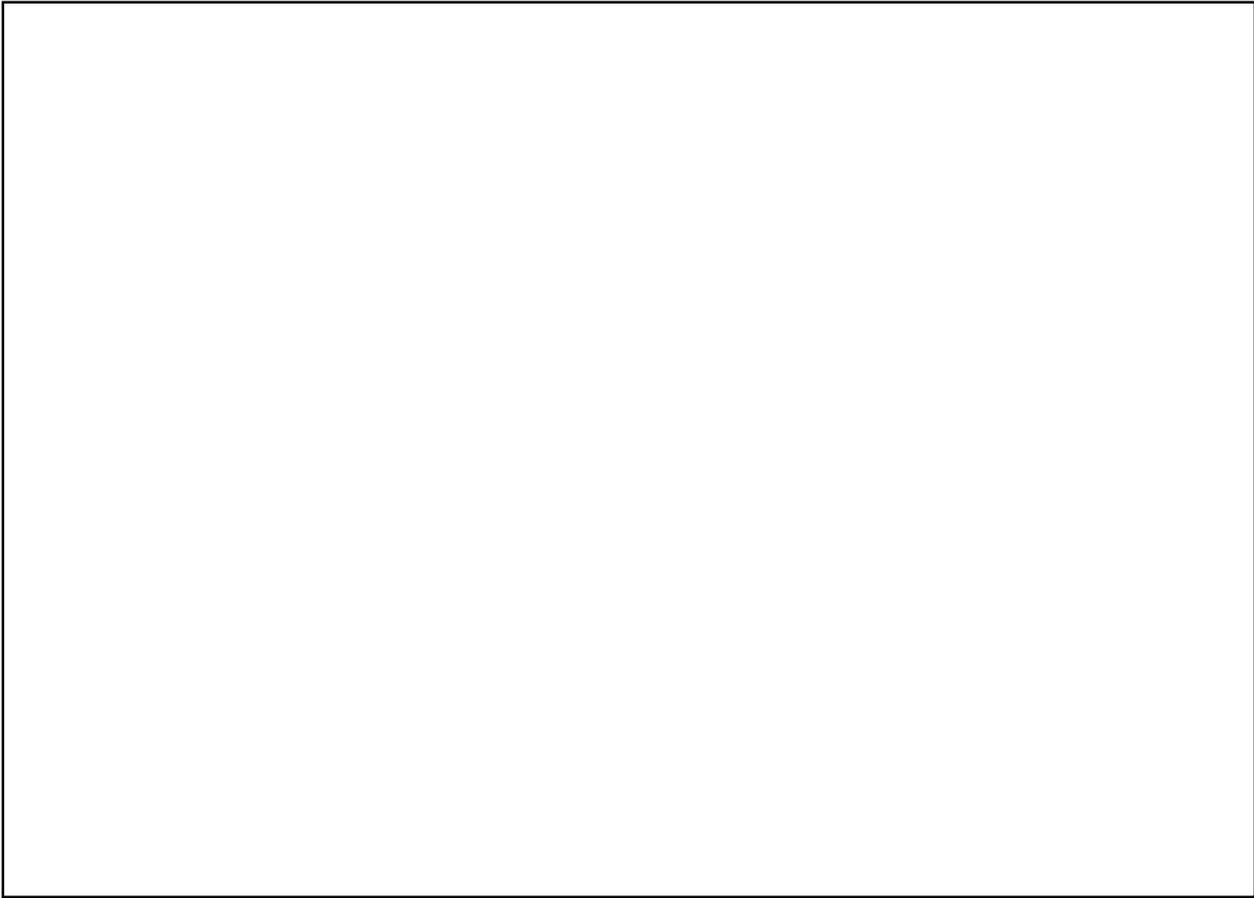
色々異見仕候処二 喜兵衛申分や王らぎ候二  
梅地

付 代判治右衛門請相 私所へ参 調申候 乍  
西尾 つけあい とこのえ この

此上八 何とそ在郷へ召連可罷歸と候て 色々  
ついでながら まかりかえるべし

申聞之由二候へ共 又喜兵衛心替り在郷へも戻り  
梅地

不申候二付 治右衛門義八夜中引取 又同廿二日二  
もつたす 西尾 五月



罷出達而異見仕候へ共承引不仕候二付而

治右衛門義在郷御役人之義二候へハうか／＼と

爰元滞留も不相成 又々在郷へ引取御座候

已後老母難義二相煩候条 喜兵衛急度

罷歸候様二と申 爰元を何とぞ喜兵衛を

召連歸 落付申才覚種々と仕候へ共

後々八是又治右衛門へも相對不仕候故 不及力

治右衛門義私宅へ参 右之分二心遣仕候へ共

代判仕候甲斐無御座 無面目由にて

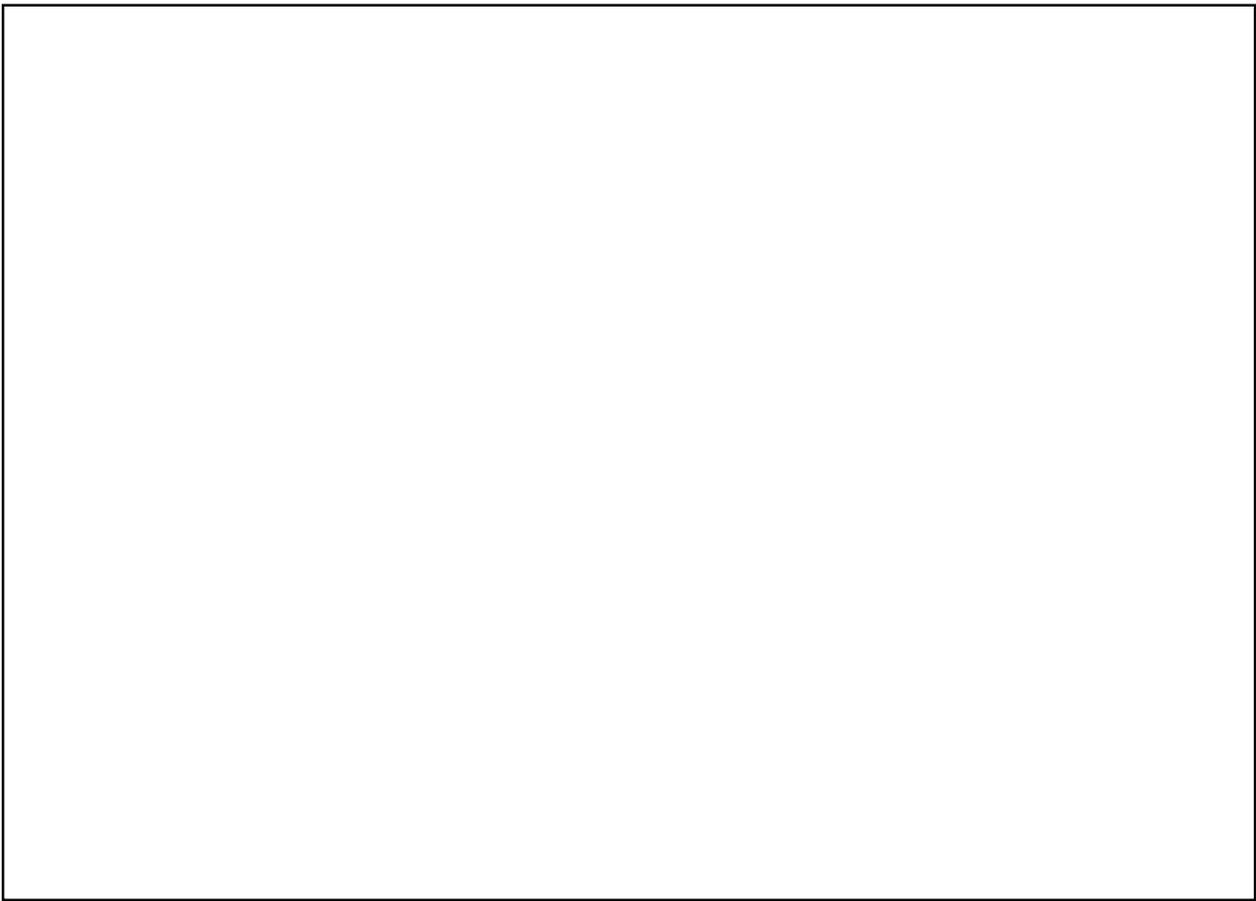
罷歸候事

内田清右衛門義 是又兄弟三浦十郎兵衛呼寄

重畳異見仕らせ候へ共 是以後々八相對

も不仕候事

奥山忠右衛門へ八平川正兵衛内縁御座候付異見



頼申させ候へ共合点不仕候事

一 安富甚右衛門義者安富与右衛門 不遁間のがれざる柄柄から

二 二て候故 両度与右衛門安富へ私相對仕異見頼  
彼者かのものも度々申聞候へ共 合点不仕候事

一 大谷喜左衛門へ八弟長大夫・三浦十郎兵衛縁者  
故兩人を以達たつて而異見仕候へ共承引不仕候事

一 増野左二右衛門義八親類内縁も無これなき之者故

可仕様無御座 一 紙之手紙を以異見仕候へ共  
合点不仕候事

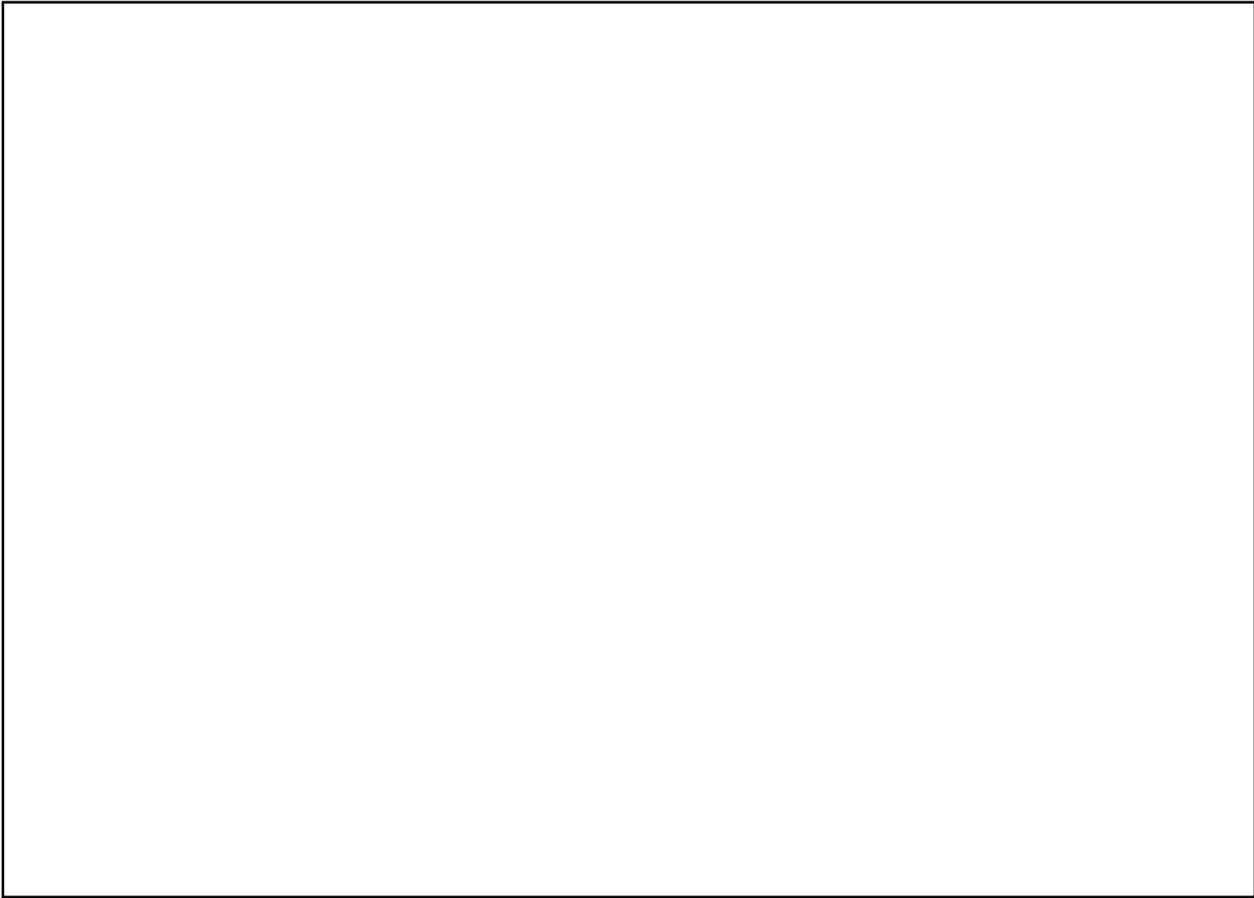
一 私申分と候て梅地喜兵衛申候八 去四月廿元禄七

七日爰元罷出私江申候八 瀬尻之者共

無子細落付御奉公可申上との判形物

仕差出筈二候 此段同意仕 判形いたし

可申哉之通私へ問候処二 私申候八 左様二申談



指出候義無用之由喜兵衛梅地二申聞 其後瀨尻

ヨリ落付可申との書付三組一同二有福甚兵衛

持参仕候へハ私請取一覽仕候ケ様ふたつころ二一心

成申様 近比二存候由喜兵衛申分之通及承候

切々彼者案外成申分と存候 其節喜兵衛

申候段 私申分之義 初ケ条二書記候通

少も相違無御座候 其證據ハ私喜兵衛二

對し二心 有之候ハ、有福甚兵衛三組落

付候書付持参仕候て罷歸候刻 市味組

内之者共判形不相見へ候 定而喜兵衛

不合点二て罷居候義も可有之候条 其方

ヨリ飛脚遣 爰元罷出候様二可申聞候 左

候ハ、喜兵衛へ得と合点参候様二可申聞候

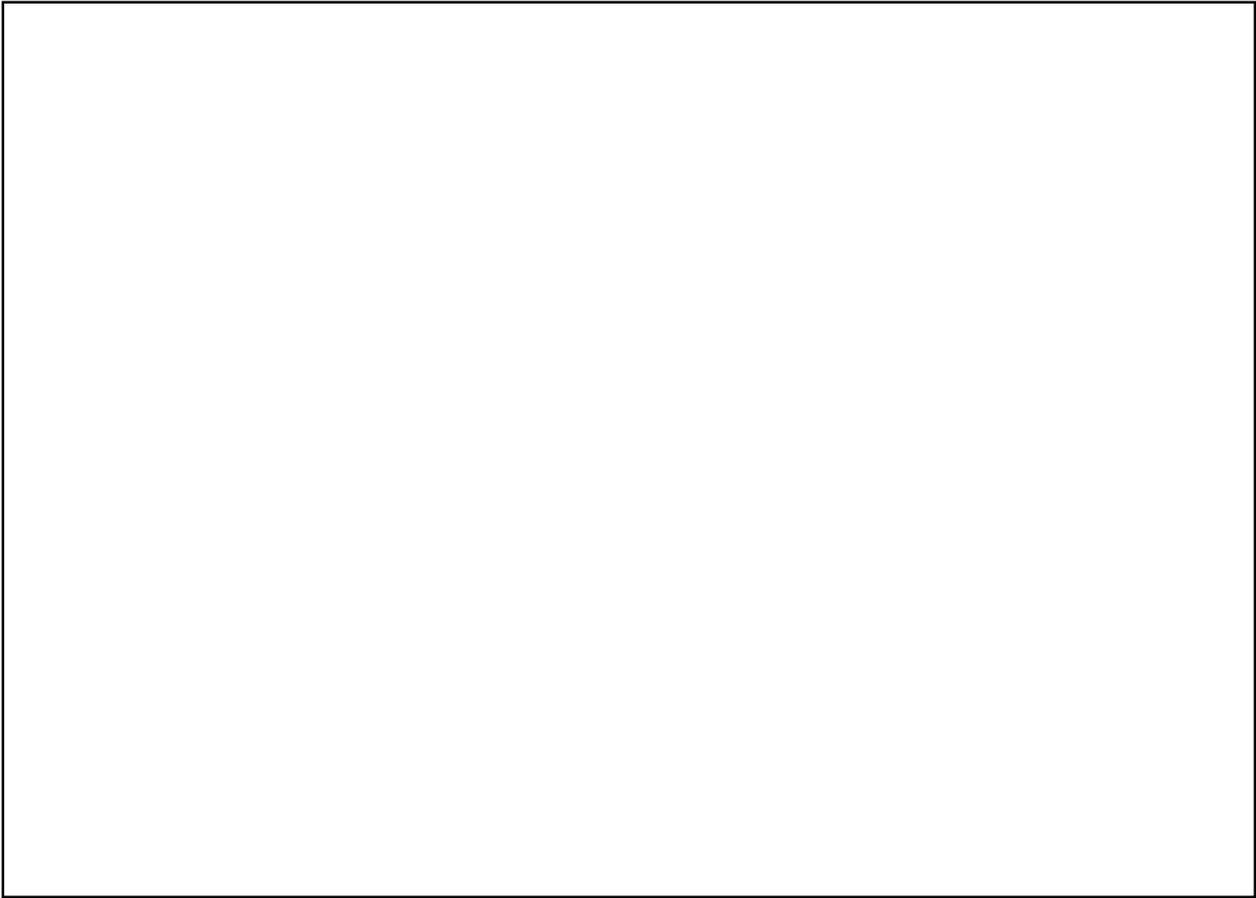
由甚兵衛二可申哉 切又三組落付候書立

一覽之節 私申候八 各口上と違 若し此書  
付二御理り事なと書加へ候時八 縦封  
を切り候ても指返候由小原平右衛門・有田甚右衛  
門・

品川太郎兵衛一座にて重畳有梅地福甚兵衛二  
申つゞめ 書付一覽仕候 喜兵衛申候様二 最前  
ヨリ此書付之首尾 私存候八、廉々ケ様二  
念を入可申哉 爰を以も喜兵衛申候様二私

不申候段八御了簡被成可被下候 喜兵衛こそ梅地  
最前私所へ参候時分 其已後 去四月廿  
九日二仲村新右衛門・増野左二右衛門三人一同二  
私宅へ

参候節も 何篇兎角申候義無御座候  
間 左様可相心得之由重畳私へ申聞  
翌晦日二八はや心替り仕 前書之通四組四月  
残り之者共と一同仕 四組六人之列は外つれ



之者 并 去年<sup>元禄六</sup>御理<sup>ことわり</sup>申上 被指<sup>さしかえられ</sup>替候萩・

須佐之役人之手二付 御奉公不相成候由

申出候 是を以考へ候へ八 彼者共こそ二心成<sup>かのものども ふたつこころ</sup>

作廻 私心入をも色々とさぐり申たると

存候 第一組内落付罷出候処二 私無用と可

存様無御座候 左様不存候付而こそ 甚兵衛<sup>有福</sup>

落付候者共之書付 持参仕候へ共 無子<sup>しさい</sup>

細請取申候 喜兵衛<sup>梅地</sup>申分之様二私存候者<sup>そつうりゆうとまは</sup>

甚兵衛<sup>有福</sup>書付持参仕候とても請取可申哉<sup>もつすへまや</sup>

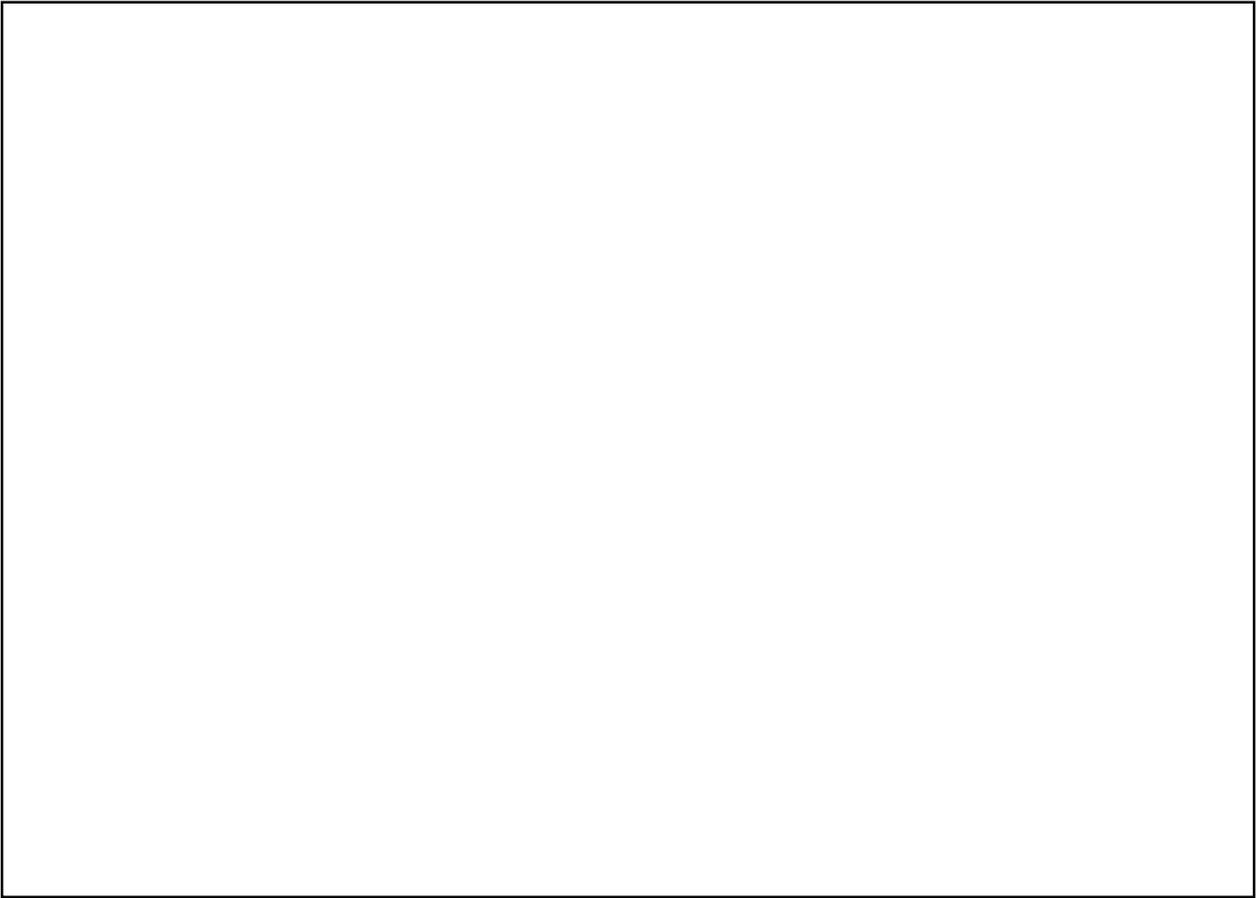
旁御引合喜兵衛<sup>梅地</sup>申分御了簡可被成候<sup>なられるべく</sup>

其上色々返替<sup>かえしか</sup>へ 私無調法之様二

申なし候段 徒なる申分と存候 其外

私組内之義 作廻悪敷取續仕 苦敷

候由 種々事をたくミ申者有之由<sup>これある</sup>

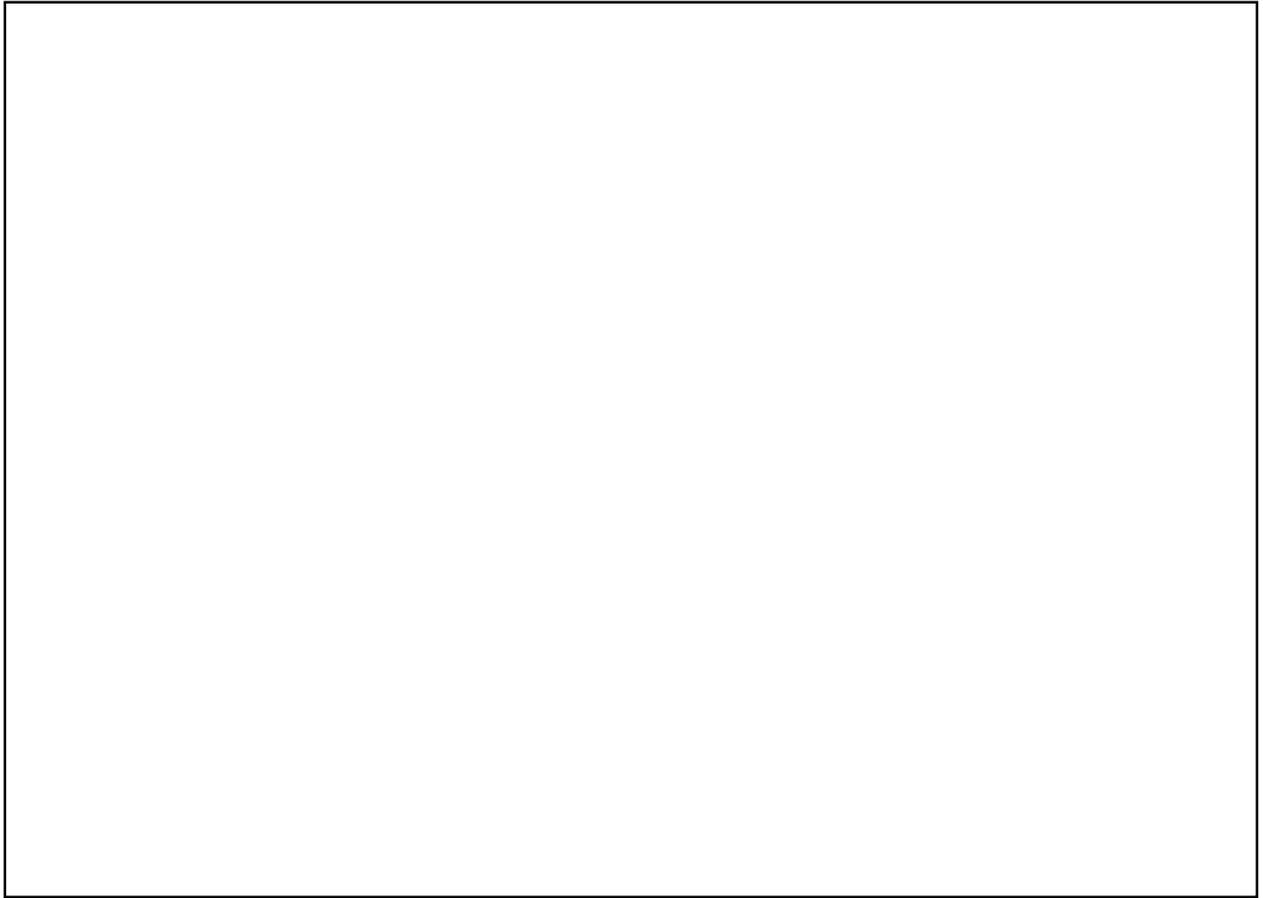


うけたまわりあよび  
及承候 組内支配之義ハ 何も控有之事  
いすれ これある  
二候間 若し左様之義申候ハバ不能  
もつし  
申候へ共 私方へ御尋可被成候 左候ハ、組中之  
あたわす  
参かかり證人共ヨリも委細可申出候 以上  
もつし  
いすれ

元禄七年  
戌ノ

閏五月十日

大谷権左衛門



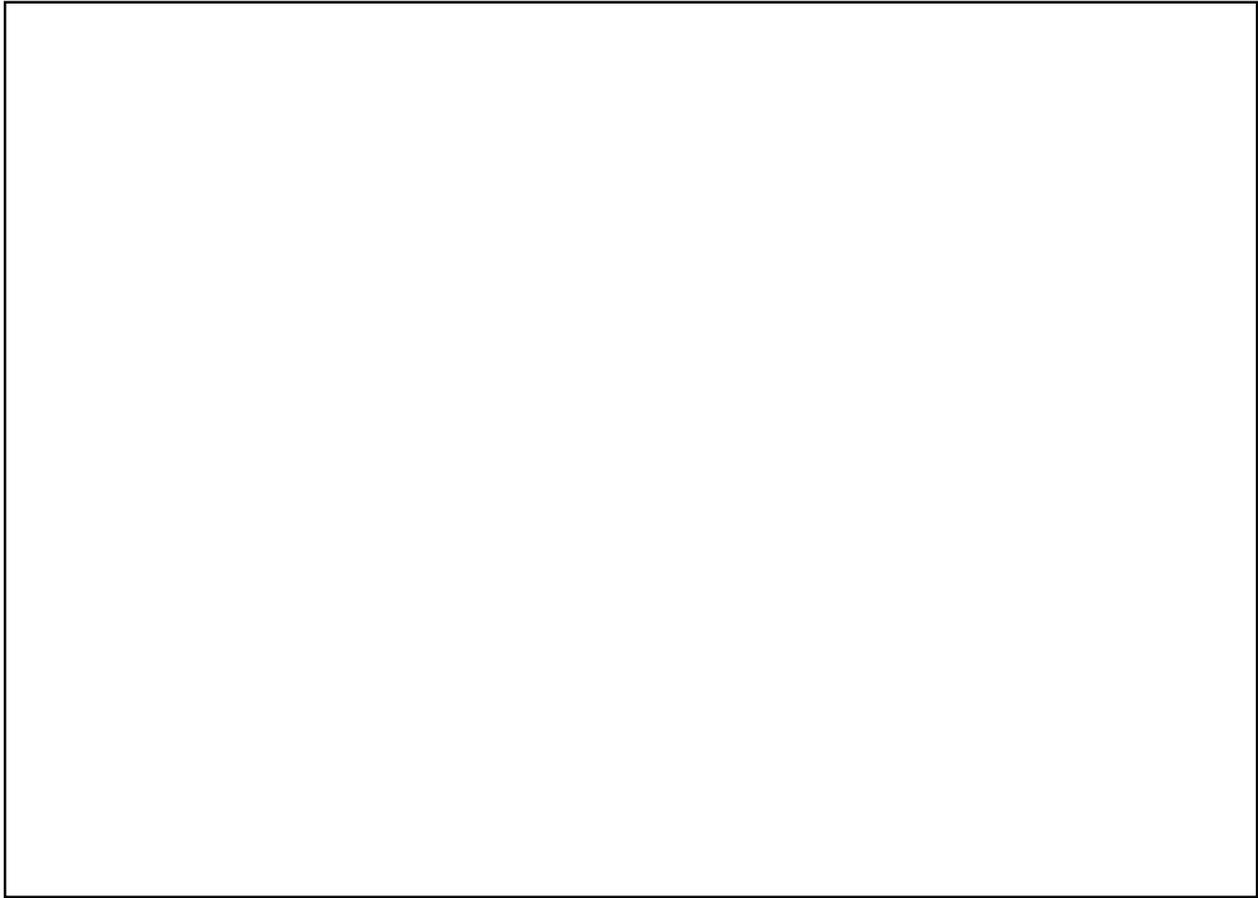
東京大学史料編纂所蔵 「益田家文書」 11・2

大谷権左衛門組九人<sub>(注1)</sub>口上

覚

覚

\*1 九人 = 大谷権左衛門が公儀（萩藩）に差出そうとした者は最終的にはP123の連署した9名から熊谷吉右衛門を除いた8人であった。



大谷権左衛門組公儀指出候九人之者

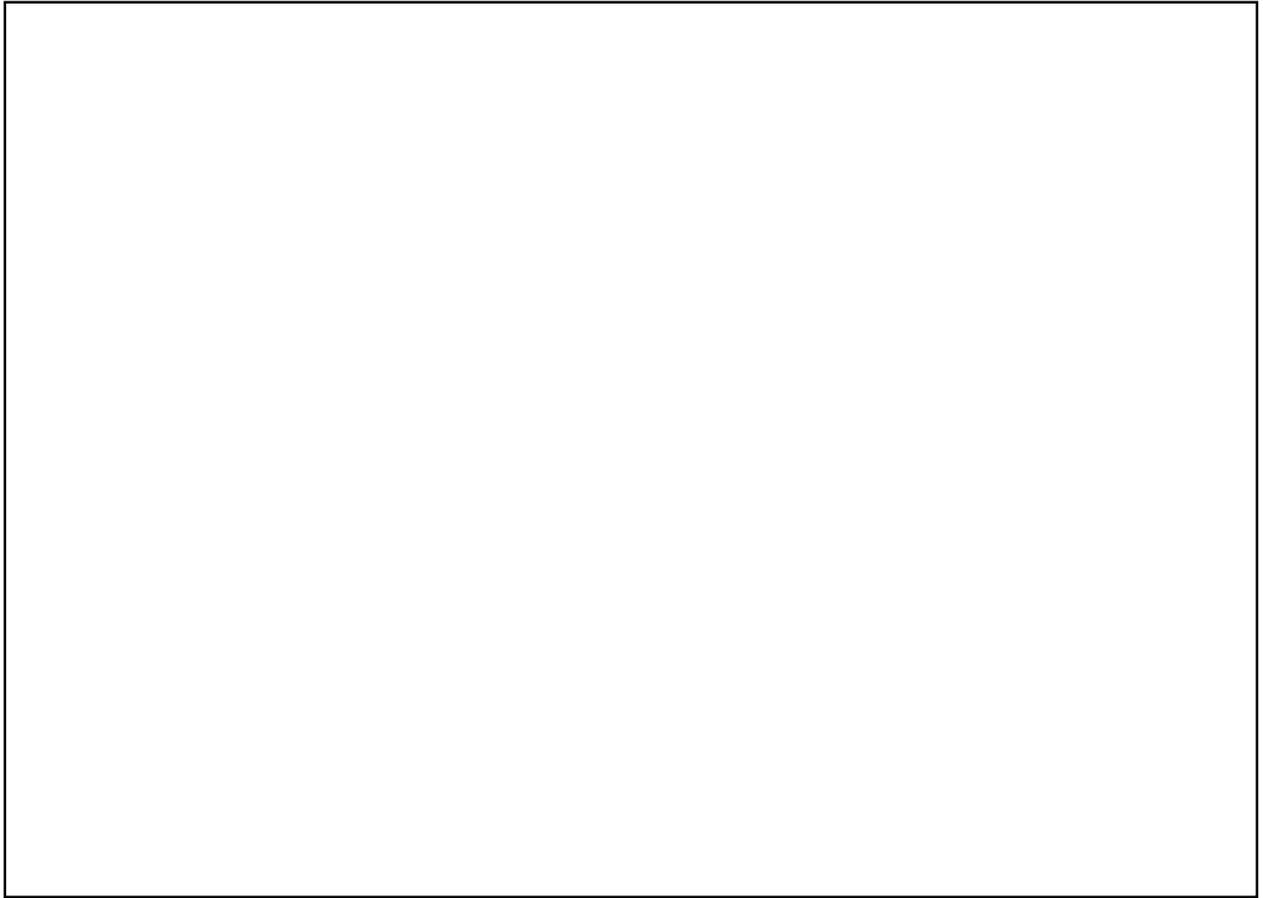
共御理申上候口上覚

一 中村新右衛門所江卯月<sup>四月</sup>廿六日<sup>虫讀</sup>小原二郎右衛門

組小原平右衛門所ヨリ同<sup>虫讀</sup>役として

申越候口上之次第 二郎<sup>小原</sup>右衛門被申越候八<sup>もつしこされ</sup>

於萩者 仁<sup>きみめしだされ</sup>被召出 御意被遊候八<sup>あそはされ</sup>



今以家中何角と申義有之通いまちつて なにかと これあり

被聞召候付 御一門中様被入情注1御きこしめされ

相談被遊候処二益田源左衛門様注2あそはされ

被成御意候八 最前 [ ] 以被仰なつれ

渡候 其旨頭共ヨリ組中江不申渡物わたされ

二て可有之候 於此段八頭共無念之これあるべく

義二候条 御仕置被仰付 可然候持おあせつけられ しかるべく

懸り候内四拾石宛可被召上之由つづめしあげらるべく

被成御意 其節之大番与頭被召なつれ

出候処二 御ヶ条之趣四組江申聞され

せ 御読仕候 其已後八御理事一圓ことわり

不申出候通被申上候へ共 [ ] 付八頭まづしです

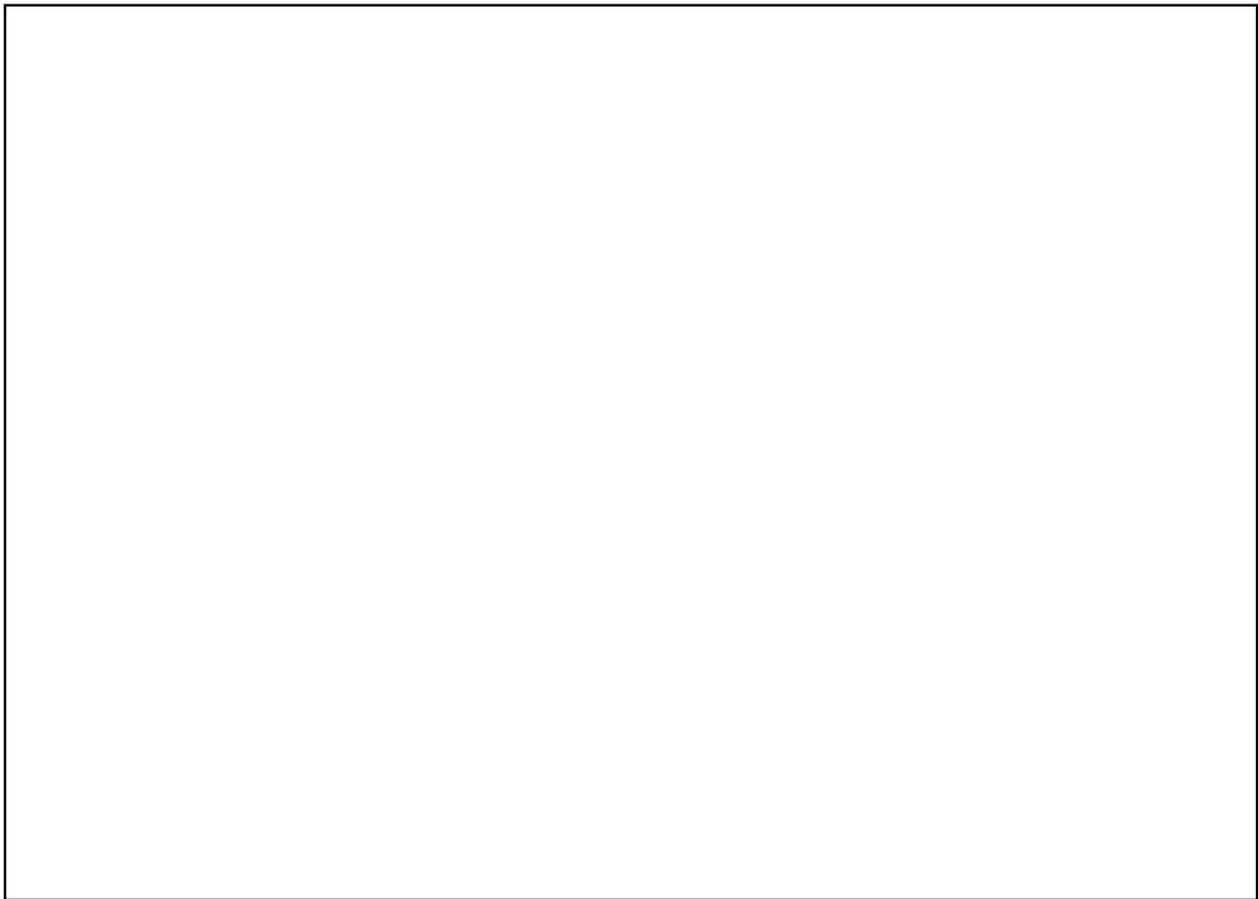
共無念無之 四組之者共 内證二てこれなく

含申候て可有之候間 随分承立申これあるべく

上候者 御仕置可被成候通被仰渡候なつれらるべく

\*1 情 = つらつら？

\*2 源左衛門 孫左衛門？



左候処さごころ二又大番之内ヨリ老人罷出被もうし

申上候八 今以御家頼治リ不申候

通被聞召 御立腹被遊候由 御尤

千万二奉存候 只今迄まの相

含罷居候者 須佐二中御座候 其内

私棟梁二て御座候 左様御意二入不

申義 全此已後申上間敷通被

申候 すすに残る四人居申候者之内

式人八同意二て候 式人八未相含被

居候 彼仁 被申出候へバ 御仕置被仰

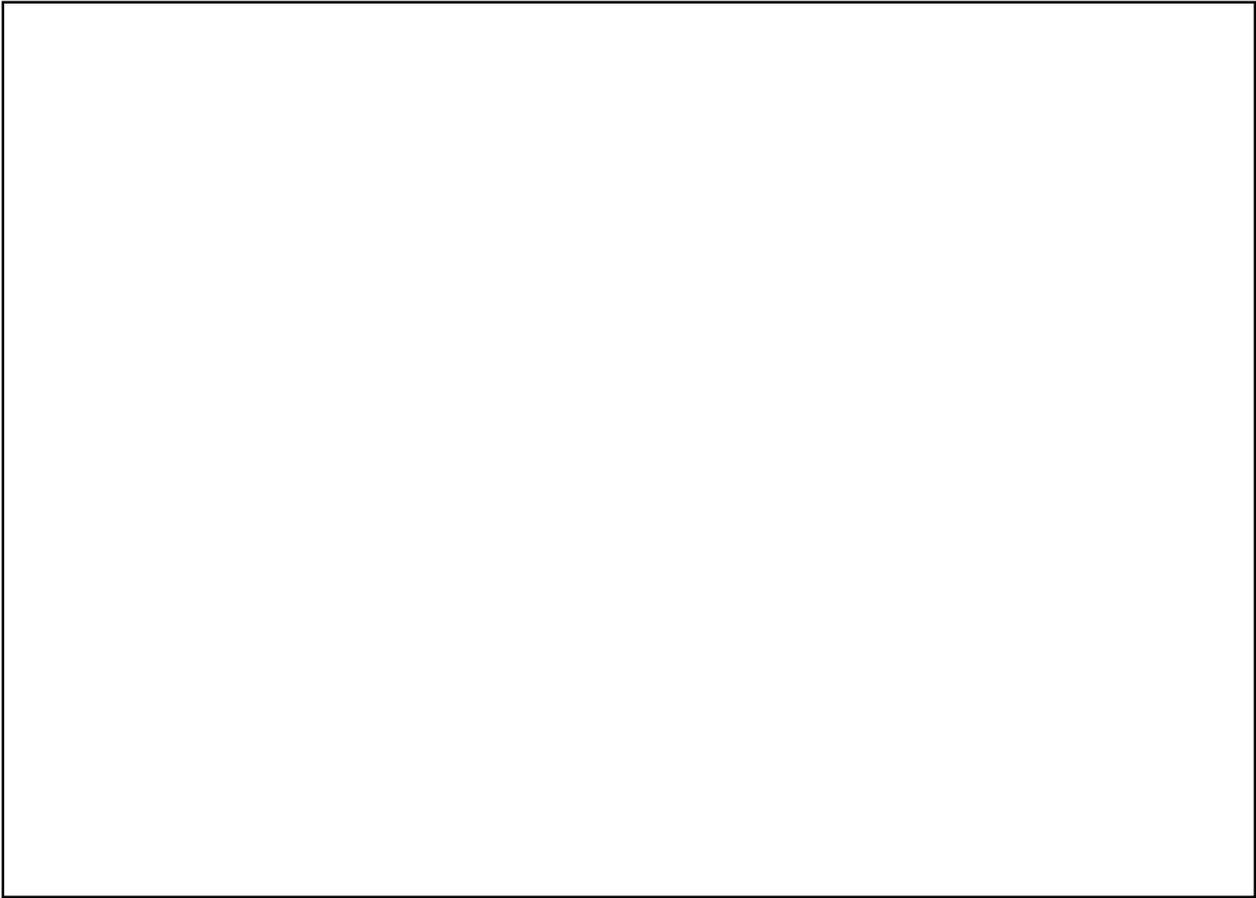
付善二候 堀一郎右衛門 大谷権左衛門江八小原

二郎左衛門 番替之節 御中被仰渡

御請仕候 境三郎左衛門江八御意一圓二

無之候 就夫 益田又左衛門殿 同与右衛門殿

三郎左衛門江被申候八 其方相含申候義



有之候八バ 此已後八指置可然候

無左候時八儀絶仕候通被申渡候故

はや儀絶之通被申聞せ候 右之

首尾二候間 組中之義も   後御

理り申間敷通連判仕 差出

候ハ、早々同意いたし判形又相

調通申候へとも 何も此段合点参

兼候二付而 梅地喜兵衛呼寄 右之

段折かへし申キかせ 兩人慥二

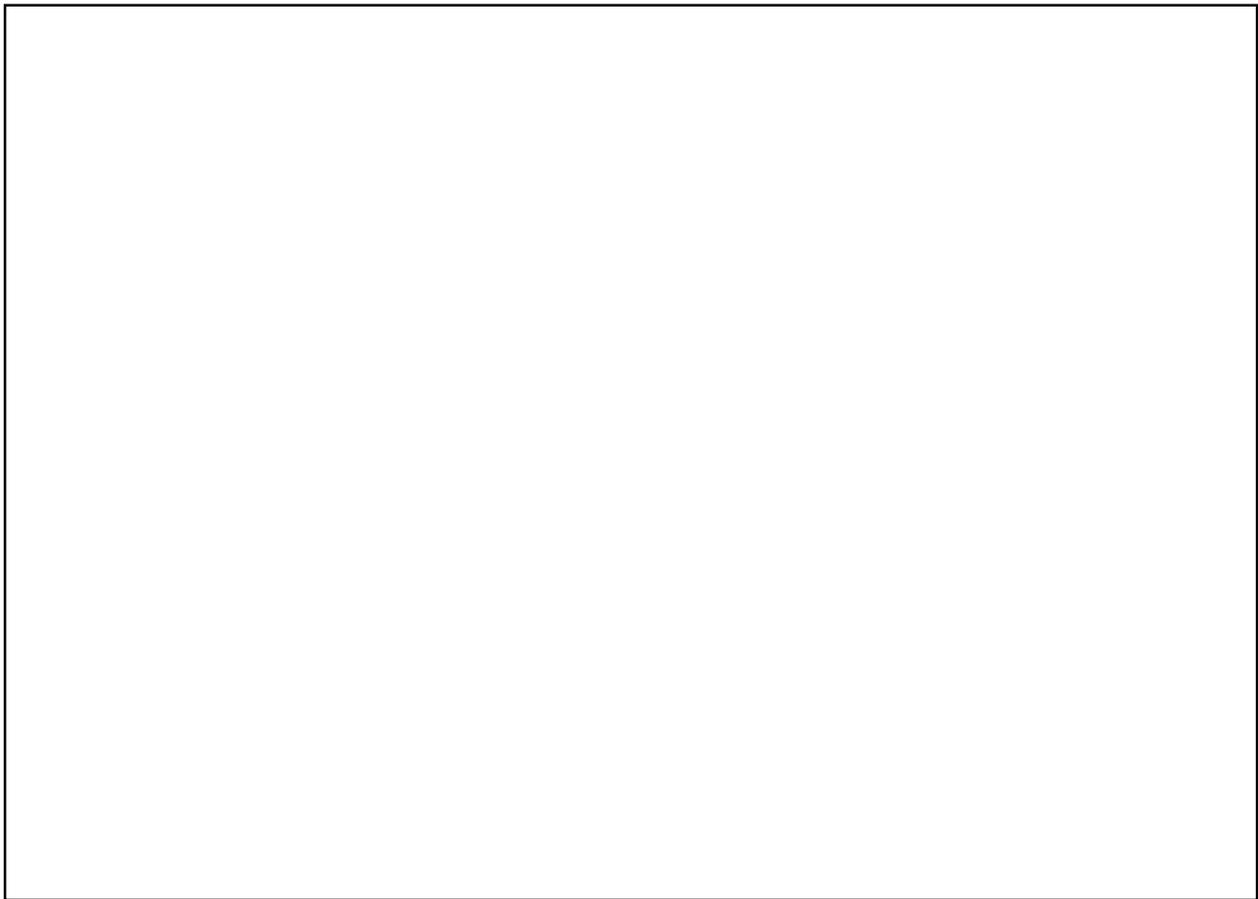
承届候事

一 右之趣不審ニ存 半間之者申談候

翌廿七日四月ニ相組之證人 梅地喜兵衛義

須佐指出 大谷権左衛門江右之趣

具ニ申達候 右之次第 御意と



御座候時八 其辻を以御組中江被仰おおせ

聞候首尾も可有御座と存承きかされ しめあへん

かけ罷出候通小原源太夫口上之

趣委細申聞せ候へ八 権左衛門被申聞大谷 もつしきかされ

候八 切々驚入たる義二候 其段一圓さてさて

不承候 いか様六人之者取立之為うけたまわらず

にて可有之候哉 相かまへても人数二これあへん や

成る間敷候 随分其方心之まじく

及程八 半間之者をも指押さしおさえ

尤 判形などの義八可為無用むようたるへん

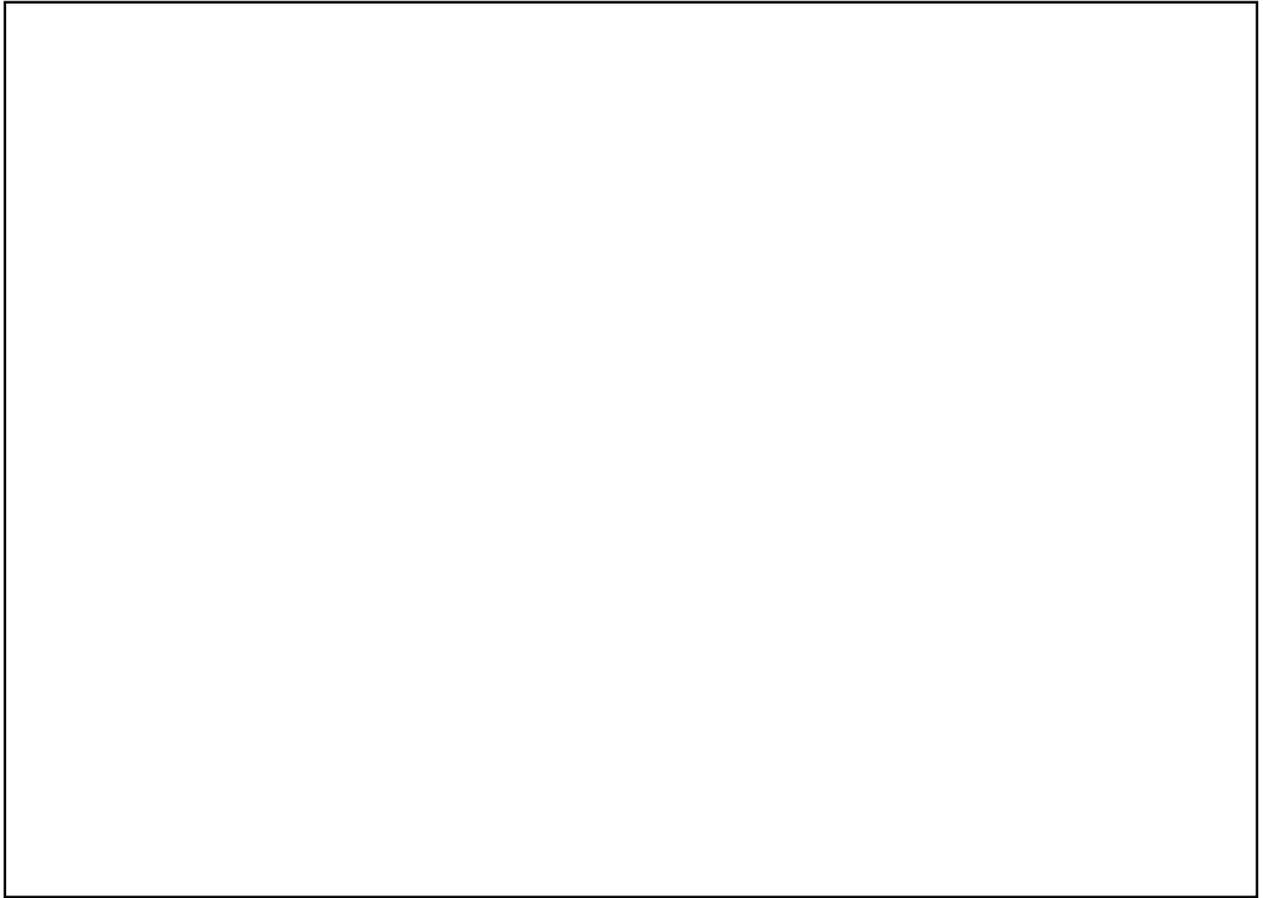
之通可申渡候 ケ様虚説もつしたさへん

を以取成候八 結句六人之者之為とりなし

にと後々如何敷候 各別之存立いかがわしく おのの

を以申出候とも 且以請取申聞かつもって

敷候 其子細八五日已前境三郎左衛門



出番二付堀一郎右衛門・拙者三人遂大谷権左衛門

相談 此節又組之内在郷騒

動仕候由風聞二候 何とも苦々にがにが

敷事二候 いか様之義申出とても

新義之取次一圓不相成候間あいならず

手堅相てがたく注<sup>1</sup>与中江も申聞せ候様二と組

権左衛門被申二付 案外之義と乍存大谷 ぞんじながら

罷歸 直様瀬尻江打廻り 右之すくさま

首尾相注<sup>1</sup>与之證人有福甚兵衛・

松井庄左衛門手子石川一郎兵衛二相對

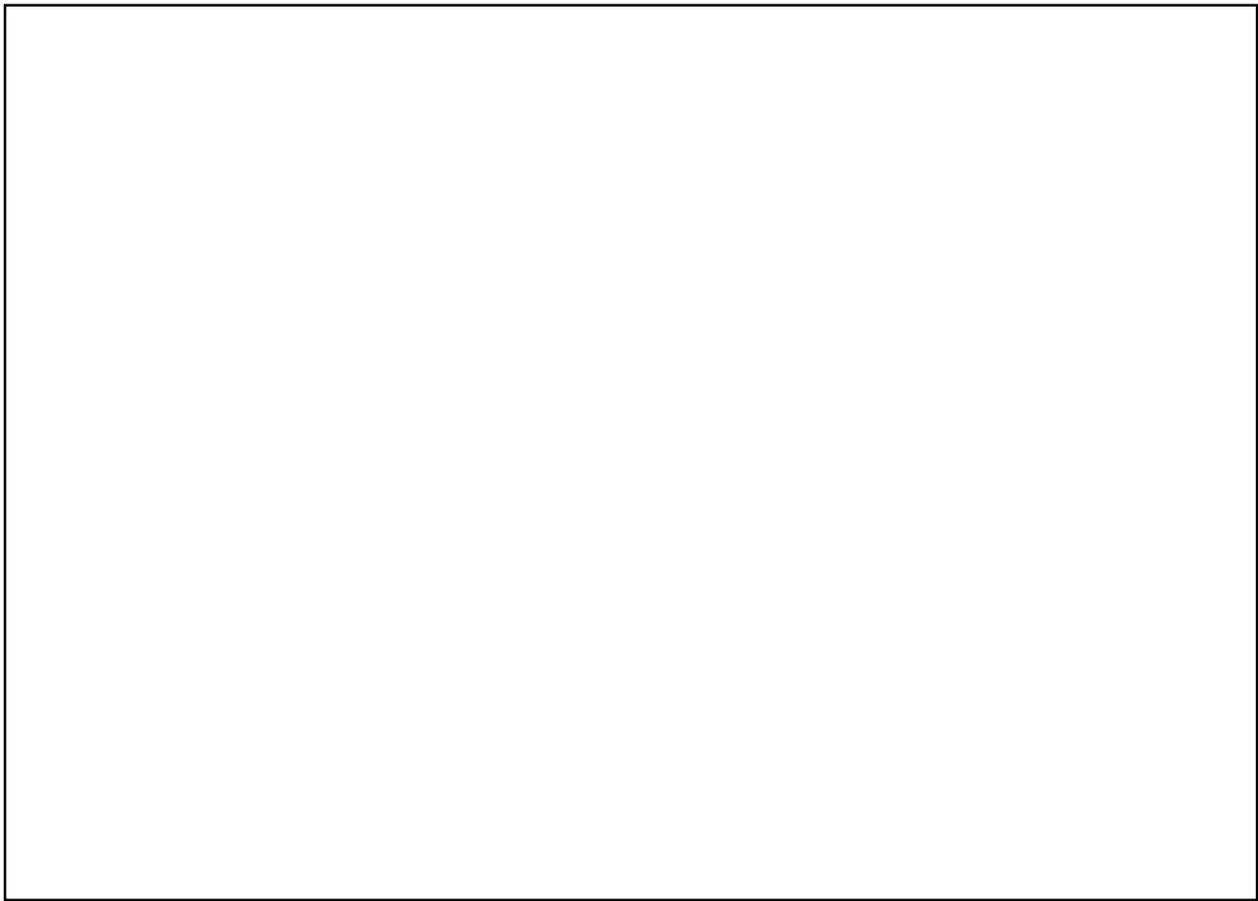
仕右之首尾相達候処二 彼者つかまつり かのもの

共にて八各頭請取不被申候へ八とせむ おの頭の

脇ヨリ取次可被申と被仰候 旁ちうさるへし おおせられ かたがた

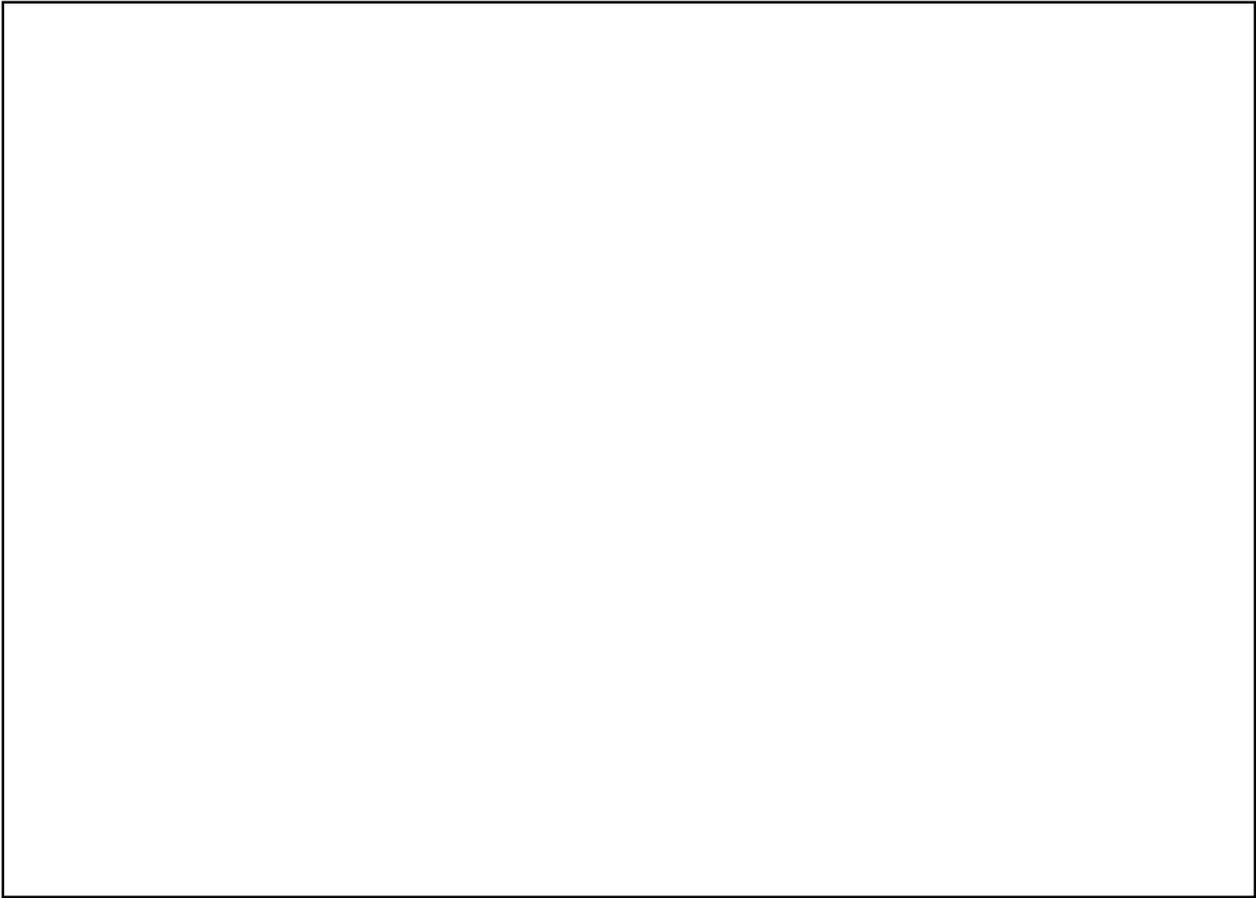
有之由にて何共合点不参義とこれある まいらぬ

\*1 相 私？



乍存市味江引取 半間之者江も  
申聞せ候 然処二翌廿八日有福  
甚兵衛 彼六人之者と一味之書物  
持参仕候所二前日梅地喜兵衛二  
被申聞せ候首尾と 案外相達  
仕 則時請取被申候段 近比頭之  
作舞に驚入候間次第二御座候事

一 卯月廿八日二六人方之者指出候連  
判之書物 権左衛門請取被申候 已後  
同晦日二残者共須佐罷出候時 中村  
新左衛門・梅地喜兵衛・増野左次右衛門  
奥山忠左衛門一同二呼寄ら連被  
申聞せ候八 瀬尻之者共 向後御



断之義申出間敷通 書付指出候

其分二同意仕候様二との義二て御座候

各申候八 扱八六人方之連判物

御請取被成候哉 驚入たる義二御座候

一昨日相与之證人差出 御内意八

承合せ候処二 段々被仰下候首尾

と八中々相違仕候八ヶ様之首尾

二て御座候哉と申候へともとかく之

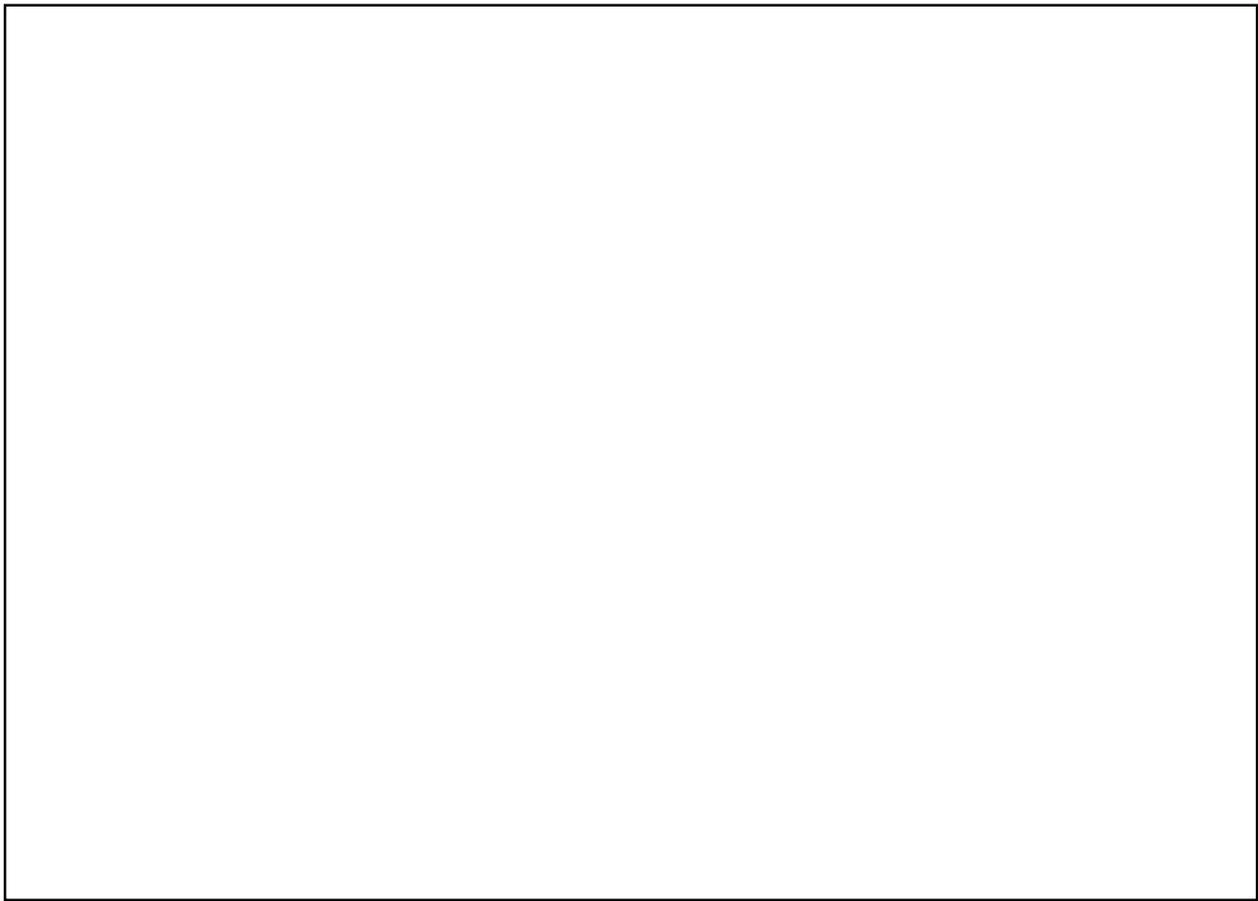
被申分 無御座候事

一 六人之者と立相 御奉公仕苦敷

題目之義八 境三郎左衛門殿組 堀一郎右衛門殿

組一同之申談御座候条 両組

ヨリ之申出之辻を以 格別二書無



不申候もつさす 然所しかるところ二私共九人之者 權左衛門殿大谷

公儀江被指出候さしだされ 別段二如何様之

題目御座候哉やと様々吟味仕

相候へとも 於各一圓覺無御座候

今度之義も在郷二て八了簡

仕苦敷存候二付つかまつりくるしく 為御向合として

喜兵衛梅地指出し御下知之分二各

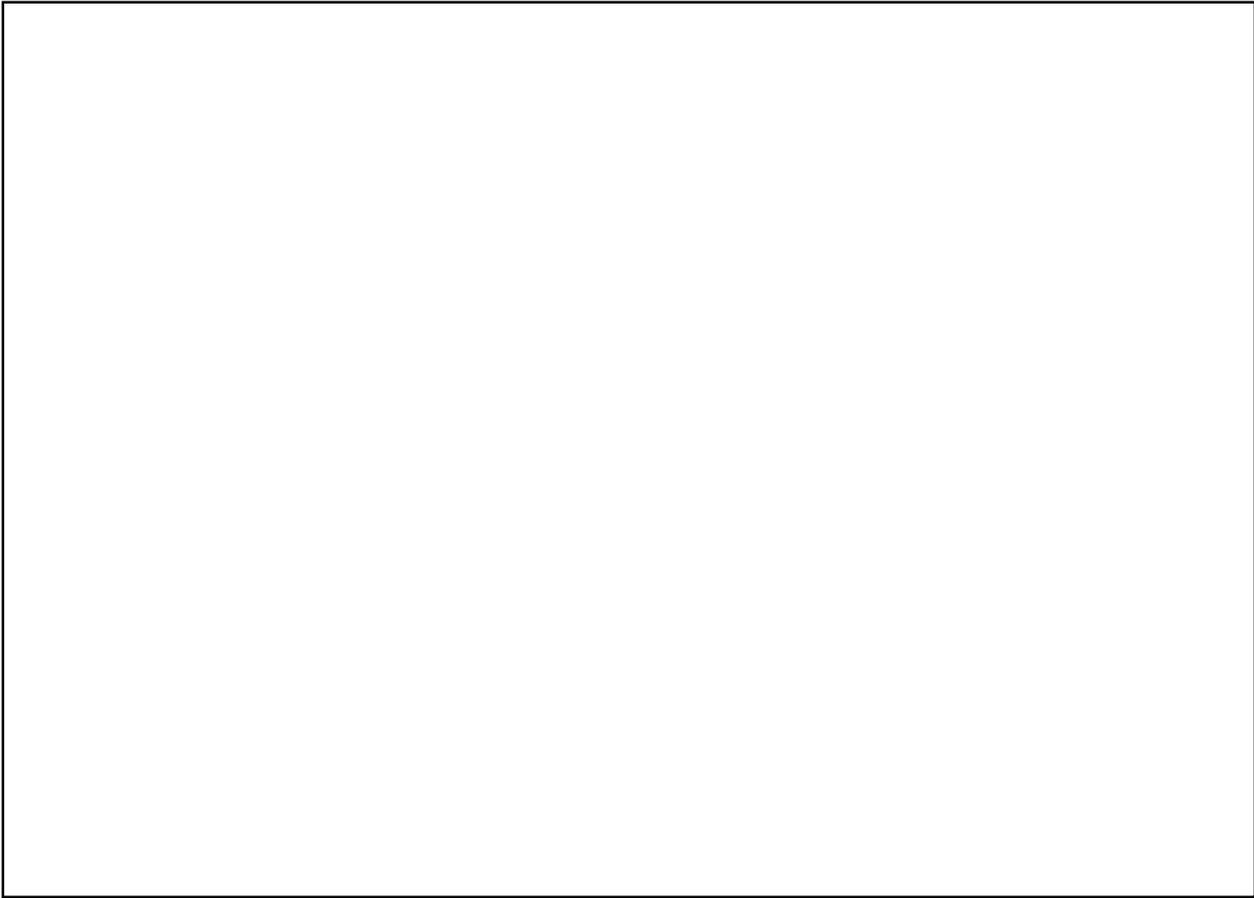
覚悟仕候所紛無御座候まぎれしななく 權左衛門殿大谷

自分二祐こそ 右之首尾被致相いたされ

違私共江も右之趣違いへん変仕

六人之者と可致一味通被申掛いちみいたすべくもつしかけられ

致迷惑候めいわくいたし 年来之よしみを指



すて 各身躰おのおの二かけ願候意趣をも

ただいまにおいて

於ただいまにおいて只今八取上ケ不被申 剩一組をも

はつし 各計被指出候段 不頼母敷たのもしからぬ

心入 更々絶言語候事ふんじに絶し

一 権左衛門殿作舞二付而 市味在宅之

者八取分 及迷惑候 此段堪忍仕とりわけめいわくにおよび

かたく義二御座候へ共 頭江對し只今

迄致延引候 様之参懸り二て八えんいんいたし

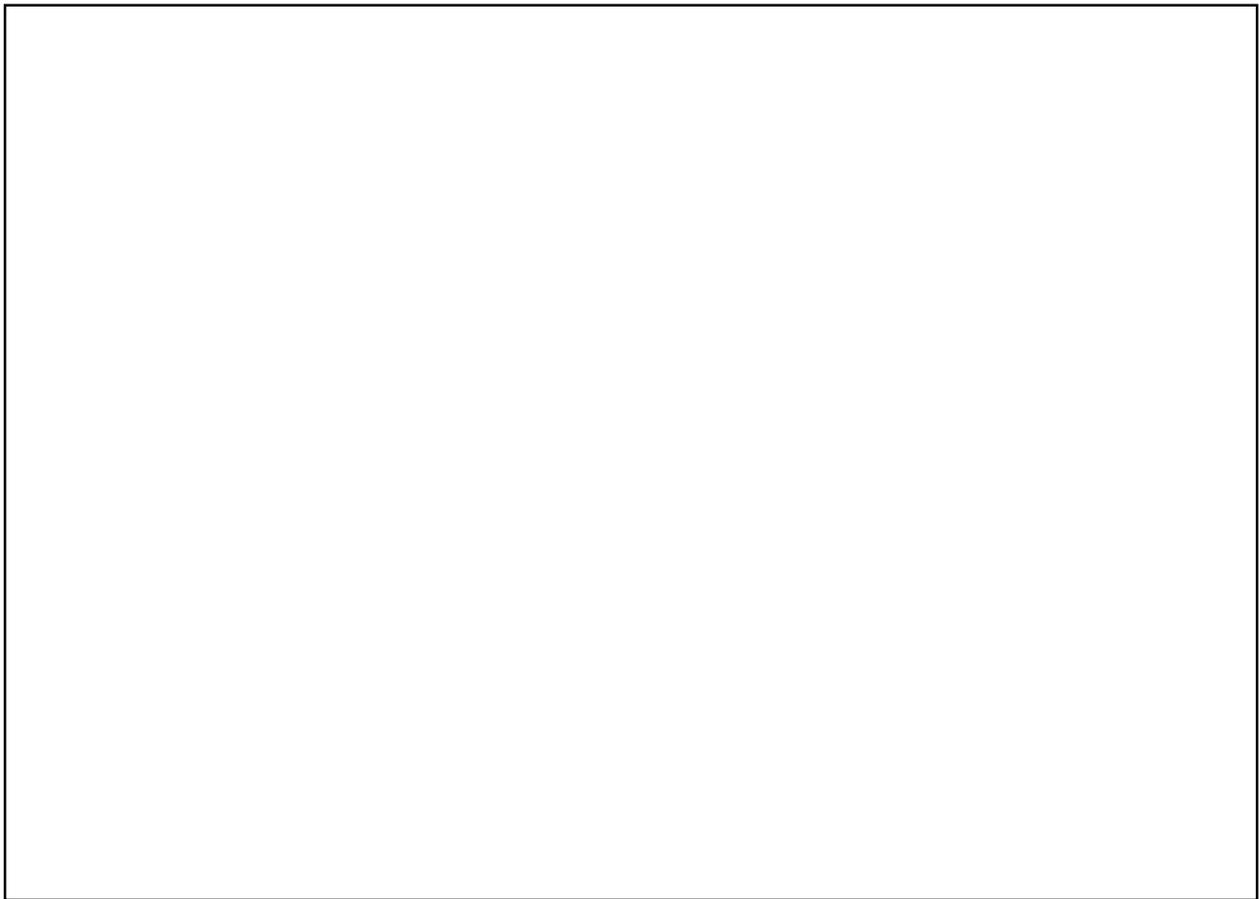
此已後如何様之者 彼地二被指置市味 さしおかれ

候とも 御境目之御用所勤

相成間敷所 眼前之義と存候へ八あいなりまじく

乍恐 御為之所 如何敷奉存おそれながら おんため いかかわしく

只今迄之次第左二申上候事



一 各罷居候与八 先年増野十左衛門殿江

御預ケ 其節ヨリ市味・せ尻

両所二相与之者居住仕候 御打

渡帳面を以 寛永八年ヨリ同十

年迄三ヶ年之見取辻を以市味・

せ尻一 注↑二被申付 竈取を以 銘々

うけ取申之由二候 然とも市味・

下田万内之悪所 瀬尻八上

田万二ても能所柄 其上 田方麦

まき所二て候故 両所之つり相

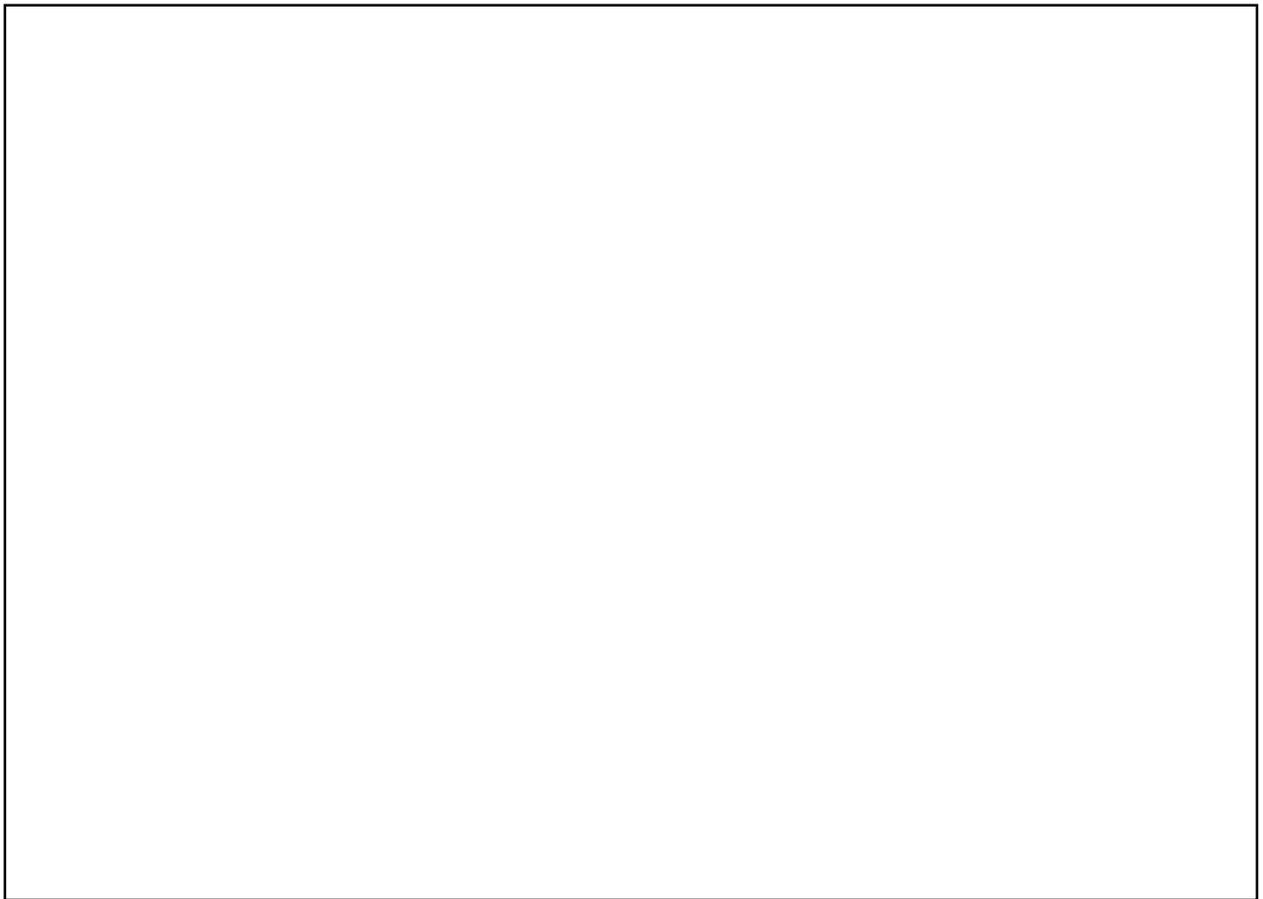
以之外高下御座候 其後波田

太郎右衛門殿支配之内ニも見取辻を

以 高三拾五石 五ツ成石にして

市味地石之内 瀬尻八つけ

\*1 = 手偏に「平」。平(なら)す。平均の意味で検地に於いては多年を経て不公平となった課税を均整にする調査を云い、貞享?検地はその例である。



被<sup>ちつされ</sup>申候 又其後栗山三郎左衛門殿支配之  
時も 此つり相被<sup>いたされ</sup>致吟味 兎角  
市味八悪所 其迄水損・虫損  
の所にて 毎年<sup>ぶ</sup>吝<sup>注1</sup>取續成通<sup>なる</sup>  
付而 又高七石 瀬尻ヨリつけ  
添被<sup>ちつされ</sup>申候 前々之頭<sup>かしら</sup>八一組之内  
甲乙無<sup>これなき</sup>之様ニ被<sup>いたされ</sup>致沙汰候事

一 大谷権左衛門殿支配之内 先年御蔵入<sup>注2</sup>  
相成候節 市味地石 熊野帳<sup>注3</sup>を以  
沙汰仕候へ八否<sup>ぶもとり</sup>戻<sup>注4</sup>之田地数ヶ所  
有<sup>これあり</sup>之 市味八悪所之義二候間  
地下<sup>じげ</sup>之ゆるみも可<sup>つかまつるべし</sup>仕と申 瀬尻  
ヨリ八旧例之分ニならしに

という。「吝」は「不」の誤用であるが、そのまま長州藩独特の用語となった。

\*2 蔵入(くらしいり) = 支藩領、藩士の給領地以外の土地はすべてその貢租が直接藩庫に収納されたので、これを御蔵入と言った。公領と称したこともある。

\*3 熊野帳 = 熊野検地(寛永検地とも)の事。元和7年から寛永元年に至る4ヶ年の実収貢租から、新租率五公五民によって石高を換算した。税率は夫れまでの七ツ三分(慶長検地)から下がったが、石高が上昇。この検地の後、一門以下藩士の全面的な大知行替えが行われた。新知行100石は旧知行70石に相当し、差し引き30石は藩庫の増徴となった。



可仕と申二付而 双方ヨリ右之意趣

申出候 重々権左衛門殿被申候八下地八

只今御蔵入二相成候へ共御預ケ之

人柄致支配事二候へ八 手前組内

二て候条 旧例之分ニ市味・瀬

尻ならしにして相渡候様ニと

下知ニまかせ 天和三年ヨリ貞

享弍年迄三ヶ年八石札米

ならしにして支配被仰付候

貞享三年御検地有之 市味

八組 注5石二引合せ候へ八 九拾石

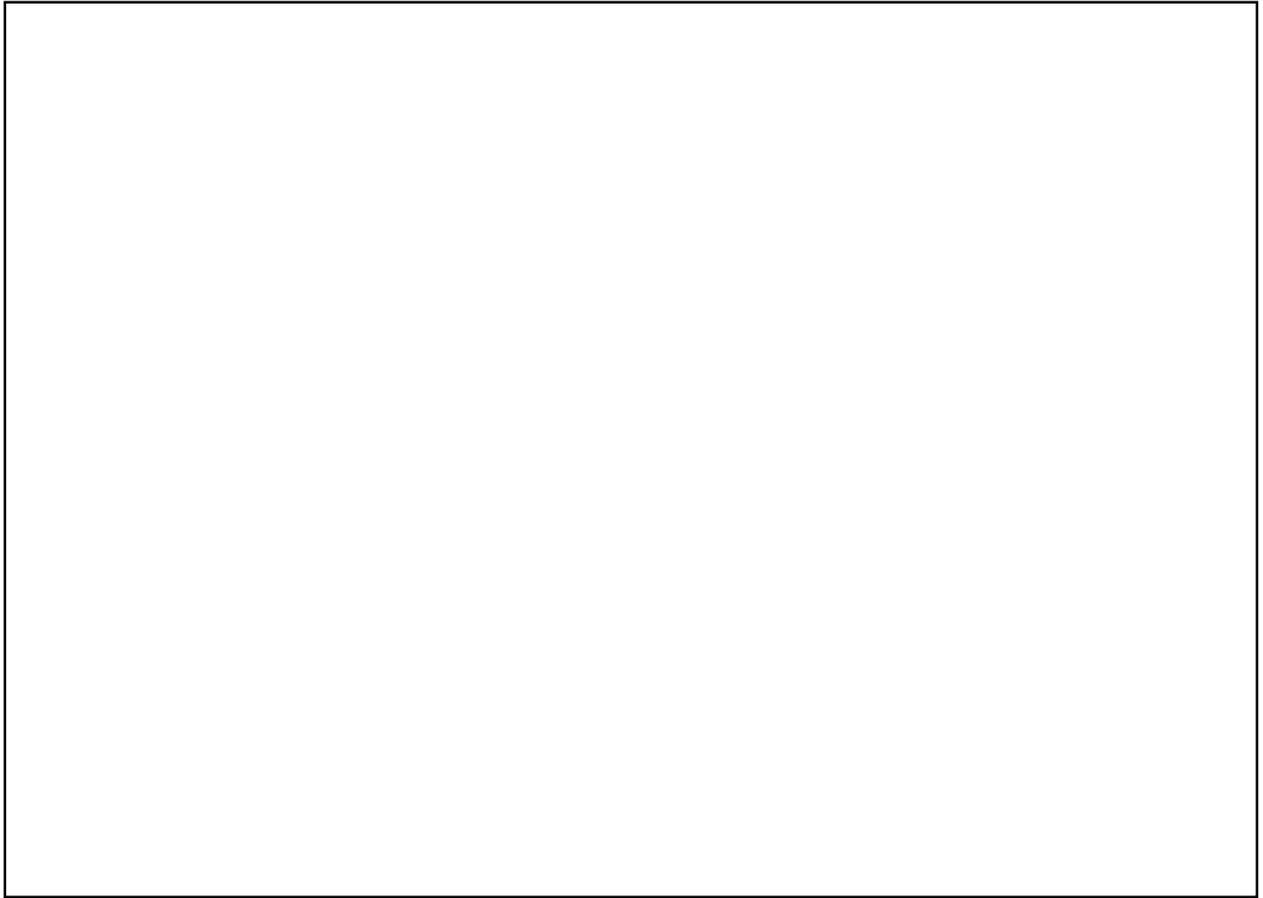
余上り申候 瀬尻八組石二引

合せ 五拾石余下り申候 右之

高下之つり相勘かへ候得八違

\*4 吝戻(ぶもどり) = 毎年春定の時に吝戻を行った。吝戻によって復旧可能な吝所を当吝と定めて堀戻しの人力飯米を交付して普請をなし、また自力で堀戻しを行う場合には三ヶ年もしくは五ヶ年間の租税が免除された。これらの工事を吝起しと言い、復旧を吝戻と言った。

\*5 = P113 脚註参照。



大段之義付ついで而市味居住之各おのおの

弥迷惑二相極申候いよいよ あいきりまり就夫それについて權左衛門殿へ

旧例之分二両所石なほし注1被仰付被

下候様二と度々申候へ共時節悪敷候され

間先相待候様二と被申候各申分あいまち もつされ おのおの

無余儀義二て半間之者もよまなき

存候二付瀬尻せ尻二知行所有之候これあり

者之内ヨリも如已前いぜんのごくなほし注1二被仰付可然候おおせつけられしかるべく

左候時八各以出米仕筈二御座候通さやうじゆつ おのおの

達而申候得共たつて そうらえどもせ尻二八下北十兵衛注2瀬尻

一門罷居候間先相待候様二と被申あいまち もつされ

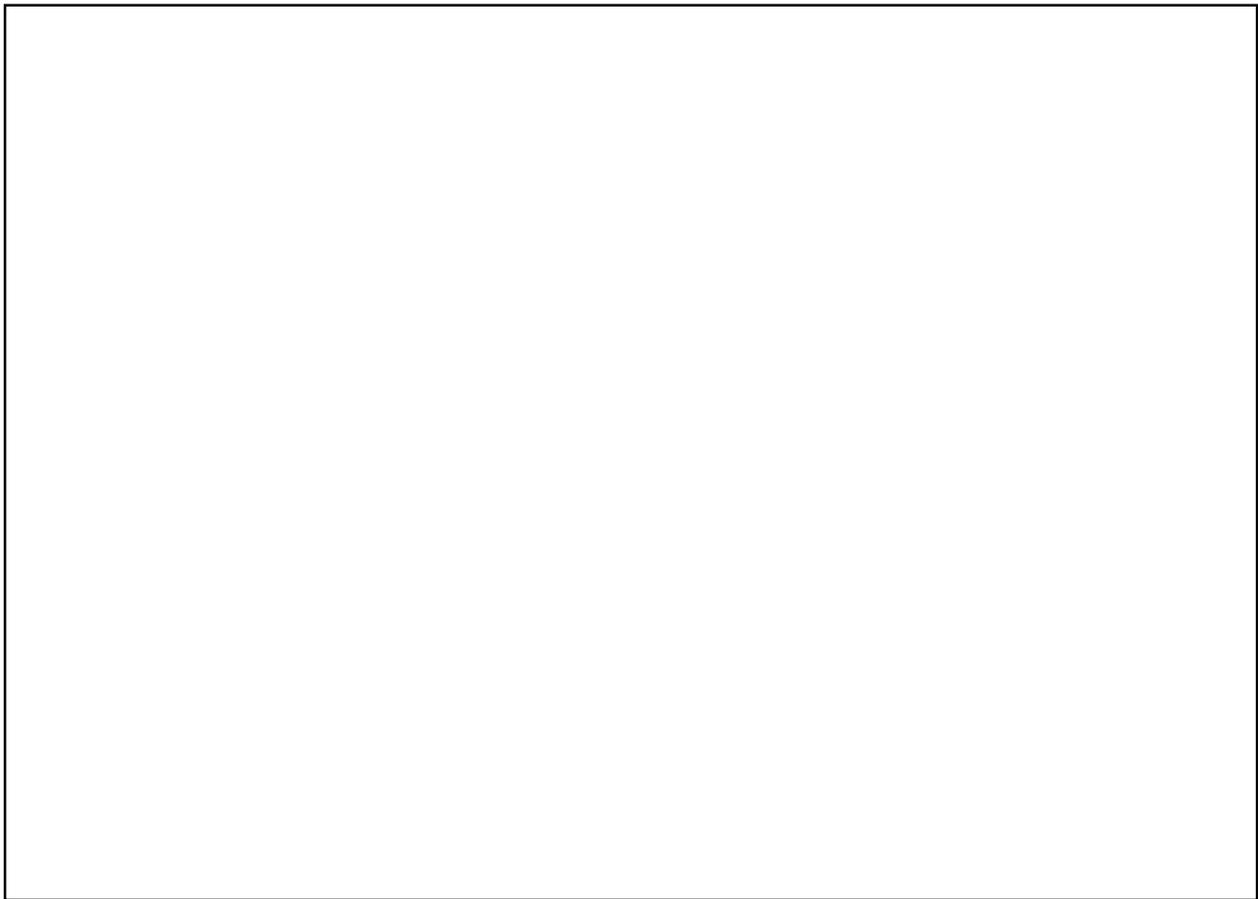
圓二被指置候二付而三ヶ年之内二侍さしあかれ ついで

四人中間二人身躰を崩無是非くすし せひなき

仕合二罷成候其内内田七郎右衛門義者まかりなり

\*1 = 113頁脚註参照。

\*2 下北十兵衛 = 不明。



水江注<sup>3</sup>ニテ飢死仕 大坂湯屋敷注<sup>4</sup>ヨリ

彼地御人被指出<sup>さしたされ</sup> 御為<sup>おんため</sup> 不可然義二候

増野十郎右衛門・梅地善兵衛兩人八石見

ニテこしき果申候<sup>之食</sup> 梅地七左衛門義八

各下人風情之躰ニテ<sup>おのおの</sup> 地下<sup>じげ</sup>ニ罷居候

中間も老人八萩道<sup>はし</sup>ニテ飢死 式人八

飯ノ浦庄屋下人<sup>あいなり</sup>ニ相成申候 千振

新右衛門義も身躰崩申候 ケ様ニ御

家人之者共 没落仕候て八 上ニ

思召よらす 御慈悲もはつれ

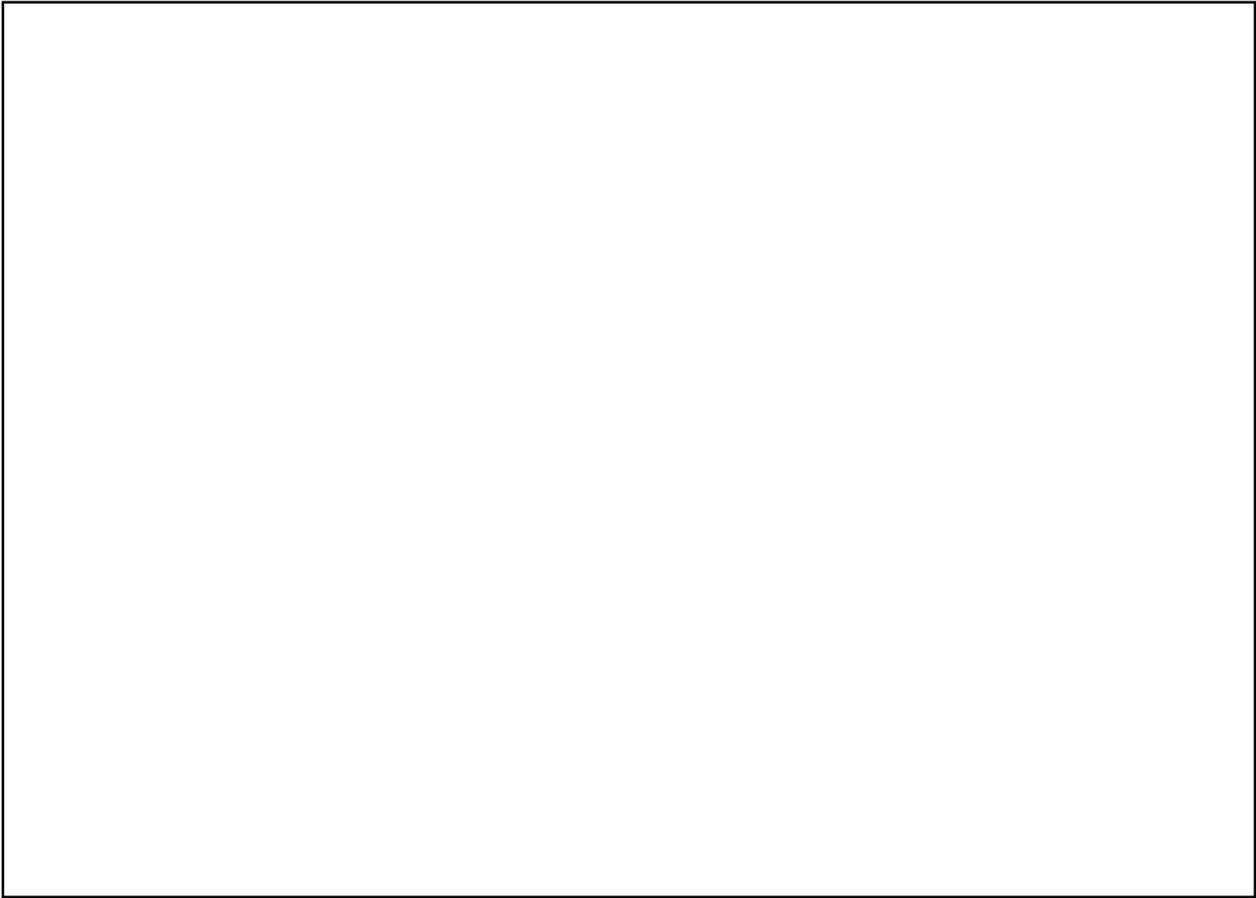
御為も如何敷奉存候事<sup>いかかわしく</sup>

一 右申上候様ニ各半間之者<sup>おのおの</sup> 只

様闕女仕候段 ひとへに頭之不<sup>かしら</sup>

\*3 水江 = 倉敷市水江の事か。

\*4 大坂湯屋敷



作舞ニテ御座候へ八御境目之義注1ニ

候へ八則時隣国江も聞へ候所

御為如何敷奉存候次ニおののおの各式と

御座候てもせがれ倅家致断絶妻

子等迄路頭ニ立候様ニまかりなり罷成候

所不及是非存せひにおよはず其後八所

帯をならし注2ニ仕只今迄古屋ニ

かき付罷居申候所帯ならし注2之

次第毎年市味村住宅

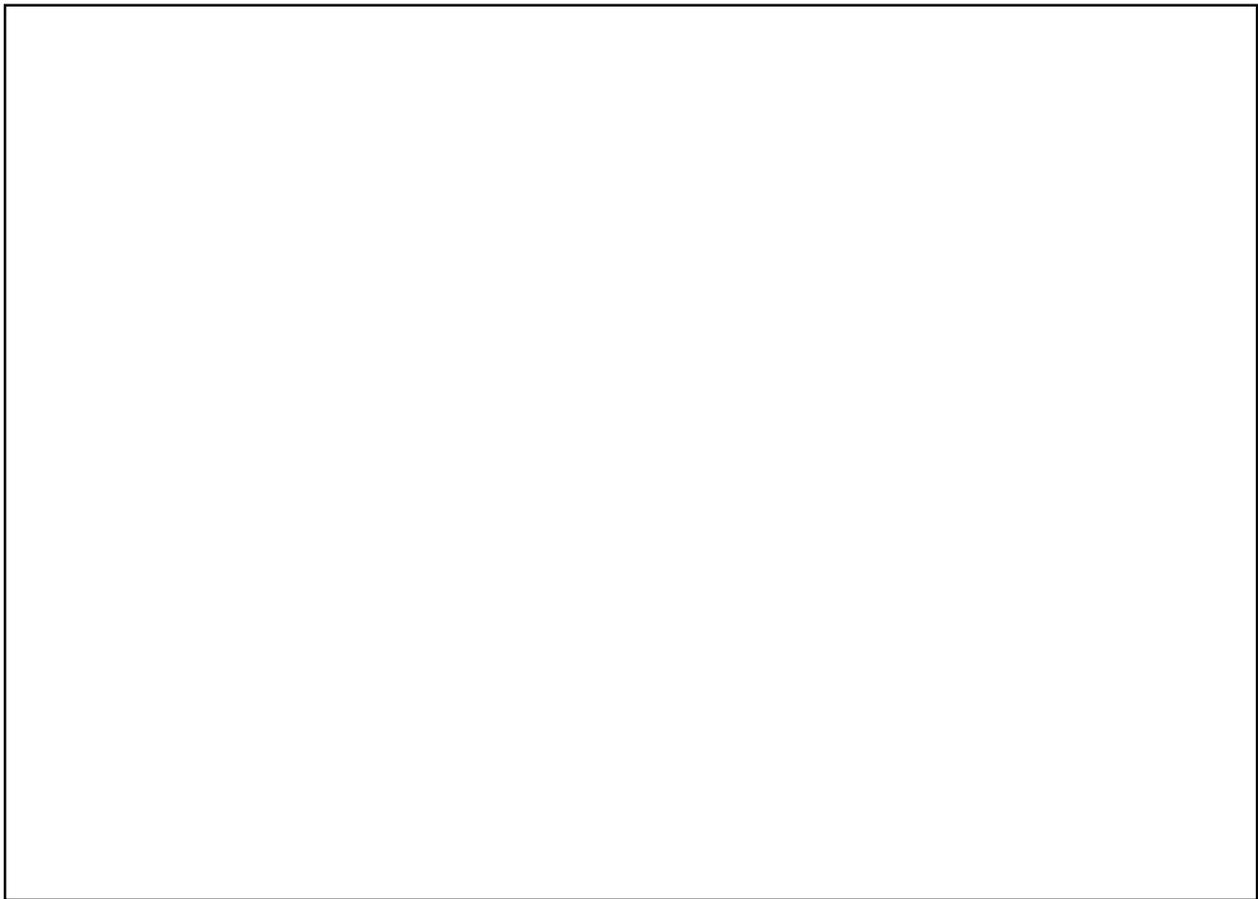
之者内證向立相詮義仕

就中困窮仕候者江相残ルなかんずく

人数ヨリ不残致助情候おしりす

\*1 御境目之義 = 下田萬村市味は石州境仏坂に最も近い集落。

\*2 = 117頁脚註参照。



然処しかるところ只今迄かんにん八勘忍仕候へ共

此上八市味居住之者共八

不残一同二路頭二立候様二可罷まかりなる

成所べき口惜次第二奉存候事

一 今度大谷権左衛門殿ヨリ各九人之者江

参候様二と被仰下二付而波田

久右衛門を以御断申候様子八各おのおの

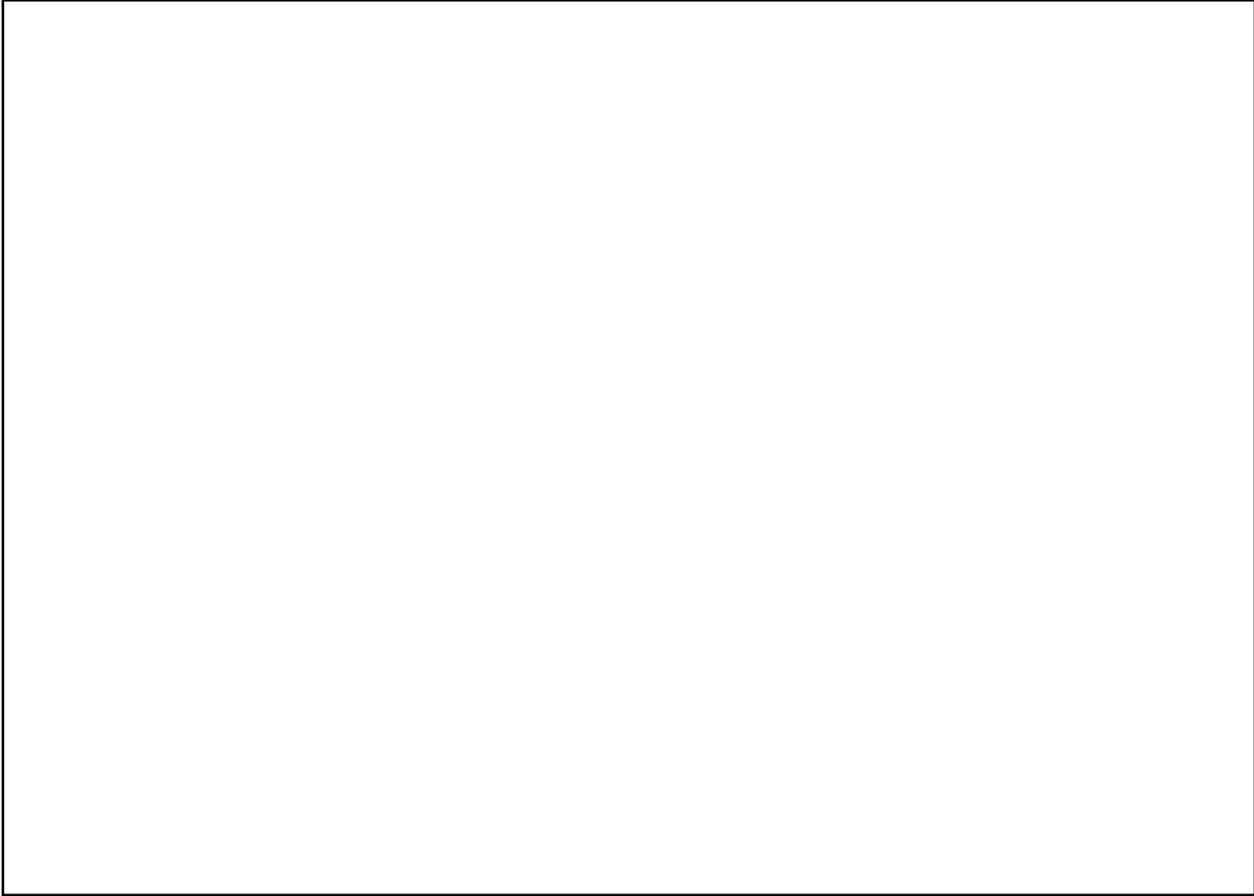
一列之申談三頭御一座二てかしら

存寄之一義委細二可申分もつしわけるべく

ぬきノゝに被召寄候ともめしよせられ

兎角参間敷通堅クまいるまじく

申合せ候就夫それについて権左衛門殿被召大谷



寄候節も御断申候 勿論

残る兩組之者も各同前之

覚悟仕候 然処二私共江八

御知せも無之 在郷二罷居候

老脈之雜式八一類之者共

被召出 各代判被仰付 此

元罷出候事不能成者之所へ八

権左衛門殿二男 丸右衛門殿二有福

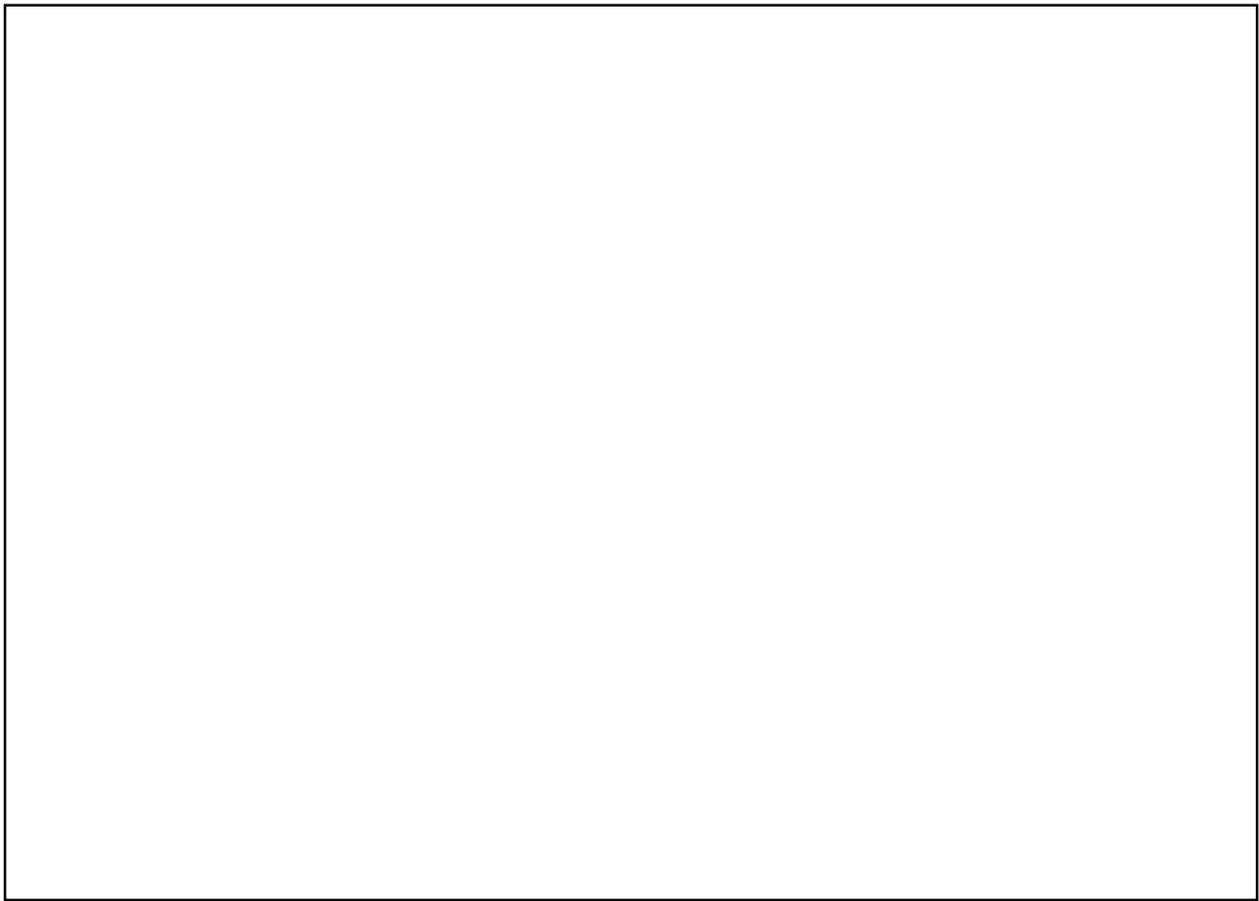
甚兵衛・小原平右衛門兩人被相添

在々被差越 代判被仰付候

右之首尾小原平右衛門・西尾

次左衛門を以 右之分二埒明ケ候

間 左様二可相心得通 被仰付



切々八案外千万成御手 驚入

候へとも 只今頭へ對し格別之

存分と致遠慮 又候哉 波田

久右衛門を以御断申候八入組

たる事にて一組切之沙汰

にて八わかり苦敷御座候間

兎角三組一同二御頭

御列座之上被聞召可被下候

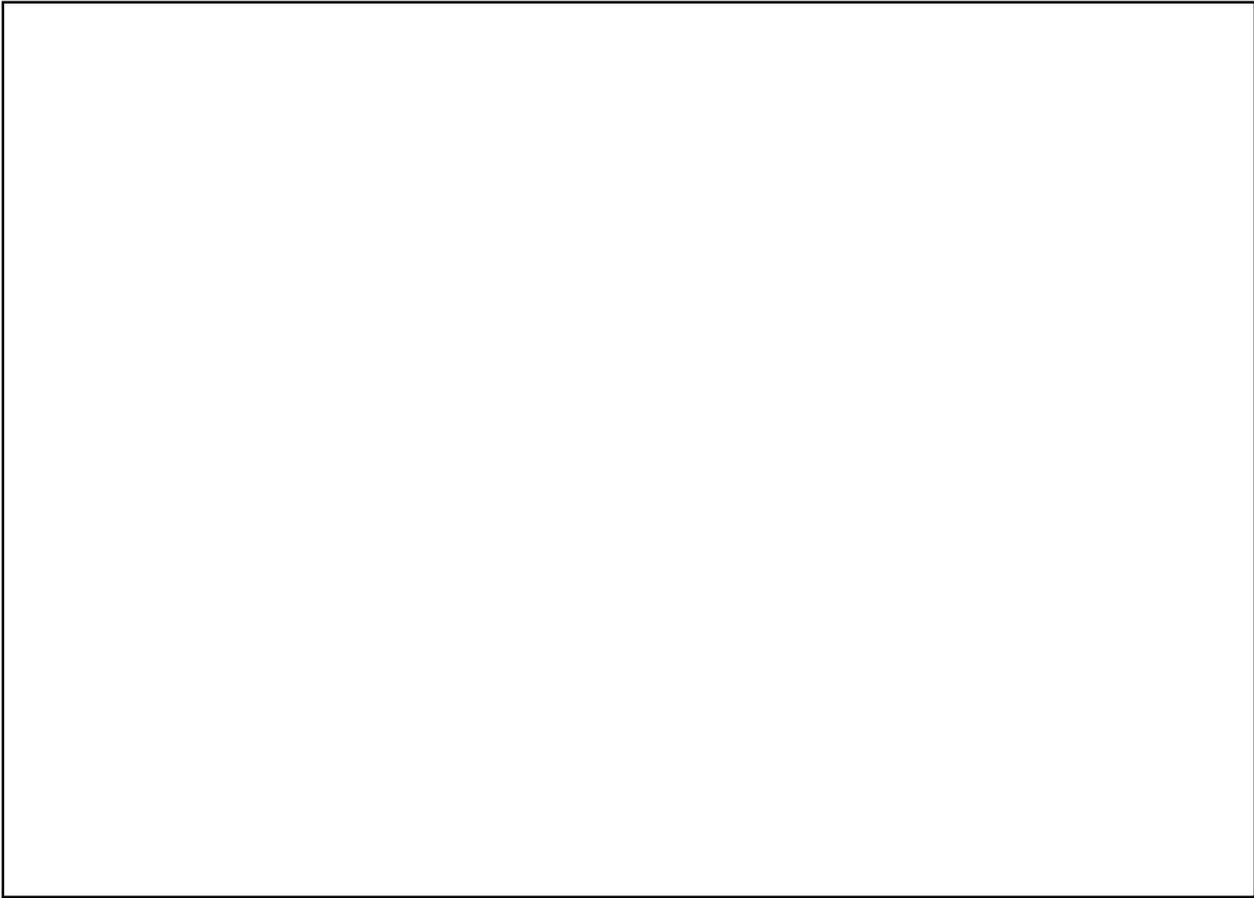
左様御座候へバ 六人之者との

出入之義 被聞召分 能御座候

通 重畳 御断申候へバ 頭中

連座候て三組之者申分

承候の不相成との心入 合点



不参候事まいらさず

一 私共九人無故公儀被差出候ゆえなく さしだされ

段 御家頼之失面目を不めんぼくをうしないせひ

及是非次第第二御座候処二におよばず

此度三組一同之義 権左右衛門殿へ大谷

申出候様二と御上意二付御

請申上候 一旦八右之通二御うけ

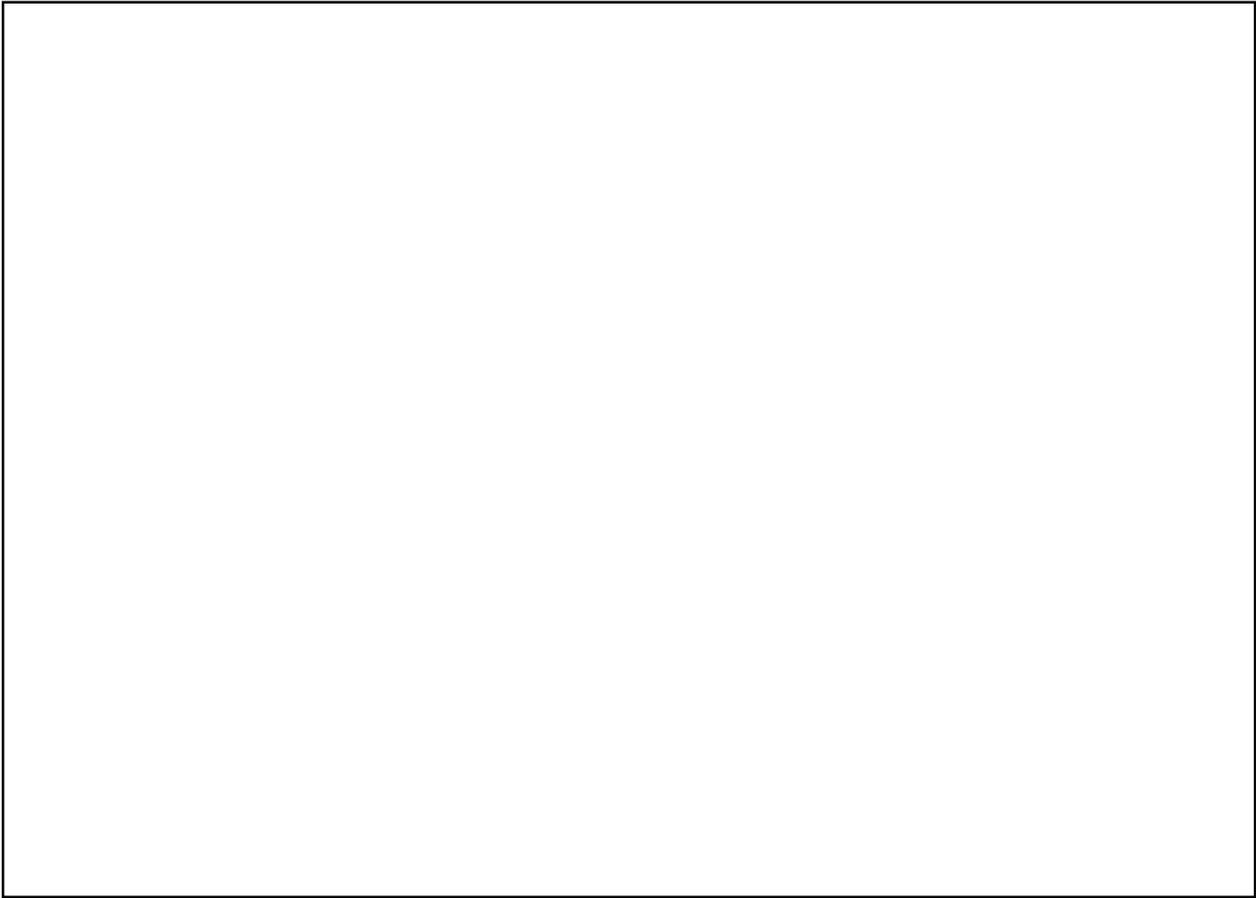
座候へ共 最早此上八未権左右衛門いまだ 大谷

支配二預り候段 一圓不罷まかり

成候条 此辻を以 如何様二もならず

御沙汰被成可被下候様二と所なられくたさるべく

仰二御座候 以上



戊元禄七

閏五月十八日

安富神基左衛門 花押

中村新左衛門 花押

梅地喜兵衛 花押

奥山忠左衛門 花押

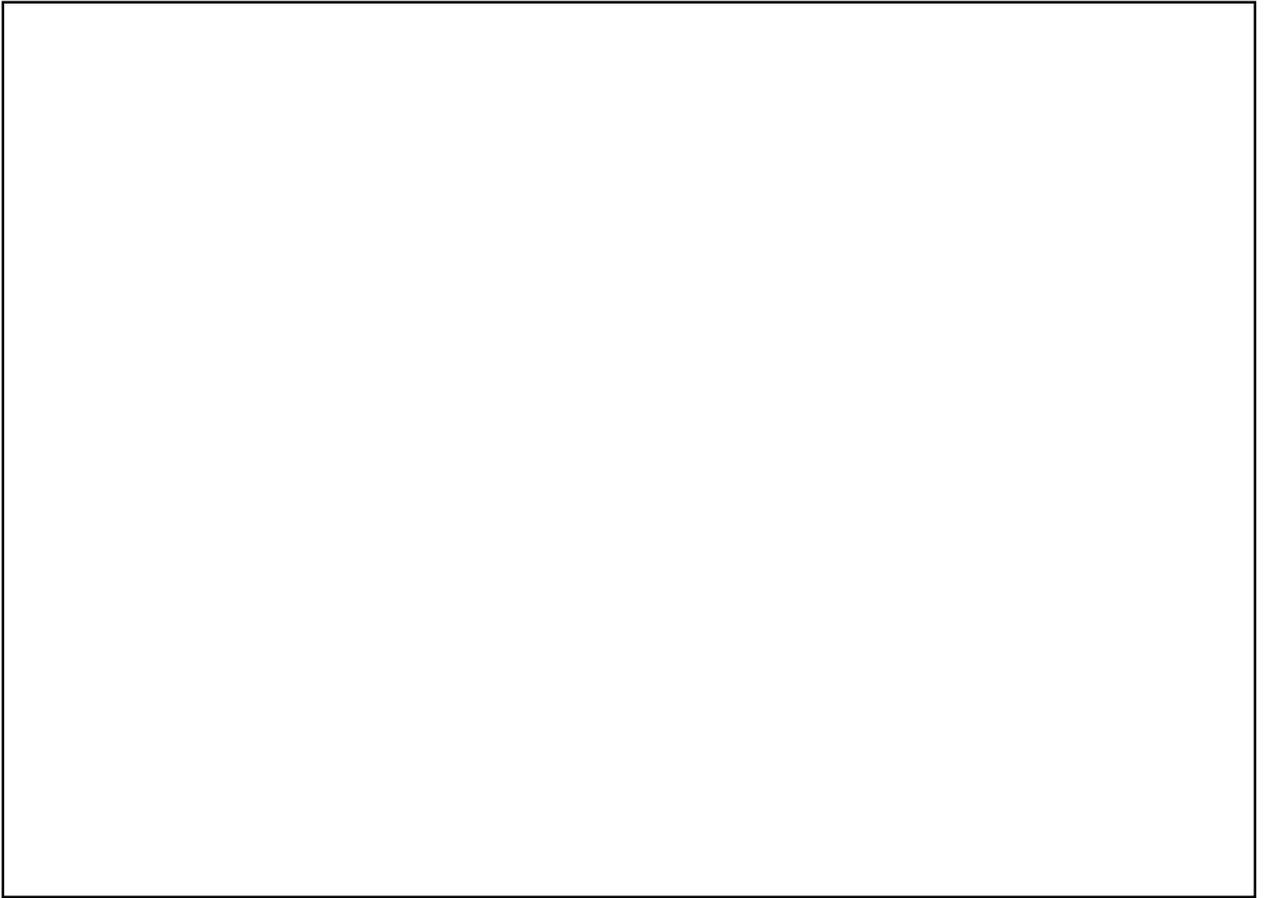
増野左次右衛門 花押

内田清右衛門 花押

椋 六郎右衛門 花押

大谷喜左衛門 花押

熊谷吉右衛門 花押



大田権兵衛殿  
松原六左衛門殿

東京大学史料編纂所蔵 「益田家文書」 55-35  
有福三左衛門注1覚書

覚

一 旧冬四組より御理り事申出候との

風聞御座候得共 私方へ八何より茂

一 圖物音注2無御座候 如何様之御理りにて候

哉と存居申候処ニ 其以後御理り之

下書物 須佐より萩江指越 大塚半右衛門

請取 受取 私へ見遣申候 此下書ニ 二嶋御開作注3

次ニ先御役人注3被指替 扱又御理り之廉ニ

願之分ニ不被仰付候時ハ 四組侍分不残 御

暇と書留有之段 如何敷存候 加様之所

をのけ 御役儀續け相なと之儀申出可

然儀と存候間 此下書ニ 付ケ札をして

須佐へ指戻シ可申と半右衛門ニ申候へハ はや

表向仕出シ仕たる之由相聞へ申候 然時ハ

付ケ札仕候て茂 跡事之由申候故 手紙

相添 付ケ札なく須佐へ指返申候事

一 其已後御家督御悦として 真嶋与一右衛門・

品川三郎右衛門 萩罷出候ニ付而 今度四組よ

り之

御理り書物二三ヶ条各かつてんニ不參候

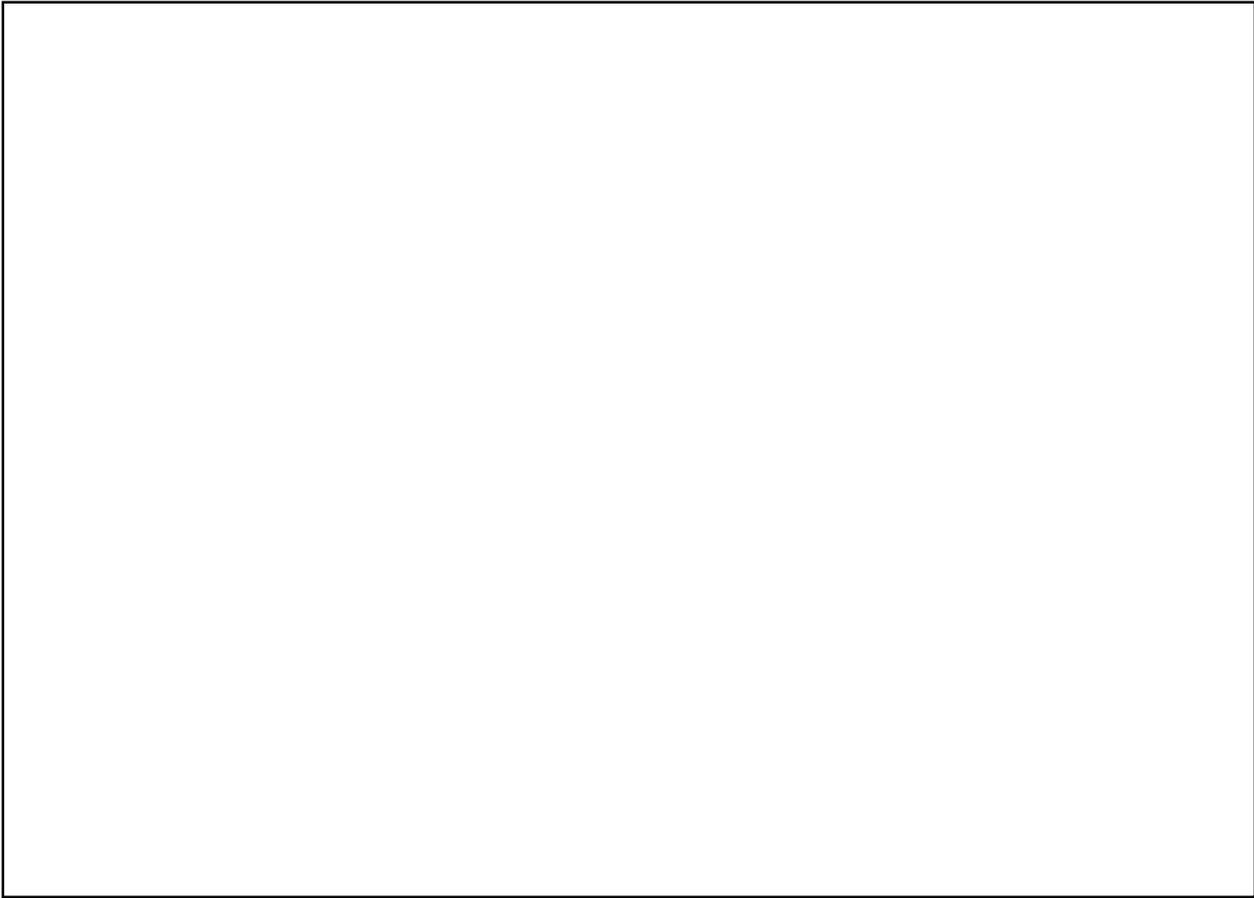
第一御家督御間茂無御座 其上御役

人なとも不被指替之由被仰渡候 然時ハ右之

\*1 有福三左衛門 = 大谷権左衛門組士。元禄六年四組一同に訴訟申出の節、一列に加わらなかつた六人之者の一人。

\*2 物音 = 知らせ、情報。

\*3 先御役人 = 益田久右衛門(當役) 益田八郎左右衛門(萩當役) 栗山半左衛門(御目付役)。以上三名は元禄七年二月十二日更迭され、萩から須佐へ差し戻された。



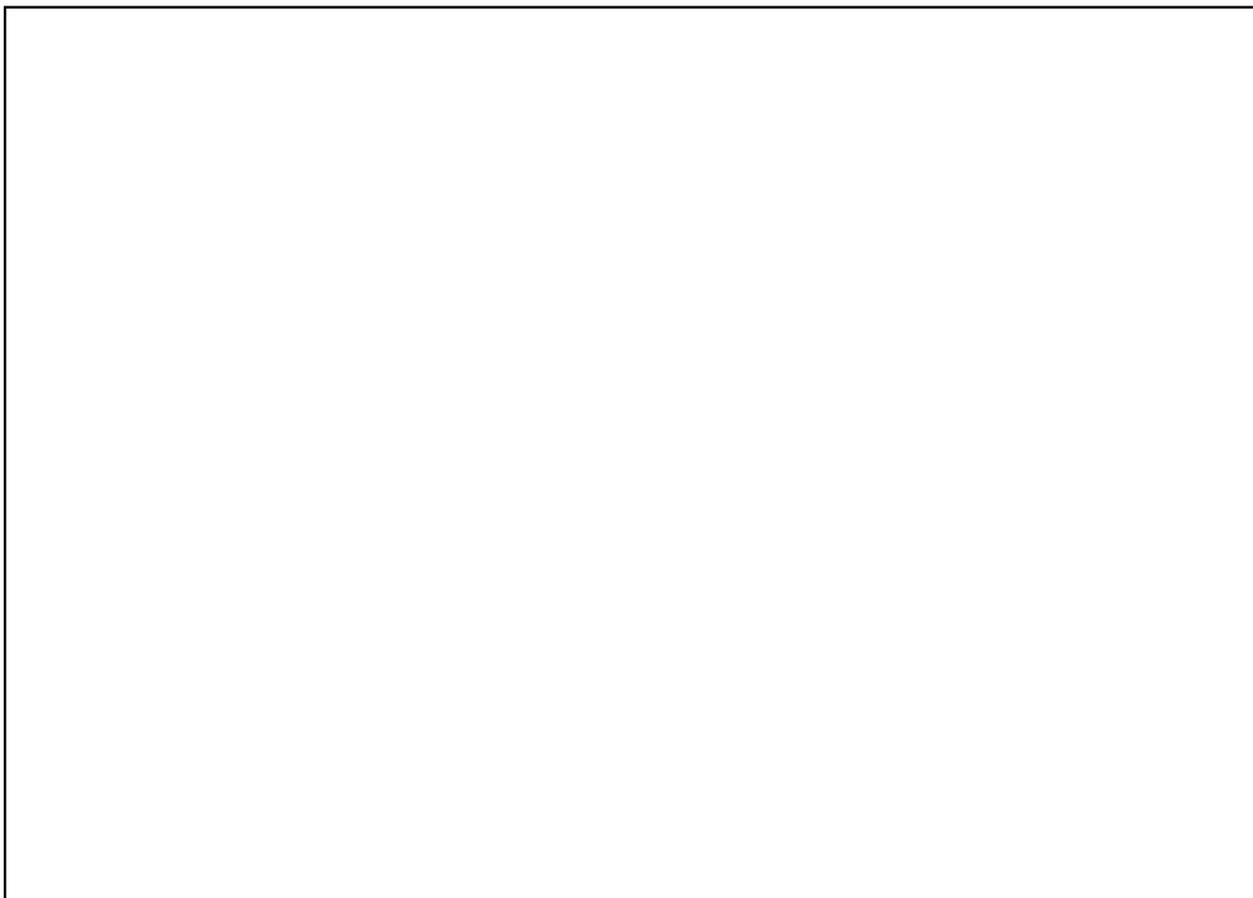
御理りなど申出候時節にて八御座有間敷候  
と申候へ八与一右衛門申候八私真嶋以左様二存候由申候  
付而各存寄と同前之儀二候故 然時者しかるときは  
幸小原二郎左衛門殿 萩御当番にて御座候条  
半右衛門私同心仕二郎左衛門殿へ掛御目二一右之  
様子申候へ八 御彼方被仰候者 左様存寄  
候八、須佐へ申遣し 四組ヨリ三頭まで申出  
頭ヨリ又左衛門殿へ趣被申越候者 又左衛門殿書  
物預り置被申候間 被指戻候様二茂可相成  
哉と被仰候付而 須佐半間中江 各存寄  
書状を以申遣し候 然共一圓二返事も不  
仕 其已後八善悪共二様子不承候事  
当春宗門御究之節 各儀古来ヨリ之  
五人組をは外つし 一組之外江はね出し候  
四組之儀八 牛庵様御代ヨリ 御法



を以御沙汰被仰付おあせつけられ 今以右之参加いまもつてヨリニ  
御座候処ニ 今度組外へ指出候段さしたし 如何様  
之首尾かくのごとくニて如此仕候哉 切々不謂儀さてさひわれざると  
存候 儲又宗門御究之儀も 年々五人  
組を以 手堅御詮作被仰付儀おあせつけられニ御座候  
處ニ 各手前宗旨之儀ニ付 毛頭如在  
も無御座候処ニ 組半間之者共 私之  
意趣を以 古来ヨリ被仰付来候五人組を  
はね一組之外江出候儀 切々狼藉成さてさてるうぜき  
仕立と存候 此段早々詮議可仕と存候そう  
得共 其砌八江戸御到来注1半ニて  
下々式ニ御座候而も 何ケ申出騒動  
仕候時者 御当地之儀八御国境と申  
他領江聞候てハ 上之御為如何と  
乍憚奉存候付 とかくなしニ判形仕  
罷居候 右之段々如何様之首尾ニて如此かくのごとく  
仕立仕候哉 様子御尋被成 明白ニ御沙汰  
奉願候事  
去ル四月廿八日 大谷権左衛門殿 堀市郎右衛門殿  
小原二郎左衛門殿 三組ヨリ 去ル頃被仰出候

\*1 江戸御到来 = 「益田家文書」12-43には「江戸より御両国御安堵之御到来有之次第」とあり。元禄7年2月7日、毛利本家では毛利吉就が卒去。同年4月13日、吉就の弟吉広が家督相続した。吉広は右田毛利六郎左衛門就信の養子となって主膳就勝と号していたが、兄が卒去したので毛利本家の家督を相続した。この代替りを幕府に報告し、防長ニカ国の安堵状を求めていたものと考えられる。そういう時期に、益田家中の騒動が表沙汰になっては一大事という認識があった事を意味すると考えられる。

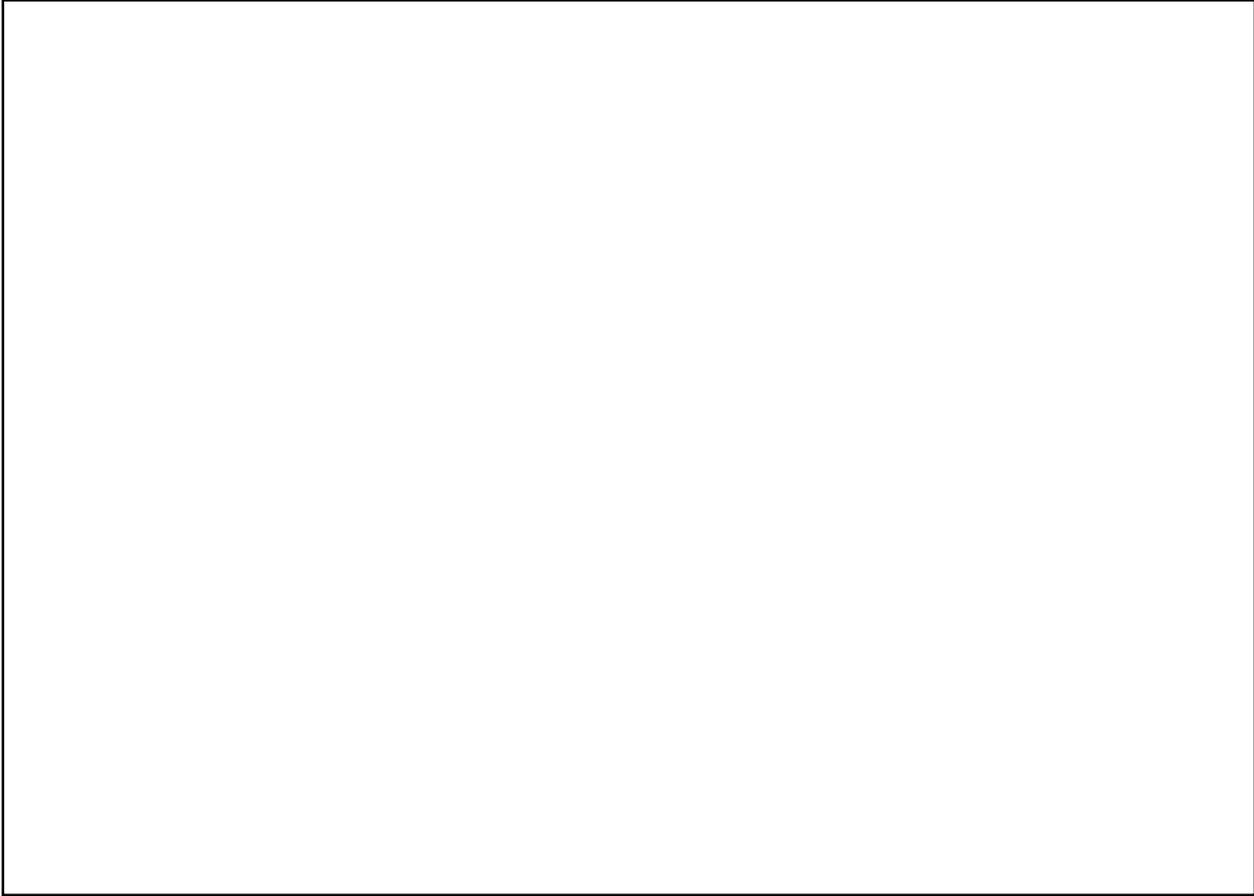
御ケ条之分ニ落付 致一和續而御奉公可  
申上との申出仕候 此段各六人之者  
すすめ二より右之通三頭へ申出候付而  
四組残者共 騒動仕候通申立之由  
承及候 曾以左様之首尾ニて八無御座候  
此段八当春宗門御究之節 四人之御頭  
まで申出仕候八 彼六人之者一同之判形  
被仰付候時八 残ル惣人数判形不仕候通  
申出 六人を組外へはね出し申候 就夫  
六人之一類共 其外詮議仕候處ニ 六人  
之者組外へはね出し可申との儀 一圓ニ  
不承 扨々仰天仕候 然時者六人之者と  
一和仕 御奉公可申上との儀 書付を以御  
頭まで可申出との儀 私一類共 其外一  
和之者 書付指出し申候 然時者六人者  
皆々をすゝめ申たるニて八毛頭無御座候  
縦此段各すゝめ候とて茂 皆々落付  
致一和 御奉公可申上との儀八 指而すゝめ  
そこないニて八御座有間敷と奉存候 扨又



去ル廿九日之朝 境二郎左衛門殿 堀市郎右衛門殿  
御組内之儀二付 御出萩可有之由二て  
舟本迄御出候節 残ル四十人之内ヨリも萩  
罷出ル之由二て不<sup>お</sup>大形騒動仕候通り 乍<sup>は</sup>憚<sup>ば</sup>  
御為如何敷奉存候 右之分二残ル者共  
祐騒動仕候二 却<sup>か</sup>而<sup>え</sup> 各<sup>お</sup>六人之内騒動仕  
之通申出候由 一圓合点不<sup>ま</sup>参<sup>い</sup>候 此段二於  
いて八 皆々御存之通二御座候事

去ル四月晦日二組半間之者共 御頭衆  
まで申出候八 各<sup>お</sup>儀と向後一座相役  
等仕候儀不相成<sup>あ</sup>之通申出候由承及候  
扨又御組内日数請帳へも入候儀 一圓二  
不相成<sup>あ</sup>候通 内證申談仕たる之由  
二候 私手前之儀八前後之首尾 前書  
之通二御座候間 何之廉を以 右候仕立  
仕哉の通 双方明白之所御詮議被<sup>お</sup>  
仰付被下候様二奉願候事

右前書之廉々 少<sup>す</sup>茂相違無<sup>し</sup>御座候  
然處二去暮已<sup>し</sup>来<sup>か</sup> 御理<sup>ご</sup>り事二付 各手



前様々成儀申候て 後年御奉公茂  
得<sup>えつかまつり</sup>不仕様ニ致談合之由 切々不謂儀ニ御座候  
別而御代初之御事ニ御座候へバ 乍憚<sup>はばかりながら</sup>  
御為宜様ニと奉存 四組之儀茂 随分  
取統 後年御奉公申上度奉存候て  
皆々江茂存寄申候処ニ 却而私不作<sup>かえつて</sup>  
廻之様ニ申なし夥敷騒動仕 色々  
手立之段 不謂儀ニ奉存候 只今まで  
之参加よりニてハ 向後御奉公茂仕  
苦敷御座候間 御沙汰被仰付被下候<sup>おあせつけられだされ</sup>  
様ニ奉願候 以上

戌ノ

閏五月廿一日

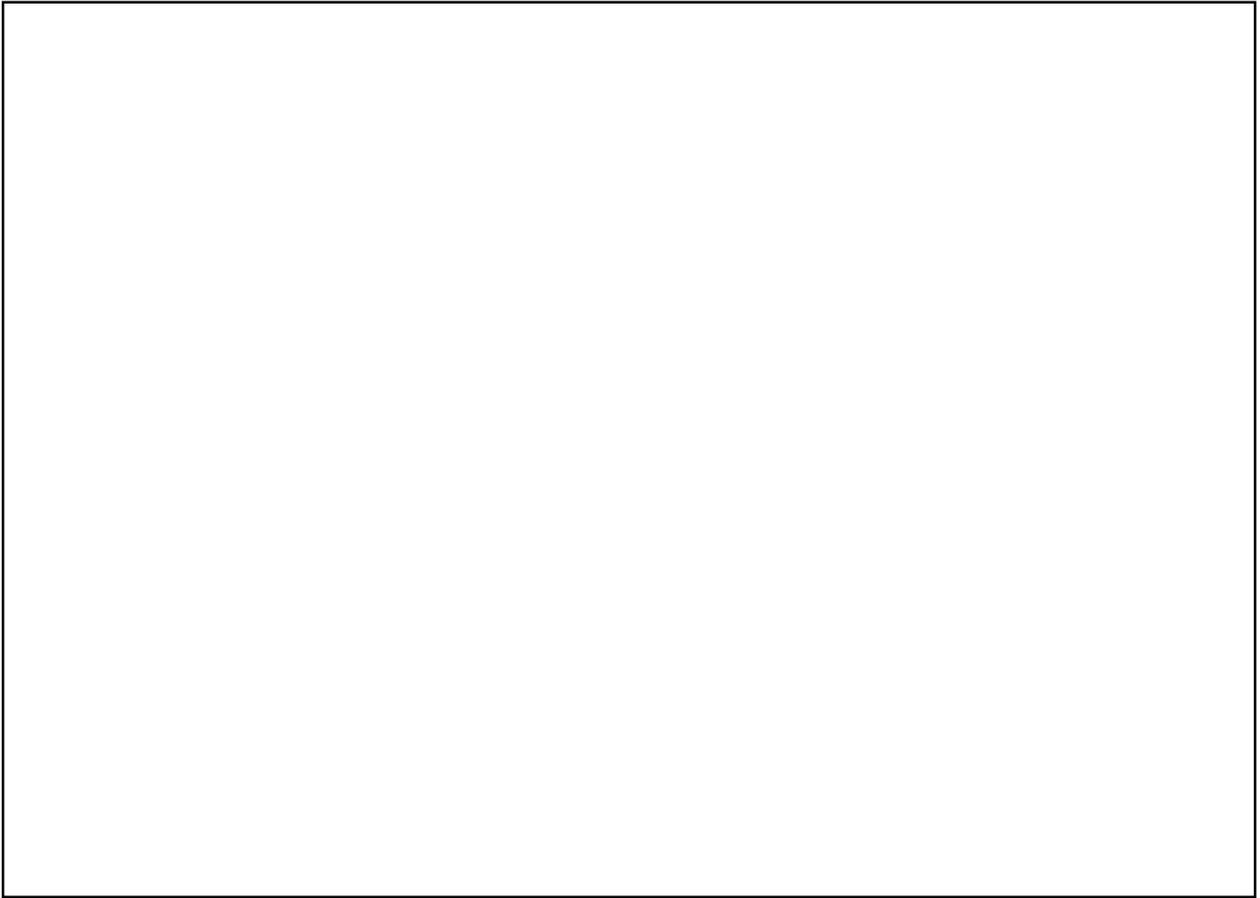
有福三左衛門

大谷権左衛門殿

右者私組内有福三左衛門ヨリ

前書之通申出候

松本庄左衛門  
松庄



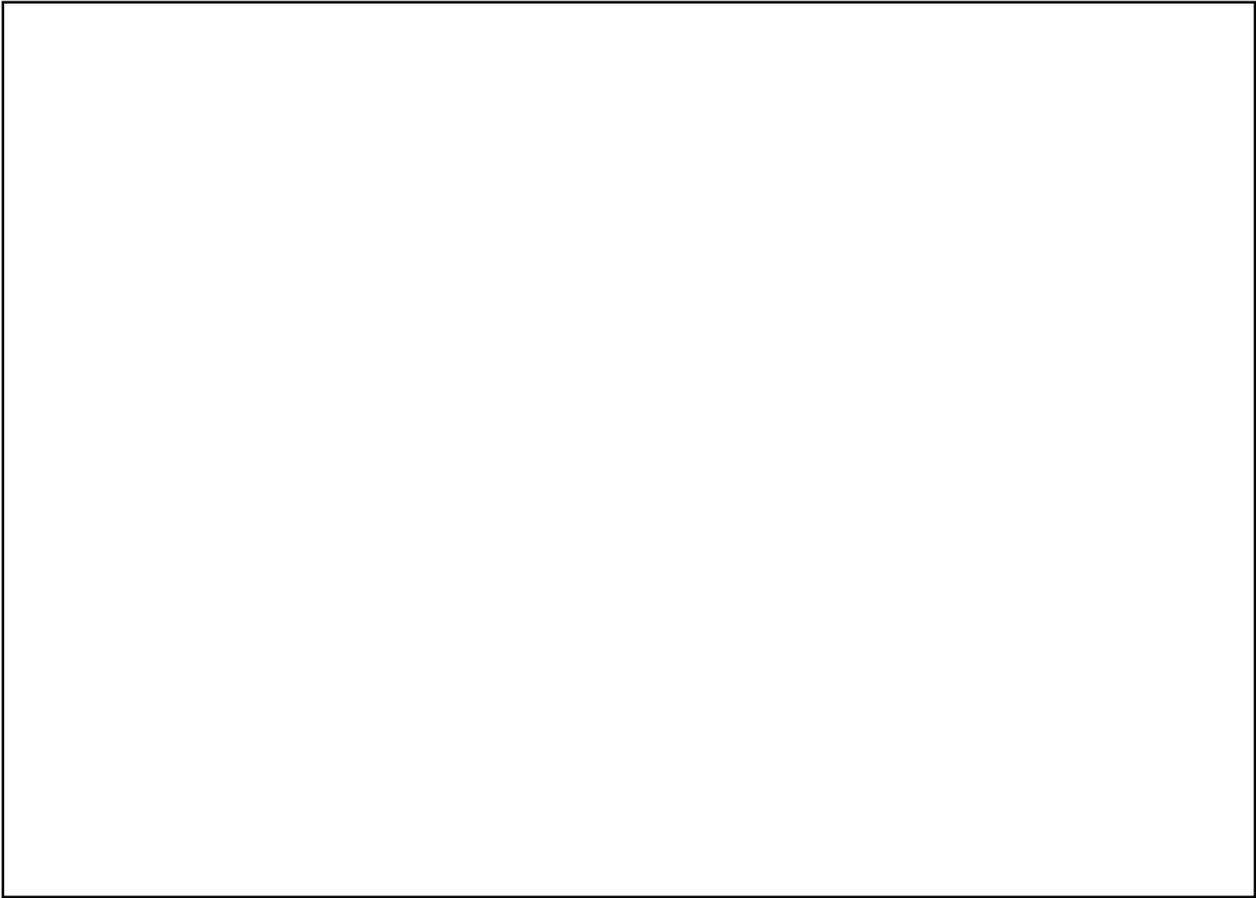
遂御沙汰可被下候 以上

同日 大谷権左衛門

増野 作左衛門殿

松井 庄左衛門殿

益田 八郎左衛門殿



東京大学史編纂所蔵 「益田家文書」

11  
14

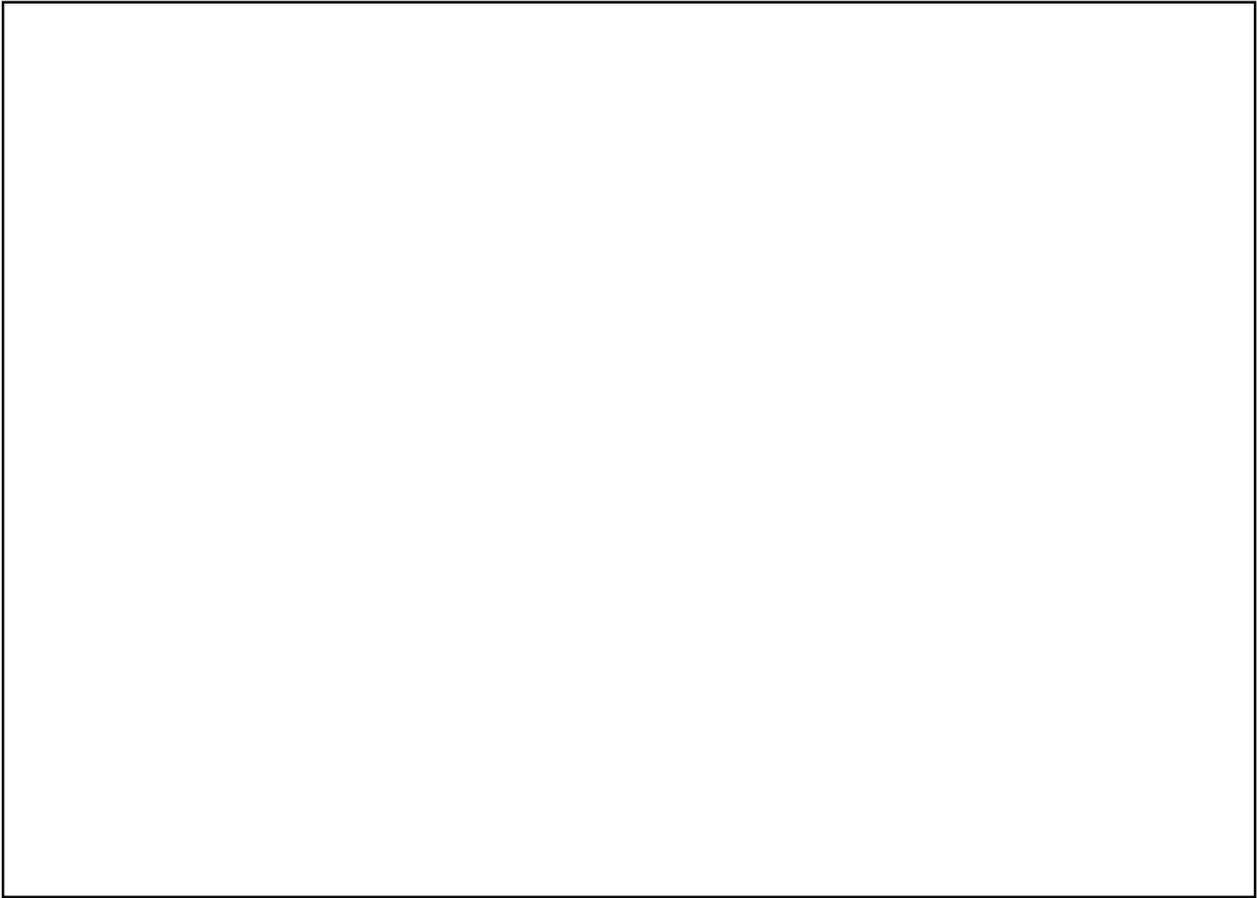
昨日大谷権左衛門宅ニ而之  
次第申上候口上覚

覚

三組

昨日大谷権左衛門宅ニ而之次第  
申上候口上覚

一 私共御訴訟之一儀 大谷権左衛門  
於宅 三頭連座之上 被承  
届 其上ニ而増野作左衛門殿 其外



之御衆へも取次可被申与<sup>組</sup>之

儀二付 私共半間ヨリ 大谷又右衛門・

大谷孫兵衛・四組半間之證

人 波田久右衛門 右三人覺書

持参仕候 頭衆可承与<sup>組</sup>之儀

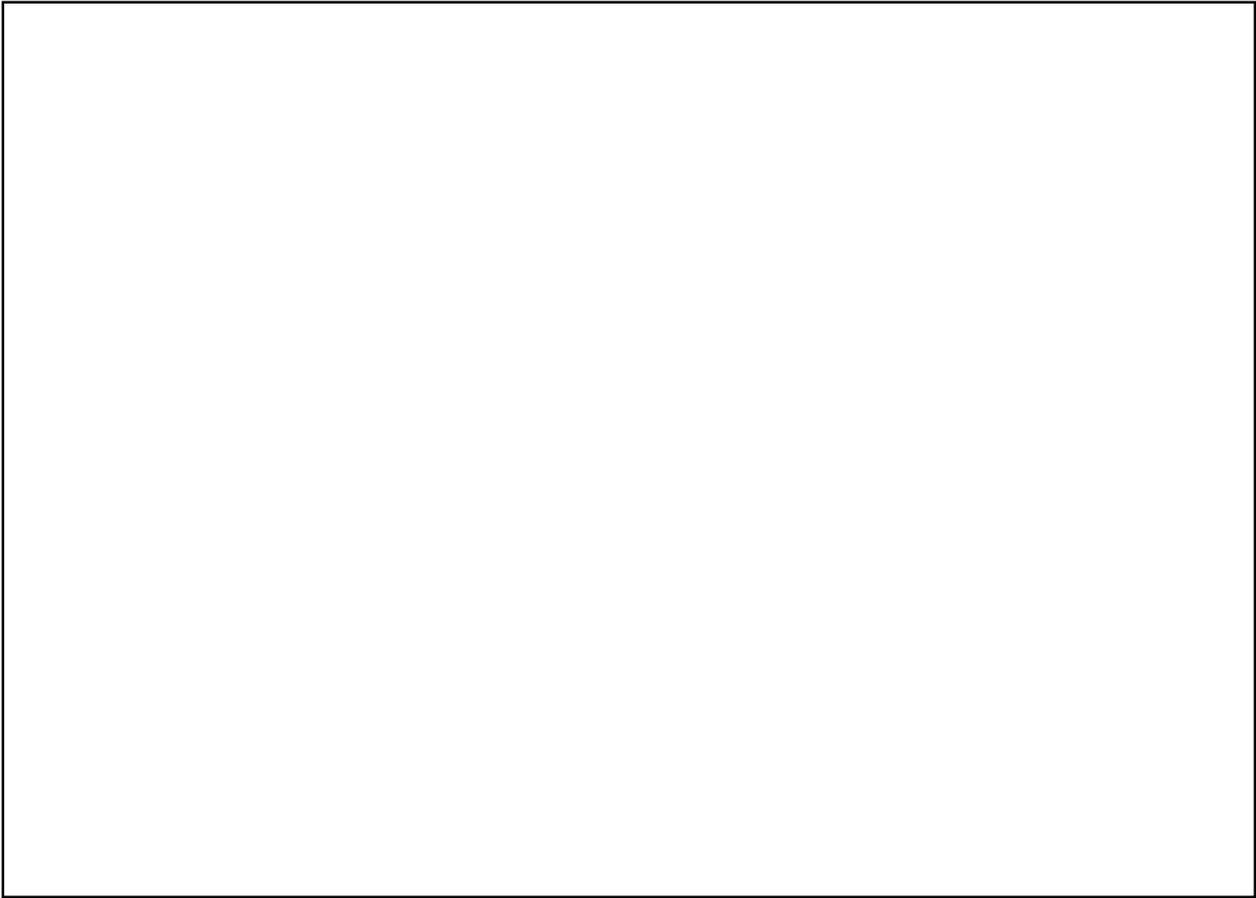
処二 勝手二有福甚兵衛・緒方

□右衛門相催居 □頭衆之

内ヨリ御用之儀有之候間 各

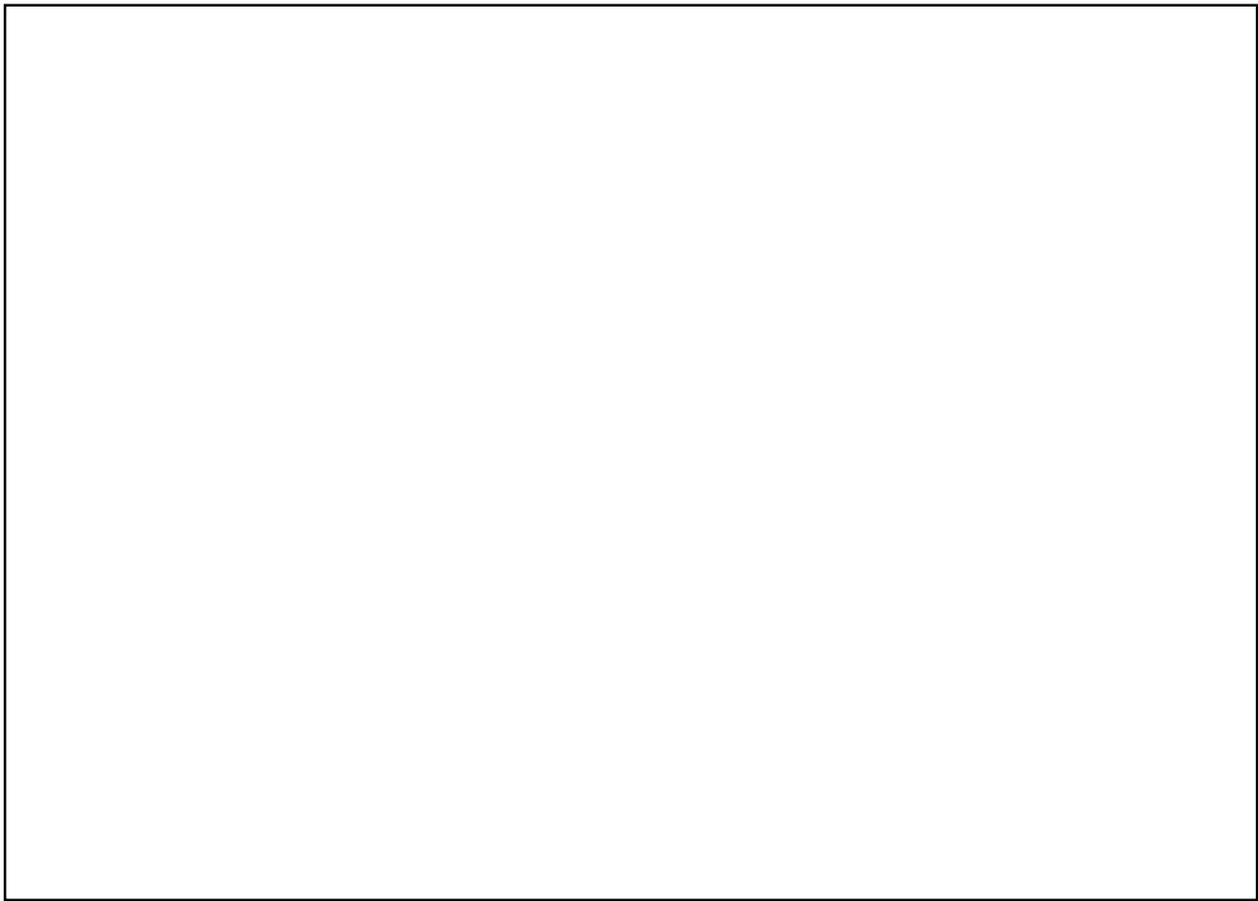
事先引付可然通被申

聞せ候へ八寧日権左衛門も罷



歸候様二との儀二付 両人之者  
とも則時罷立候 其以後 彼  
宅上ノ間ニて 様子可承由  
ニて 右三人之内兩人頭衆  
前江罷出 久右衛門事八権左衛門

上ヶ組 中村新右衛門儀速参ニ  
付 頭衆ヨリよひ来候様ニと  
被申候故 玄関ヨリ虫讀の 候処ニ  
有福三左衛門ほくりを手に  
さけ はたしニて指足



仕 権左衛門宅江参 臺所江は

いり足を洗候て 右之次第

何共無心元存 久右衛門

付 大谷又右衛門をよひ 右之趣

申聞せ候 左候て 三左衛門儀

奥向之戸を明候へ共 明果

申二付 下女罷出明候へハ 無

滞三左衛門奥へ参申

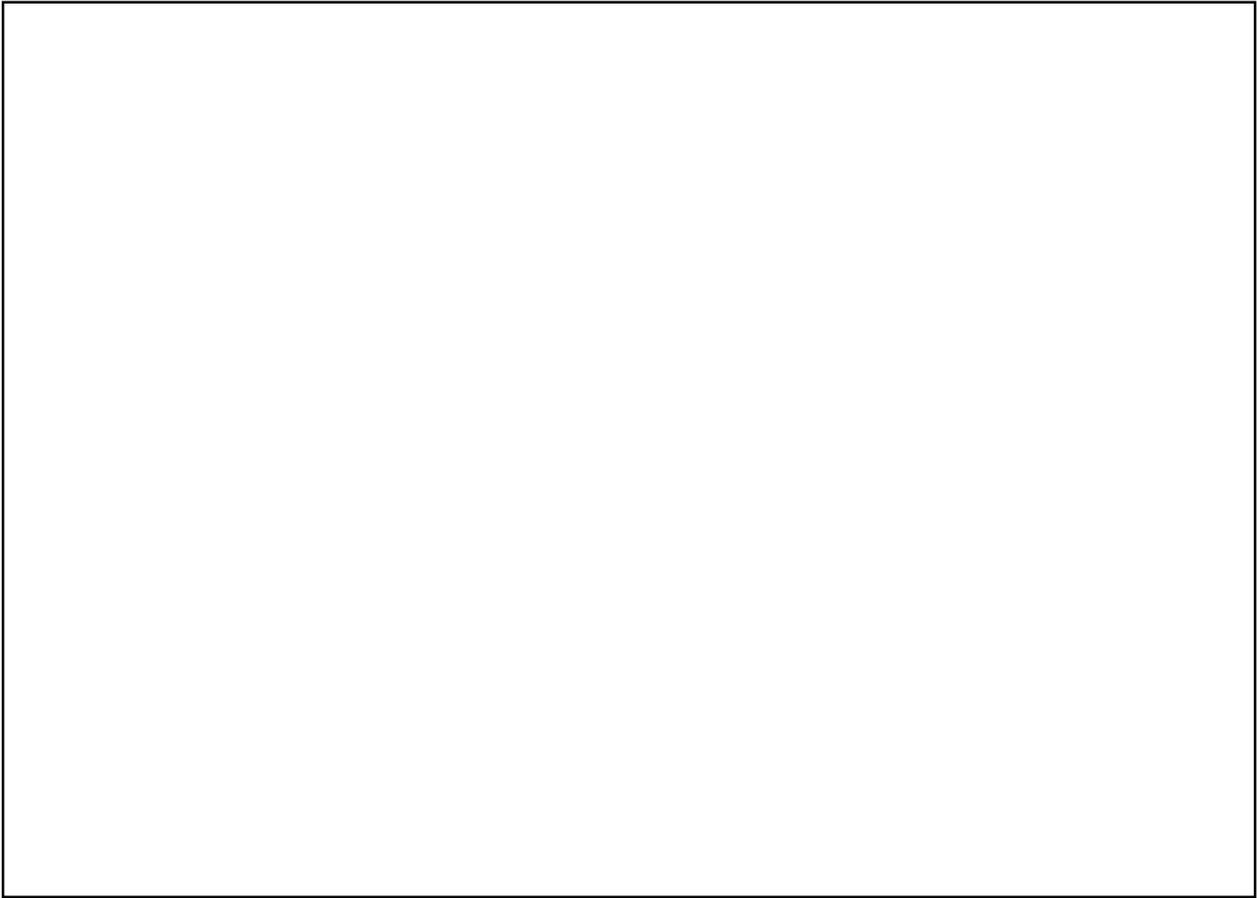
奥向二男数多居候処二

及見候へ共 立隠候様二御座候故



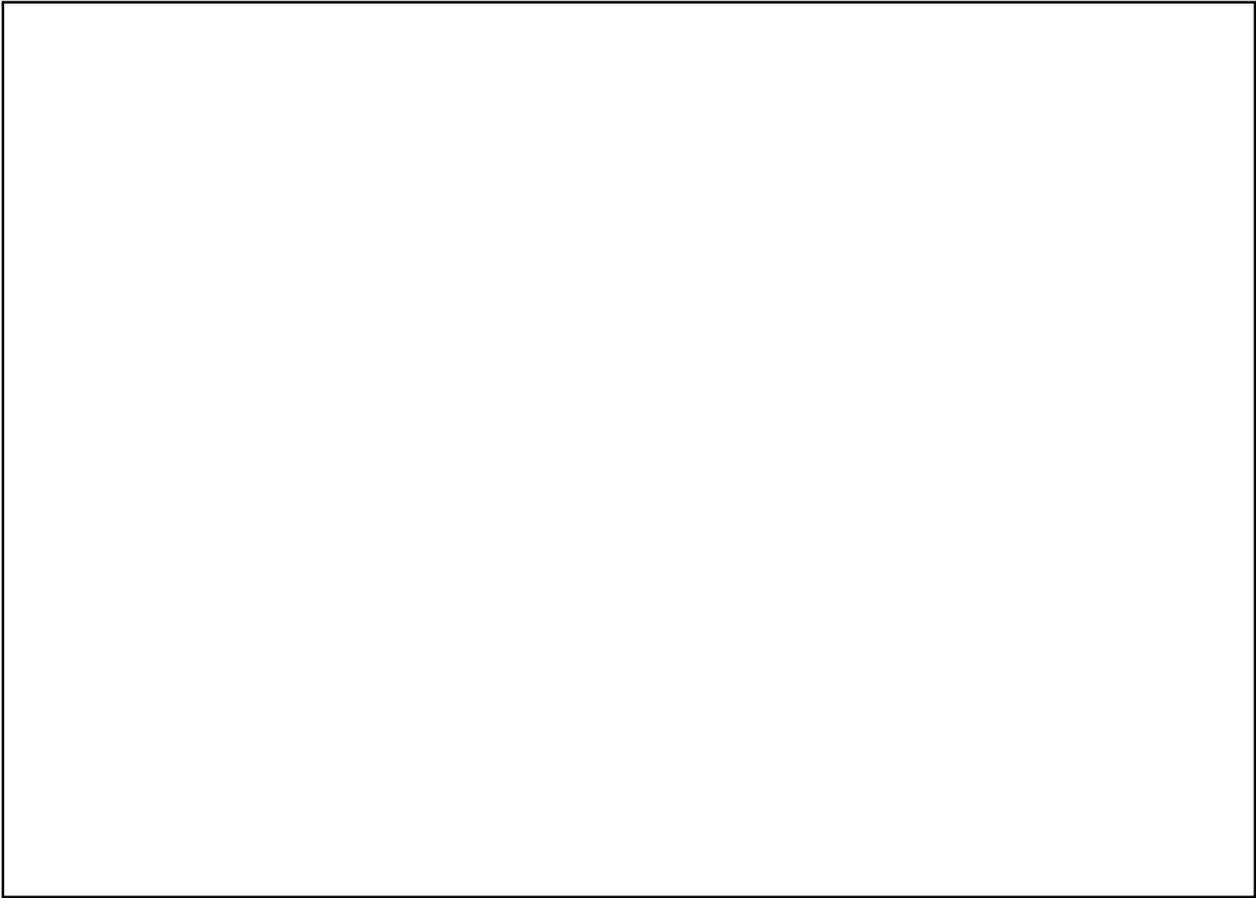
慥二八見王<sup>わ</sup>け不仕候 又右衛門<sup>大谷</sup>  
孫兵衛<sup>大谷</sup>・三左衛門<sup>有福</sup>跡をしたい見  
申度心入二御座候へ共 女儀<sup>掛算</sup>  
方<sup>と</sup>候処二 奥向江致推  
参候儀 遠慮仕 右之通

一  
迄を八慥二見届申候事  
各存分之次第 御沙汰二  
かゝり不申内 八成<sup>掛算</sup> 理  
密 仕儀二御座候 尤六人  
之者指出候書付之儀也



右同前二念を入申之由二候  
双方身躰掛之事二候へ八  
此段不珍儀二御座候 然所二  
歎方之者 内證しのはセ  
置候て 各申分取次可被

申との儀 何共権左衛門心  
底合点仕苦敷候 就夫達而  
御理申上候様二 被聞召  
両頭取次被申 頭共一同二  
大慶仕候事



一 大谷権左衛門指上ケ組九人

是又右同前之申分二

御座候 然内右九人之者共

去ル比 権左衛門ヨリ公儀江被

指出候 於此儀八段々無

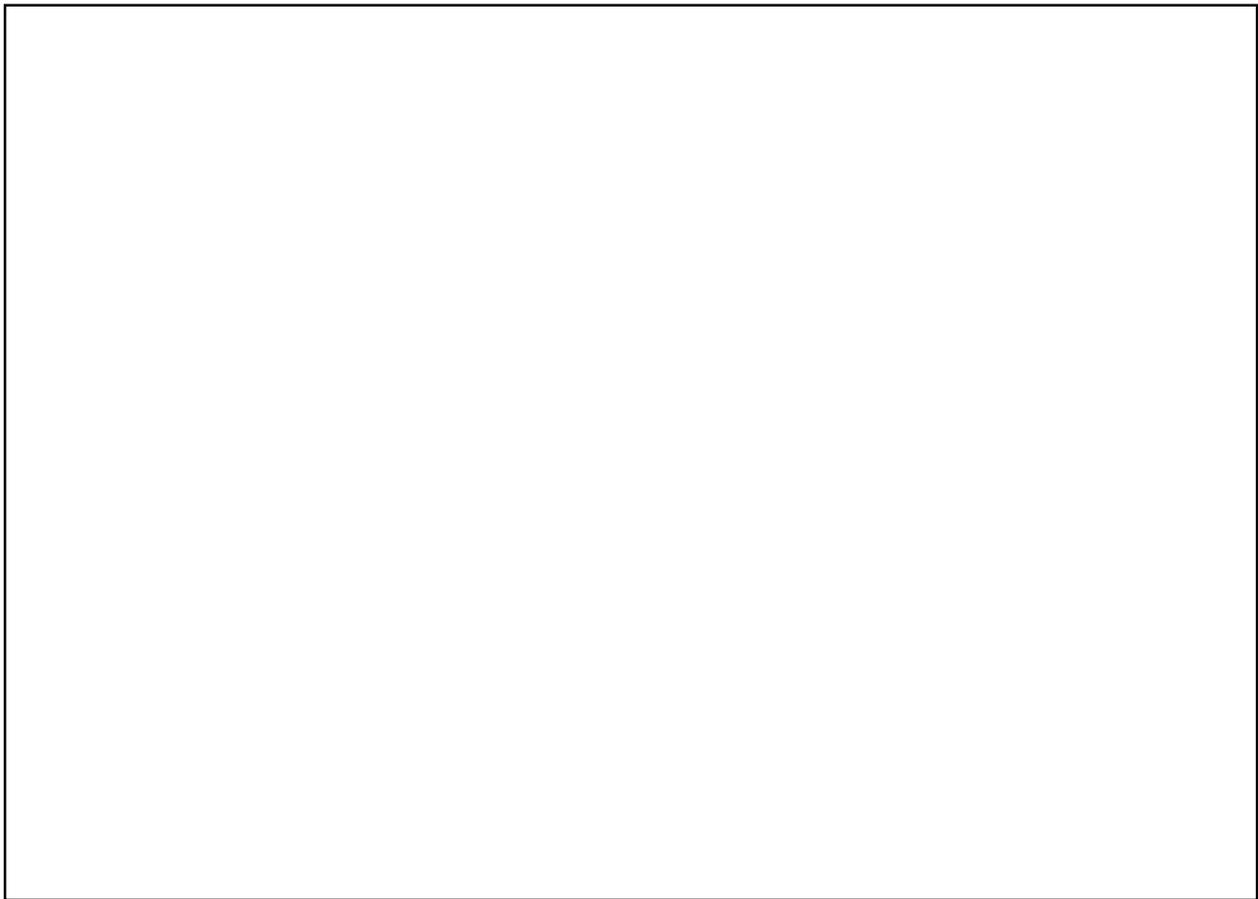
紛証據御座候 先頭心

入故 各御家来へ面目

を失候様二罷成 不及是非

次第二御座候 然上八再

先頭支配を請申候儀



於私共二八 不罷成候通儀立

仕候 其段御役人中江去ル

比申届候 然処二今度 波波田久右衛門久殿

御越二付 公儀ヨリ被成下候

を以 境三郎左衛門・堀一郎右衛門 達而

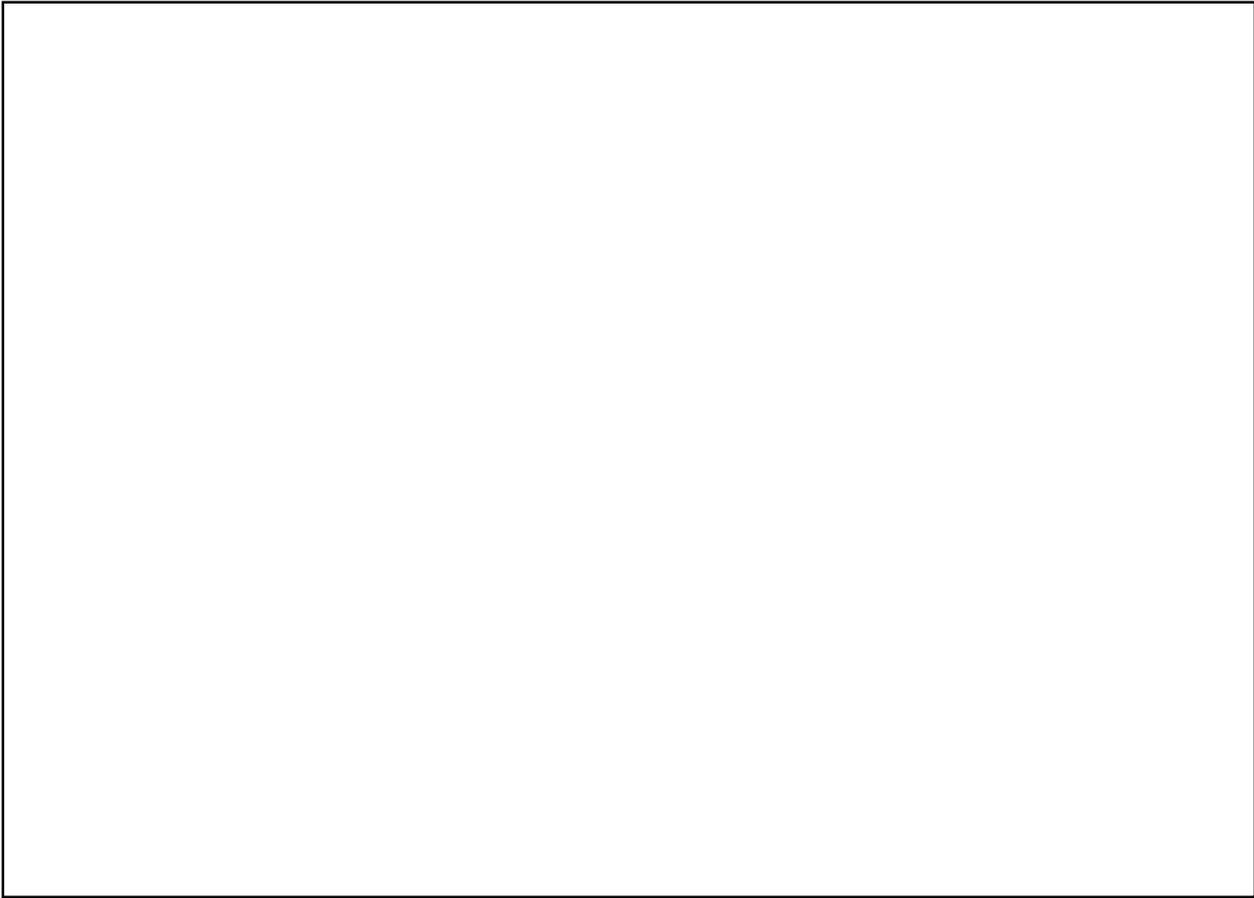
指圖之處 對 御上江 三頭

一同二取由續持之處 權左衛門支配

を請 其以後之儀八最前

之分二 權左衛門支配を請候

儀 不罷成候間 此段御間



届可被下通偏望仕候へ共

昨日彼宅二て之参掛二

御座候時八 最早一旦之取

次にても 権左衛門へ頼候儀不

罷成候段 申上候へ八 大内

権兵衛殿・松原六左衛門殿 被指出

此兩人迄右之次第申上候事

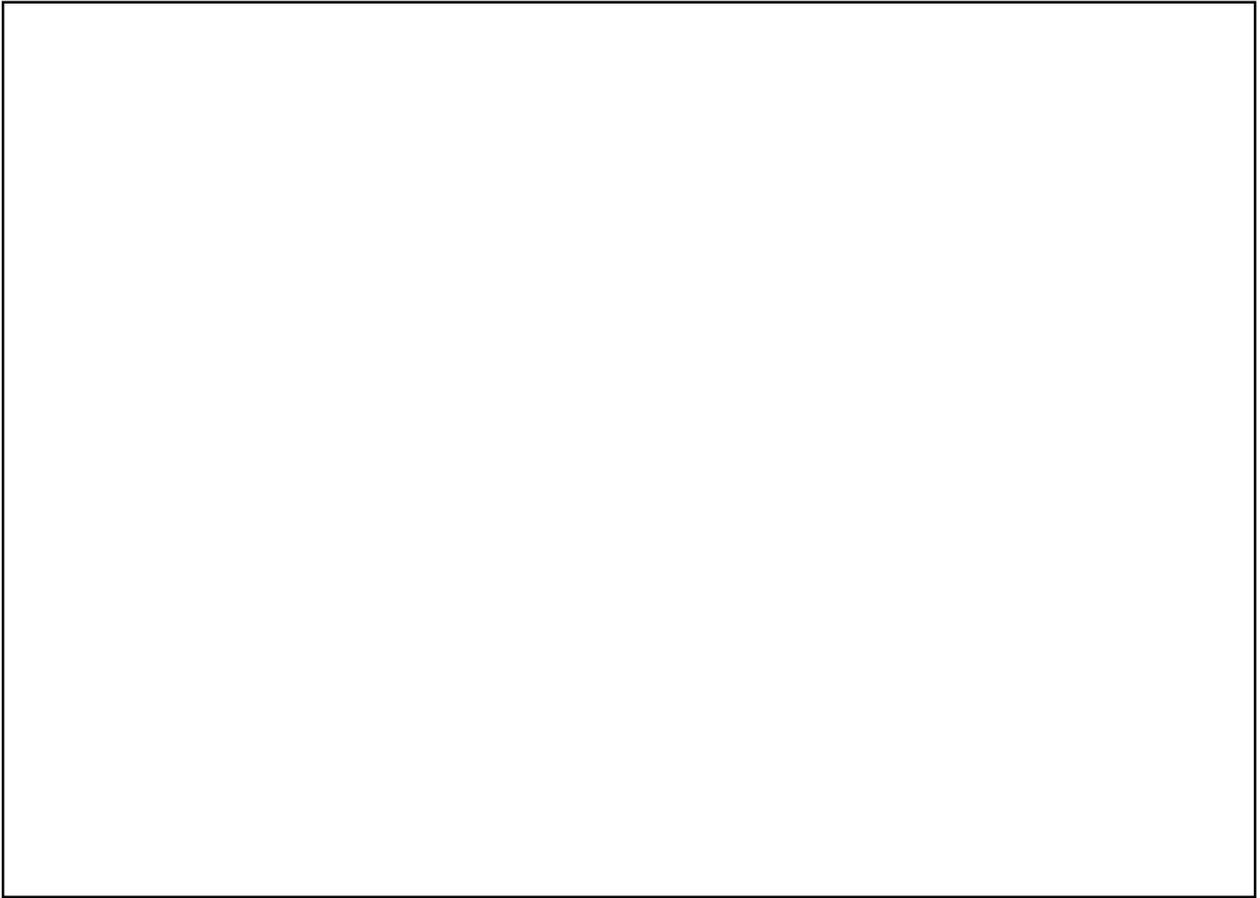
戌ノ

閏五月廿二日 境三郎左衛門 組

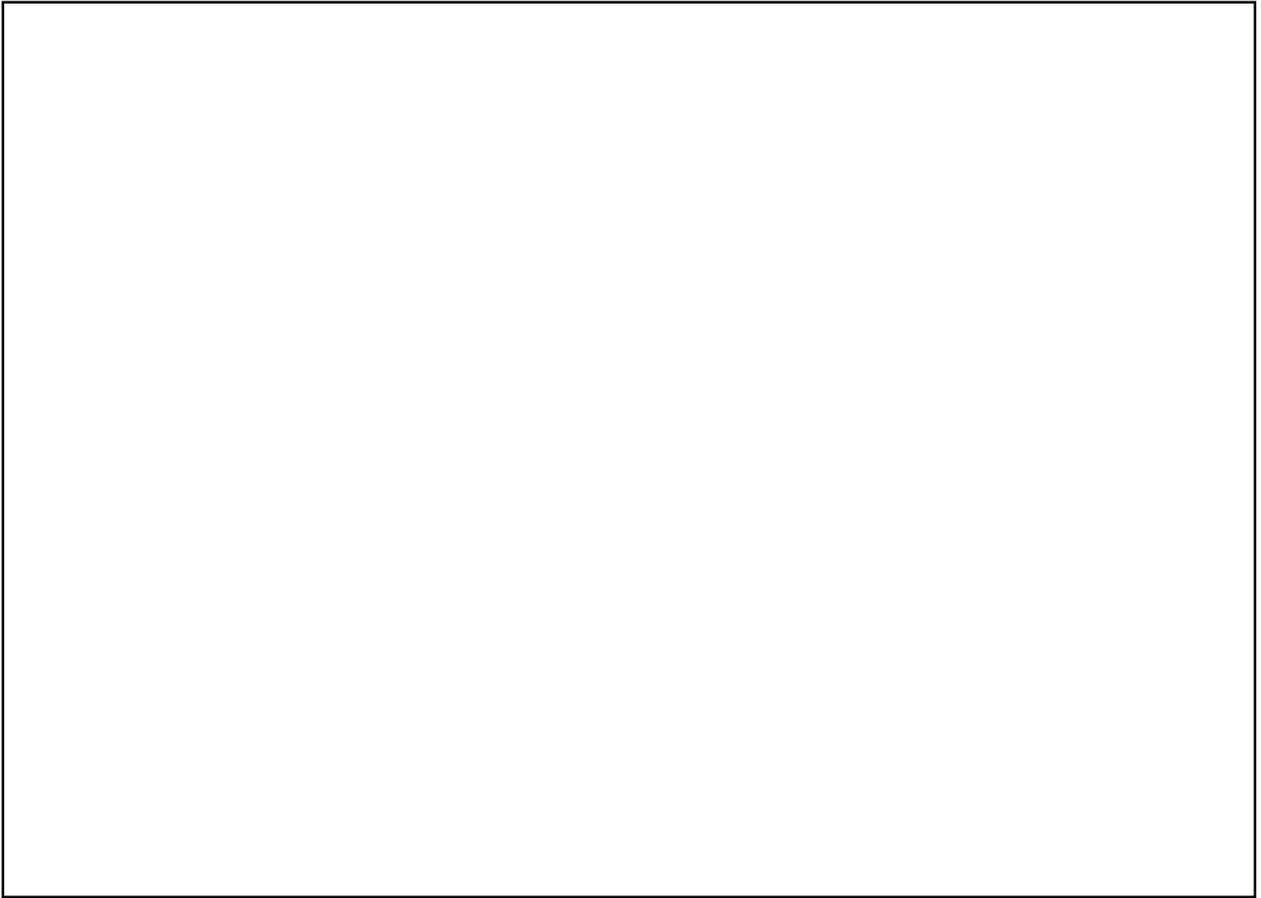
堀一郎右衛門 組

大谷権左衛門指上ケ与<sub>組</sub>

九人

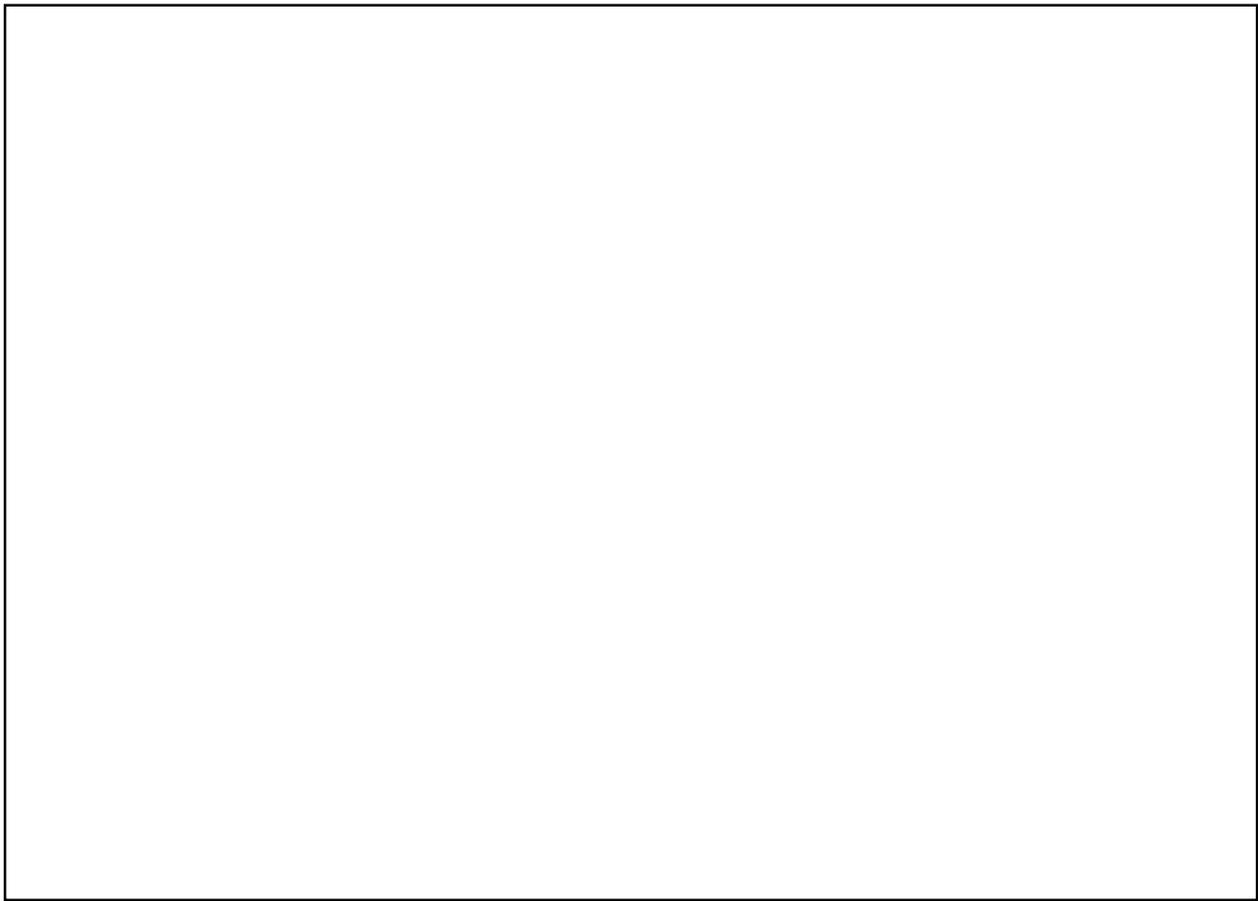


堀一郎右衛門殿  
境三郎左衛門殿  
大田権兵衛殿  
松原六左衛門殿



東京大学史料編纂所蔵 益田家文書 20・9  
**大谷権左衛門口上覚書**

**口上覚**



覚

一 旧冬元禄六冬以来四組落付不申騒動仕候二付 去ル五月十九日元禄七

松井正左衛門被指辰 四組落付之義 何とそ各四人

心遣仕候様二と益田与右衛門殿 益田八郎左衛門殿 栗山

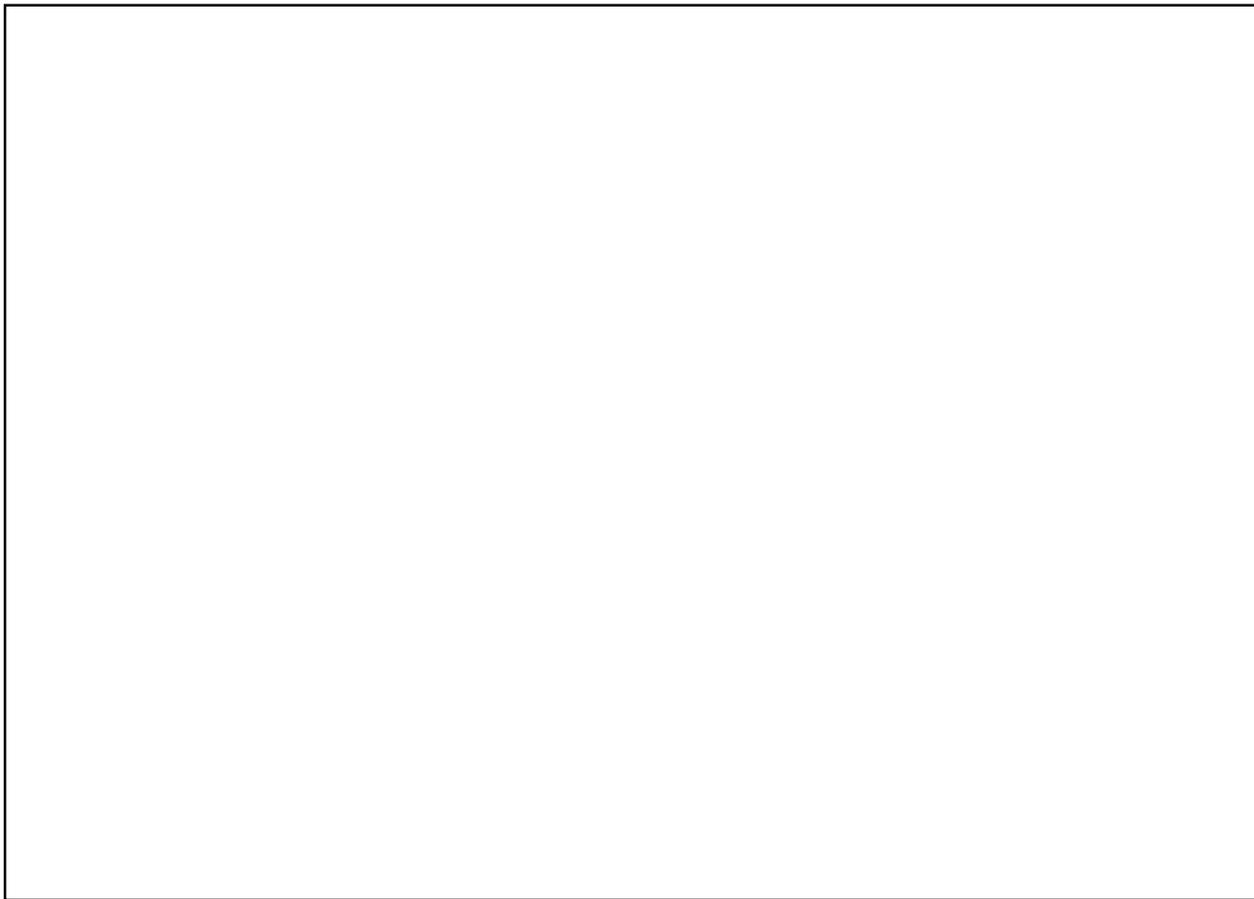
半左衛門 松井正左衛門 一同二存寄被申聞候二付 各おのあの

四人申相もつしあい 一組切り二沙汰可仕と申談 致其沙汰

候処二私江御預ケ之土共之内 十三人八去ル四月

廿八日二無子細しさいなく 一組一和仕 御奉公可申上之通

堀一郎右衛門・小原二郎左衛門 私三組一同二申出 去ル比ころ  
松井正左衛門 御内意承罷歸候上 私存分二順ぞんじぶんしたがい  
又四人落付申候 右十七人之者共 家名之儀者  
最前松井正左衛門方へ別紙二注文仕 差出候二付 **不存之候**  
切又安富甚左衛門・仲村新左衛門・大谷喜左衛門・梅地喜兵衛さてまた  
奥山忠左衛門・増野左二右衛門・椋木六右衛門・内田清右衛門  
右八人  
之儀者 私宅へ可參候まいるべく 左候て 正左衛門被指戻松井 さしもとされ 年寄  
中内意二付 組内落付候 存寄申聞筈二候間 左様ぞんじよう  
可相心得之通再三申聞せ候へ共 彼者共申候八 組あこいひんあへく  
出入之儀御尋候時者 四組一同二て無御座候へ八申候儀あたまね  
不相成之由 度々申切り候二付 私申聞せ候八 其方  
なと存分 有之 拙者申分不承段八 双方なごんぶん こゝあり  
理屈次第二て候 先手前所へ參間敷と八 不謂ます  
儀之由重畳申聞せ候へ共 承引不仕候二付何と歟うりよじりしりたがひ  
落付之ためと存 彼者共親類・内縁を以  
種々異見仕候へ共 落付不申候故 不及力二 右八人ちからあふまはず



之者共 年寄中江差出申候処ニ 皆々最前八表

向請取候儀者不相成候間 先私方ニ請持罷居候

様ニと被申候二付 理其意ニ候 然処ニ今月十四日 二

益田八郎左衛門殿・増野作左衛門・松井正左衛門 被指戻

御意之旨謹而承申候 其以後 去ル十七日ニ 益田

与右衛門殿・益田八郎左衛門殿 被申候八 境三郎左衛門・

堀一郎右衛門 両組

一同二申候八 御手前組八人之者共 両組一同二致一座

連判はつれ六人之者共との申分承候へ八 無子細

落付可申様ニ相聞へ候条 私罷出 三組一同二沙汰

可仕之由被申候二付 前々之参かゝり三組之

中ノ心外成儀共御座候へ八 御為之儀ニて

御座候時者 私内證之存分を差捨 三頭被致

一座落シ付可申之由申談候 左候処ニ 同日 境三郎左衛門

私宅江参申候八 御自分三組出相之儀 益田

与右衛門へ物語候て承申候 左候時者 三組不残落

付候段 子細無之候 御自分此間病氣の事ニ候

条 一座被罷出候二も及不申 幸拙者組 品川

三郎左衛門出相居候間 御手前組八人之者共同道

仕 御手前宅江参候様二可申付候間 左様御心得可

有之 乍此上八三組無子細落付可申候 互二可

然存候由 三郎左衛門申候二付 私申候八 委細相心得

申候 左候八、追付三郎左衛門同道仕 八人之者共参候様二

待申之由申談 三郎左衛門儀者罷歸候 いか様三郎左衛門

同道二て可参と存 夜半過迄も相待候へ共 参り

不申候 然処二三郎左衛門ヨリ手紙を以申越候八 市味村

之者共へ様子申聞せ候処二 在郷二残り居候者共を呼

出シ 得と相談仕 其上二て様子可申之通申事

二候 何も明日様子可申事之由申越候事

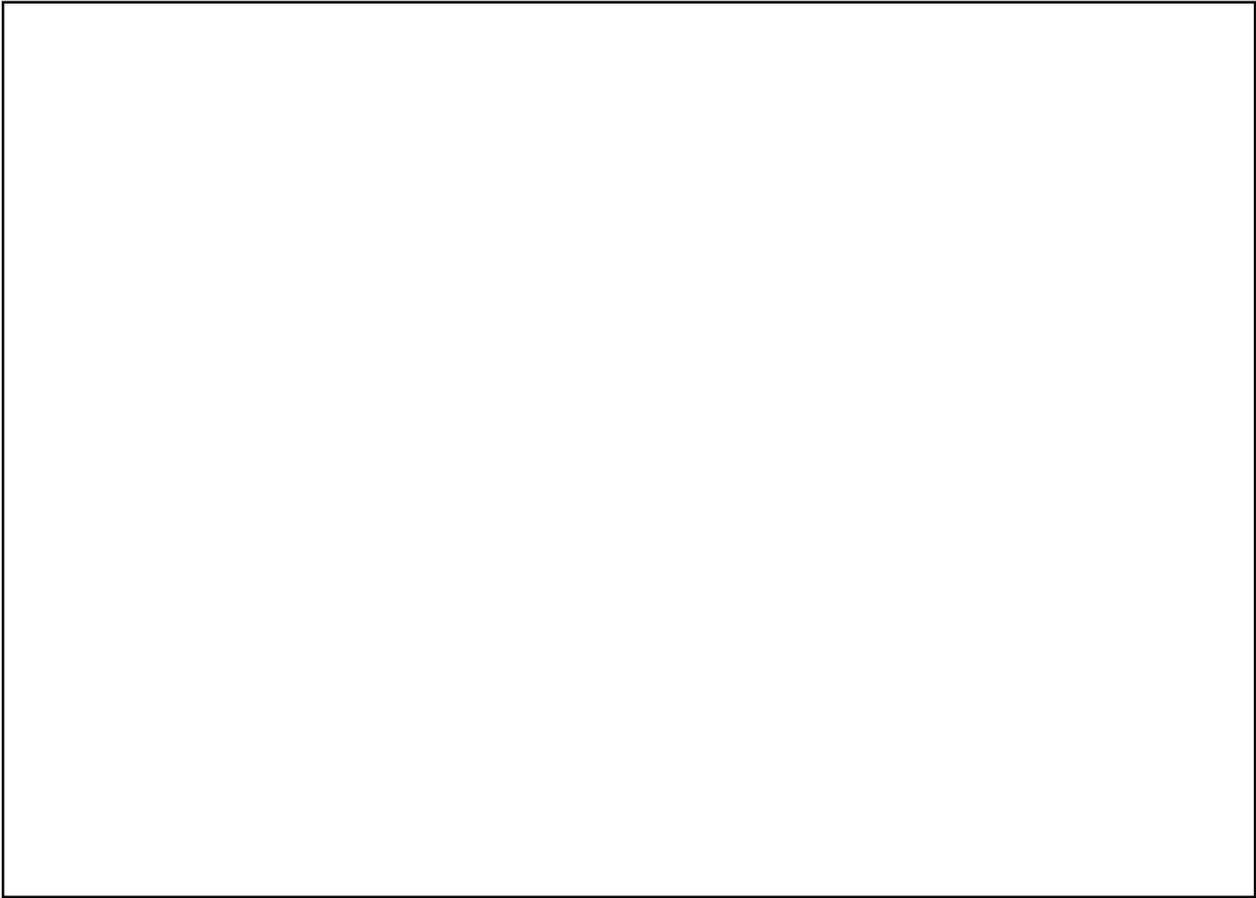
五月 翌十八日二境三郎左衛門所へ同名治右衛門を遣申候は

市味村

之者共<sup>い</sup>また私宅へ不参候 いか、仕候哉之通申

遣候処二 彼方返事二 御手前組八人之者共申

分承候処二 昨日之首尾二違候八 今度増野作左衛門殿



被指<sup>さし</sup>戻<sup>も</sup>落<sup>お</sup>付<sup>づ</sup>申<sup>ま</sup>候<sup>う</sup>様<sup>さま</sup>二<sup>に</sup> 御<sup>ご</sup>意<sup>い</sup>之<sup>の</sup>上<sup>じやう</sup> 不<sup>ふ</sup>及<sup>じやく</sup>

力<sup>ちから</sup>二<sup>に</sup>候<sup>う</sup>間<sup>ま</sup>一<sup>いつ</sup>通<sup>と</sup>り八<sup>はつ</sup>権<sup>けん</sup>左<sup>さ</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>もん</sup>殿<sup>でん</sup>宅<sup>たく</sup>へ可<sup>ま</sup>參<sup>ま</sup>候<sup>う</sup> 候<sup>う</sup>八<sup>はつ</sup>彼<sup>か</sup>者<sup>しや</sup>共<sup>ども</sup>

手<sup>て</sup>二<sup>に</sup>付<sup>つ</sup>候<sup>う</sup>儀<sup>ぎ</sup>者<sup>しや</sup>不<sup>ふ</sup>相<sup>あ</sup>成<sup>い</sup>候<sup>う</sup>間<sup>ま</sup> 左<sup>さ</sup>様<sup>さま</sup>御<sup>ご</sup>聞<sup>もん</sup>届<sup>とど</sup>可<sup>か</sup>被<sup>ま</sup>下<sup>くだ</sup>由<sup>よし</sup>

申<sup>ま</sup>候<sup>う</sup>間<sup>ま</sup> 乍<sup>しづ</sup>此<sup>この</sup>上<sup>うへ</sup>八<sup>はつ</sup>権<sup>けん</sup>左<sup>さ</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>もん</sup>組<sup>ぐみ</sup>頭<sup>かみ</sup>役<sup>やく</sup>之<sup>の</sup>御<sup>ご</sup>理<sup>り</sup>可<sup>か</sup>被<sup>ま</sup>申<sup>ま</sup>上<sup>あ</sup>候<sup>う</sup>

無<sup>な</sup>左<sup>さ</sup>候<sup>う</sup>へ八<sup>はつ</sup>三<sup>さん</sup>組<sup>ぐみ</sup>共<sup>ども</sup>二<sup>に</sup>落<sup>お</sup>付<sup>づ</sup>不<sup>ふ</sup>申<sup>ま</sup> 其<sup>その</sup>上<sup>うへ</sup>八<sup>はつ</sup>人<sup>にん</sup>之<sup>の</sup>者<sup>しや</sup>共<sup>ども</sup>ヨリ

権<sup>けん</sup>左<sup>さ</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>もん</sup>被<sup>ま</sup>差<sup>さ</sup>替<sup>か</sup>候<sup>う</sup>様<sup>さま</sup>二<sup>に</sup>の書<sup>かき</sup>付<sup>つ</sup>差<sup>さ</sup>出<sup>で</sup>筈<sup>はず</sup>二<sup>に</sup>相<sup>あ</sup>極<sup>きま</sup>り候<sup>う</sup>

自<sup>こ</sup>然<sup>の</sup>左<sup>さ</sup>様<sup>さま</sup>有<sup>あ</sup>之<sup>の</sup>候<sup>う</sup>へ八<sup>はつ</sup> 萩<sup>はぎ</sup>御<sup>ご</sup>一<sup>いつ</sup>門<sup>もん</sup>様<sup>さま</sup>方<sup>かた</sup> 権<sup>けん</sup>左<sup>さ</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>もん</sup>不<sup>ふ</sup>作<sup>さ</sup>廻<sup>まわ</sup>

之<sup>の</sup>儀<sup>ぎ</sup>被<sup>ま</sup>聞<sup>もん</sup>召<sup>め</sup>届<sup>とど</sup>と及<sup>およ</sup>承<sup>うけ</sup>候<sup>う</sup> 左<sup>さ</sup>候<sup>う</sup>上<sup>うへ</sup>八<sup>はつ</sup> 旦<sup>ただ</sup>那<sup>な</sup>様<sup>さま</sup>何<sup>なに</sup>と

思<sup>お</sup>召<sup>め</sup>候<sup>う</sup>而<sup>して</sup>も御<sup>ご</sup>作<sup>さ</sup>廻<sup>まわ</sup>不<sup>ふ</sup>被<sup>ま</sup>為<sup>な</sup>成<sup>じやう</sup>儀<sup>ぎ</sup>二<sup>に</sup>候<sup>う</sup>間<sup>ま</sup> 何<sup>なに</sup>共<sup>ども</sup>苦<sup>くる</sup>々<sup>々</sup>敷<sup>敷</sup>

存<sup>ぞん</sup>候<sup>う</sup>条<sup>じょう</sup> 権<sup>けん</sup>左<sup>さ</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>もん</sup>組<sup>ぐみ</sup>一<sup>いつ</sup>通<sup>と</sup>り落<sup>お</sup>シ付<sup>づ</sup>候<sup>う</sup>上<sup>うへ</sup> 則<sup>すなは</sup>時<sup>とき</sup>増<sup>ま</sup>野<sup>の</sup>

作<sup>さ</sup>左<sup>さ</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>もん</sup>方<sup>かた</sup>へ組<sup>ぐみ</sup>差<sup>さ</sup>上<sup>うへ</sup>可<sup>か</sup>然<sup>なる</sup>之<sup>の</sup>由<sup>よし</sup>申<sup>ま</sup>越<sup>こ</sup>候<sup>う</sup>二<sup>に</sup>付<sup>つ</sup> 私<sup>わが</sup>存<sup>ぞん</sup>候<sup>う</sup> □

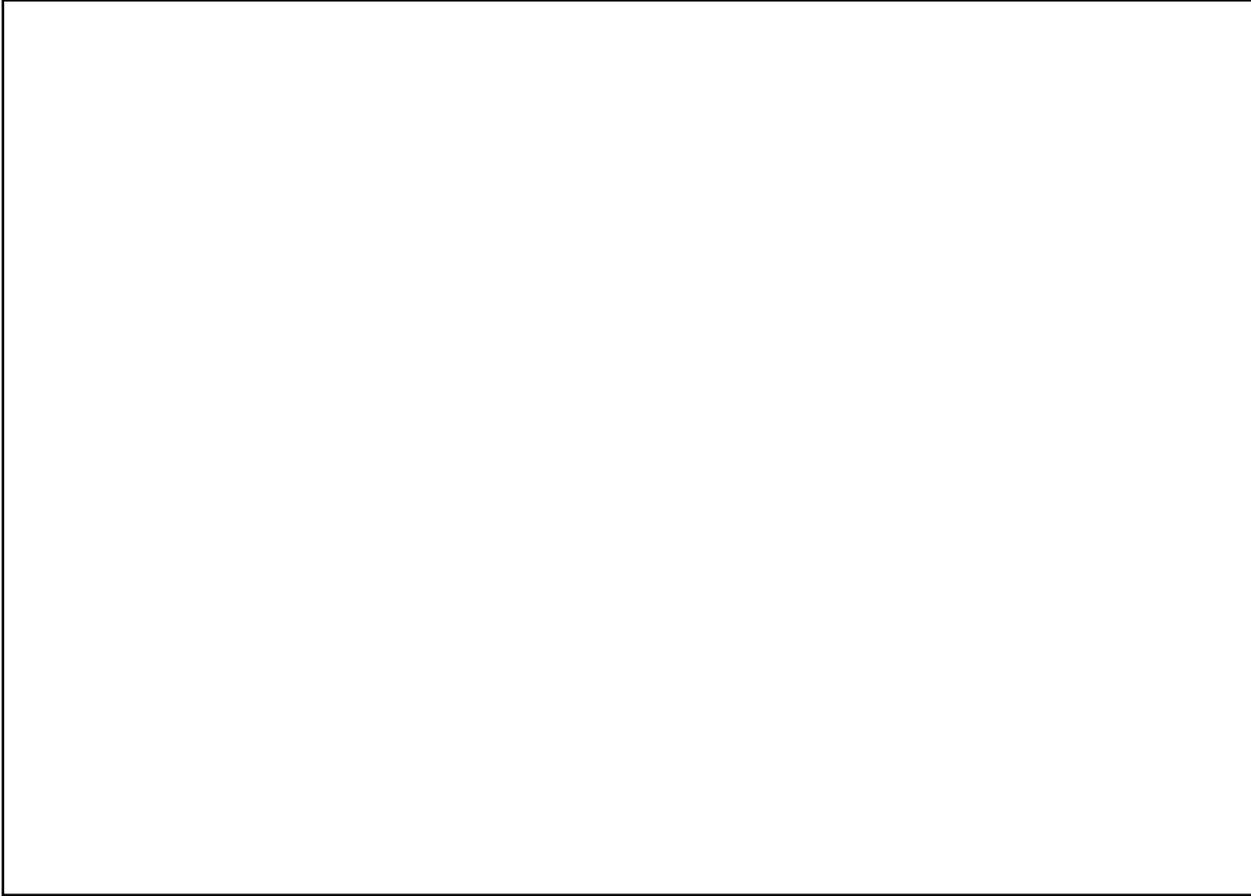
私<sup>わが</sup>手<sup>て</sup>前<sup>まへ</sup>不<sup>ふ</sup>作<sup>さ</sup>廻<sup>まわ</sup>之<sup>の</sup>段<sup>だん</sup> 何<sup>なに</sup>レ<sup>れ</sup>之<sup>の</sup>取<sup>と</sup>成<sup>じやう</sup>を以<sup>もつ</sup> 御<sup>ご</sup>一<sup>いつ</sup>門<sup>もん</sup>中<sup>ちゆう</sup>様<sup>さま</sup>

被<sup>ま</sup>聞<sup>もん</sup>召<sup>め</sup>上<sup>う</sup>候<sup>う</sup>哉<sup>や</sup> 只<sup>ただ</sup>今<sup>いま</sup>迄<sup>まで</sup>も御<sup>ごん</sup>為<sup>ため</sup>を こそ肝<sup>かん</sup>要<sup>よう</sup>

と乍<sup>は</sup>憚<sup>はかり</sup>奉<sup>ほう</sup>存<sup>ぞん</sup>候<sup>う</sup>処<sup>ところ</sup>二<sup>に</sup> 上<sup>う</sup>々<sup>々</sup>様<sup>さま</sup>方<sup>かた</sup>御<sup>ごん</sup>心<sup>しん</sup>入<sup>い</sup> 右<sup>みぎ</sup>之<sup>の</sup>通<sup>と</sup>二<sup>に</sup>

御<sup>ごん</sup>座<sup>ざ</sup>候<sup>う</sup>時<sup>とき</sup>者<sup>しや</sup> 不<sup>ふ</sup>及<sup>じやく</sup>是<sup>これ</sup>非<sup>ひ</sup>仕<sup>し</sup>合<sup>あ</sup>奉<sup>ほう</sup>存<sup>ぞん</sup>候<sup>う</sup> 併<sup>ひがし</sup>明<sup>めい</sup>白<sup>はく</sup>之<sup>の</sup>

被<sup>ま</sup>遂<sup>すい</sup>御<sup>ごん</sup>沙<sup>さ</sup>汰<sup>た</sup>候<sup>う</sup>八<sup>はつ</sup>、私<sup>わが</sup>如<sup>ごと</sup>在<sup>あ</sup>無<sup>な</sup>之<sup>の</sup>段<sup>だん</sup> 被<sup>ま</sup>聞<sup>もん</sup>召<sup>め</sup>分<sup>ぶん</sup>可<sup>か</sup>



被下と奉存候 左候而 同日一益田与右衛門殿 境三郎左衛門

同心候て 私宅へ被参候而も 三郎左衛門事私組差

上候様二とのすゝめ仕候 私申候八 得と吟味可仕と

致挨拶候 其後益田与右衛門殿 益田八郎左衛門殿ヨリも両組

落シ付可申と三郎左衛門申之由候間 私組差上

可然之由被仰聞候へ共 私存候八 御為之儀二付而

者少も忘却不仕候へ共 私組八人之者并二両組一同

仕 私頭役替り不申候時者 落付申儀不相成と申立

罷居之由二候 此段更々合点不参候 其上両頭も

此儀尤と請取 自分ノ之組落シ付ケ不相成と

申候処 切々不謂儀共二存候 萬々私へ意趣有之候

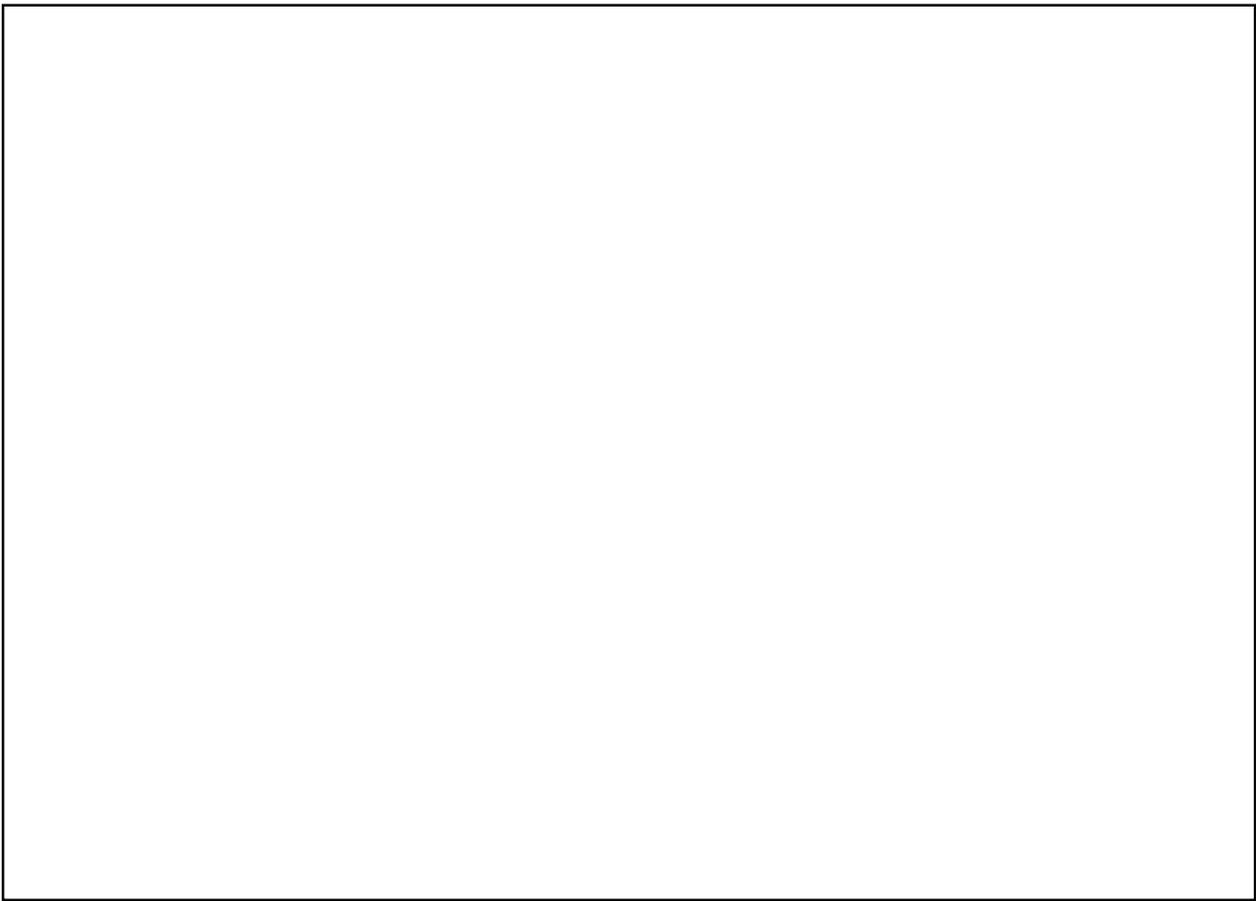
とても夫八各別之義 候条 御為と存候ハ

面々之組を八落シ付 其上二て存有之時ハ

追而可申事二候 為何子細ニて私頭役不指上候へハ

組之落シ付不相成と申候哉 甚不及合点 今者

私組八人之者共をも両組之者共かけ留 私



仕候節 一類共江も相對 不相成様二有之候段

不

謂儀と存候 三郎左衛門・市郎右衛門ヨリ組内

か様二八參間敷儀と近比ニ存候 此度之落付

私頭役替り不申候二付 三組此間納り兼候段

三郎左衛門 市郎右衛門ヨリ 定而公儀へ可申遣と存候 全ク

左様之參かゝりニて八無御座候 各御存之通ニ

私義者組内落付候之ためと存 最初ヨリ色々

心遣仕 扱又三組出相仕 苦敷所へも罷出 落し付

□とこそ申候二 又候や何之題目も無之私頭

役替り不申候へ八組之落付候事不相成と両頭并

組子共二好候段 不謂義と存候 就中私組八人

之者共 組子とてか様無筋儀を申募罷居候

段 前代未聞之儀共驚人候 私事今度組内

之取納 又八對 公儀江  之覚毛頭無御座候

処江私を目かけか様三組徒之申分仕候段 畢竟

落付候処 心外ニ存有之候て手立仕候と存候



三郎左衛門申様二定而私組八人之者共ヨリ書付指

出候て可然御座候と存候間 明白之御沙汰被仰付

可被下候 且又及承候<sup>二</sup>私組近年之支配悪敷

故 内證取續不相成候なと々々事

申出之由候 組内之儀者 古法をふまへ

控有之事二候間 私組證人并年寄共申分をも

被聞召可被下候 今度出入此かた 組取納之義

かかり覚書仕 益田八郎左衛門殿へ申出置候故 此書付

不<sup>由</sup>候 乍此上も兩組并八人之者共ヨリ無筋

共於申出二者 私申分<sup>由</sup>も委細被聞召 明白之

御沙汰被仰付 可被下候事

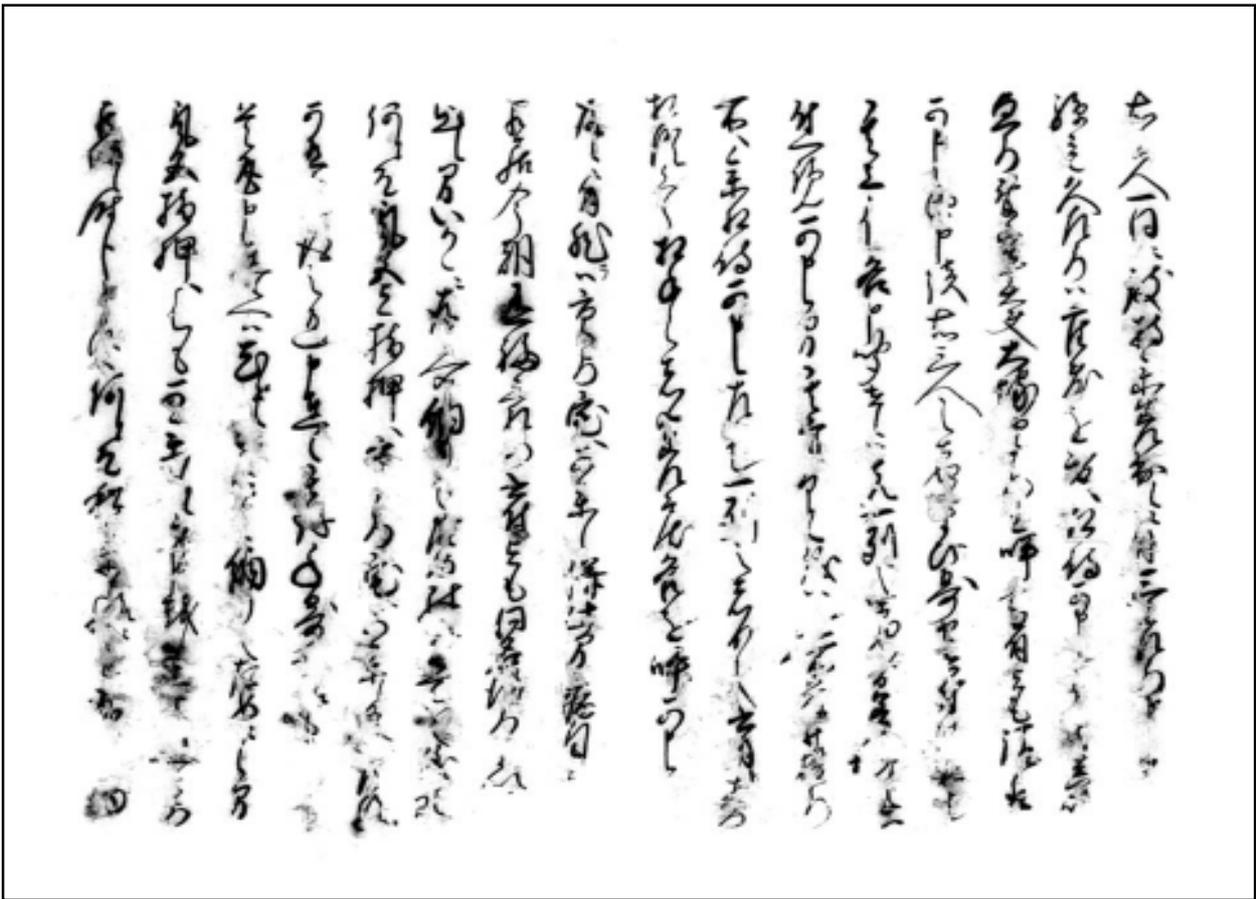
五月 同廿一日二境三郎左衛門・堀二郎右衛門 私宅へ参申

組ヨリ之書付相調申候 扱又六人者共之儀も書

付相調申候之由二候八<sup>由</sup>三人一座二て一覽仕

公儀へ可差出候由 両頭申事二候 然処二三組一列

之者ヨリ之書付 大谷又右衛門・大谷孫兵衛・波田久右衛門



右三人一同二致持参差出候二付 三郎左衛門  
 孫兵衛 久左衛門八座敷を替へ相待可申 真嶋  
 惣右衛門 栗山平太夫 大塚左衛門を呼 書付をも請取  
 可申之由申談 右三人之者共よび寄せ書付 者  
 其上にて各申聞せ候ハ 先一列之者ヨリ差  
 付一覽可申候間 其目 なんと儀ハ 藤井権左衛門  
 所へ参 相待可申候 左候て一列之者ヨリ之書付 衛門  
 相渡し候ハ、 相手之者共差戻 各を呼可申候  
 存候二付 然ラ八市郎右衛門宅へ可参候 併 此間病氣二  
 罷居 今朝有福三左衛門書付をも同名治右衛門を以  
 出候間 いかゝ二存候へ共 納り  
 何とそ気色を指押へ市郎右衛門宅へ可参  
 可有 得之通申達候 其後年寄中 江も  
 首尾申し達候へハ 尤も 納り之ため二候間  
 気色指押へ候ても可参候被申越 衛門  
 罷歸候時分 何とそ私 様七



番つかまつるへく可仕候条 夫迄八御控可有之と

待居候処二又々両頭ヨリ手紙を以

申越候二付様子承候処二両頭共二増野作左衛門所へ参

候て  権左衛門宅二て組内ヨリ之書付一覽  候て

御座候処二折節有福三左衛門勝手へ参候  大谷  衛門

付 其外人餘多罷居  波田久左衛門玄關ヨリ見

申し候二付 弥所を替へ一覽不申候へ八組内之者合点

不仕之由申出有之候通及承候 勝手二人餘多

左様可相心得之由与右衛門 平大夫 半左衛門へ申聞せ

左候而 則時彼者共罷戻り各江申候八 今度  二

付互二身上かけ之儀  候間 相  之者共首尾

不承候様二被仰付 可被下  申縮罷帰候 其  一列

者  付一覽可仕と申候 折節

私宅へ与右衛門参かゝり  通り  二付同名九右衛門

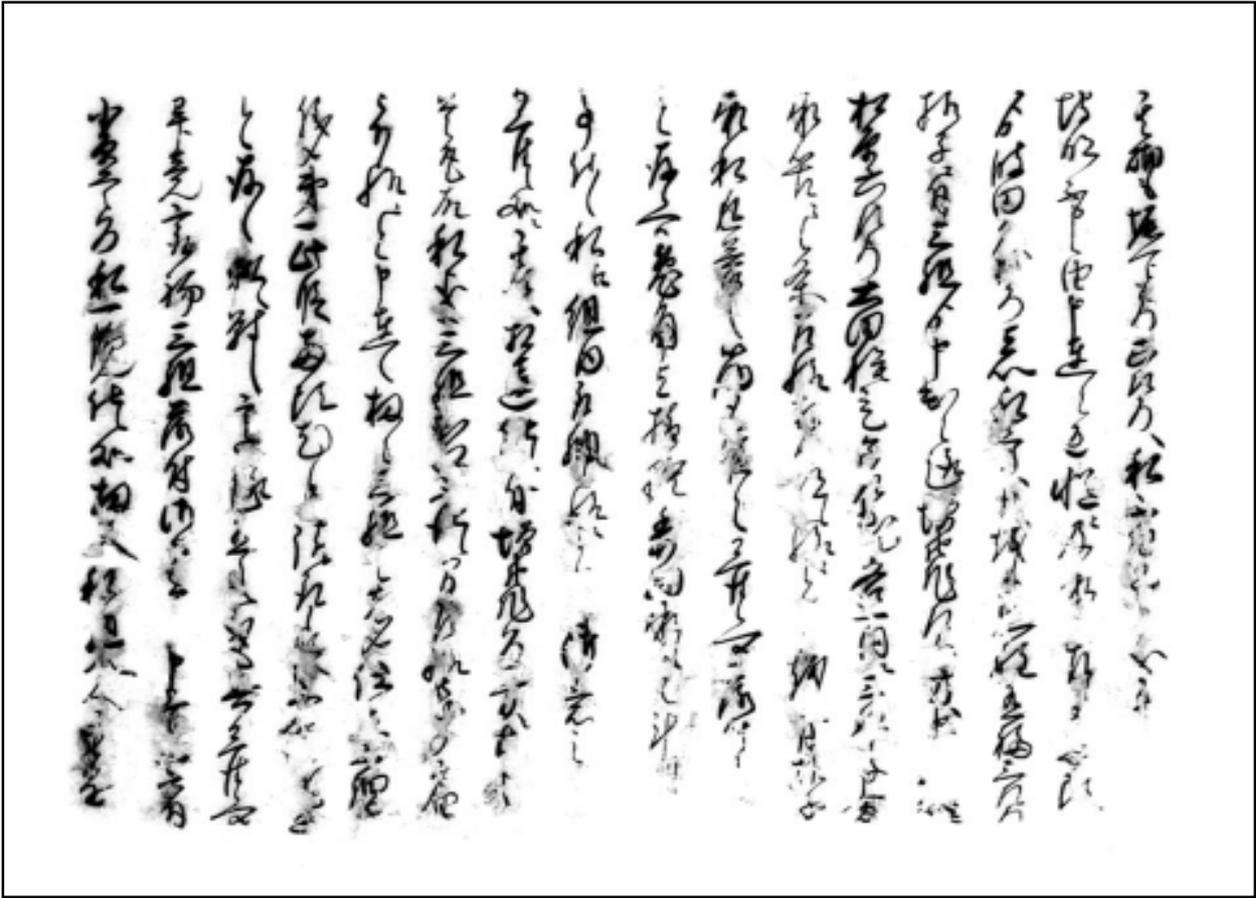
各三人居候処へ罷出申候八 有福  左衛門  無

之候八、可指戻哉之通申候二付 差返



聞せ則時三左衛門罷歸候 然処二三左衛門 参  
 又左衛門見付 大谷孫兵衛と致相談 座敷 各三人八  
 申候八只今有福三左衛門勝手へ参候て 何も首尾合  
 点不 候間 所を被替書付御一覽被下  
 処二三郎左衛門・市郎右衛門申候八三左衛門参候段不謂義共  
 就夫 其方なと申分無余儀候而 市郎右衛門宅へ  
 可参候 左候八私二も参候様二と申候二付 私  
 之御座候へ共 何と申候時八 又納り之効二相成候  
 段毛頭左様二て無之候 焼火所 組之者  
 付 勝手向二八 めて 共集り居候故  
 呼込置可申候哉 毛御了簡可  
 事をたくミ 権左衛門不作廻之由申候段不謂義存候  
 就夫 組内之者共存分御座候間 権左衛門  
 組ヨリ之書付見せ申候 不相成之由申出 埒明  
 不申通増野作左衛門へ付届任候由 作左衛門  
 宅ヨリ両頭引取候節 松井正左衛門二

候



其砌も堀一郎右衛門 正左衛門へ 私不作廻之義 由讀  
埒明不申候由申達候通 慥二及承候 左候而両頭

ヨリ波田久左衛門を以 私方へ罷越 由讀 程有福三左衛門  
様子二付 三組ヨリ申出之趣 増野作左衛門方へ申 由讀

松原六左衛門 大田権兵衛差出し各一同二三組之申分

承筈二候条 左様相心得候様二と申越候二付様子

承 私返答之筋も 由讀 にて御座候へ共 落付 由讀

と存候へ八兎角を指捨委細承候て計り 由讀

事仕候 私江組内取納候様二と 御意之 由讀

御座候処二其後相違仕候 由讀 付増野作左衛門方へ右 由讀

首尾故 私義八三組遣不仕候間 左様御聞届

被下様二と申達候 切々三組之者共仕廻不謂 由讀

儀共第一此段両頭尤と請取候段 不 由讀 廻

と存候 私へ對し意趣有之候義毛無御座候へ共

畢竟最初三組落付御 由讀 申上 由讀 付

小原二郎左衛門 私一覽仕候処 切又私組八人 由讀 被置



私手二餘り落付不申候二付 年寄中迄 [ ] 者共

御沙汰二候様二と申出候 此両条 [ ] 当存候而之

儀二て可<sup>か</sup>看<sup>み</sup>御座候と存候 切々此間私へ之仕置

引合を考へ候へ八 一人不謂儀共二存候 然処二<sup>し</sup>有<sup>り</sup>福

三左衛門 私宅へ参候首尾いか様之詰 [ ] 也

詮義不仕 私不作廻<sup>と</sup>すへく申候 路次 二て松井正左衛門

市郎右衛門申<sup>か</sup>達<sup>か</sup>之心人<sup>に</sup>不<sup>ふ</sup>俟<sup>た</sup>作<sup>ら</sup>之儀と存候 か様

之儀者組内之者共いか様二<sup>に</sup>非<sup>は</sup>道<sup>の</sup>之義申と

候ても先取しづめ 双方之申分得と承候て こそ

私不作廻と八 [ ] 申処二組ヨリ之申分則時 [ ] 三郎左衛門

市郎右衛門・増野作左衛門方へ付届仕候段者 心憎成義と

存候 私組有福三左衛門・二郎左衛門組有田彦右衛門・岩本惣

左衛門

三人之書付へ作左衛門迄其朝指出候 切又三 郎左衛門組

真嶋惣左衛門・市郎右衛門組栗山平太夫・大塚半左衛門書付之

於私宅二三郎左衛門・市郎右衛門 右両頭差出し 尤私一座

候て両頭請取申候 其心得 こそ 三左衛門私宅へ参 [ ] 候



付 縦 首尾承候とて 六人之者共書付へ返答

書加へ可申様も無御座候 第一私三左衛門を密

隠し置 一列之者之書付聞せ可申との手立

可仕哉 切々士之為肖本意を [ ] と八 [ ]

由候 三組之者共不謂義申と候ても 騒動

取納之事二候間 両頭達而差押 何事も

無之様二諸 [ ] 作廻候 [ ] 御為之義二御座候

処二 却而両頭之心入組一同二募り 兎角有之

段 御為と八被申間敷候事

一 有福三左衛門事 私宅へ参候首尾 相尋候処二

彼者申候八 私義半間六人之者へ可参と存 新

町筋上り候処二 大谷十郎右衛門あたりにて 田原甚右衛門二

相對仕候 甚右衛門申候八御自分は権左衛門殿へ八御出無之

候哉 与右衛門・平太夫・半左衛門など八権左衛門殿二被居

候由

申候二付而 夫ヨリ権左衛門殿へ参候処二 藤井権右衛門

前 道悪敷候故 草履をぬき はだしにて



権左衛門へ参候 折節門にて 波田久右衛門罷出候て相謹

申候 夫ヨリ私義者臺所へまハリ 足をあら洗い

通り候王んと存候処ニ 大谷九左衛門殿 扇子を御ふり候

故 切八権左衛門殿八奥ニ御座候物と相心得あいこころえ 奥へ通り

候へ八 御女中方御座候而 結句迷惑仕候 同日之朝

私書付持参仕候時分 権左衛門殿御事病氣故

奥座敷ニ御休ニ御座候ニ付而 罷通り懸御目ニ候

故 又其分と相心得あいこころえ 右之通ニ御座候由申候事

一 右三左衛門口上之内ニ 波田久左衛門ニ 門ニて行逢候とゆきあひ

申候八 其節私与八人者之内一兩人参候様ニと久左衛門波田

を夫ニ遣申候ニ付而 右之通ニ門ニて久左衛門ニ相對仕候事あいたい

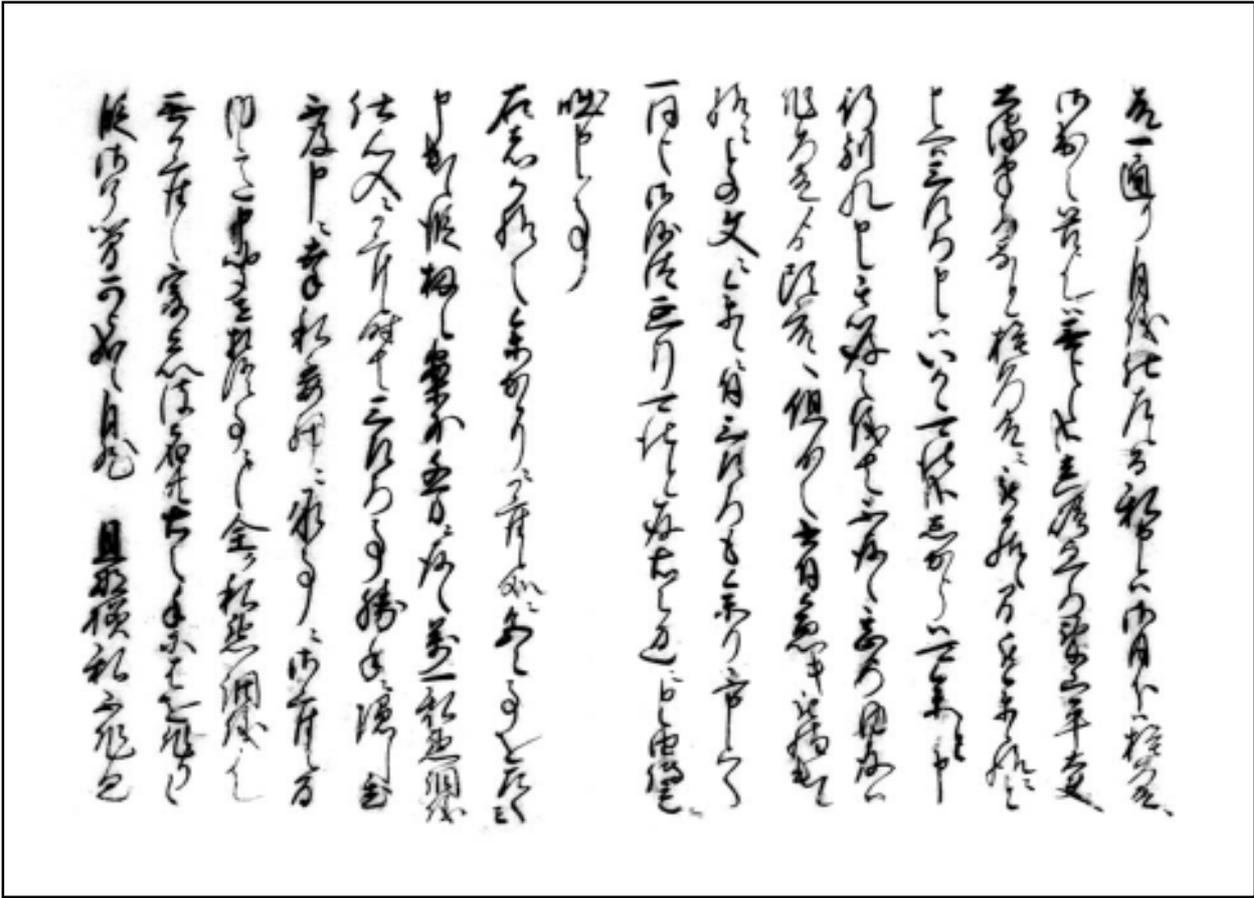
一 田原甚右衛門方江同名傳兵衛を以申遣候八 有福三左衛門ニもつじつかわし

途中ニて相對候首尾 挨拶八いか候哉と相尋候あいなずね

へ八 甚右衛門申候八 私義頭中へ増野作左衛門殿ヨリ文とかじり

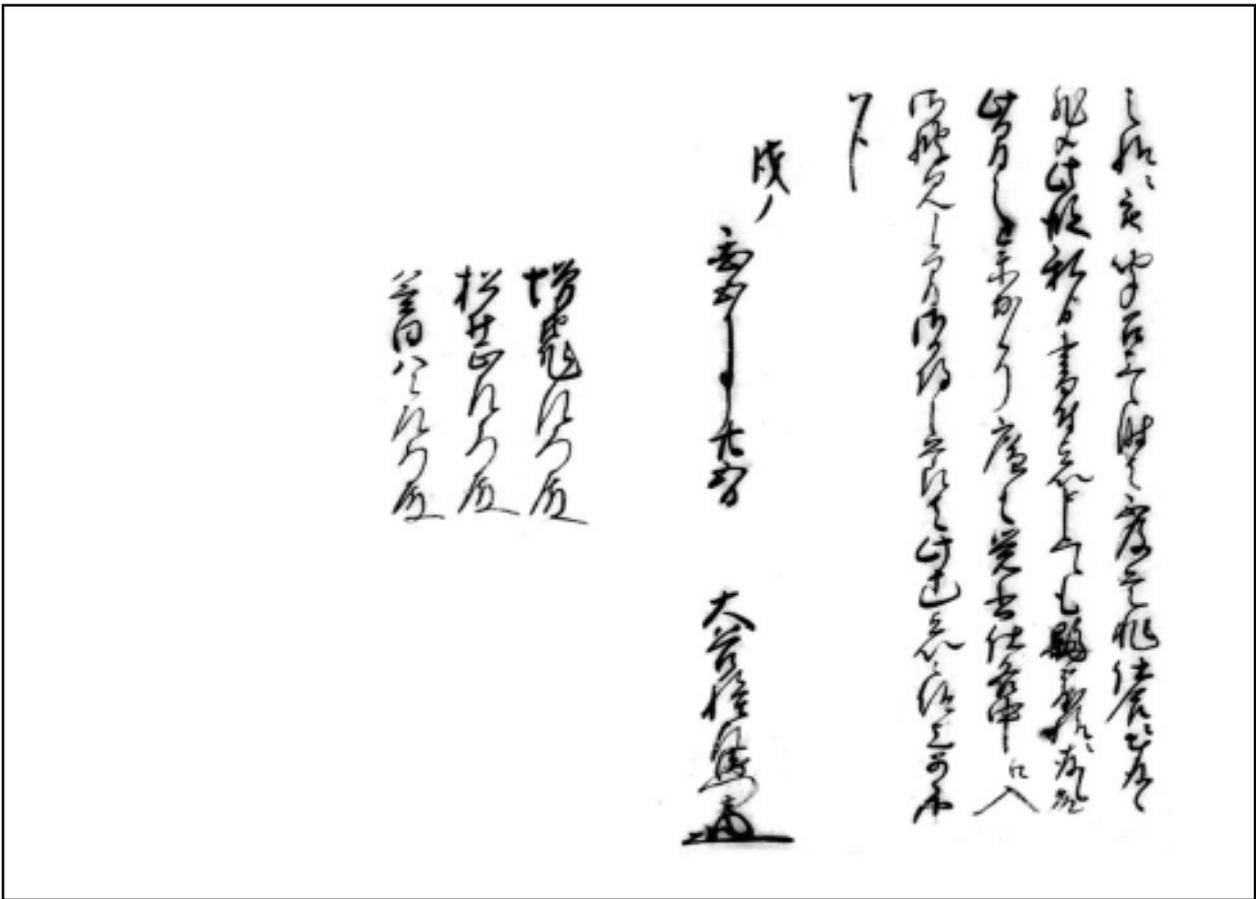
大谷権左衛門殿へ参 歸候時分 新町筋大谷十郎右衛門あたり

ニて三左衛門ニ相對仕候付 私儀八木履ニて居申候あいたい



故 一通り自儀仕（辞儀） 左候而 私申候八 御自分八権左衛門殿へ  
 御出之筈（おいで）ニテ八無之候哉 真嶋与右衛門 栗山半太夫  
 大塚半左衛門（大谷）など権左衛門殿二罷居候間 罷参候様二と  
 申候へ八 三左衛門申候八 いかゞ可仕哉 しから八可参（まいるへし）と申  
 行別れ申候 其心得之儀者不存候 甚右衛門内（田原）存八  
 作左衛門殿ヨリ衆へ 組ヨリ之書付急キ被指出候  
 様二との文二参候二付 三左衛門も参り不申候八  
 一同之御沙汰延引可仕と存 右之通二申候由 傳兵衛二  
 咄申候事（はなし）  
 右者か様之参かゞり二御座候処二 色々事をたくミ  
 申出候段 切々案外千万二存候 萬一私悪調儀  
 仕心入二御座候時者 三左衛門事勝手二隠し置  
 不及申二 幸 私委細二承事二御座候間  
 内意申聞せ相證（済力） 候事二候 全ク私悪調儀二て  
 無御座候 爰を以 彼者共右之手には注1を作りし  
 段御了簡可被成候 自然注2 旦那様注3 私不作廻

\*1 手には = 「てにおは」と同じ。辻褄。  
 \*2 自然 = 万が一。  
 \*3 旦那様 = 益田就賢。益田家当主のことを家臣は「旦那様」と呼んだ。



之様ニ被聞召上候時者 不及是非 仕合ニ奉存候  
 然共 此段私ヨリ書付を以申上候も 夥敷様ニ存候故  
 此間之参かゝり 廉々覚書仕 各中江入  
 御披見候間 御尋之節者 此辻を以被仰上 可被下候  
 以上

戌ノ  
 五月廿五日  
 大谷権左衛門

増野  
 松井  
 益田

元禄七年

閏 五月廿五日 大谷権左衛門 花押

増野 作左衛門殿  
 松井 正左衛門殿  
 益田 八郎左衛門殿



東大史料編纂所蔵「益田家文書」

51-124-16

乍返事致拜

見候 然八 大谷権左衛門

方ヨリ指出候書付

之次第 御理り

之品も無御座

候得共 九人者

ヨリ権右衛門手前之

儀 段々申出候二

付而 覚書仕

各様迄指出候

由 左様も可有

御座候 於此段八

存寄無之儀二

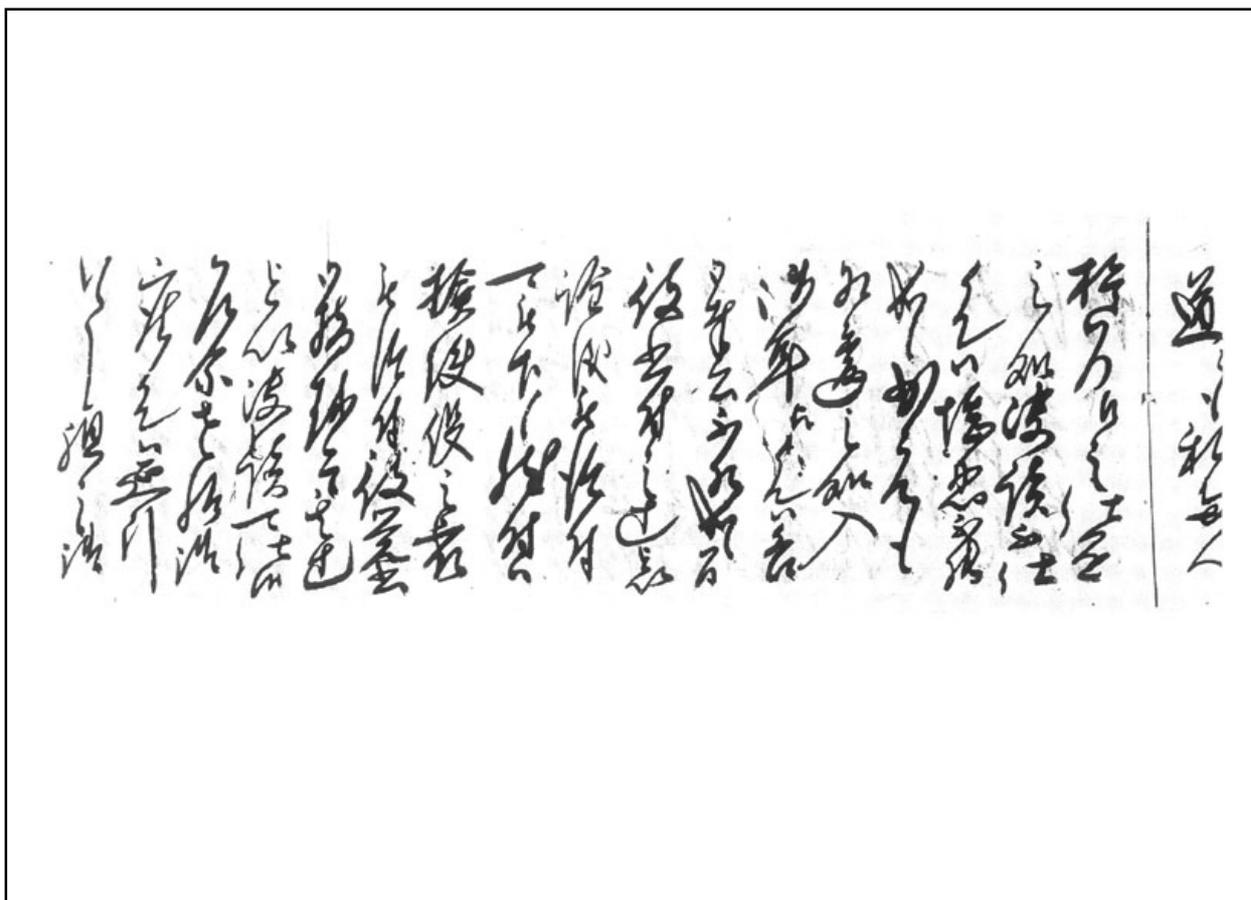
御座候 然處二

各兩人ヨリ権左衛門

方江之仕懸之



儀 書加へ候通被仰  
 下候 此儀二付而  
 権左衛門方へ承合候  
 處二 返答候之  
 次第 首尾不  
 合之儀有之候  
 彼書付之趣  
 以之外相違之  
 儀申出候通及承  
 此段被達  
 上聞二被成 御尋候  
 時八不謂儀 申  
 分可仕候得共  
 若シ不被成御尋候  
 時八 私共二迷恐  
 仕儀二候 何之  
 道二モ私兩人



権左衛門江之仕懸

之処 決談不仕

候て八堪忍不罷

成候 少二ても

相違之処 入

御年(念)を候て八各

御奉公不相成候間

彼書付之辻を以

詮議被仰付

可被下候 然時八

検使役之衆

被仰付 彼覚書

御指越候て 其辻

を以決談可仕候

乍尔 左様御

座候て八延引

いたし候組之御



沙汰之ささわりに  
も可相成様二存候  
間 願八各兩人  
権左衛門儀も御地  
被召出被下候様二  
被成御沙汰可被下候  
右両条之處  
御沙汰二も難被  
及候八返事次第  
権左衛門方直談  
之上 何之道二と  
埒明申候ヨリ外  
参筋無御座候  
間 左様御心得  
可被下候 依之  
又々以飛札を  
得御意候 恐惶  
謹言



堀市郎右衛門  
花押

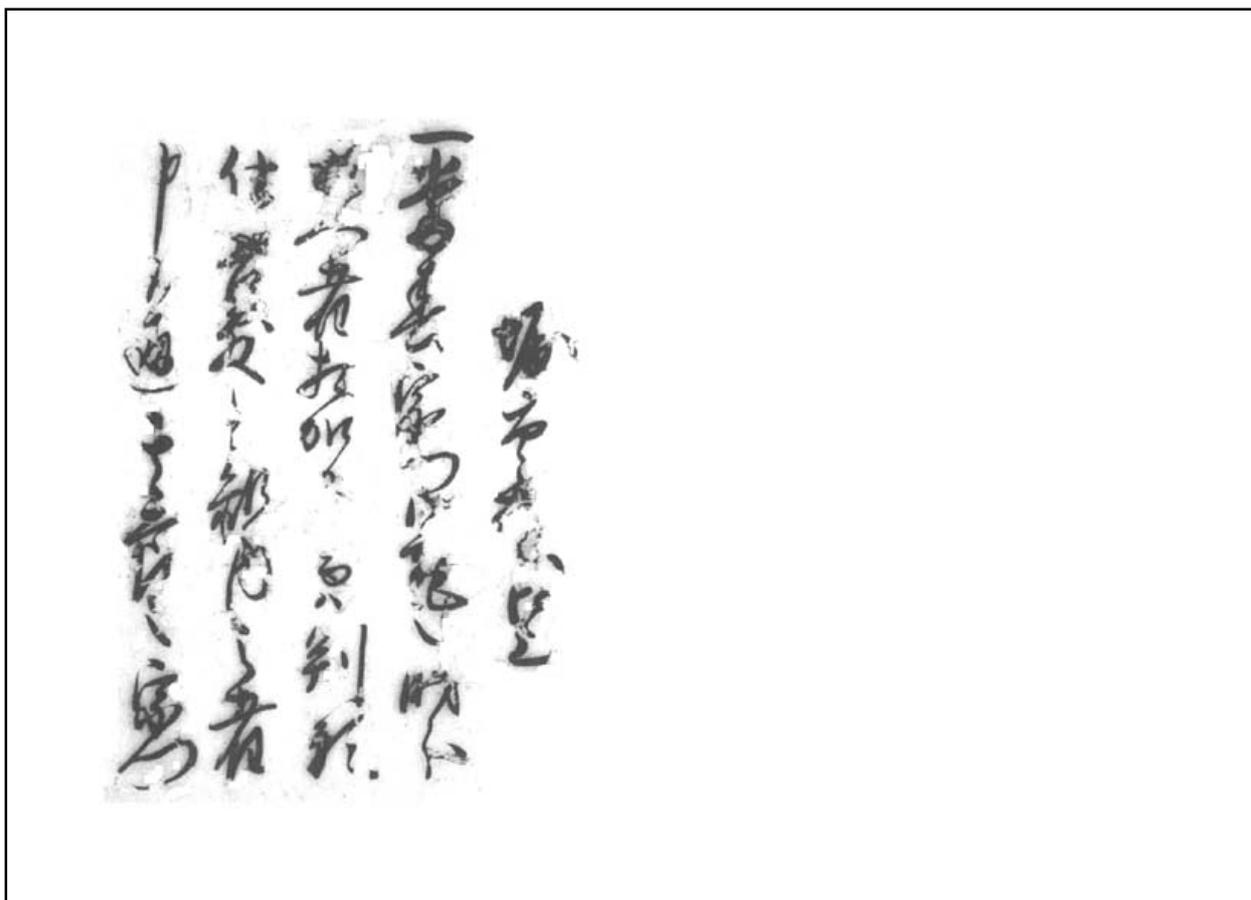
閏  
五月廿七日

境三郎左衛門  
花押



益田又左衛門様  
益田八郎左衛門様  
増野作左衛門様

益田又左衛門様  
益田八郎左衛門様  
増野作左衛門様



東京大学史料編纂所蔵 「益田家文書」  
20 | 19

【注】この文書の写本箇所は 16-14 の 11頁以下とほぼ同文

堀市郎右衛門口上書

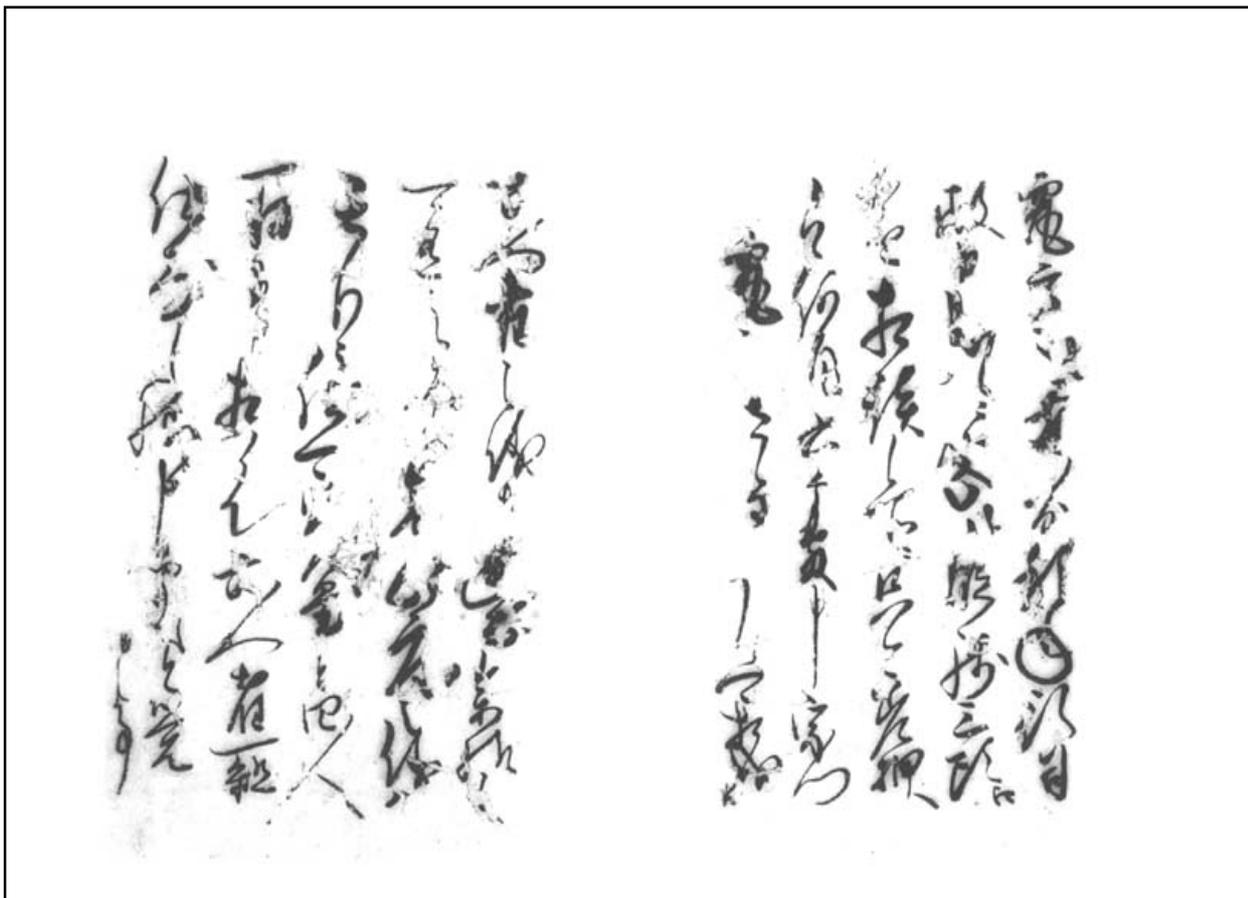
堀市郎右衛門口上

— 元禄七春 当春宗門御究之時分

六人者相加<sup>て</sup>候而八判形

仕苦敷<sup>つかまつり</sup>とて 組内之者

申候通 其節之宗門



究方之者ヨリ 私年行司

故申出候二付 此段残三頭江

遂相談候所二 只今差押へ

候八、何角 六ヶ敷申 宗門

御究二もさわり二可相成候

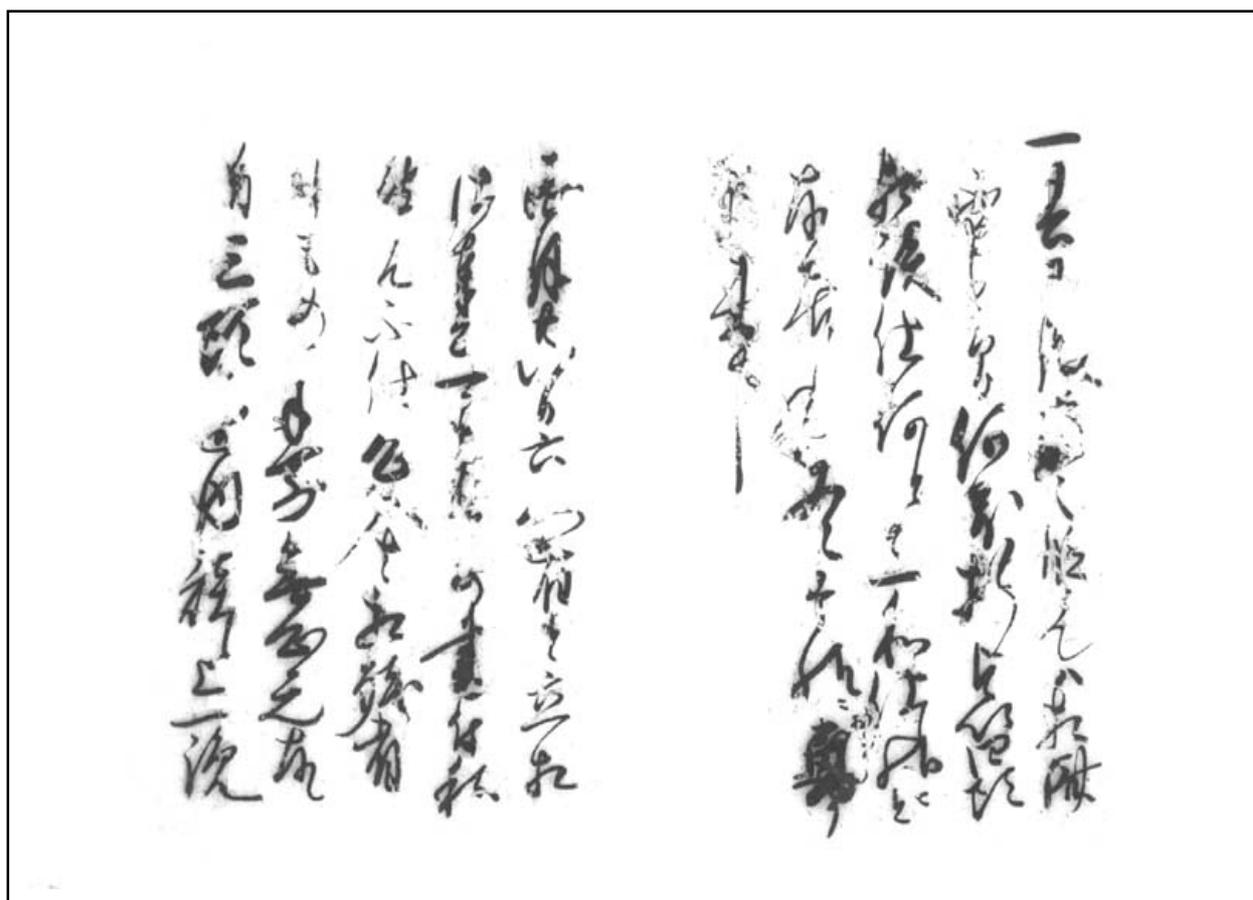
六人者之儀者 追而 参様七

可有之候間 先 此度之儀八

其分二仕 可差置と四人

一同二申相候て 六人者一組二

仕置候様二申聞候と覚申候事



一 是已後 右之段ニテハ 相濟  
 不申候間 何茂折を以 四頭  
 相談仕 何とそ 一和仕候様ニと  
 存居候内 又々か様ニ興リ  
 申候事

一 四月廿八日 六人者と立相  
 御奉公可申上との書付 私  
 披見不仕心入者 相残者  
 ともの手前 無心元存候  
 付 三頭遂内談候上 一覽

一 是已後 右之段ニテハ 相濟

不申候間 何茂折を以 四頭

相談仕 何とそ 一和仕候様ニと

存居候内 又々か様ニ興リ

申候事

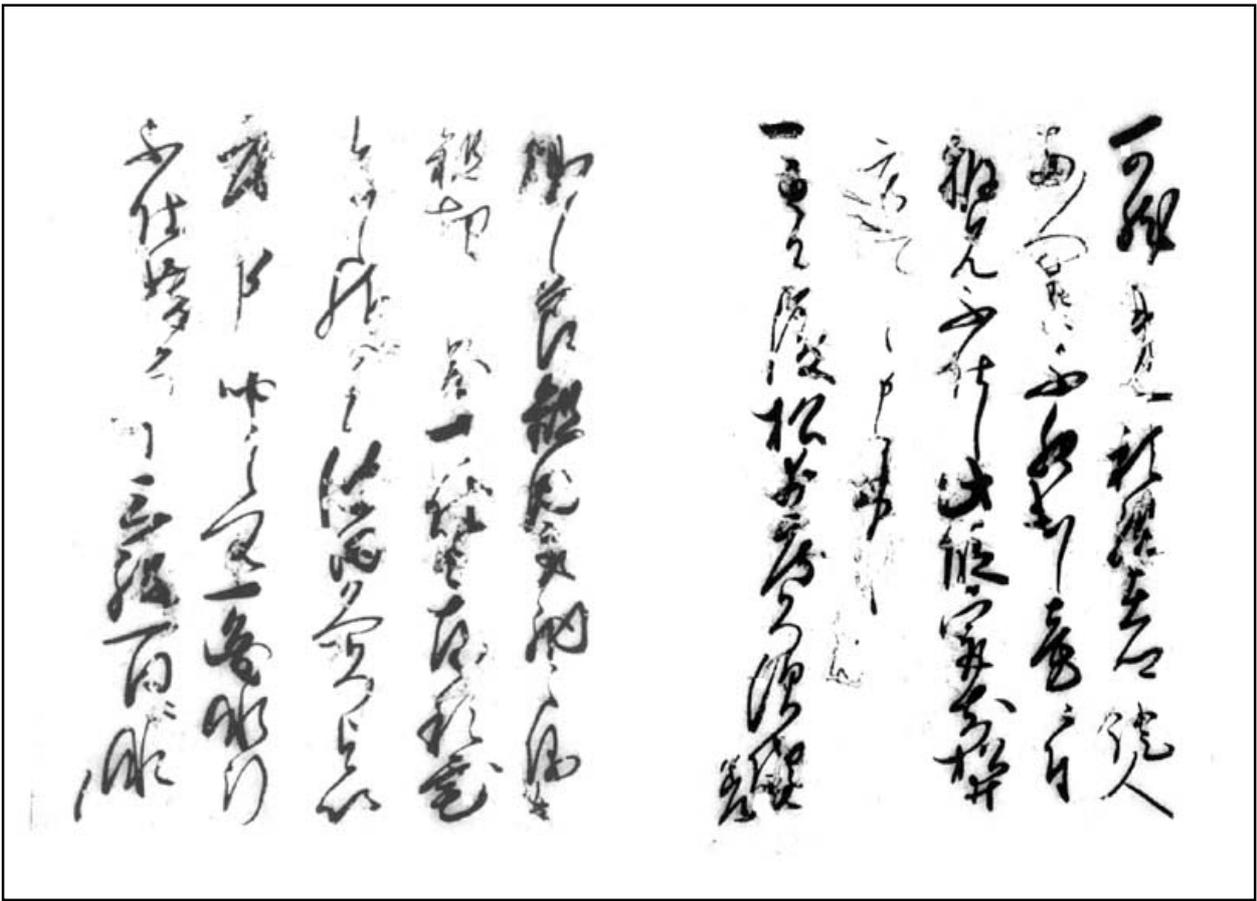
一 四月廿八日 六人者と立相

御奉公可申上との書付 私

披見不仕心入者 相残者

ともの手前 無心元存候

付 三頭遂内談候上 一覽



一 可然候 第一私組在郷之證人  
 兩人共二不罷出候旁二付  
 披見不仕候 此段最前 松井  
 庄左衛門へ申候事  
 其已後 松井庄左工門 須佐被差

越候節 組内取納之儀者  
 組切に茂可仕候 尤私宅  
 へ参候様二と 波田久左衛門を以  
 度々申聞候へ共 一圓承引  
 不仕 兎角三組一同二承候

可然候 第一私組在郷之證人

兩人共二不罷出候旁二付

披見不仕候 此段最前 松井

庄左衛門へ申候事

其已後 松井庄左工門 須佐被差

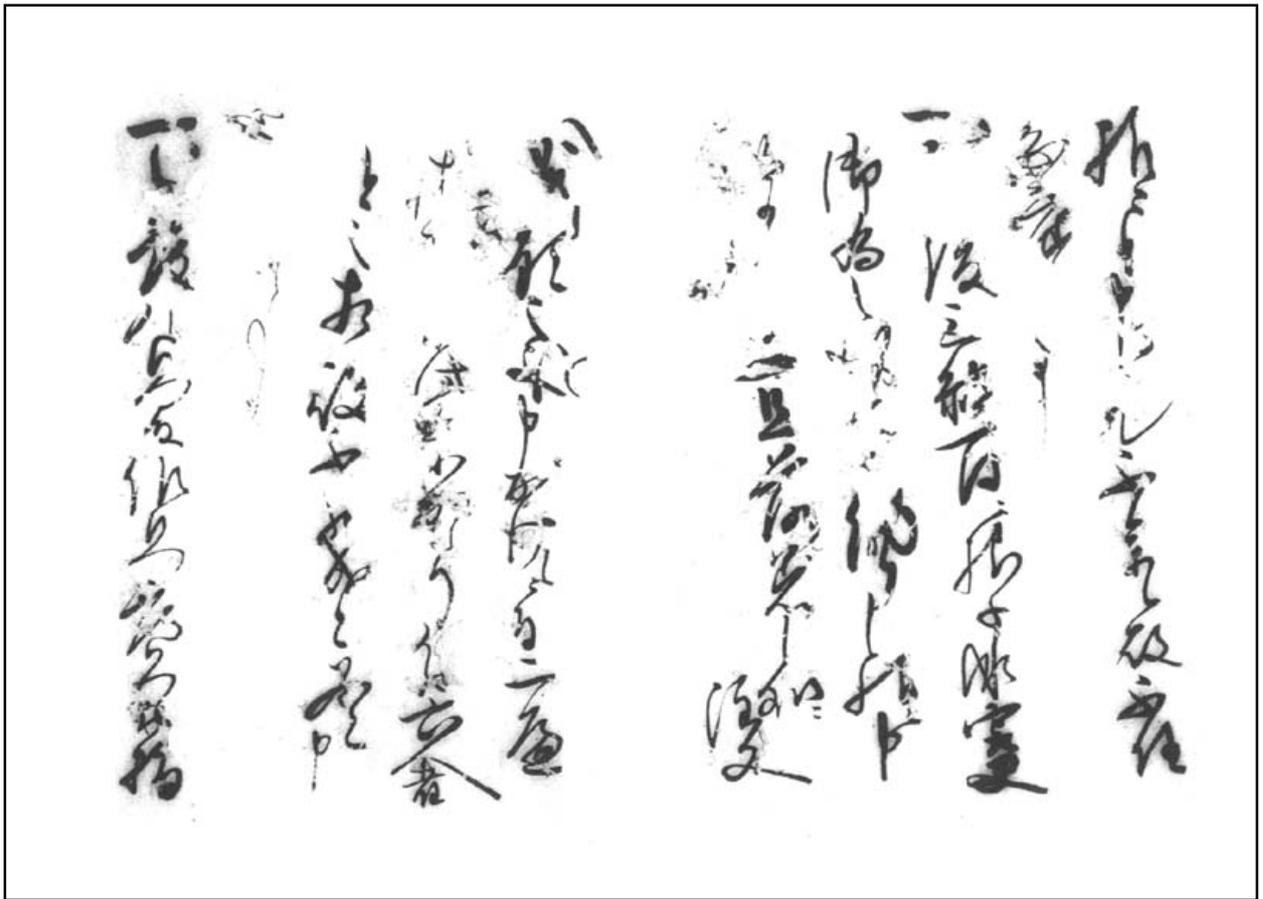
越候節 組内取納之儀者

組切に茂可仕候 尤私宅

へ参候様二と 波田久左衛門を以

度々申聞候へ共 一圓承引

不仕 兎角三組一同二承候



様ニと申候て不参候故 不任

心底候事

其後三組一同二様子承 最早

御為之儀候間 治り候様ニ申

候付 旦落着候処ニ注文

△判形之義申かけ候ニ付 二遍

發仕 此参加よりにて八 六人者

と之相役 不罷成と答へ申

募候事

今度 八郎左衛門殿 作左衛門 庄右衛門 被指



申候而八 猶以助候様二と重々

申聞せ候得共 申切候二付而 中人を

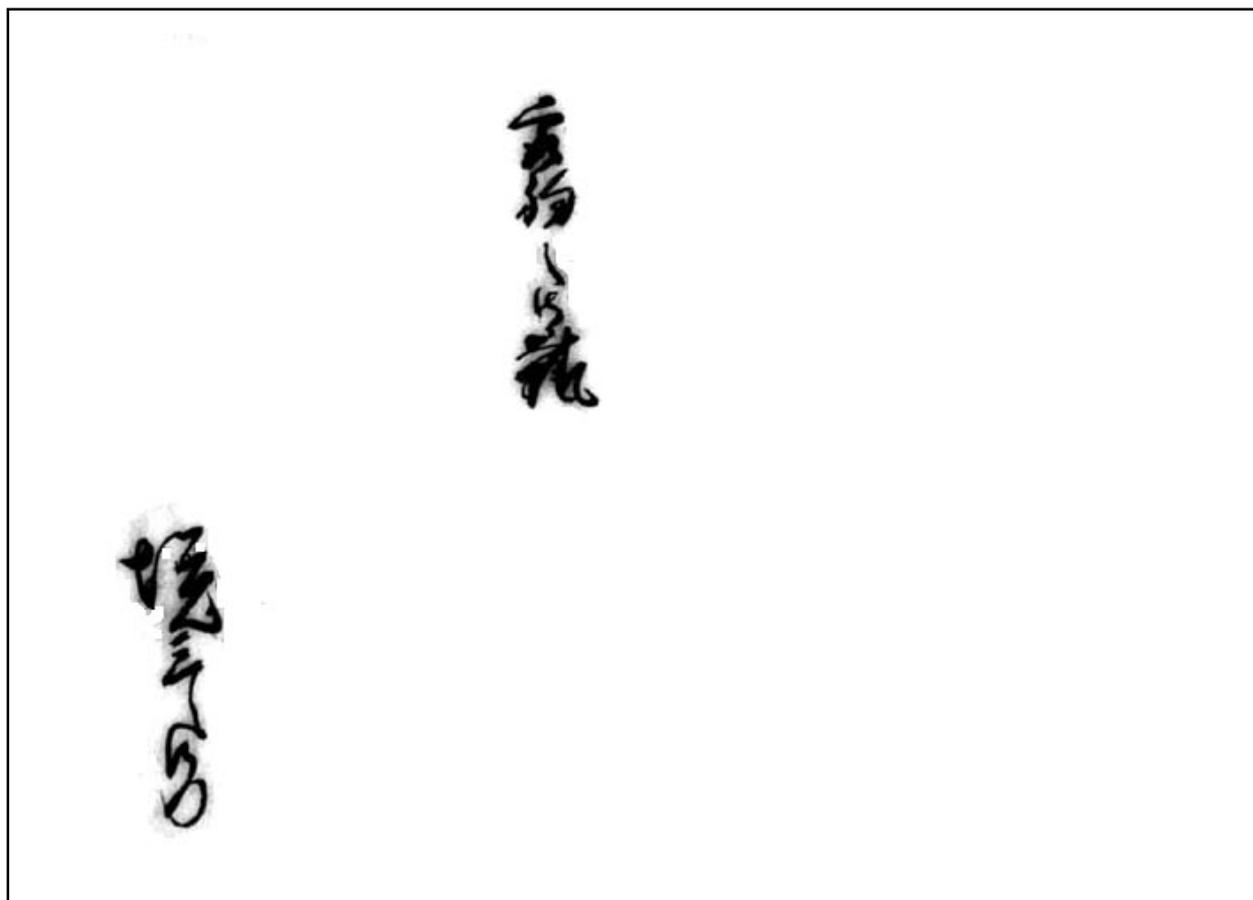
立候て異見仕せ候へ共 只今之

参かゝり二て八 始終御奉公

不相成之由申切り 不任心底候事

戌ノ

閏五月廿九日 堀市郎右衛門 花押



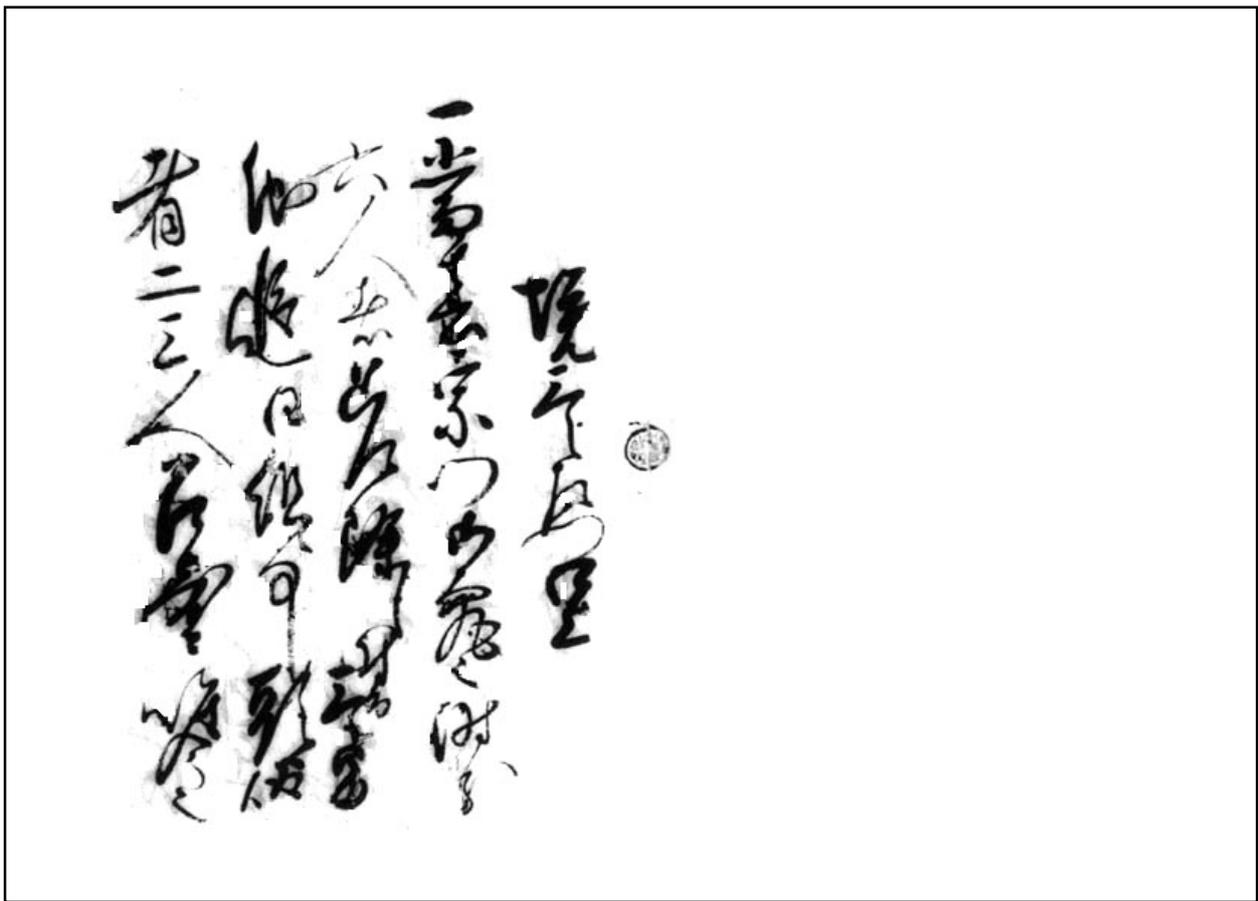
東京大学史料編纂所蔵「益田家文書」  
31<sup>W</sup>

境三郎左衛門口上覚

【表紙】

最初之御究きわめ

境 三郎左衛門



境 三郎左衛門口上

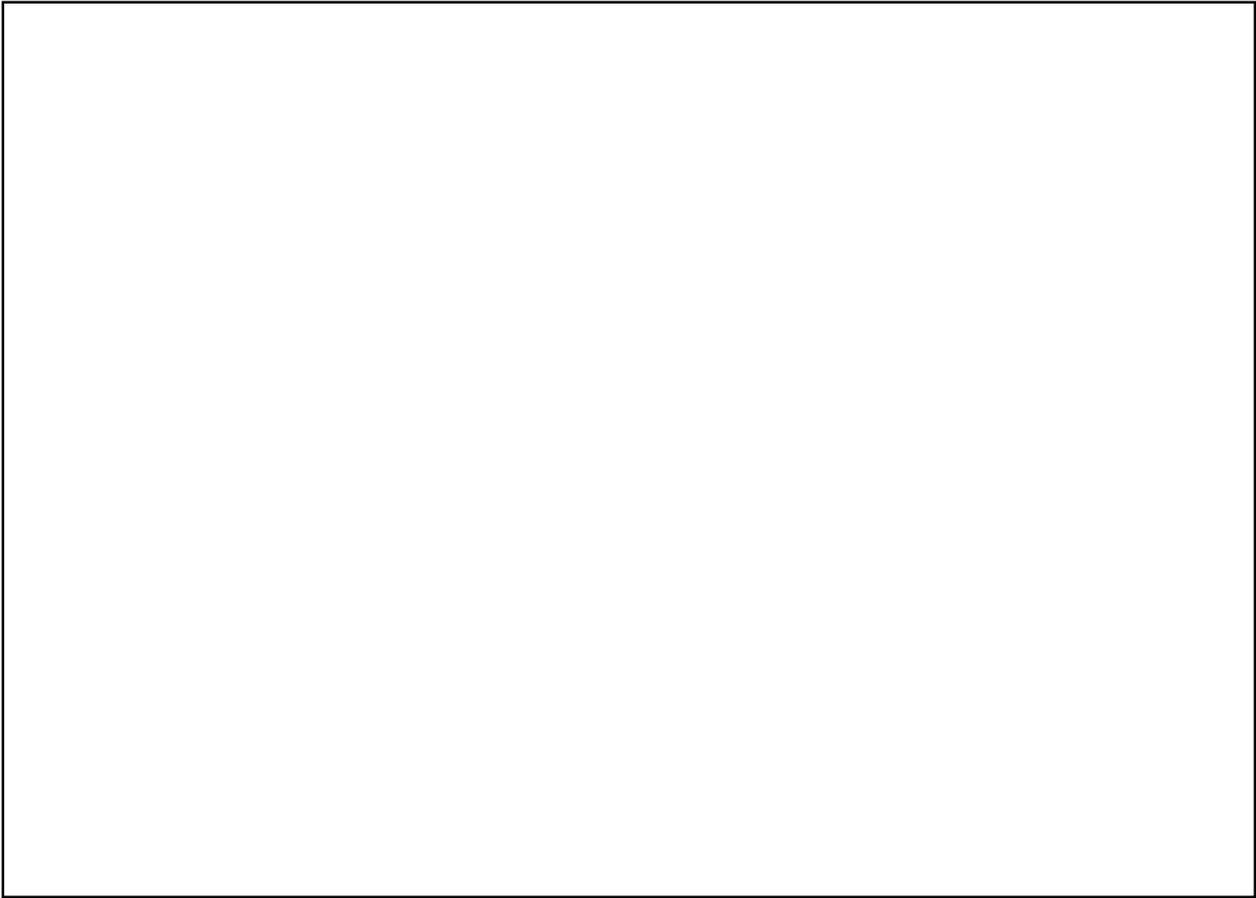
—  
元禄七年  
當春宗門御究之時分

六人者差除候付而 三郎左衛門

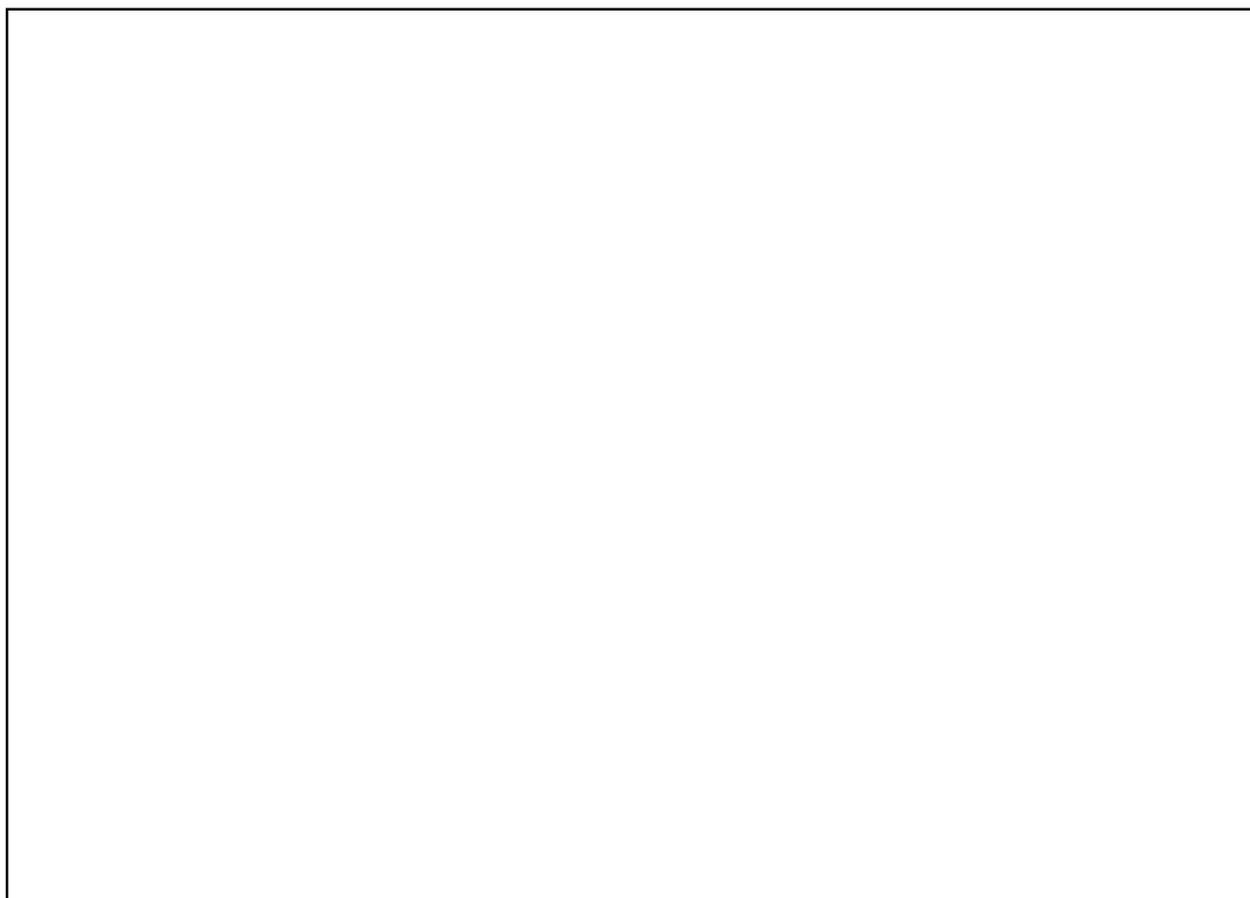
儀 追日注<sup>\*</sup>組ヨリ頭取分

者三人召寄せ 唯今之

\*1 追日 = 追付力。



分二而八 先々不相濟儀  
第一御為不可然 其上  
組内支配不相成候間  
何とそ各心遣申候様二と  
申聞せ候處 成程  
御尤存候 先々如何様二  
茂 参かゝり可有御  
座と申候事  
一 四月廿八日 六人者と相役  
仕 向後御理り事不  
申上御奉公可申上と  
申し候者 数拾人催し



書付指出し 就夫 残

一人私よ里八 彼六人者と

相役仕 御奉公不罷成

由 三頭江付届仕候由

於萩承候事

一 五月十二日 萩より罷歸

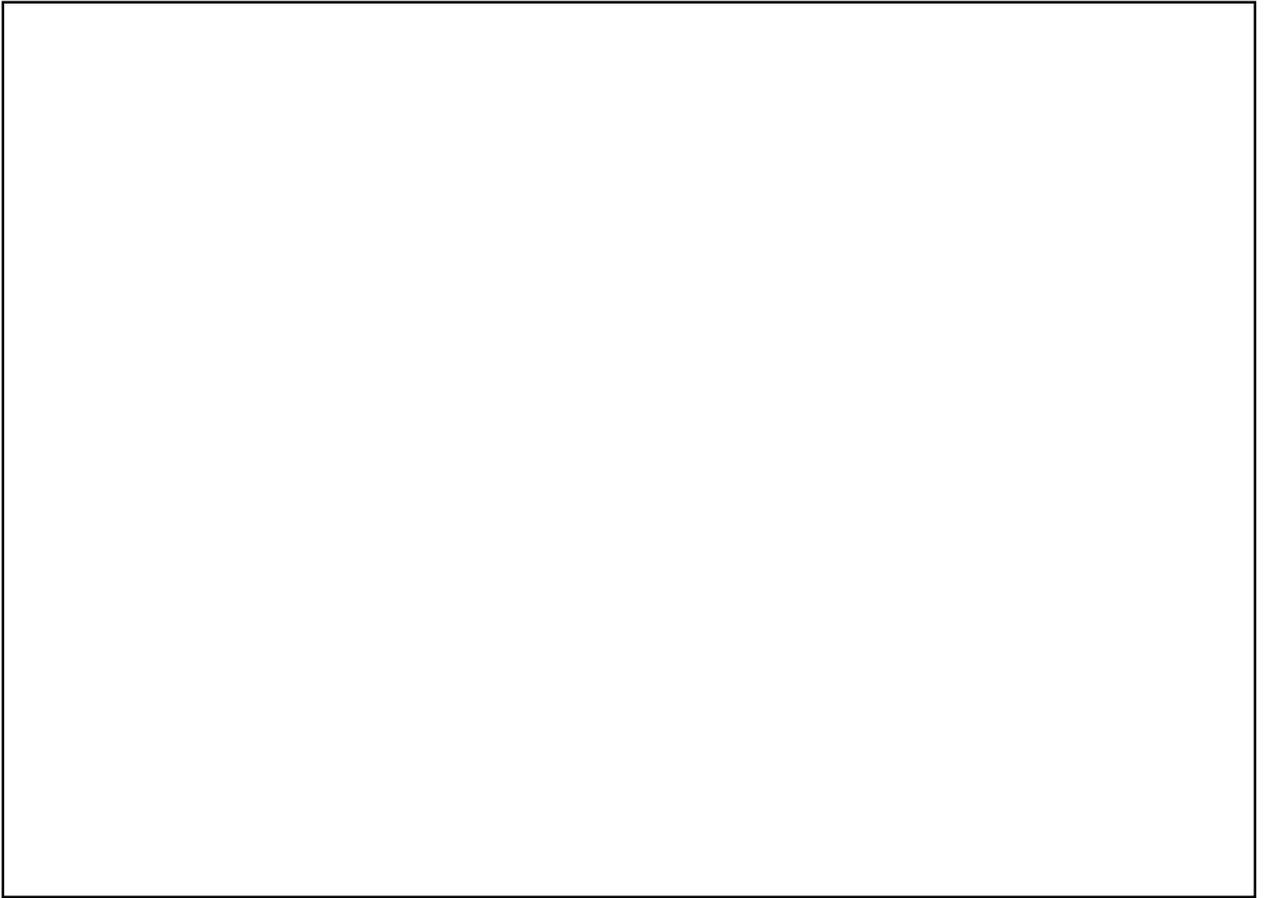
組内江申聞せ候八

尊簡茂御下近々之

儀候間 先謹おしん而罷居候

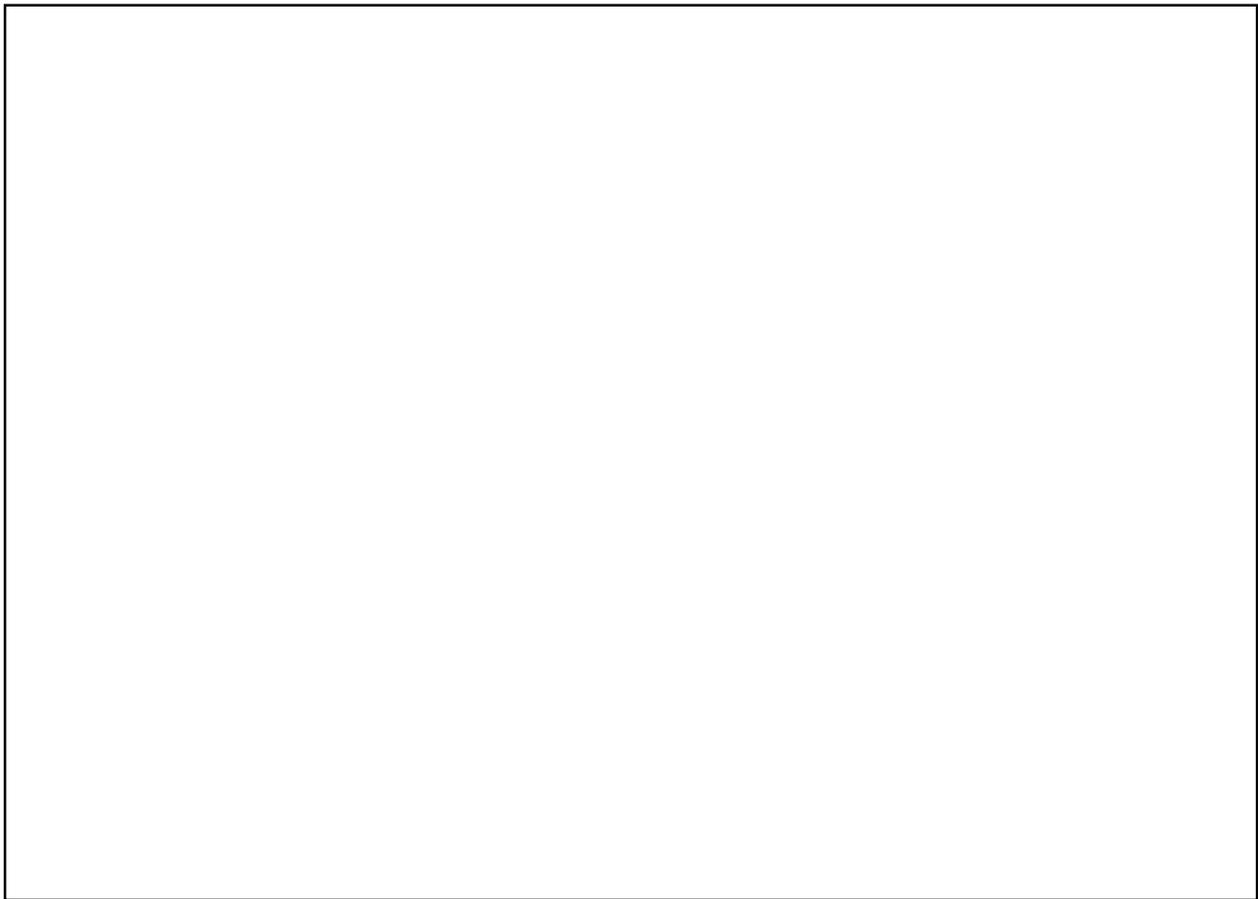
様二と申聞せ候事

一 松井庄左衛門 須佐被差



【4  
～  
8頁】

虫損などのため以下五丁撮影不能



儀二仕候 私儀今年迄

拾八年組支配被仰付候

何とそ御威光を以

組内取収可被下存候へ共

右之參            故不任しんていに

心底まかせず 残念至極奉存候事

一 若残 三頭之内よ里私

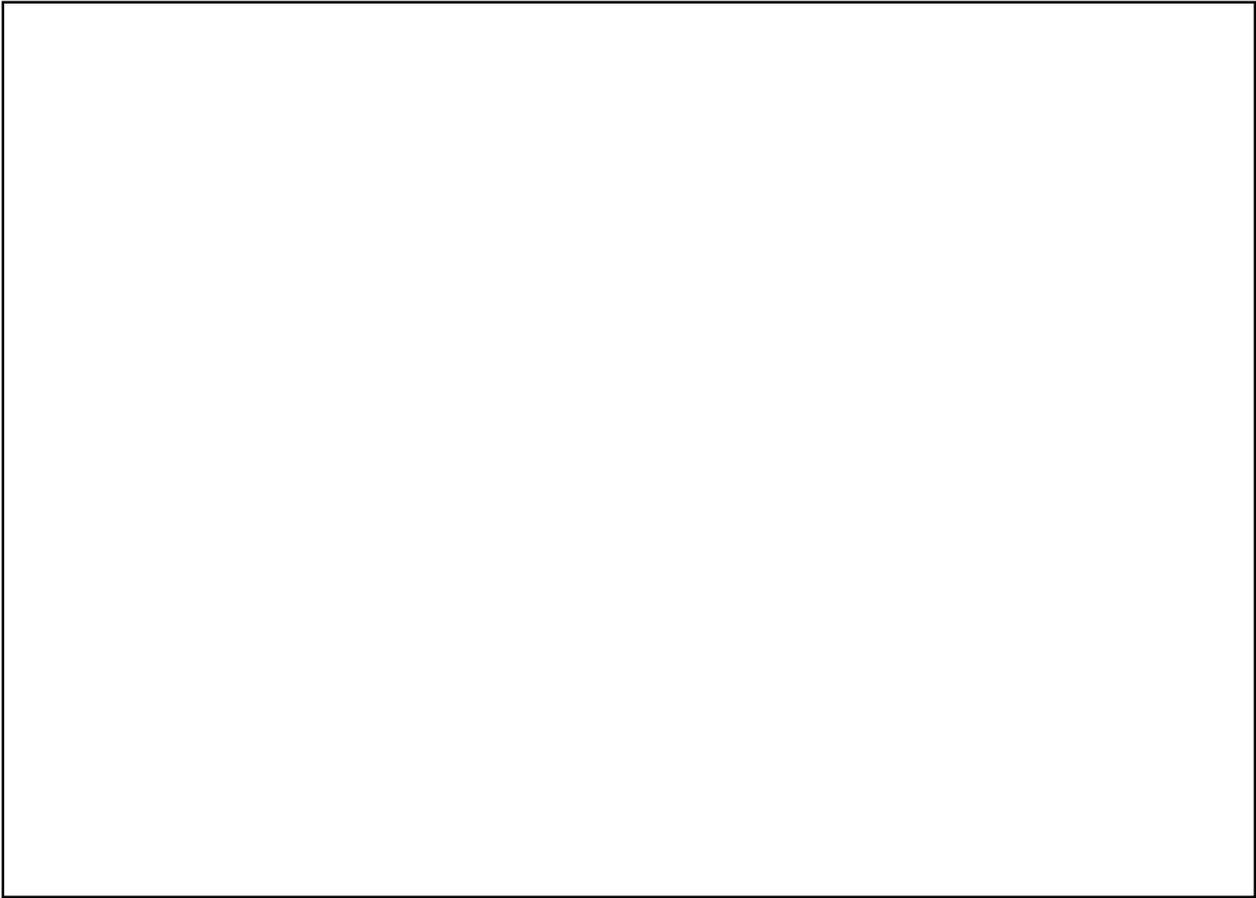
身分二かゝり候儀申出候八、

私へ御尋被下候様二

奉存候事

成元禄七ノ

閏五月廿九日 境三郎左衛門 花押



東京大学史料編纂所蔵「益田家文書」  
46  
17

御意覚書

御意覚

一 元禄六冬 旧冬四組之者訴訟之儀申出

候処 被及御沙汰 元禄七春 当春 頭々迄

其段被仰渡 四与一同二向後無

子細御奉公可申上通 頭共迄申

出候段 達 上聞候 然處此節

一列をはつれ候六人之者江 意趣

を合 当春以来度々騒動

今以申募候段 公儀を輕しめ

た類義共 酷注<sup>1</sup>不謂儀候 因茲

被及御沙汰 急度御仕置も可

被仰付候へ共 御時節旁故 一向二注<sup>2</sup>

御暇被遣候 乍尔 石見已来

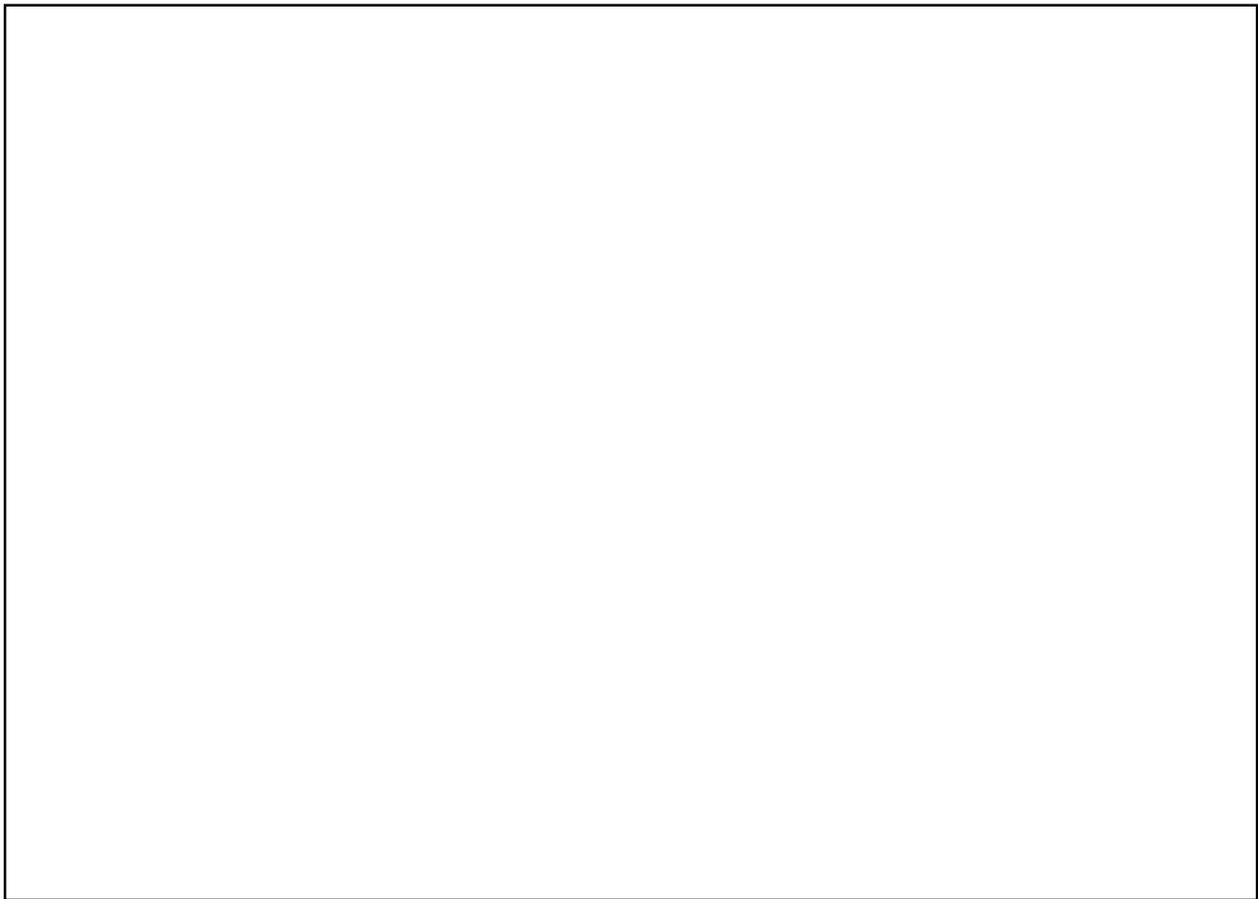
御供仕 数代御奉公申上候者之

儀候得八 被對御先祖候て茂

紙の継目

\*1 「酷」=「甚」の誤記か。 185頁参照。

\*2 一向二 = ここは「一同二」の誤記力。184 ~ 5頁に同じ様な「一同」「一向」の用例あり。



一向注<sup>二</sup>被召放候段 御心外思召候

乍此上このうえながら 続而御奉公可申上との於このころ

心立者だてにおいて 御憤を被指捨 先々之

分二可被召仕候条 此段委細

可被申渡候 乍此上いよいよもって 弥以相募者

於有之八 早速退去可被申付候

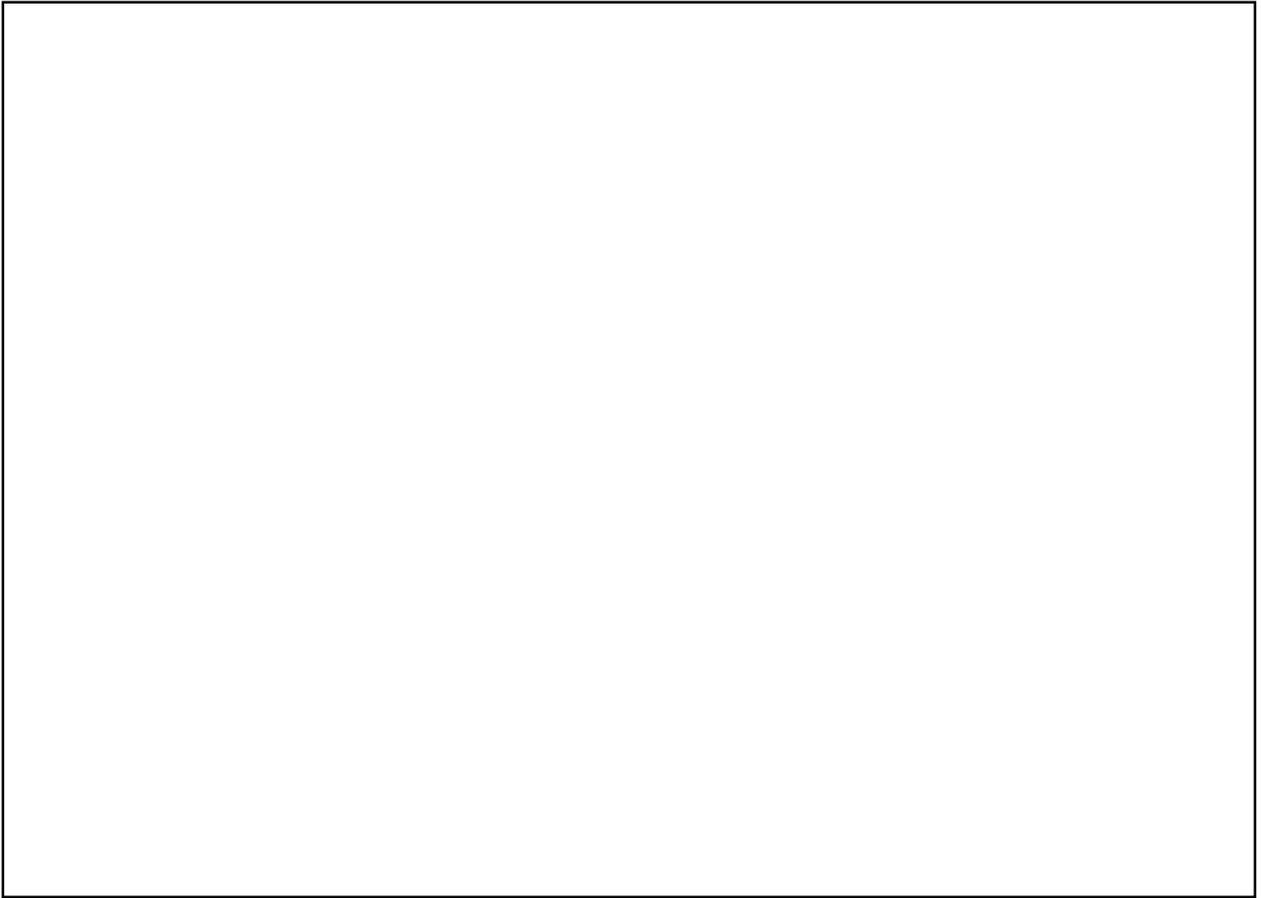
已上

成元禄七ノ 閏五月廿九日

益田 久右衛門殿

益田 与右衛門殿

栗山 半左衛門殿



44-15-3

【注】この文書は 55- 34と同文

### 御意覚書

### 御意覚

一 元禄六冬 旧冬四組之者訴訟之儀申出候処

被及御沙汰 元禄七春 当春頭々迄 其段

被仰渡 四組一同二向後無子細

御奉公可申上通 頭共迄申出候段

達 上聞候 然処 其節一列を

はつれ候六人之者へ 意趣を含

当春以来度々相働仕候

然處 私之意趣を以 對

公儀 何ヶ申候時八 偏 不御為成所二

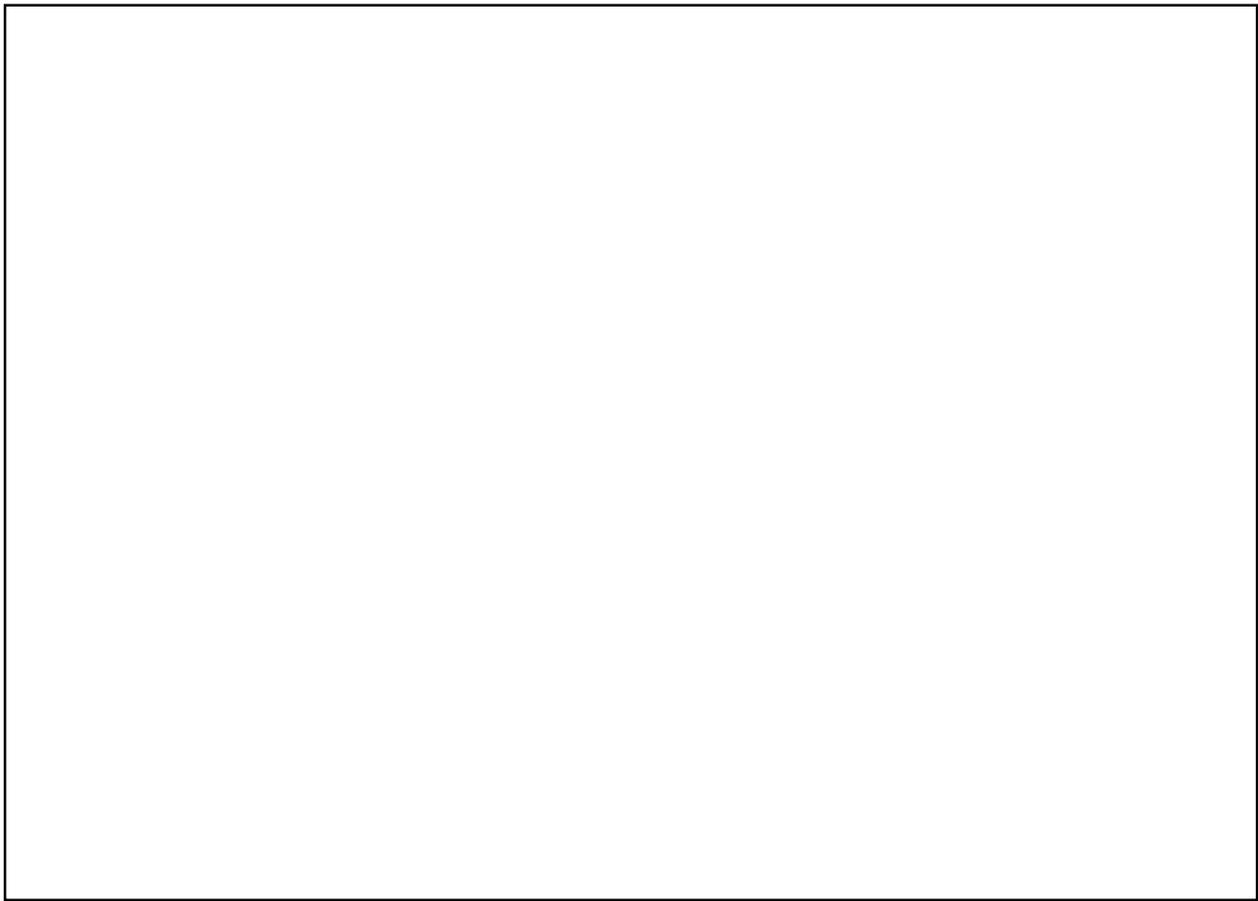
氣を付 抽一列 向後無子細続而

御奉公可申上之通 去比 注文を以

三頭迄申出候由 別而神妙之儀共

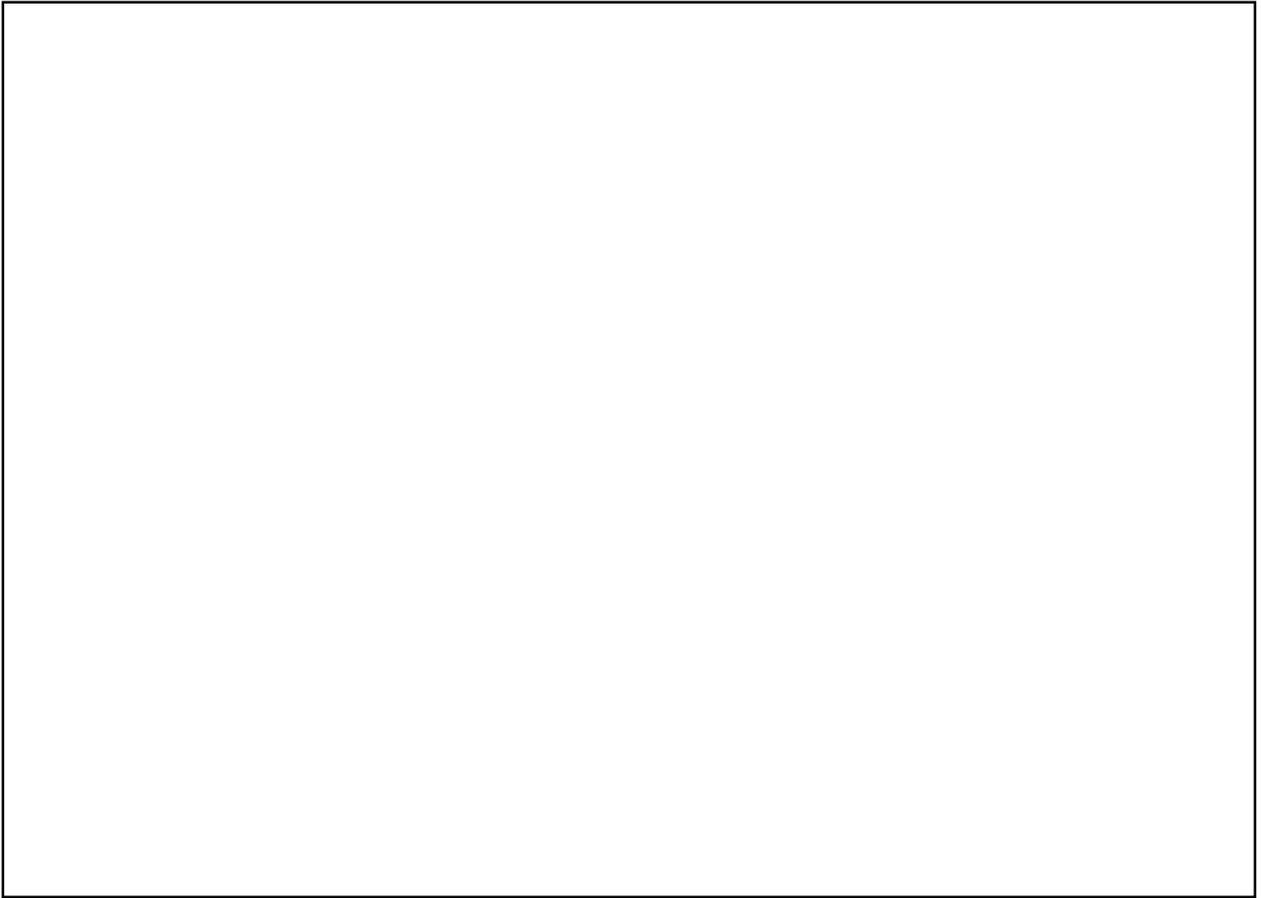
思召候 此外相残三組之者共

紙の継目……………



今以何ヶ申募候段 公儀を  
輕しめたる義共 甚不謂事二候  
因茲 境三郎左衛門 堀市郎右衛門  
組 并 大谷権左衛門組 八人之者共  
一同二被召上候 尤被及御沙汰 急  
度御仕置茂可被仰付候へ共 御時節  
旁故 一向二御暇被遣候 乍尔 石見  
以来御供仕 数代御奉公申上候者  
之儀候へ八 御当家被對 御先祖  
候て茂 一向二被召放候段 御心外  
思召候 乍此上 続而御奉公可申上  
との於心立八 御憤を被差捨  
先々之分二可被召仕候条 此段委  
細可被申渡候 弥以 相募者  
於有之者 早速退去可

.....紙の継目.....



被申付候  
以上

戌<sup>元禄七</sup>  
閏五月廿九日

益田 久右衛門殿  
益田 与右衛門殿  
栗山 半左衛門殿

東京大学史料編纂所蔵 「益田家文書」

13-2 益田就恒御意書

【注】この文書は 44・15・4とほぼ同一内容

御意覚

一 旧冬四組一同御理之義申出候

時分 境三郎左衛門組 真嶋与一右衛門

小原二郎左衛門組 有田彦右衛門 岩本

惣左衛門 大谷権左衛門組 有福三左衛門

堀市郎右衛門組 栗山平太夫 大塚半右衛門

右六人之者 其<sup>列</sup>烈をはつれ候付而

一<sup>列</sup>烈之者意趣を合 今以相役等

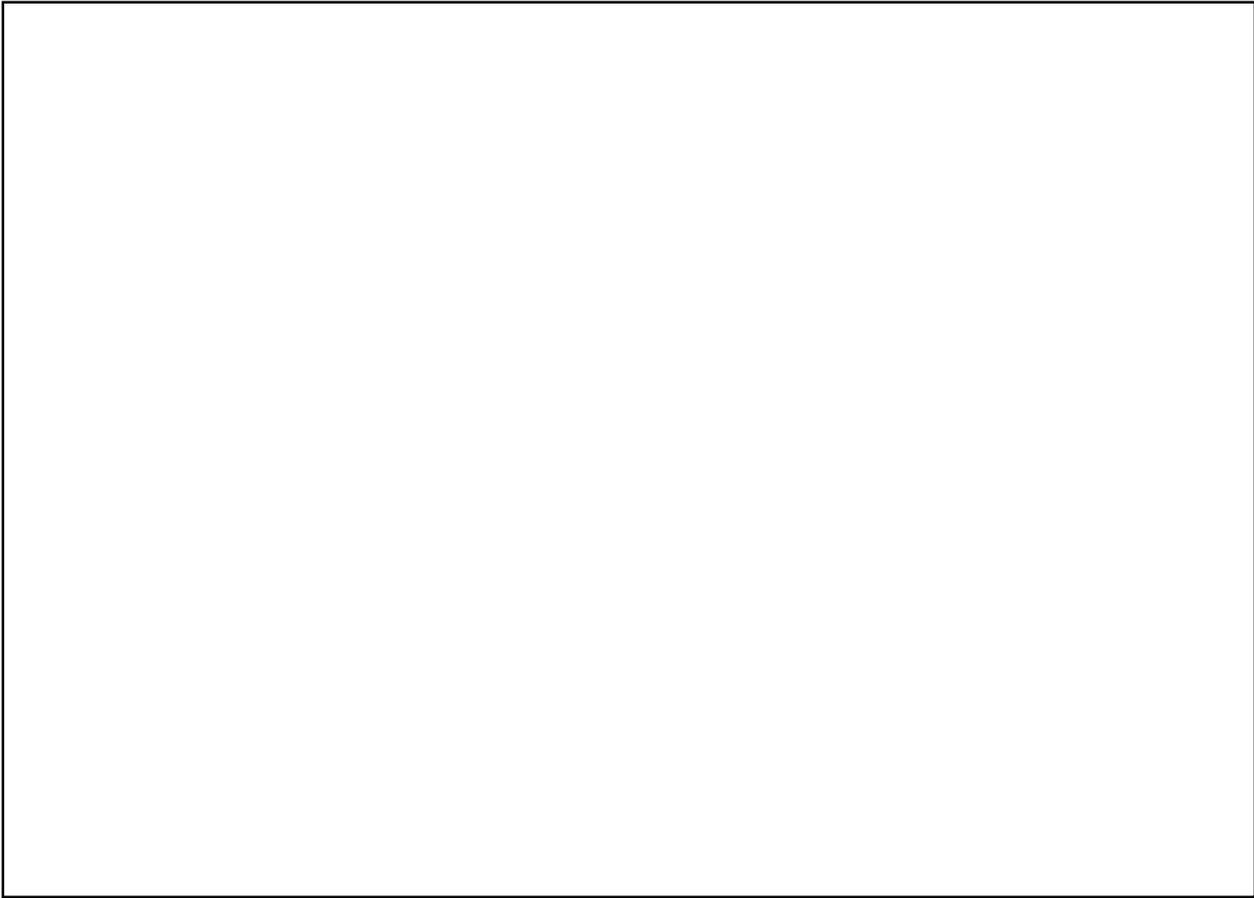
相成間敷候通申募之由候へ共

六人之者共 一<sup>列</sup>烈をはつれ候段者

尤之心入<sup>しかりといえども</sup>にて候 雖然 御尋之子細

有之候条 六人之もの逼塞

可被仰付候 於<sup>あつて</sup>様子者追而可被遂



御沙汰候 以上

戌ノ

閏五月廿九日

益田 久右衛門殿

益田 与右衛門殿

栗山 半左衛門殿

御意覚

一 旧冬四組之者訴訟之儀申出候處

被及御沙汰 当春頭々迄其段

被仰渡 四組一同二向後無子細

御奉公可申上通 頭共迄申出候段

達 上聞候 然処 其節一列を

はつれ候六人之者江 意趣を

含 当春以来度々相働仕候 しかる処二

私之以意趣 對 公儀何角候二付八 偏二不 御為成

所二氣を付 抽一列 向後無子細<sup>續</sup>而御奉公可申上候通<sup>聞</sup>召 此

注文を以三頭迄申遣候由 神妙為

此外相残三組之者 今

以申募之段 公儀を輕しめ

たる義共甚不謂事候

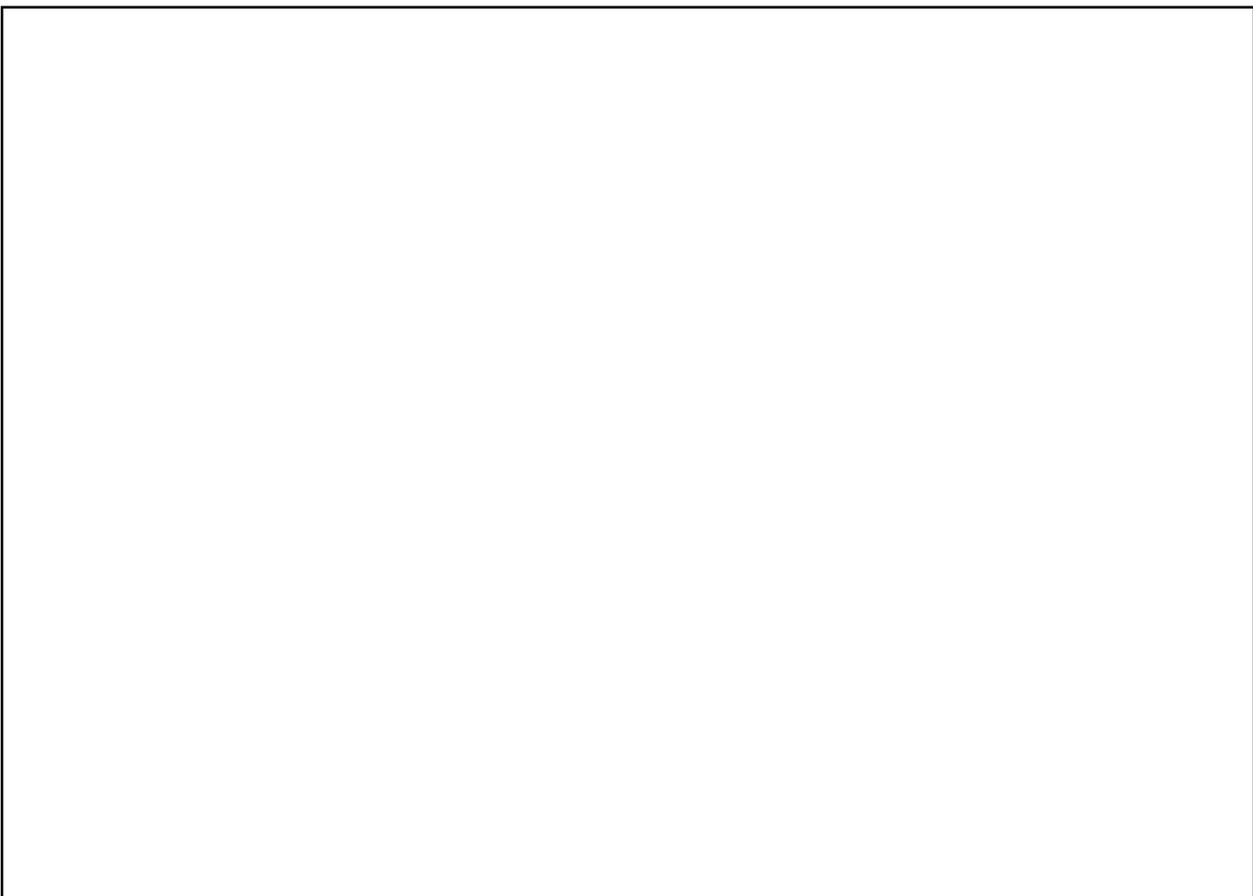
因茲 境三郎左衛門 堀市郎右衛門 并 大谷権左衛門<sup>組</sup>与八人

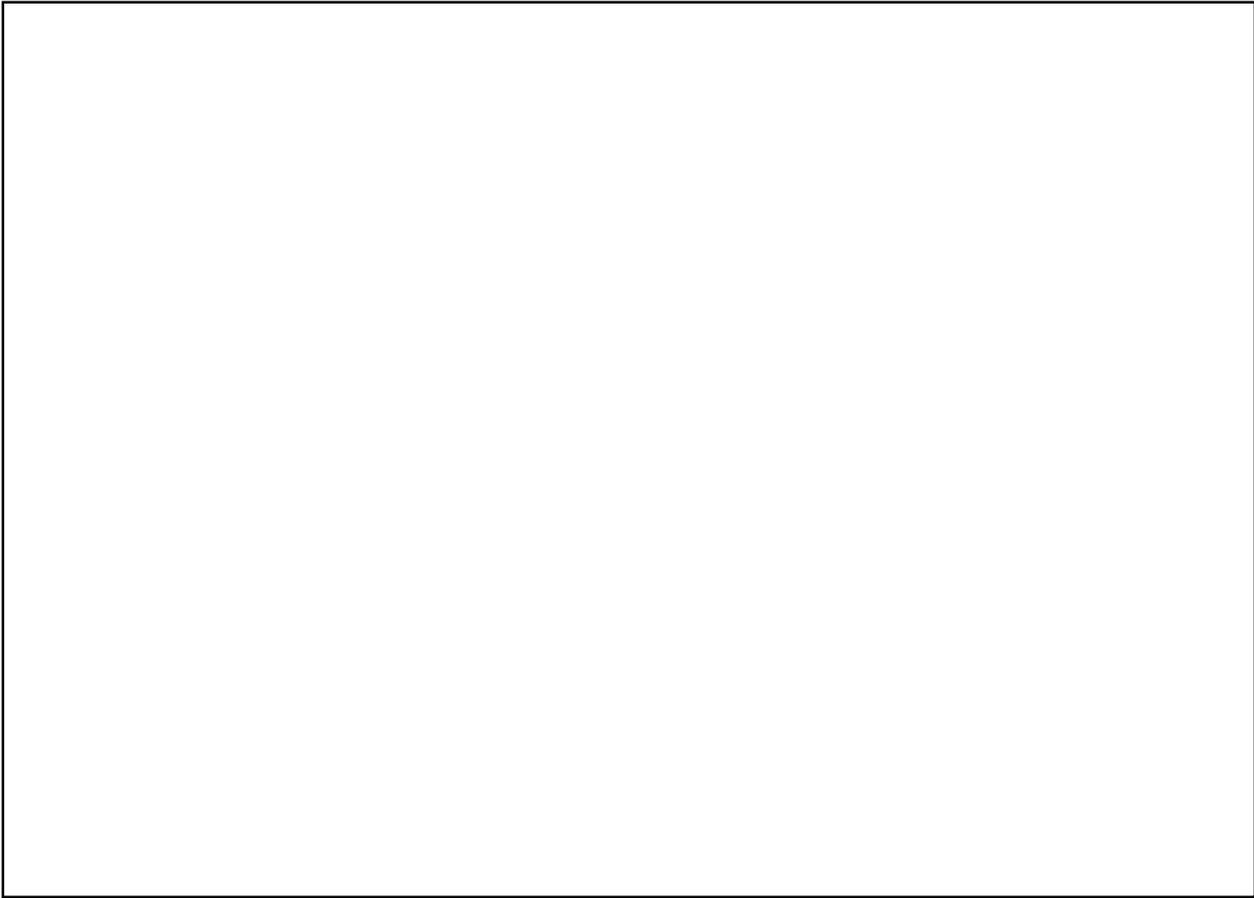
之者一同二被召上候 尤 被及御沙汰急度御仕置也

可被仰付候へ共 御時節旁故

一向<sup>同方</sup>二御暇被遣候 乍尔<sup>しかしながら</sup> 石見

以来御供仕 数代御奉公申





上候者之儀候へハ 被對御先祖

候て茂一向同カ二被召放之段 御心外二

思召候 乍此上このうえながら 続而御奉公可

申上との於心立ハ 御憤を被

差捨 先々之分二可被召仕候条

此段委細可被申渡候

弥以いよいよもつて 相募者於有之者これあるに於いては

早速退去可被申付候 以上

元禄七  
戌ノ

閏五月廿九日

益田 久右衛門殿

益田 与右衛門殿

栗山 半左衛門殿

東京大学史料編纂所蔵「益田家文書」

44-15-4 御意覚書

【注】この文書は 13・2とほぼ同一内容

御意覚

— 元禄六冬 旧冬四組一同御理りの儀申出候

時分 境三郎左衛門組 真嶋与一右衛門

小原二郎左衛門組 有田彦右衛門 岩本

惣左衛門 大谷権左衛門組 有福三左衛門

堀市郎右衛門組 栗山平太夫 大塚半右衛門

右六人之者 其列をはつれ候付而

一列之者意趣をしまつて含 今以相役等

相成間敷之通申募之由候へ共

六人之者共 一列をはつれ候段八

尤之もつとも心入しかりといえども二て候 雖然 御尋之子細

有之候条 六人之者逼塞ひっそく

可被申付候 於様子八 追而可被遂あつて



御沙汰候 以上

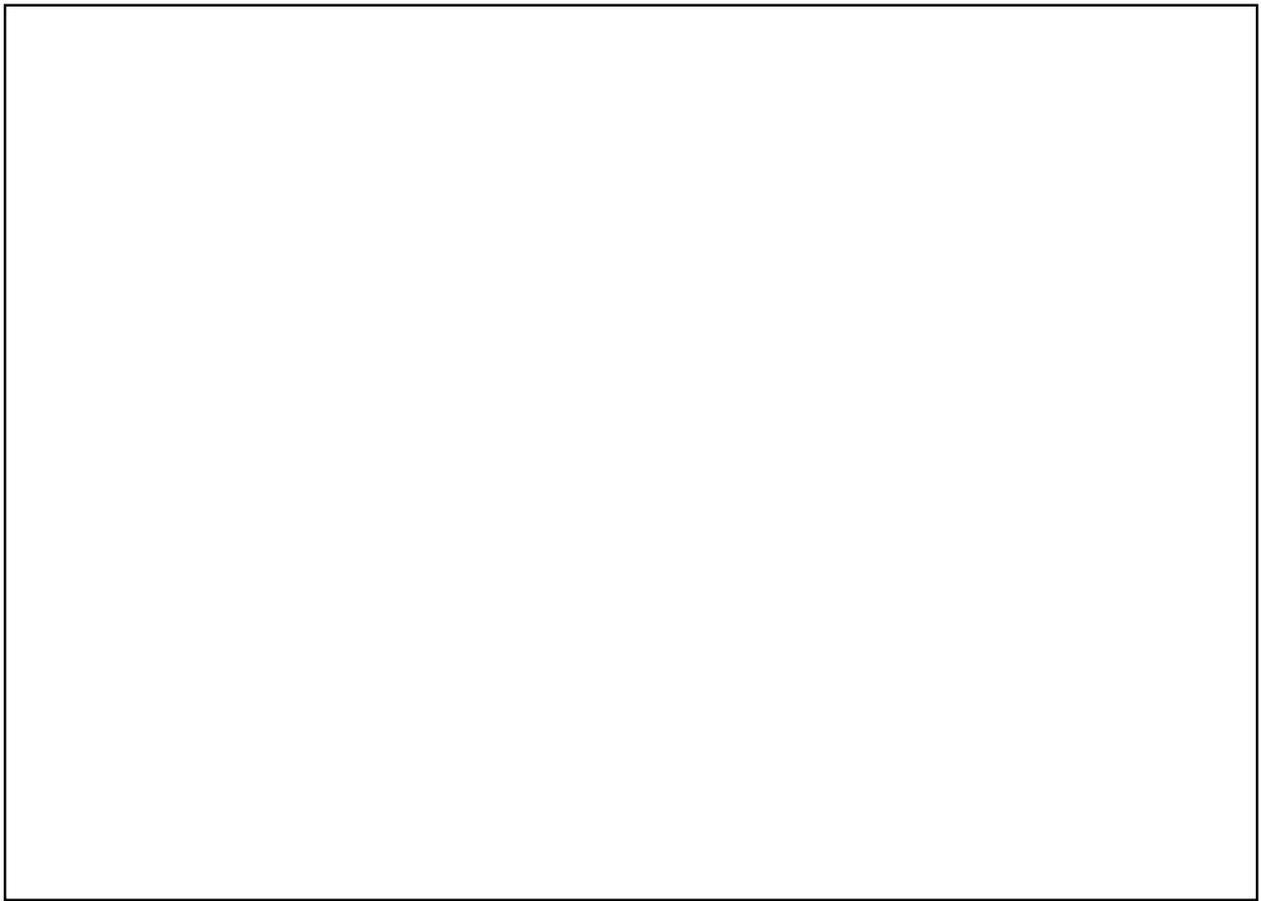
元禄七  
戌ノ

閏五月廿九日

益田 久右衛門殿

益田 与右衛門殿

栗山 半左衛門殿



東京大学史料編纂所蔵「益田家文書」

16 | 17 | 2

二之目之御請

堀市郎右衛門御請

二之目之御請

堀市郎右衛門御請

一 組二へおき注↑仕候時分

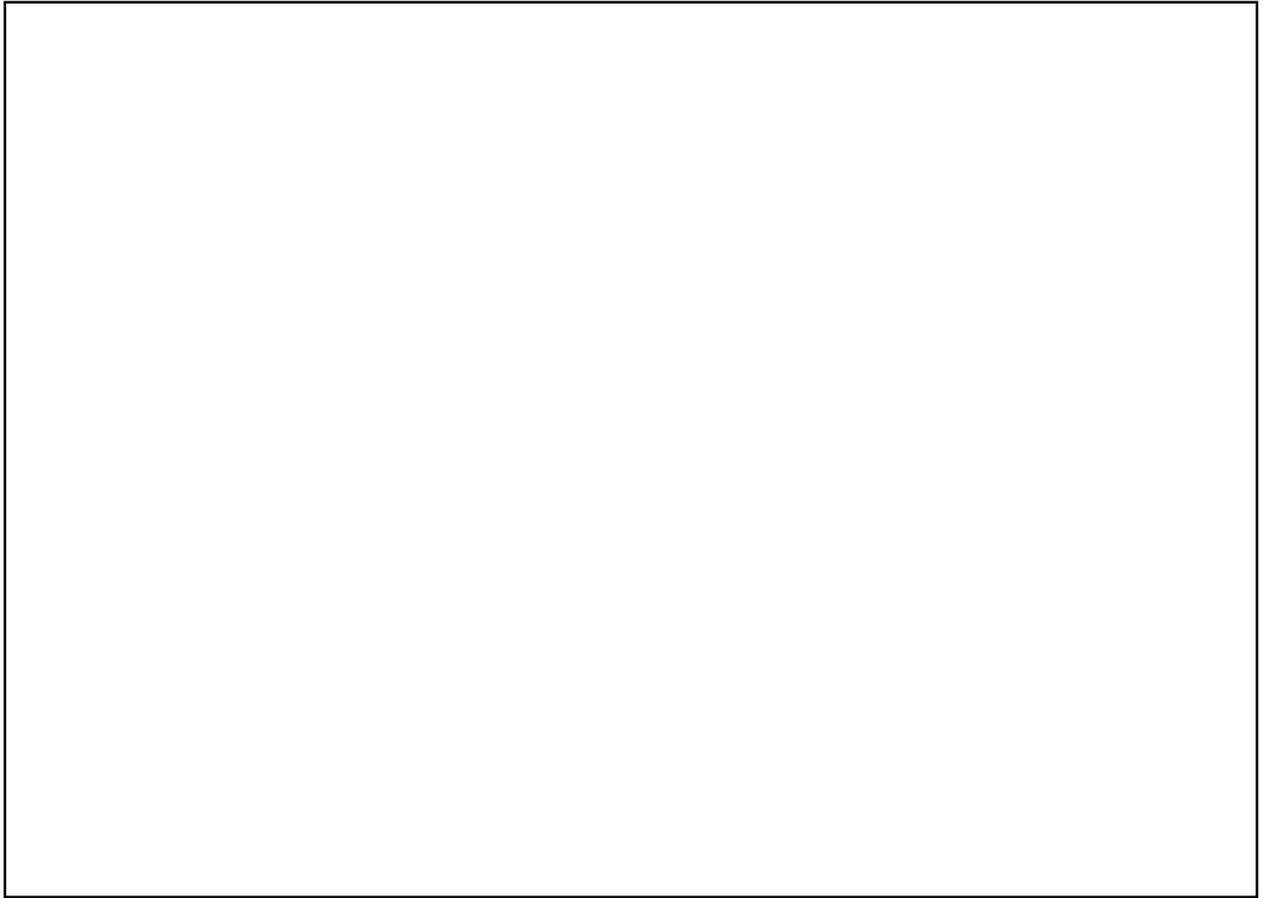
心遣仕候得共 弥落付

不申候時八 組差上可申

候へ共 私共手はなし候て

組子申募たる義二候間

\*1 二へおき = 51 頁脚註参照。「にべ発」と同じ力。



自然<sup>注1</sup>多人数之儀二候へ八

一人二て茂境目なと越候へ八<sup>注2</sup>

御為不可然<sup>しかるへからざる</sup>義と存知

仕候事

一 入江忠兵衛被差戻

御意御座候由承候得共

何ヨリ<sup>いすれ</sup>之物と而有<sup>て</sup>之候哉

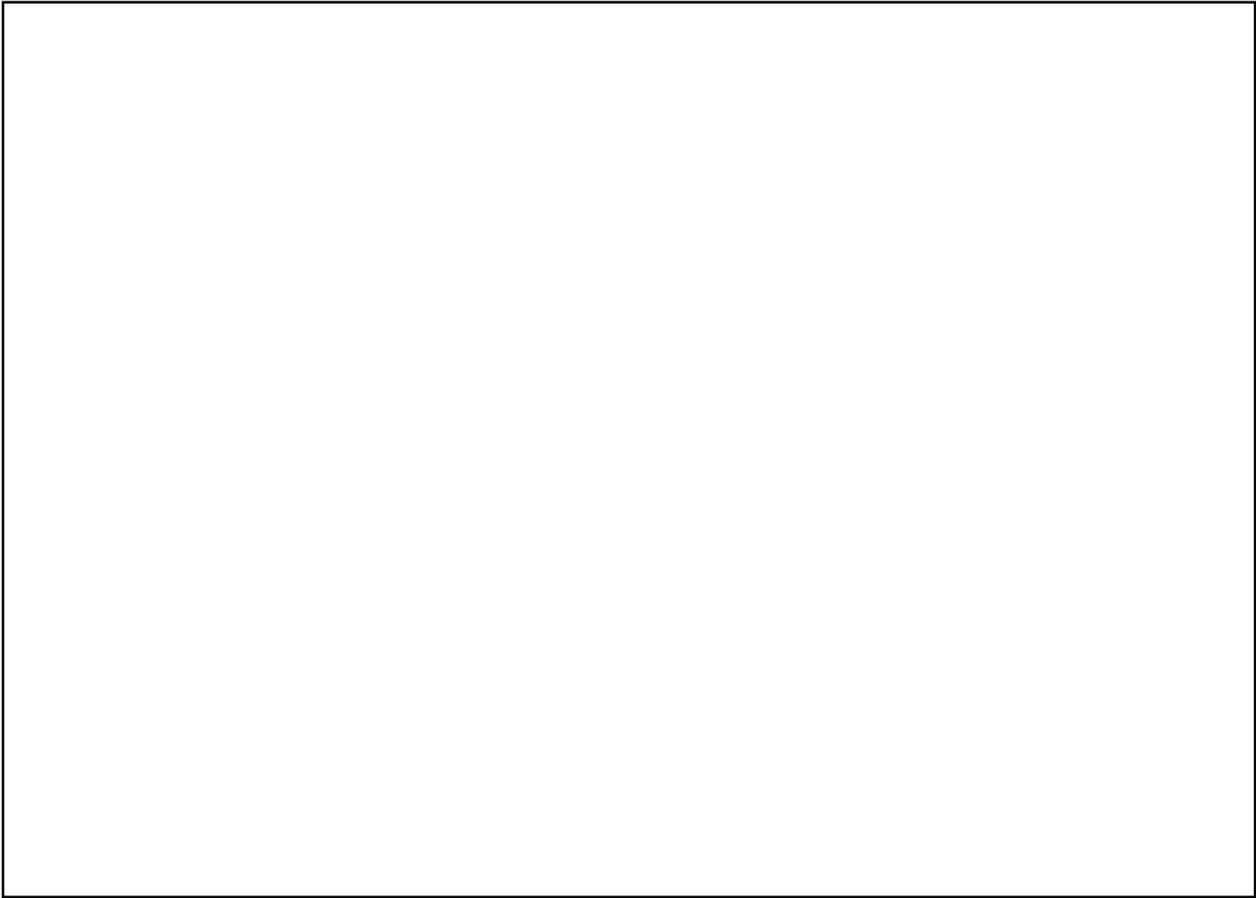
一 圓覚不申候事

一 船場迄罷出候儀茂組子共

一 通りの存分達

\*1 自然 = 万一。

\* 2 一人二て茂境目なと越候へ八 = 一人でも仏坂関門を越えて石州へ逃亡でもしようものなら...



御耳申度としきりに

願候故 一通達 御耳候て

組子共落着之ためにも

相成候八、御為と奉存

右之通り御座候事

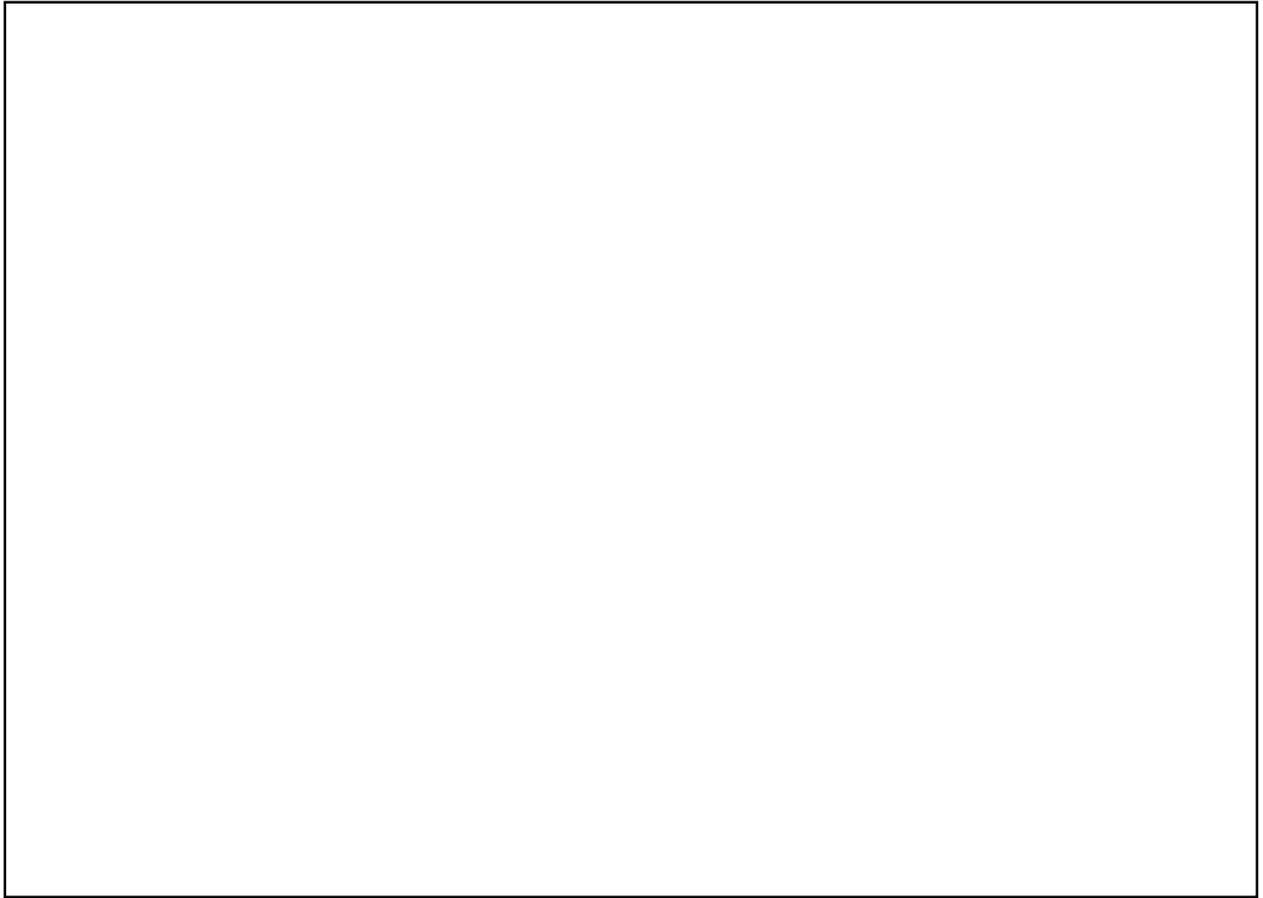
一 増野作左衛門 被差歸候時分も

色々心遣仕候へ共 組子一

圓落着不申  今之

参掛り二て八 始終之

御奉公不相成と申



極候付八 弥組差上可申

義共候處ニ 是以私共手は

なし候て足と可申と

奉存 右之通り御座候事

一 私共萩罷出申度と

願候事 是以組子共一通り

御理り之筋申上度と頻ニ

願候故罷出 様子申上候八、

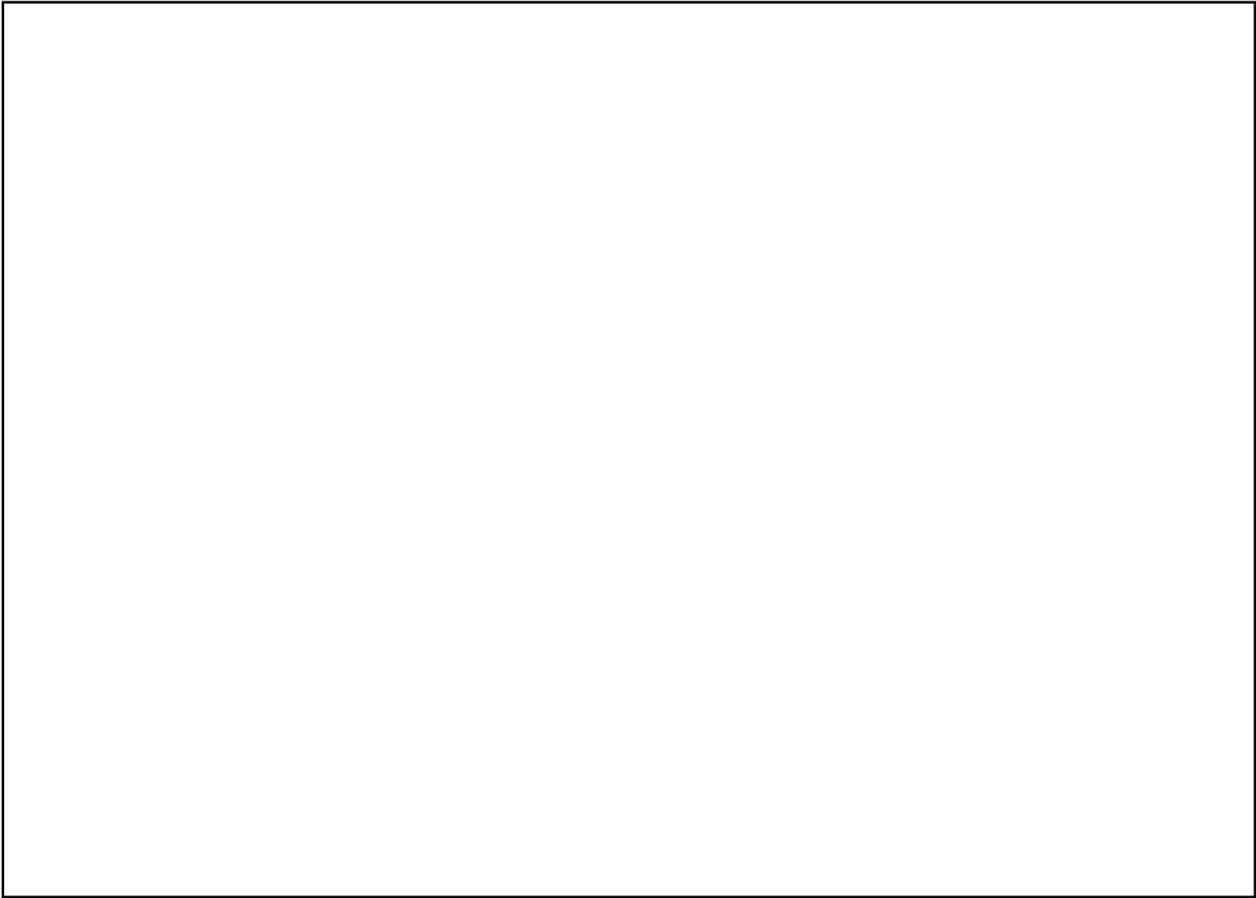
与<sup>組</sup>子落着之ためにも

可相成と存 延引仕候事



元禄七  
戌ノ六月二日

堀市郎右衛門  
花押



東大史料編纂所蔵「益田家文書」

51-124-13

益田久右衛門等連署書状

態飛脚を以得御

意候 然者各儀しからば

昨曉暮過注1當到

着さそつまつて 左候而 落去

申候与組 召出候 御

令條之赴 申渡

五ツ注2時分 両方

共二 無別条べつじょうなく 埒

明申候 尤兩人

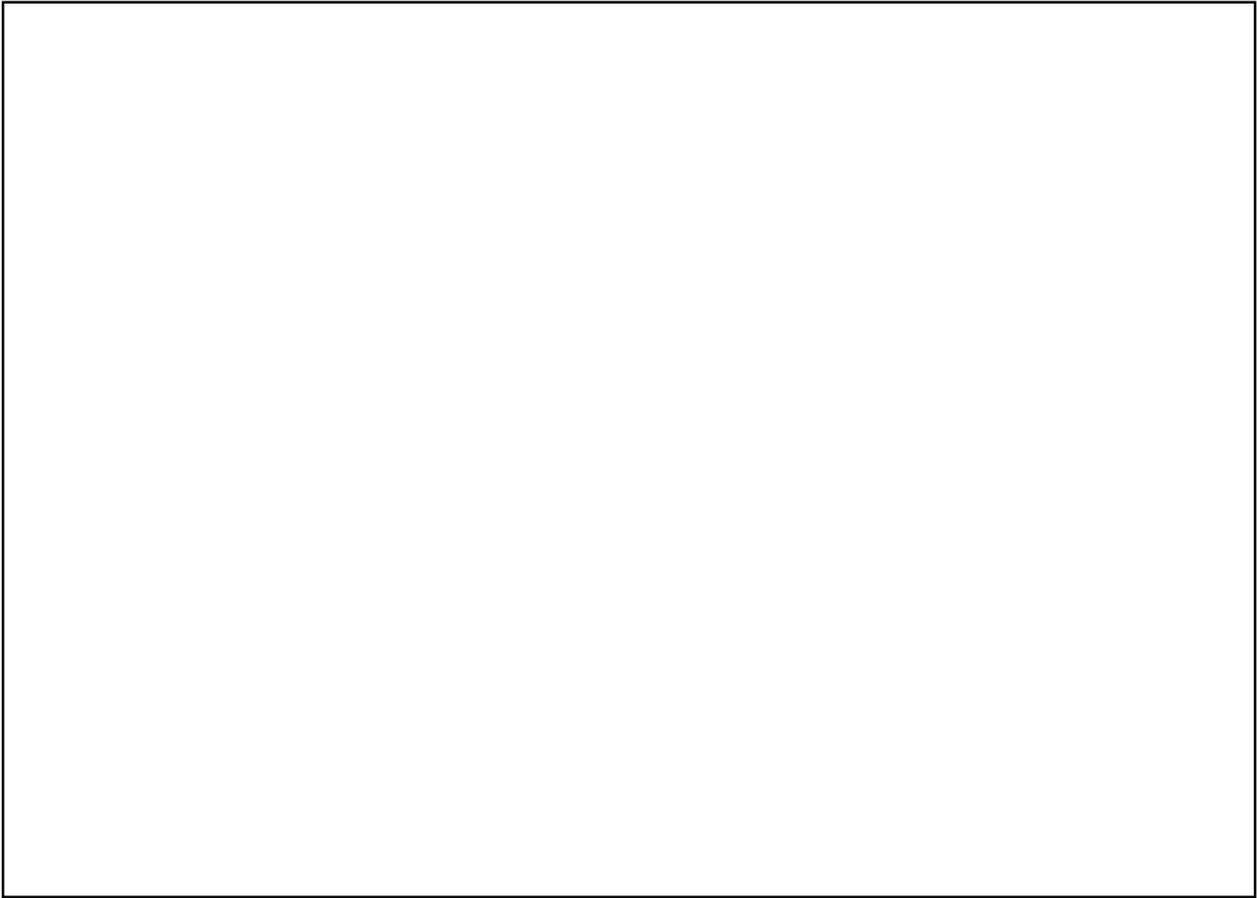
共二堅固成作

舞二而て ところへ

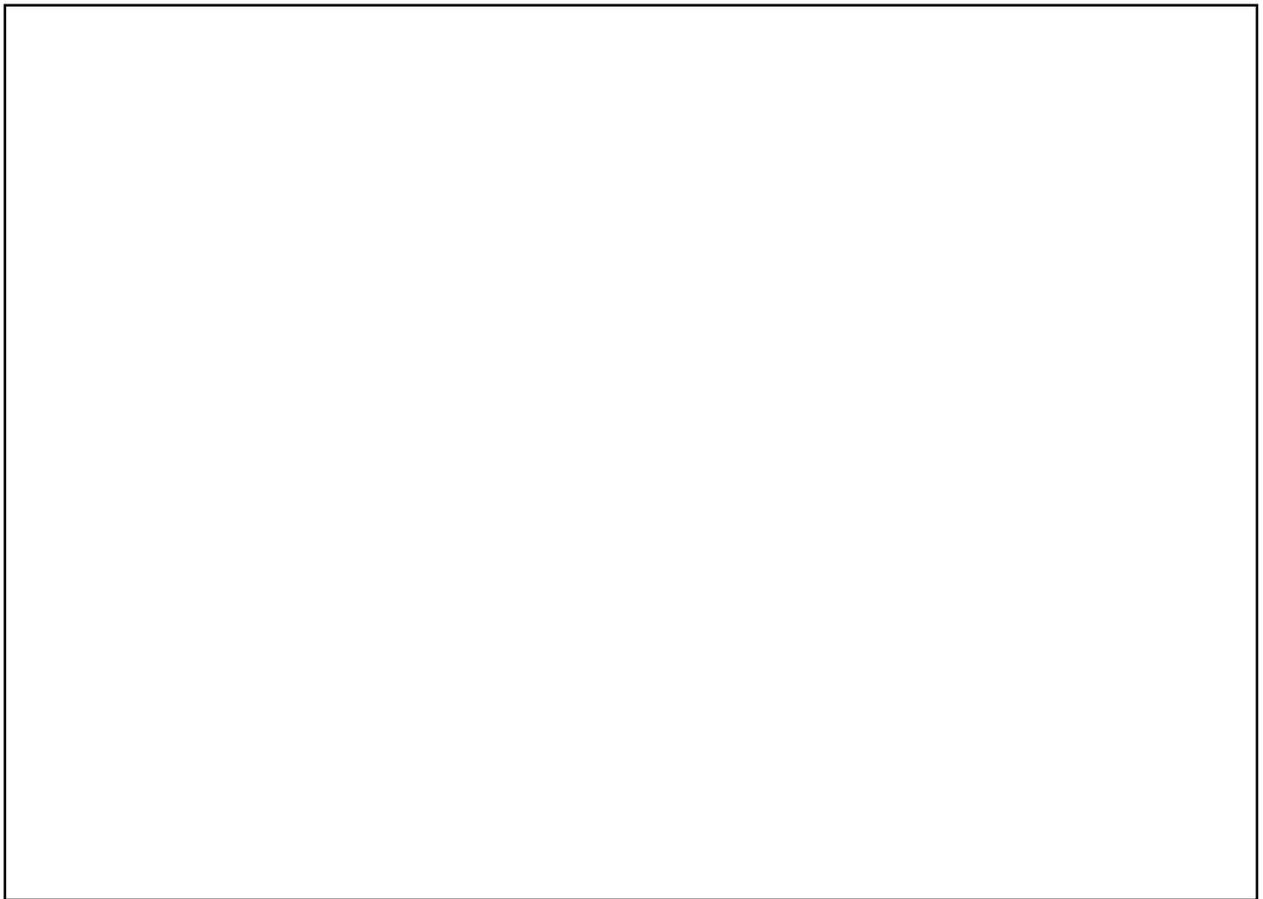
迄も作舞

所 無御座候しなくそつまつ

\*1 昨曉暮過はおかし「昨晚」カ。  
\*2 五ツ = 九ツカ



昨日罷越候時分  
其元二而之首て  
尾 夜半過候而すまきやうじゆうじゆうして  
作廻申 御座候  
様二との儀二御  
座候故 爰元こゝもと  
飛脚仕立之儀  
茂右之所へ對シ  
少々延引候間  
左様御心得可被なられる  
成候 委細之儀べく  
者追々可得御ぎよしを  
意候 何連いすれ  
御前之首尾



御了簡次第

可然様しかるべき二可被仰上おかせあげらるべく

尤御手廻り衆中

も加判つかまつるべく可被仕候

いとも多人数故

其儀無御座候 い

つれも中ノ心遣

二而御座候 此段者

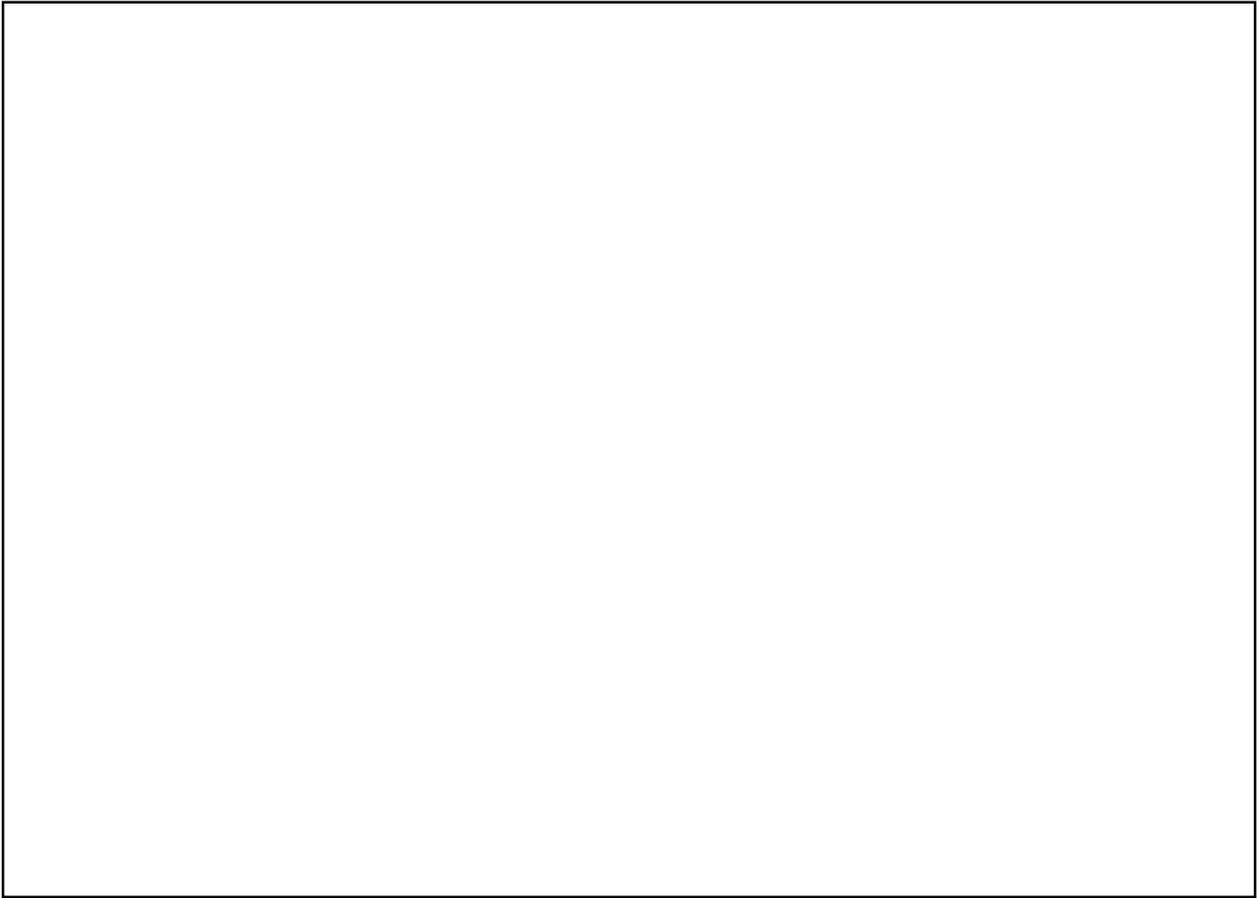
委細罷歸可欠字カ(得) 貴意候

恐惶謹言

梅津徳右衛門 花押

六月十一日

品川五郎右衛門 花押



小国茂兵衛

花押

松井庄右衛門

花押

尚々 早々無障

埒明 御威光故注1

守 乍このうえながら此上 恐悦奉

存候 以上

益益田 又左衛門様

増野作左衛門様

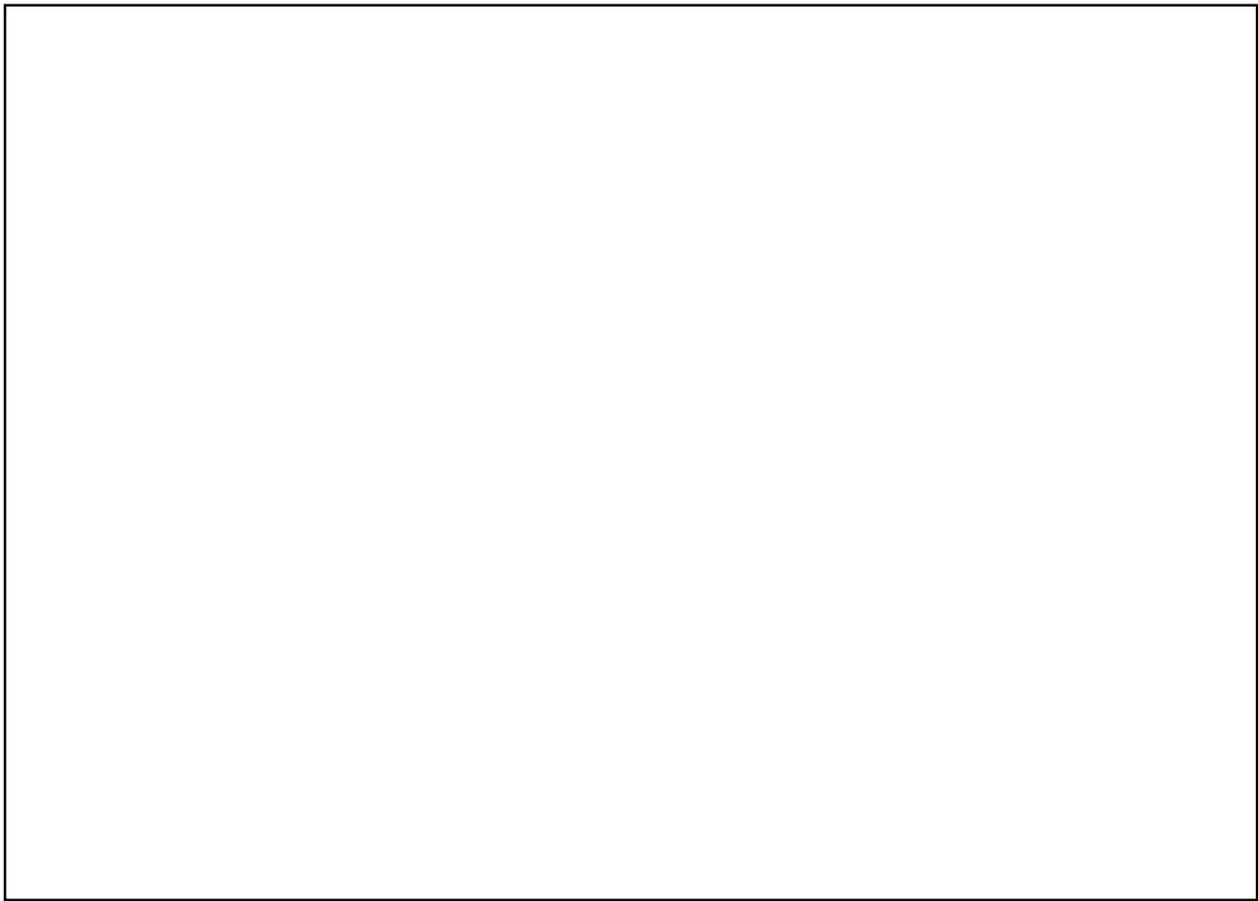
松本市兵衛様

\*1 故守 固守

東大史料編纂所蔵「益田家文書」  
51-124-14 益田久右衛門等連署  
書状

態以飛脚啓達仕候  
然者 飯井浦迄退  
去仕候者之儀二付而  
田万・江崎なども少々  
無心元存候付而 大谷  
進兵衛下田万 指  
遣置 彼地二罷居  
飯井浦之様子承  
合せ 其外地下弥  
物静二罷居候様二と  
申聞せ遣置候 然  
處 飯井浦二罷  
居候者 内々致吟

\*1 態 = ふりはえて。わざわざ



味候程存当り 彼  
地をしのびノヽニ 大形おおかた  
立歸 夫々之宿近所ニ  
蜜ひそかニ罷居 何とぞ  
前々之通ニ御奉公  
をも申上度との多兵衛大谷  
方迄申出事ニ御座候  
扱さてまた又 弥いよいよ 飯井立のき候  
者付立

一 安富五郎兵衛 波田

久右衛門 片山久兵衛

大谷孫兵衛 大谷

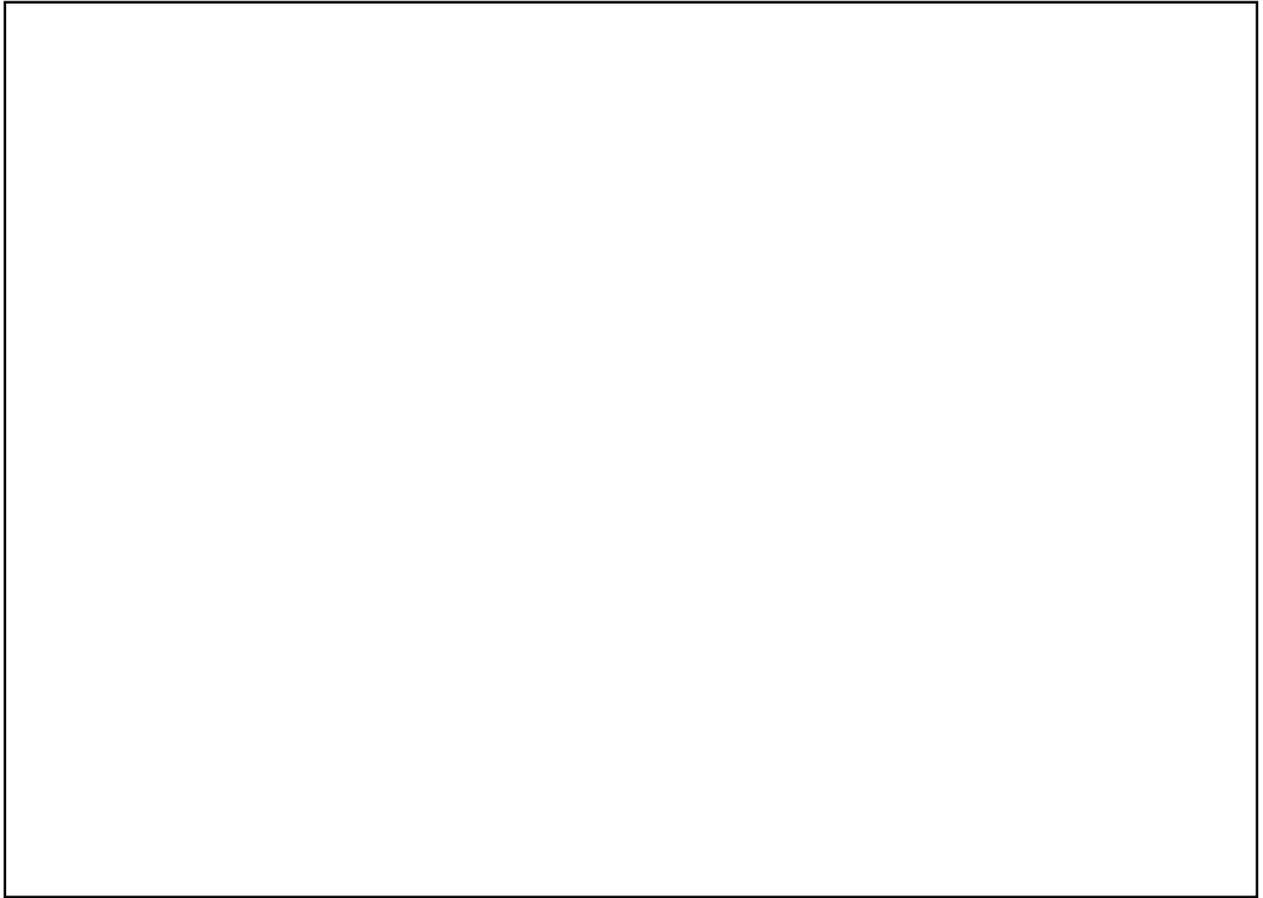
又右衛門 高津左衛門

以上六人 昨朝四

ツ時分ニ高津之

処こゝニ罷越申し候由ニ候

高津江茂大谷



太兵衛方より地方之

吉人彼地へ聞合遣候通

太兵衛方よりも申越

候間 高津之様子も

委細二相知可申と

存候

一 椋半太夫事 右六人

之者との烈を八は

つれ 飯井浦を 先

達而 奉公かせぎのため

津和野之方へ罷越申

之由候

一 波田久右衛門事 増野

藤兵衛兄弟 知辱之

儀二付而 内證を以

異見仕候処 一旦八

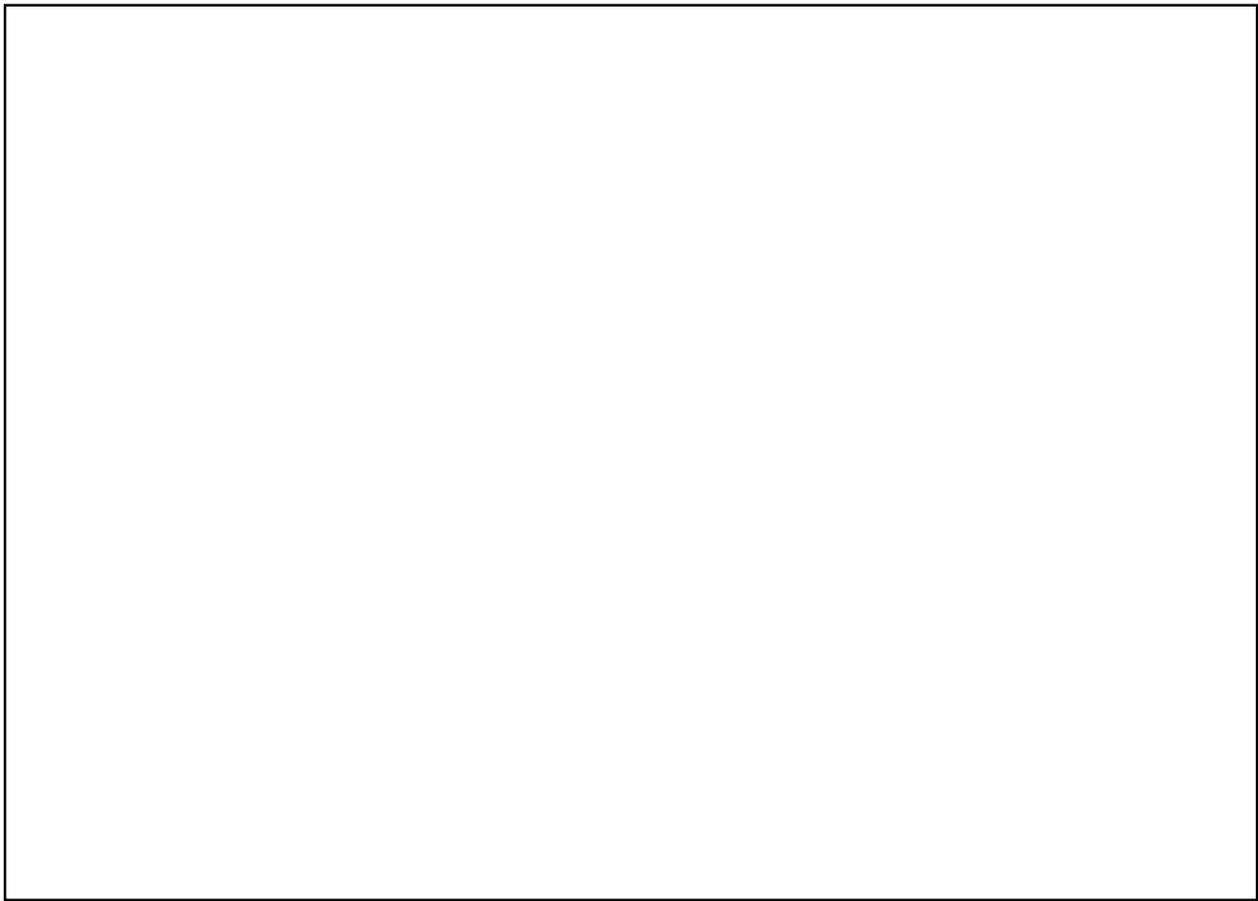
合点仕候故 其段各

江茂内證申出候

就夫 昨日 半左衛門

方より 居留り候て

注文にも書加申候



しかるところ  
然処 如何儀候哉 飯

井立のき候者一同二

相成 久右衛門事も高

津之方へ罷越候由二

御座候間 此段左様

御心得可被成候なされるべく

—  
今度立歸御奉公

申上度と申者之

極りたる注文 今日

其元指出申候 弥いよいよ

被召仕候段八 其元めしつかえられ

より被仰越次第二 可おおせこされ

申渡候通申聞候

其内之儀八随分物

静二罷居候様二と手

堅 多兵衛注1申聞せ置候

右申候様二 飯井之義も

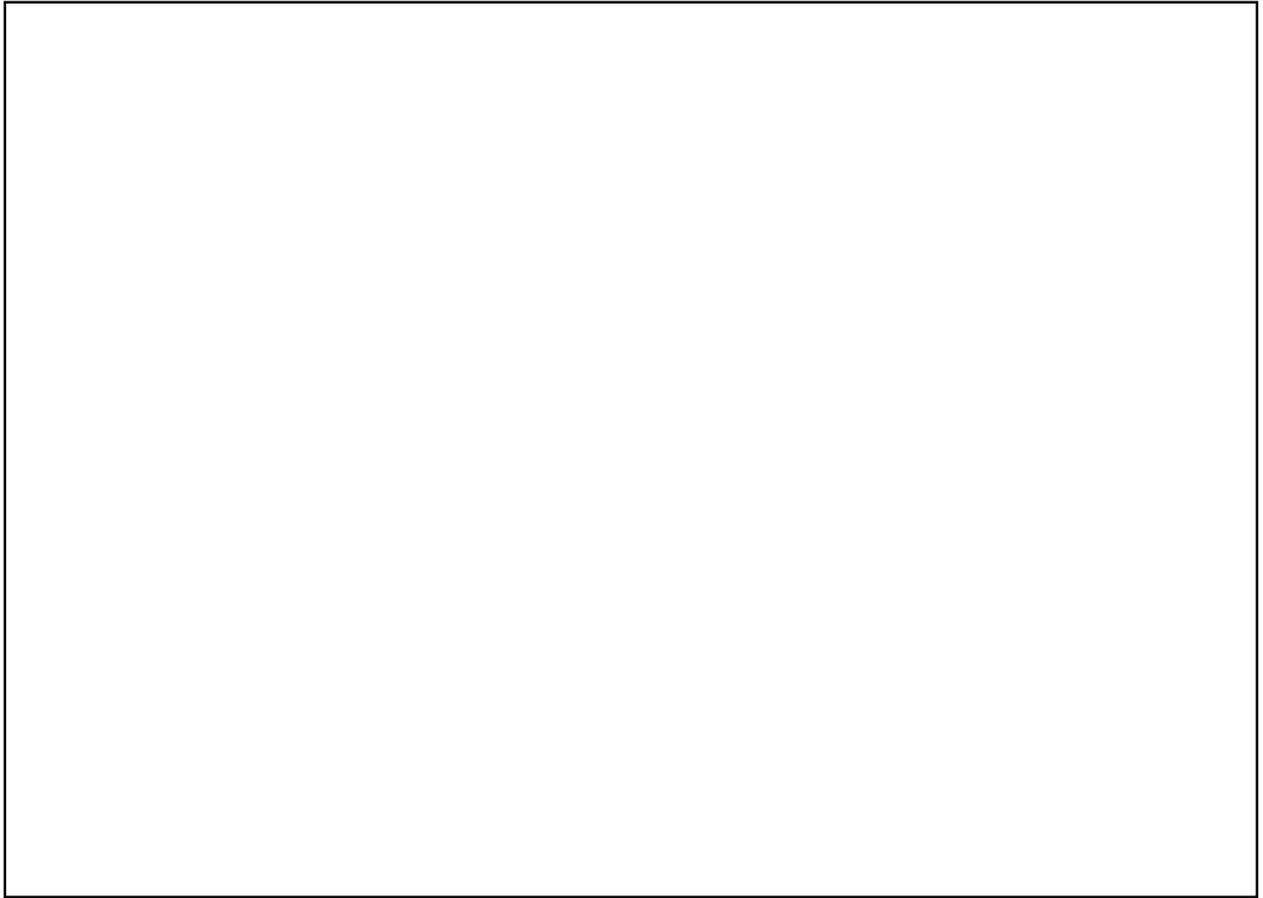
諸事首尾能埒明

可然存候 飯井之庄屋

方へも六兵衛注2方より

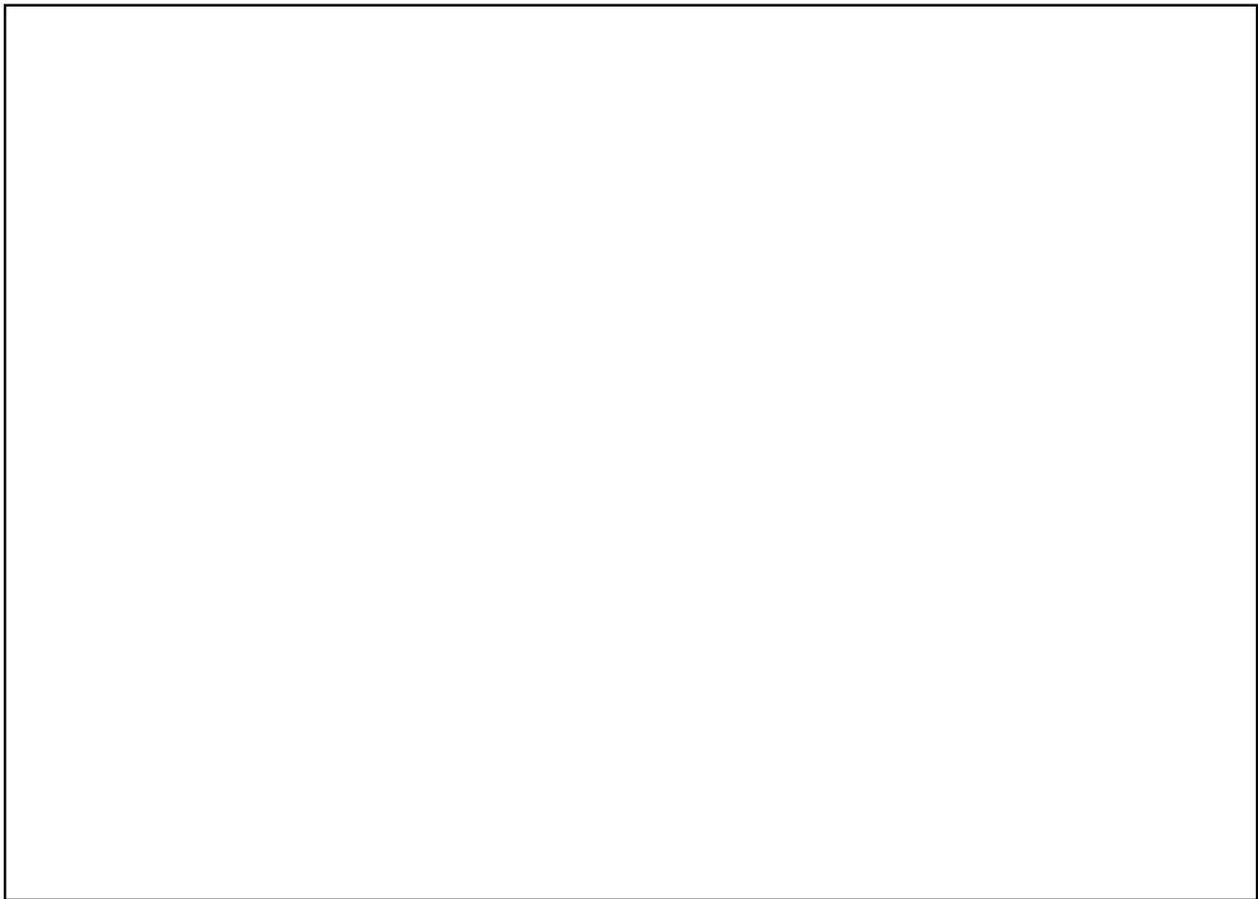
\*1 多兵衛 = 大谷太兵衛のことか。

\*2 六兵衛 = 誰のことか。



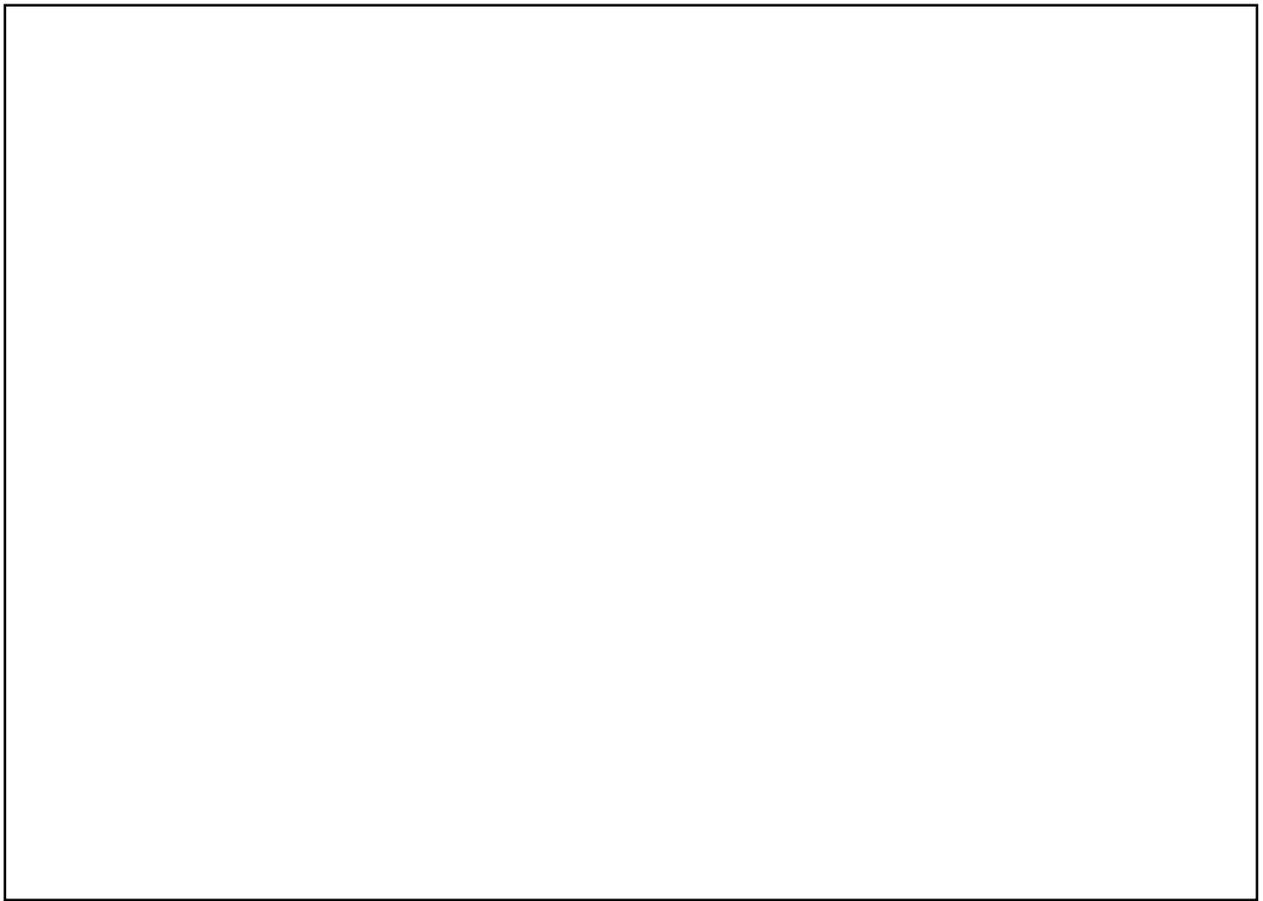
太兵衛差圖仕 大谷 様子  
申遣候付而 ひとしあ 一入宿之  
せいとう 証討カ 旁仕候由  
相聞へ申候 何も相替  
儀も御座候て 追々  
可申出候  
一 二郎兵衛様 注↑ 御家来 梅津  
三右衛門 小坂勘兵衛 爰  
元罷越 品川三郎右衛門  
不存分二而 て 立のき候  
段 笑止千萬二存候  
一通り彼者共へ相對  
仕 内證異見等相  
加 立歸御奉公申上候  
様二心遣仕見申度候  
此段各様迄内證  
を以 ことわり 理申出候 如何二も  
尤之事二て早々爰  
元罷越 心遣仕見可  
申通被仰聞候付而 ついで

\*1 二郎兵衛様 =



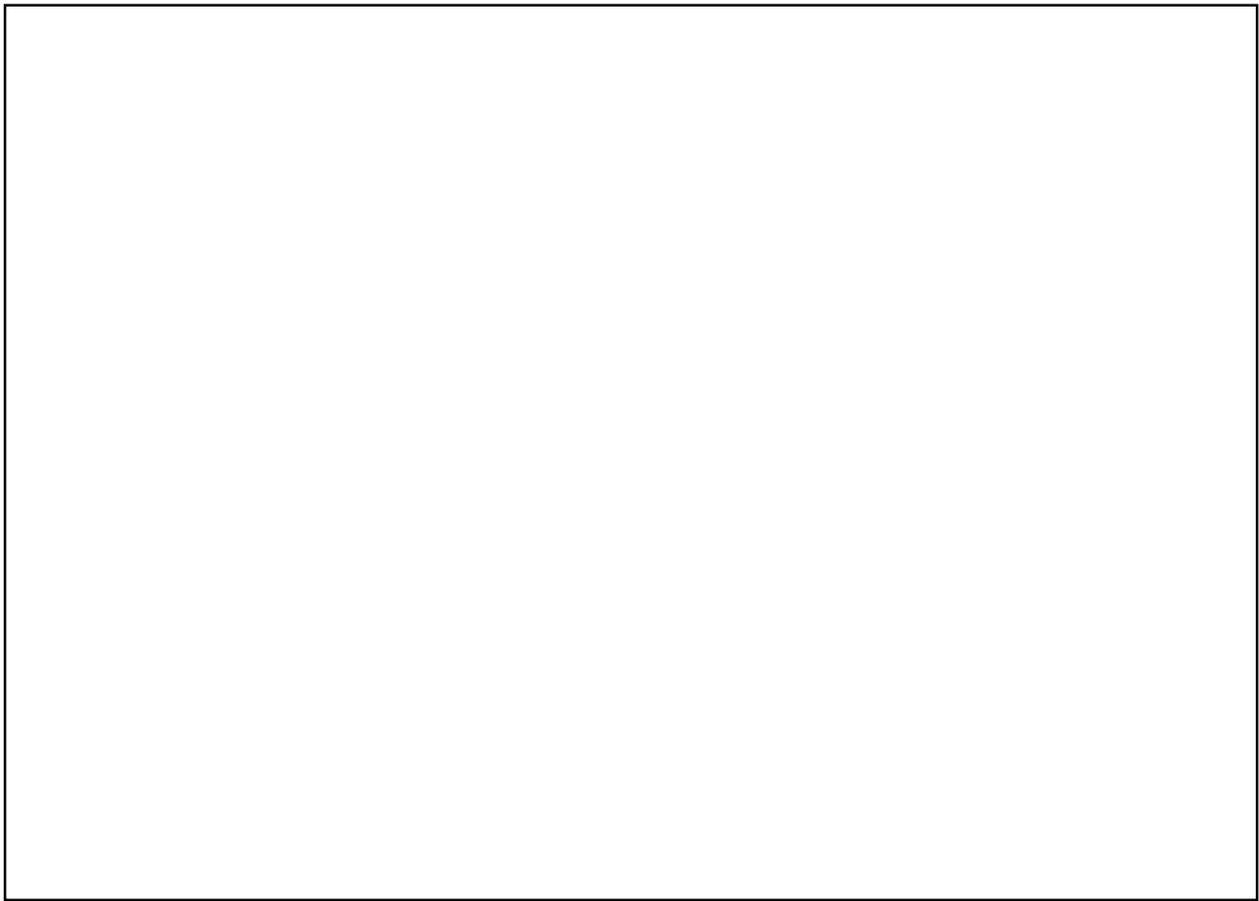
昨日爰元罷越 半左衛門栗山へ  
相對仕 様子申出候  
^付箋<sub>注2</sub>  
付而 尤儀候通申聞せ  
兩人共二即時在郷へ罷  
越候  
一 昨日じかた地方宗門の究之  
義二付而 齊藤左兵衛殿  
と申仁 江崎被罷越  
御究被仕候 それについて 就夫 當  
町目代善右衛門事  
早晚之分二宗門帳  
相調 あいととのえ 江崎へ持参  
仕候処 左兵衛殿被申候八  
此節右衛門様御家 益田就賢  
来之者 御暇なとと為  
被遣と承及候 左様之  
差引仕候て罷出候  
哉と相尋被申候 あいたずねもつたれ 善右衛門  
申候八 前々之通二相  
調 罷出候由申し候へ八

\*2 付箋の下の部分 = 随分其心遣可 / 存候由申聞せ在郷へ / 罷越候



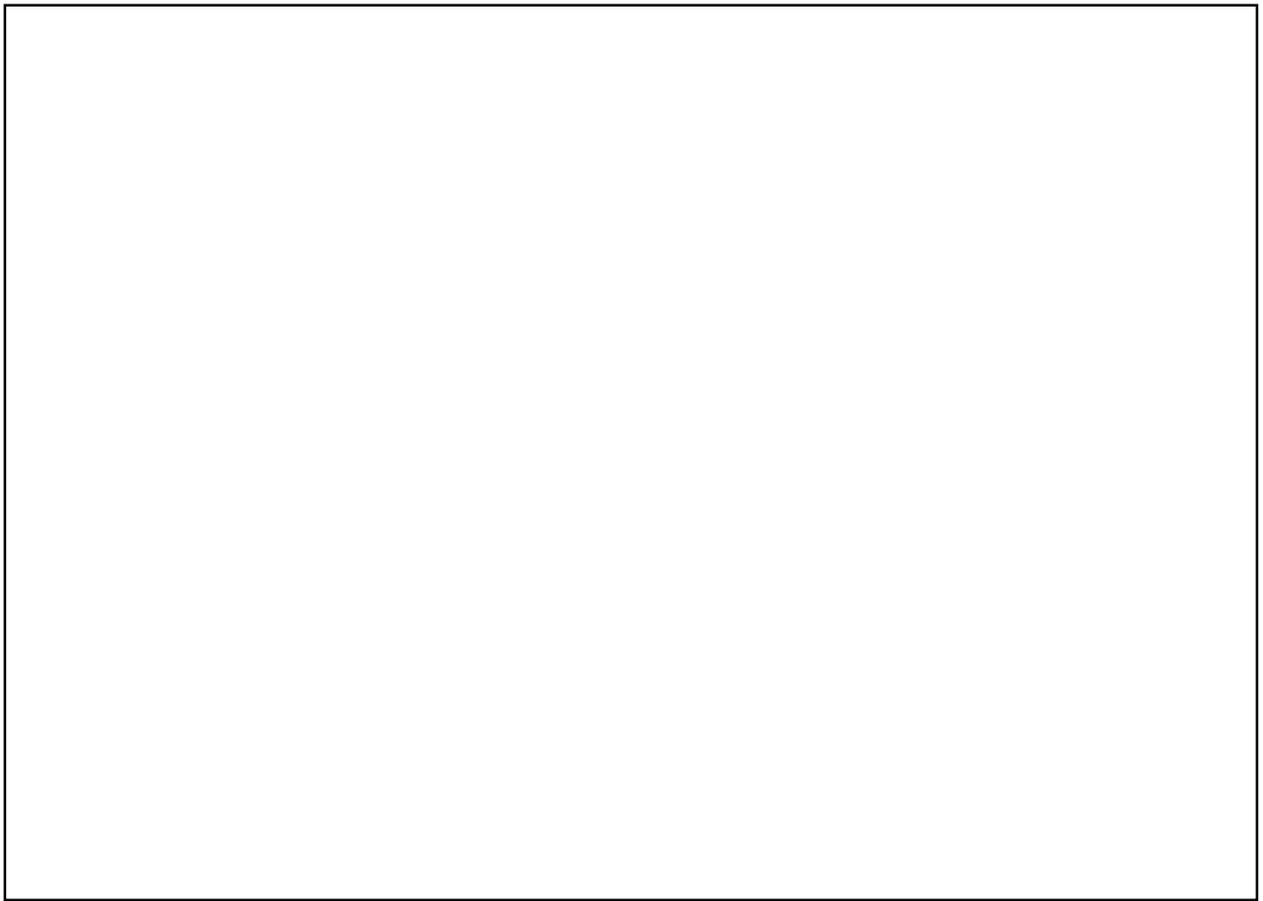
右之差引仕候て持  
参仕候様二と被申もつしつけ  
付候 此段 爰元二てられ  
吟味仕候處 何とも  
指引仕 苦敷義二  
付而 昨日左兵衛殿江ついで  
半左衛門方ヨリ岩本栗山  
九郎兵衛を以申遣候八  
地方宗門御究二じかた  
付而 家来帳持参ついで  
仕候処 今度檀那益田就賢  
足輕之者暇なと  
遣候通被聞召付 左きこめされ  
様之差引抔仕候哉など  
と御尋被成 被指戻さしもどされ  
之通申候事二御座候  
被仰聞候様 足輕之おあせきかれ  
ものも、注<sup>1</sup>様子有之  
候て触遣申し候 於此このたん  
段者 唯今差引にあいては

\*1 ものもゝ = ものどもの誤記？

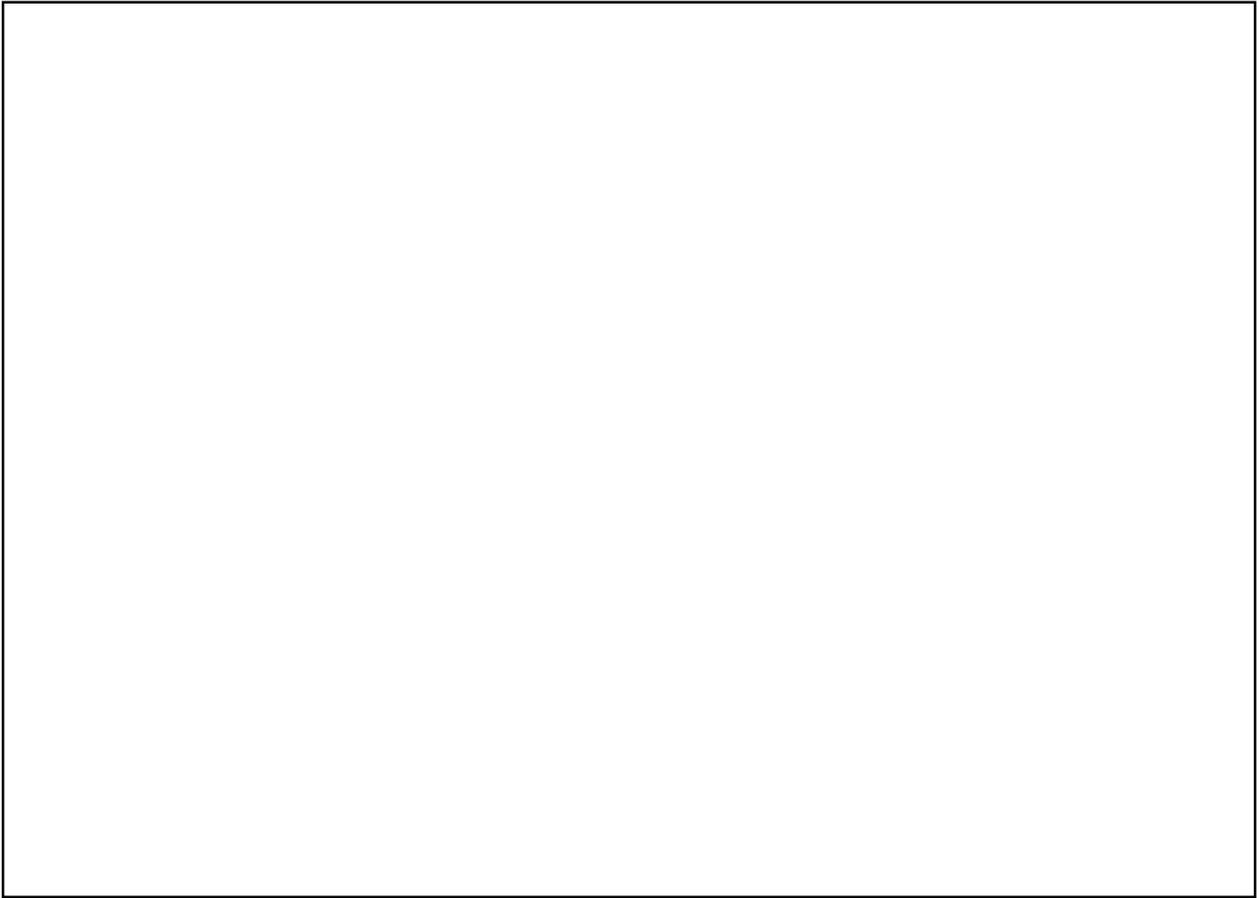


仕 苦鋪儀共御座候  
条 今少被指延さしのほされ  
被下候くだされて 諸事御沙  
汰相究 家来  
帳之差引申付 い  
つれ二ても御座被成なられ  
所へ持せ 指出可申候間  
家来帳之義八 今  
少々差延被下候様くだされ  
二と理申し候処 左衛門殿さむらひ  
被申候八 成ほと尤候もつされ  
義候 上使と御 談  
候て御家来帳之  
義八吉部注<sup>2</sup>へ御持せ可  
被成候 四五日者指延は  
候ても不苦候間 左  
様相心得候様二と被  
申越候条 左様御  
心得可被成候 爰元之こしもと  
宗門御帳をも 安富

\*2 吉部(きべ) = 吉部には奥阿武代官の勤場(宰判)があった。元禄5~7年の奥阿武代官は江木二郎右衛門。



忠右衛門二見合申付  
折角相調させ申し候  
飯井浦立のき候  
六人之者 并 椋木  
半太夫右之者とも  
家子共二差引申  
付 宗門御帳相調  
させ可申候間 是又  
左様御心得可被成候  
地方家来帳をも  
右之通二差引申  
付 一両日中二吉部  
指出可申と存候 自然  
相替義も御座候八、  
様子可被仰越候 此外  
相易義も御座候八、  
追々可得御意候  
恐惶謹言



六月五日

栗山半左衛門  
花押

益田與右衛門  
花押

益田久右衛門  
花押

益田又左衛門様

益田八郎左衛門様

増野作左衛門様

松井庄左衛門様



東大史料編纂所蔵「益田家文書」

51-124-15 居留り御奉書申上候者名前覚

居留り御奉公申上候者

堀与（組）

尾木 孫右衛門

高津 権右衛門

高津 善右衛門

高津 正右衛門

高津 与右衛門

長嶺 七右衛門

境与（組）

大谷 市右衛門

波田 安兵衛

安兵衛儀八御役引とり有之候哉

先居留り候様二と申聞せ置候

大谷与（組）

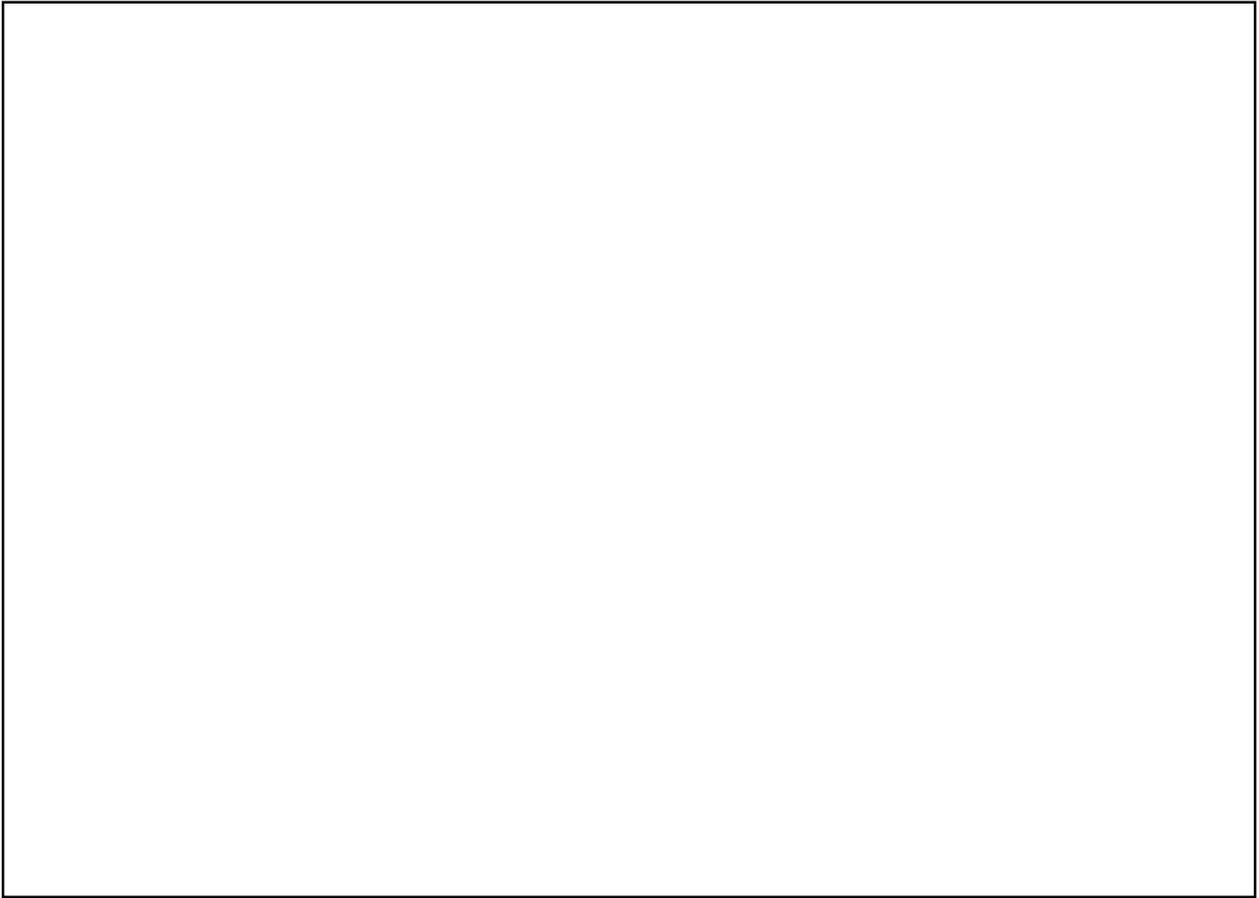
中村 新左衛門

奥山 忠左衛門

増野 左二右衛門

内田 清右衛門

棕木 六右衛門



梅地 喜兵衛

以上拾四人

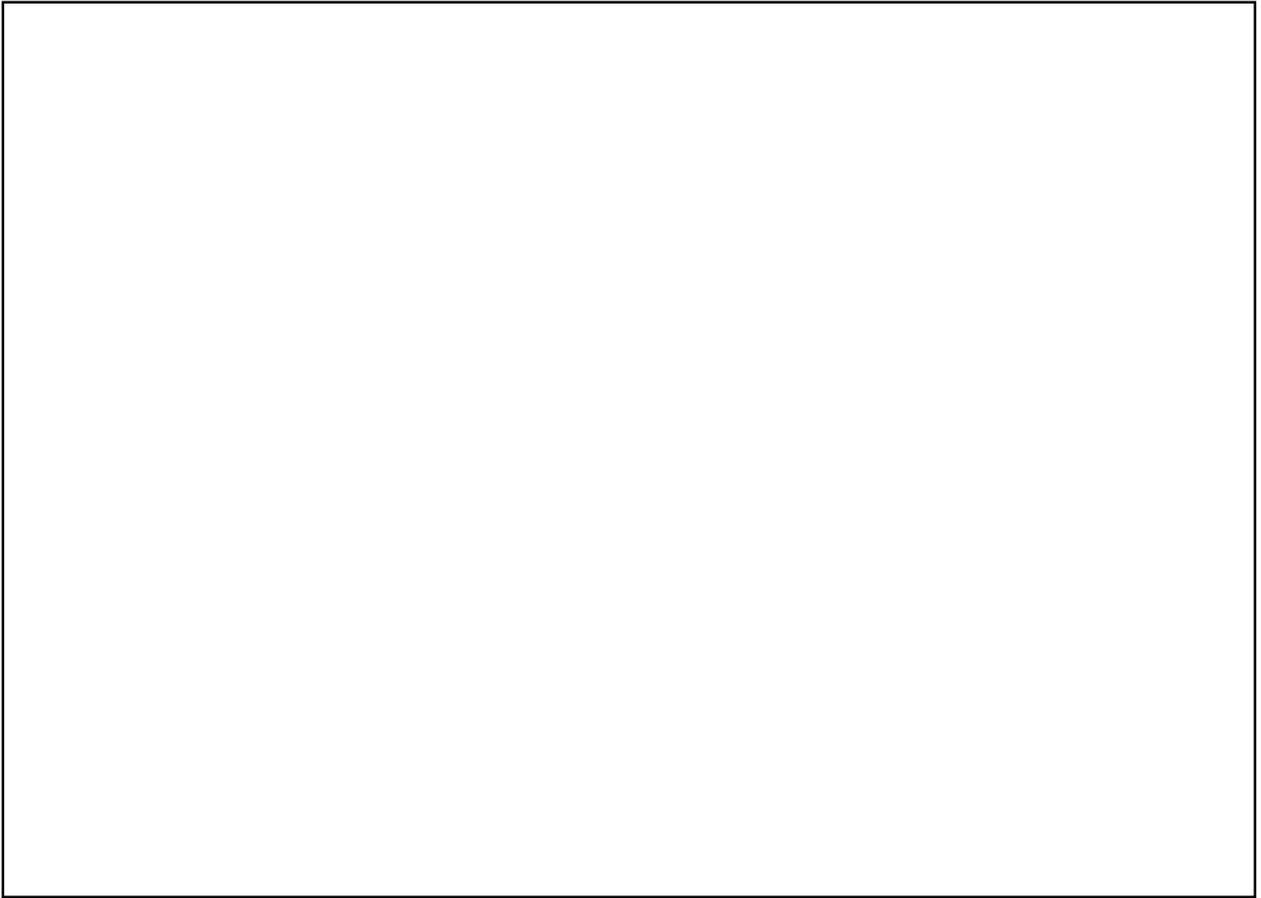
外二

安富 五郎兵衛

大谷 喜左衛門

此兩人八末相極候

六月二日



## 注文

一 境三郎左衛門先組

片山 久兵衛

波田 久右衛門

品川 三郎右衛門

城一 宇兵衛

仁保 徳右衛門

尾木 市兵衛

石川 安之丞

大谷 善左衛門

城一 忠左衛門

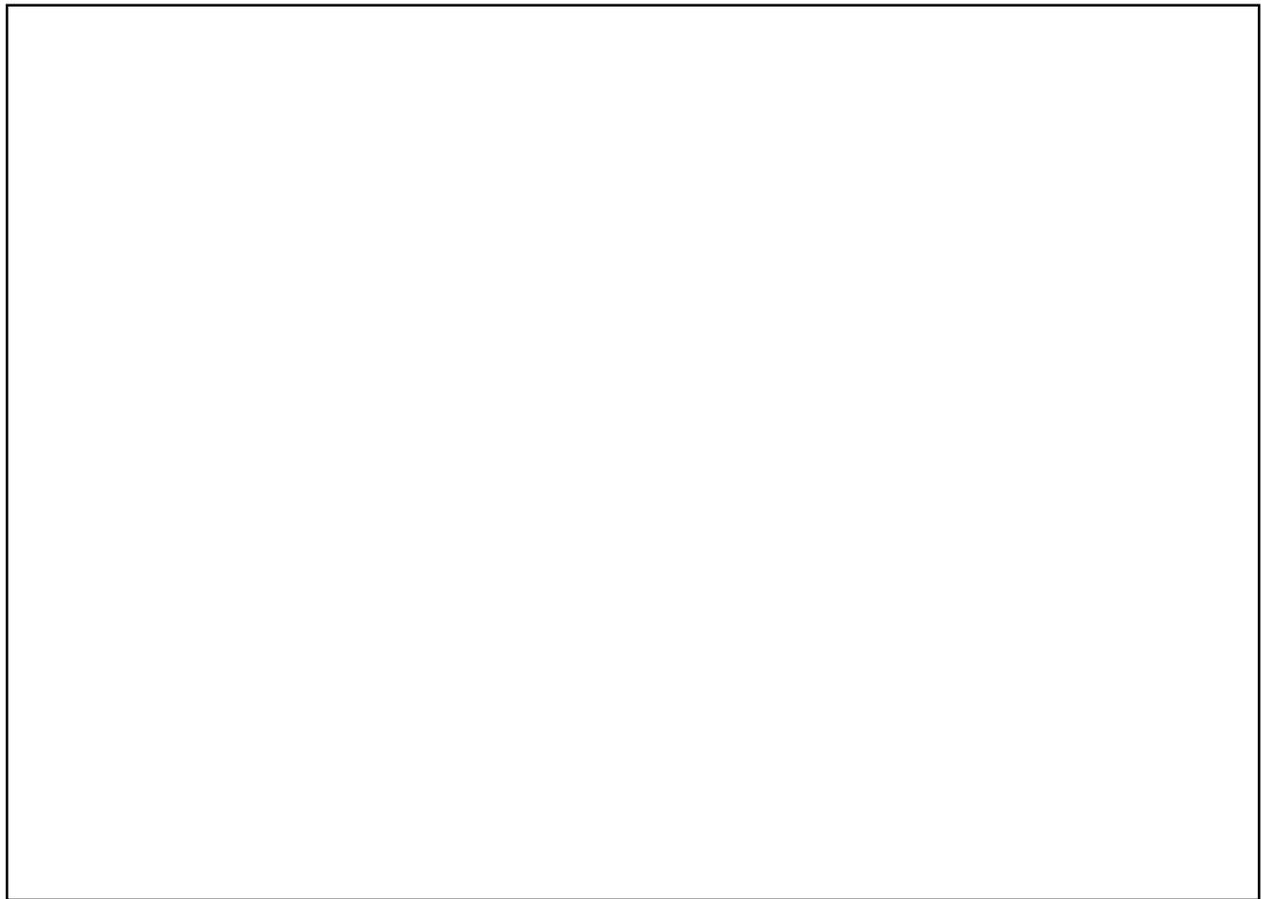
中村 六郎兵衛

大谷 孫兵衛

梅津 甚右衛門

河上 六左衛門

椋木 半太夫



一 堀市郎右衛門先組

大谷 又右衛門

高津 左衛門

波田 半兵衛

大谷 忠兵衛

以上拾八人

右両組之者共退去

仕候 右之者共之内二も

今日又立歸御奉公

可申上と申者も可有

御座哉 色々變申し候

付而 難極候 乍尔

大格注<sup>1</sup> 八右之通二相聞

申し候 以上

六月二日

\*1 大格 大略或いは大極（局）か。

画像データ未入手

東京大学史料編纂所蔵「益田家文書」

44-15 堀市右衛門切腹沙汰書等

堀市郎右衛門

一 此間組子共結徒黨こしつをむすび 無

筋御理申出候処二 可被収時節

両度指捨置 其上最初

之組一同二諸事御理申上間ことわり

敷之通申出候處二 両頭義者は

及一覽候得共そつらえども 其方儀者

無披見段 甚不届之儀二

思召候事

一 先頃入江忠兵衛を以 被成

御意候処二 其旨承間敷之由

返答之趣 上を輕しめ

緩怠之義二 思召候事

一 組子共再相募候処二 可取収

無方便 剩あまつさえ 両頭出萩之

覚悟二て船場迄罷出候二付

組子茂騒動仕候通推参之

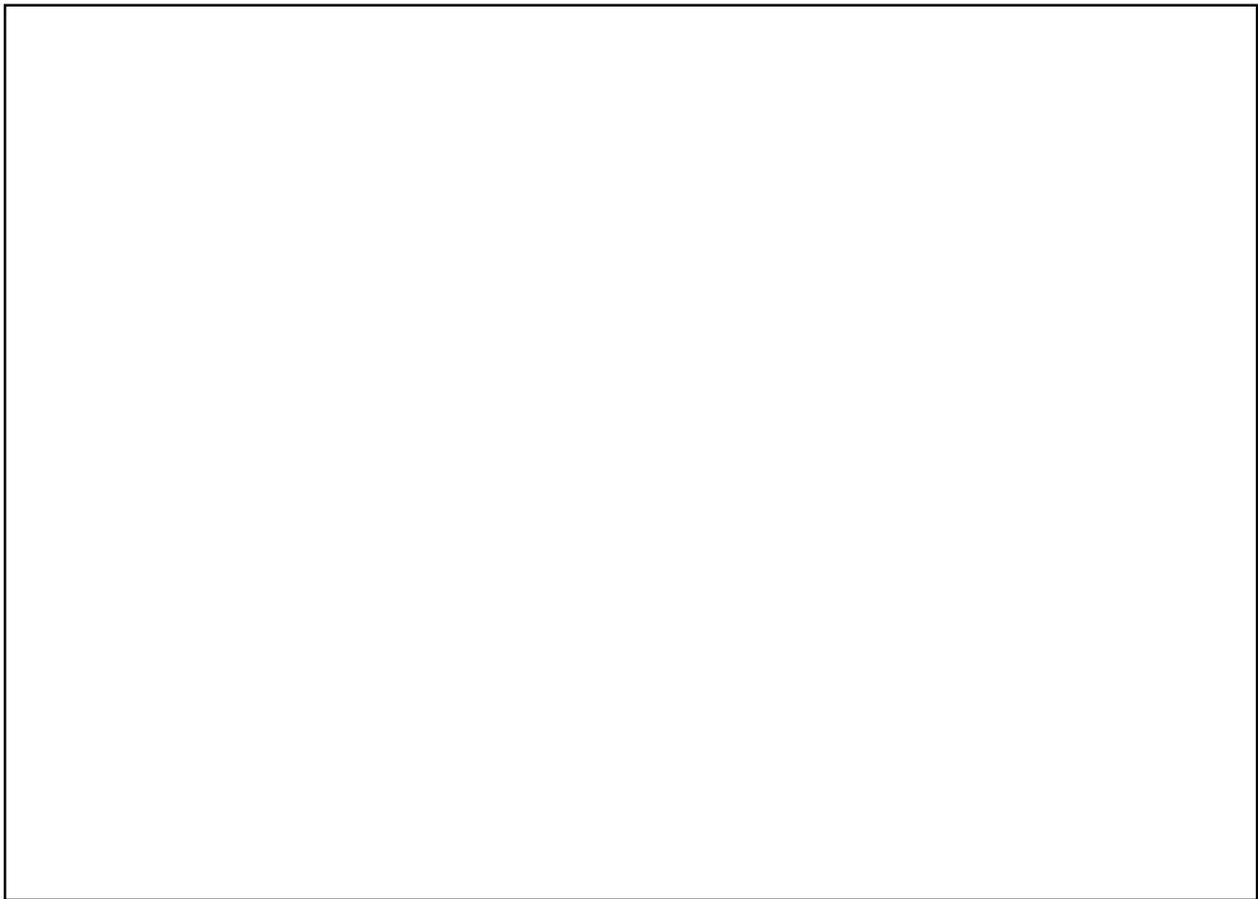
作廻 畢竟組子一味之心入

不忠逆意之至二 思召候事

右之廉之越度あやむ至極二

思召候 因茲よつひ 切腹被仰付候事

元禄七 六月十日



東京大学史料編纂所蔵「益田家文書」

44-15-2

境三郎左衛門切腹申渡書

### 境三郎左衛門

一 此間組子共結徒黨とくしをむすび 無筋

御断申出候処 可取収時節

両度差捨置あまじえ 剩組 与子共

四五人此度之列二もれ候をも

立隠候段 不届之至に

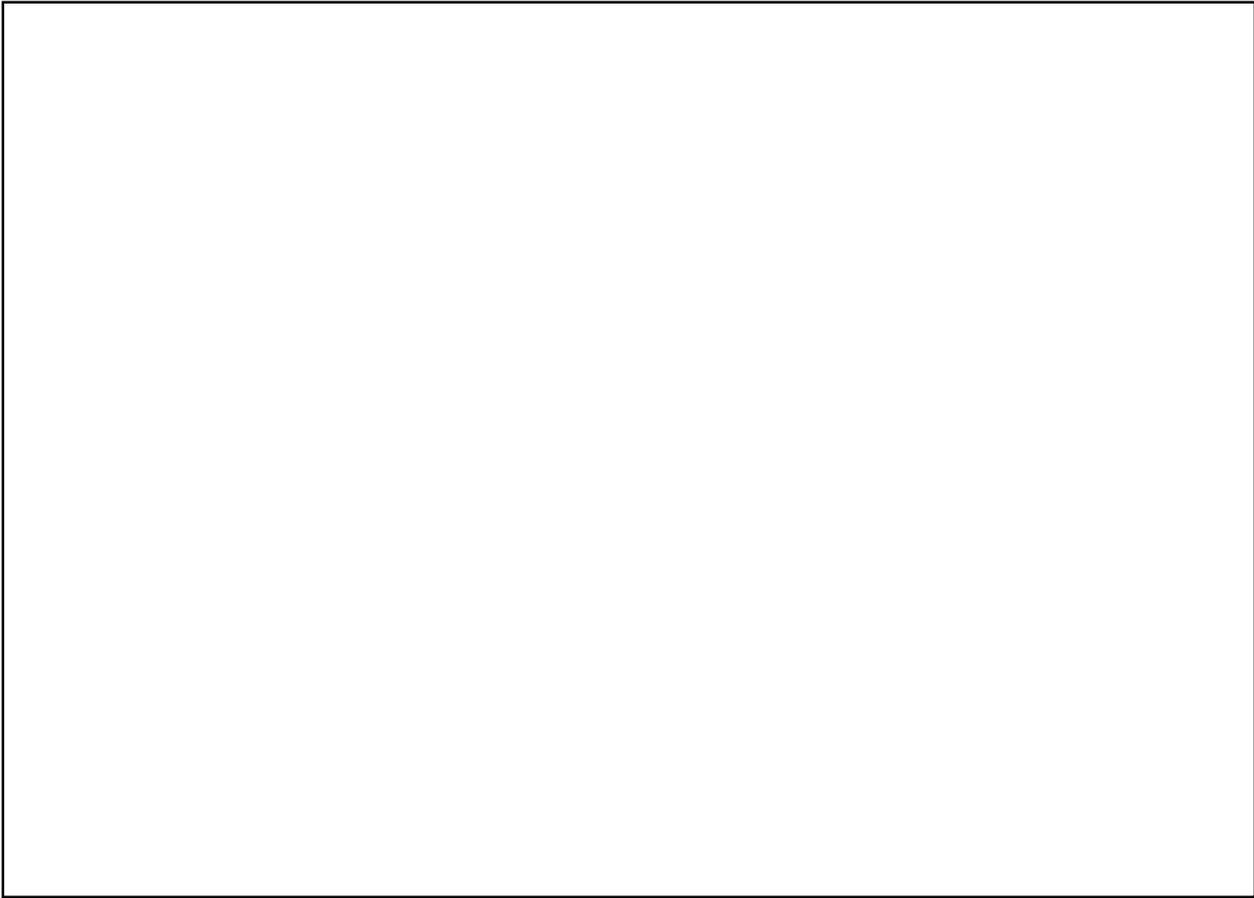
思召候事

一 先頃入江忠兵衛を以 被成

御意候処 其旨承間敷之由

返答之趣 上を輕しめ 甚

緩怠之儀二 思召候事



一 組子共再相募候処 可取収

無方便 其上両頭出萩之

覚悟ニテ船場迄罷出候付

組子茂相働仕候通 推参

之作廻 畢竟組子一味之

心入 不忠逆意之至

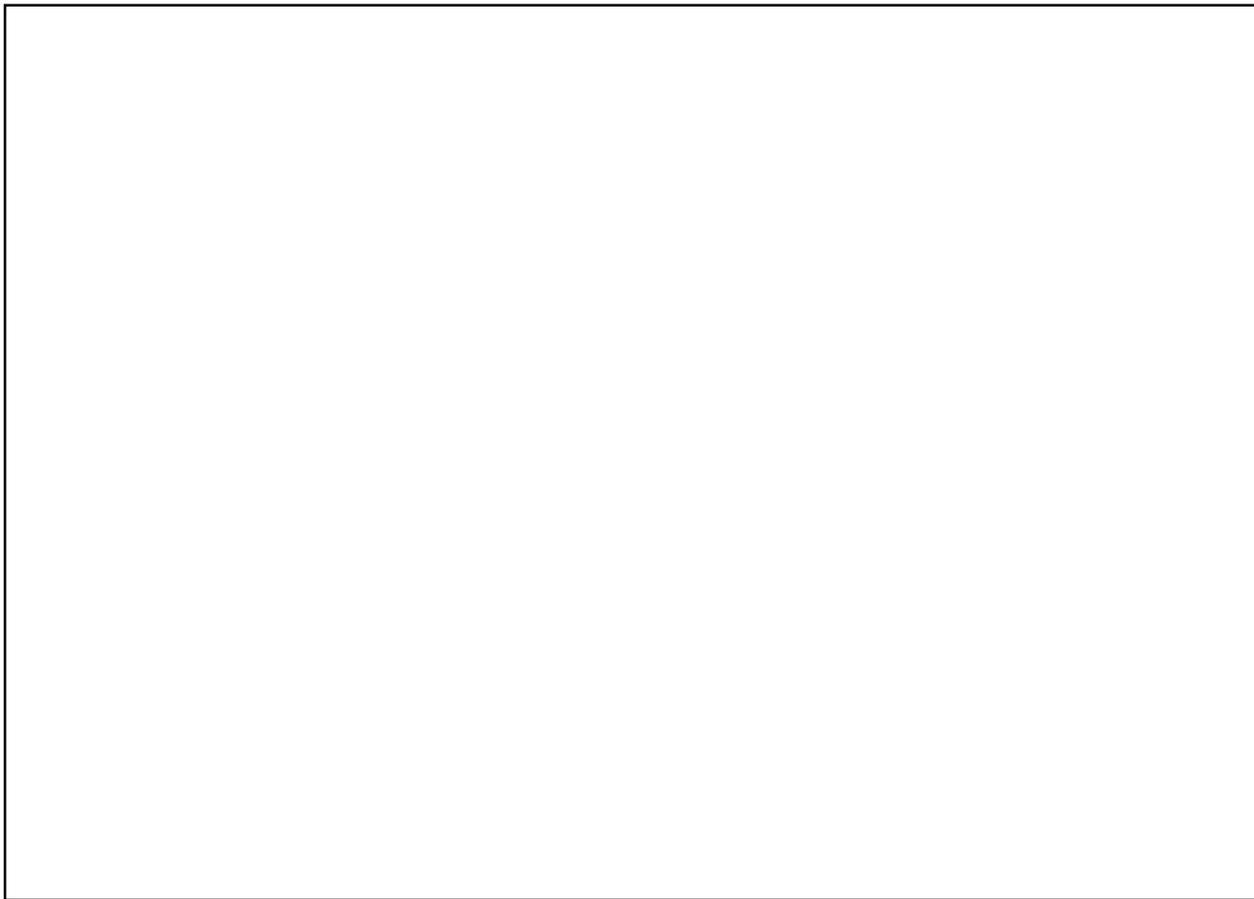
思召候事

右之廉々<sup>あつら</sup>越度<sup>あつら</sup>至極 思召候

因茲<sup>よつら</sup>切腹被<sup>あつら</sup>仰付候事

成ノ<sup>元禄七</sup>

六月十日



東京大学史料編纂所蔵 「益田家文書」

46  
19

切腹申渡書

和田 安之丞

堀 市之進

同 唯八

一 其方共 父市郎右衛門注↑義

此間組子共結徒黨 無筋

御理申出候處二 可取収とじおめめるへき

無方便 誠組子一味之働

段候 不忠之至二候故 切腹

被 仰付候 因茲 其方共

儀茂 同罪二被 仰付候事

元禄七  
戌ノ

六月十日

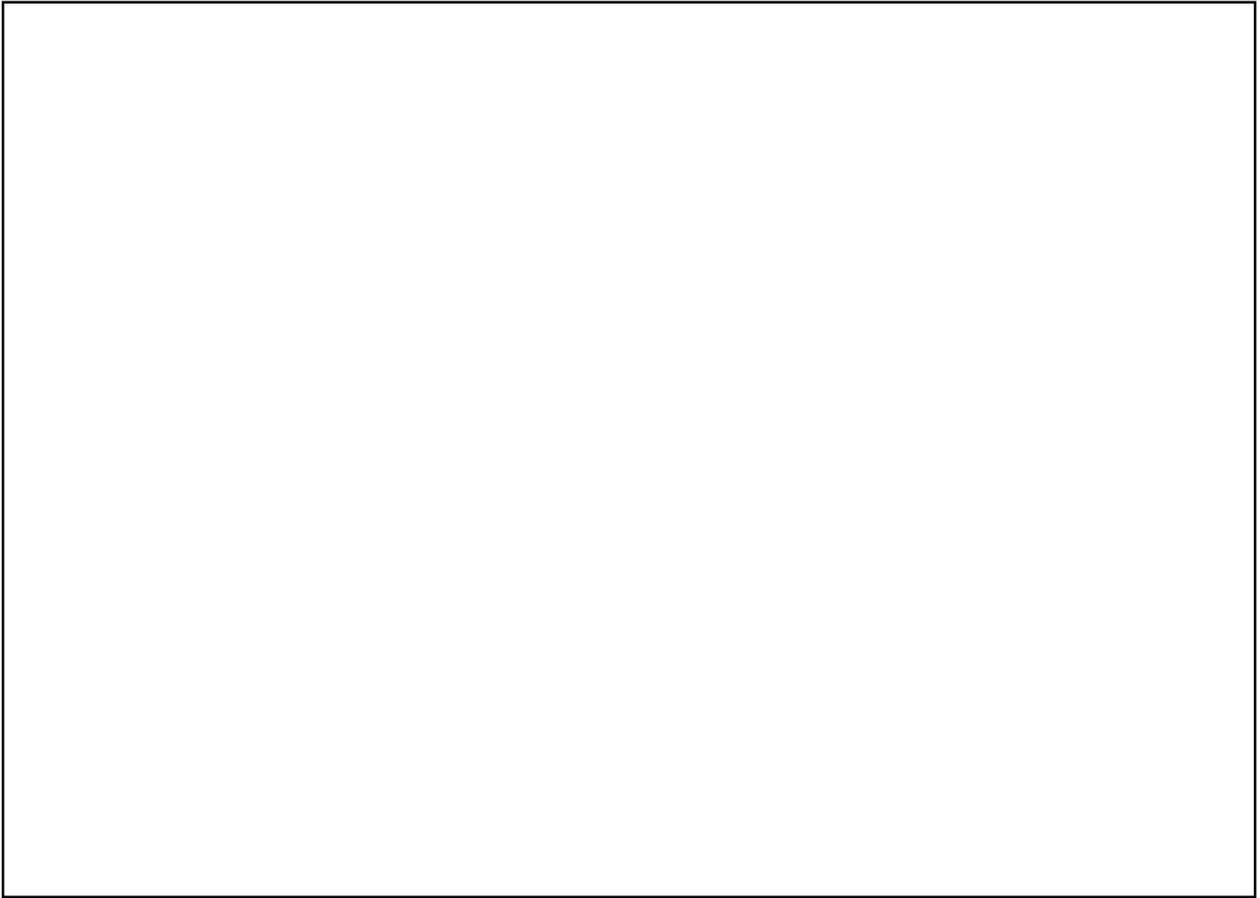
\*1 市郎右衛門 = 堀市郎右衛門。

東京大学史料編纂所蔵 「益田家文書」  
46-10 追放申渡書

覚

大野 三省

一 其方事存念 当家心入を以 家来二  
留置 諸事近年之儀八地下之  
調法二茂相成候通聞及候 然所 今度  
小組理騒動之儀二付而 一圓可取納  
心入茂無之 剩 色々談合之人数二  
相加 不被為心立 誠以 代々之恵を  
令忘却 不謂儀共候 然時八令  
扶助置候而茂 無詮議共候条 暇  
遣候 居所之儀八 相障り所 心抔茂  
有之候得とも 老足之事二候へ八 不及其儀候  
然共 当領尤上地并江崎・萩差  
除 其外之義八 雖為御國中 何二



成共心次第 居住可仕事

成<sup>元禄七</sup> 七月廿二日